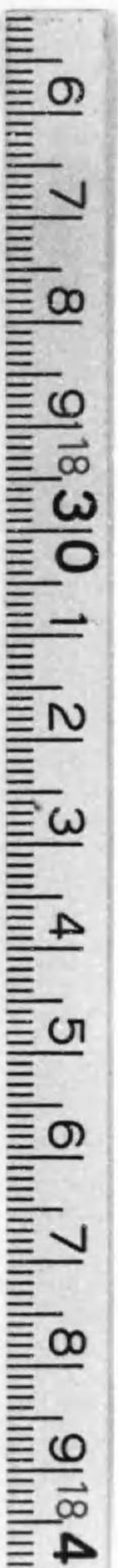
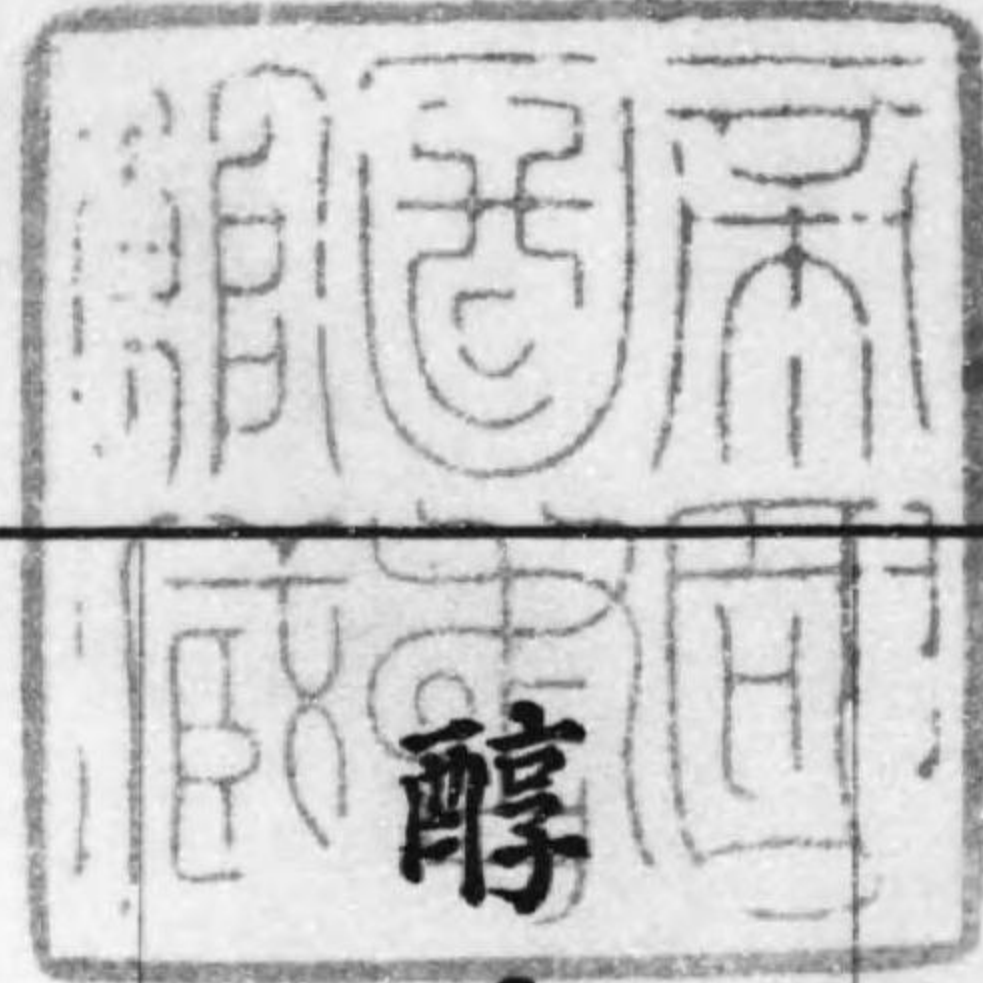


始



特218
797



東京高等師範學校教授
能勢朝次編

醇正國語
教授參考書

株式會社
文學社
刊行



緒言

本書は「醇正國語」教授の参考に供するため、編述したものであります。編者の立場から、教授の進行を想定し、参考となる事柄は廣く網羅するやうに心がけました。併し様々な資料の雜纂になることを避け、組織的に叙述すると共に本質的な部分に特に力を入れました。各教材の研究を、「解題」・「解釋」・「備考」の三部に分ち、「解題」に於ては豫備的研究を、「解釋」に於ては本質的研究を、「備考」に於ては補足的研究を行いました。

二

第一部「解題」は次のやうに組織されてゐます。

- (1) 作者
- (2) 出典
- (3) 主眼及び採擇の趣旨

(1)に於ては作者に就いてなるべく詳細に記述し、單に履歴を掲げるのみでなく、教材の文學史的取扱の場合を考慮し、その作風にもふれておきました。履歴不明の點につき直接作者の教示を仰いで掲載したのも少くありません。(2)に於ては各教材の出典をなるべく詳細に記し、その典據を明らかにすると共に、原典を髣髴たらしめるやうに致しました。(3)に於ては各教材の主眼を簡単に述べてその陶冶的價値を明らかにすると共に、教材排列の用意に就いて述べました。

三

第二部「解釋」は次のやうに組織されてゐます。

- (1) 語釋
- (2) 文の構成
- (3) 文意
- (4) 鑑賞批評

解釋は教材の本質的研究でありまして、編者はこゝに最も力を注ぐやうに致しました。近時我が國に於ても國語教育や國文學の基礎學として解釋學が研究されてゐます。これは主としてドイツ解釋學の流を汲むもののやうに思はれますが、デイルタイ以後俄かに勃興したこの學問は、解釋の普遍妥當

性への關心から生まれたもので、元來理論的な特性を有するものであります。従つてその理論的體系をそのまゝ解釋の實踐に適用しようとする場合には、様々な困難の存在するのを免れません。翻つて思ふに、幾多の優れた古典を有する東洋には東洋独自の實踐的な解釋學が成立して居ります。本書の編述に當つては特にこの點に反省を加へました。「韋編三絶」「讀書百遍義自見」などといふ古聖賢の言行は別としても、東洋の實踐的解釋學の根本的性格は、「解釋」乃至「理會」といふ術語の中に端的に示されてゐます。これは元來、支那古典學の發生と共に古典解釋の事象に反省が加へられた時、類推の結果工藝の術語が援用されたものであります。即ち「解釋」は牛角を分析して盃(觚・觥・觥・觥等)を作る作用であり、「理會」は璞を分析綜合して種々の飾玉(玦・珉・珉・珉・珉・珉等)を作る作用であります。その中、「解」は牛角を分析する作用を示し、「釋」は字書に「捨也」とありまして、分析された牛角の中不純な部分を捨てること即ち否定することを意味してゐます。又「理」は璞を分析研磨する作用を示し、會は字書に「合也」とありまして、分析研磨された玉を綜合することを意味してゐます。この分析及び否定(又は綜合)といふ二つの作用を経て解釋が成立し、理會が成立するとするのが、東洋人の解釋學的思想であります。

これはもと支那に發生し、後日本にも移入せられた解釋學でありますが、日本人は又本來独自の解釋學的思想をもつて居ります。日本の解釋の第一段の作用は「わけがわかる」といふやうな言ひ方の

中に示されてゐます。即ち「分けられる」と「分け」が「分り」、「分けられぬもの」は「分け」が「分らぬ」とするのであります。初め單純であつた言語は、相互に複合せられることによつて語彙の數を益し、次第に複雑な思想の表現に堪へられるやうになります。従つて複合せられた言語の具體的な意味は、その言語を個々の成分に「分け」、各成分の意味を明らかにすることによつてのみ把握せられるのであります。日本語の「わけ」といふ言葉はこの間の消息を簡明的確に示して居ります。併し言語の單なる分析は訓詁註釋の域を脱しません。日本人の解釋學はこの「分ける」といふ境地を越えて更に「あきらめる」といふ點に到達してゐます。「あきらめる」といふことは「明瞭にすること」であり、同時に又「斷念し否定すること」であります。明らかにすることは斷念し否定することであり、斷念し否定することによつて始めて事物の真相が明瞭になるとするのであります。即ちこの「あきらめ」といふ語は、分析された結果について検討を加へ、不純なものを否定し、純粹にして本質的なものだけを把握するといふ日本人本來の認識法を示すものでありまして、短歌や俳句といふやうな文藝はかゝる態度の最も典型的な表現であります。

本書に於ては以上のやうな東洋的解釋學に反省を加へつゝ教材の本質的研究を試みました。即ち「語釋」及び「文の構成」は「解」であり、「理」であり「わけ」であります。それに対して「文意」及び「鑑賞批評」は「釋」であり「會」であり、「あきらめ」であります。従來の國語教育はこの「わけ」

と「あきらめ」との二つの極端の間に動搖を續け、一方に偏向しては他方を閑却してその弱點を暴露して來ました。當來の國語教育は綿密にして正確な「わけ」の上に、鋭い「あきらめ」を加へるといふ方向に發展せられなければなりません。それは又國語教育によつて陶冶せらるべき日本人の理想的な生活態度でもあらうと思ひます。

四

第三の「備考」は次のやうに組織されてゐます。

(1) 指導研究

(2) 參考

「指導研究」に於ては實際指導の方法に關し編者の立場から一つの試案を提出しました。併し指導そのものは元來指導者独自の人格的背景をもつて始めてその生命ある機能を發揮するものであります。教材の十分な研究の上に自然にして妥當な指導案を各自に工夫することが絶對に必要であると思はれます。従つて本書に於ても全く一つの試案を描いて見たに過ぎません。(2)「參考」としては教材研究上乃至指導上參考となるべき各種の資料を輯録いたしました。即ち或は教材と原文との比較をなし、或は補充教材を附録し或は又挿繪について説明いたしました。

本書は概ね以上の組織と方法とによつて編述いたしました。が、何分短時日の間に完成する必要がありましたので、或は思はぬ所に不備な點がありはせぬかと懸念に堪へません。幸に各位の御叱正を仰ぐと共に益々研鑽をつみ、本書をして完璧たらしめたいと念じてゐる次第であります。

昭和十四年一月

著者識

醇正國語 教授參考書 卷一

目次

一 明治天皇御製	五十嵐 力
二 大和言葉	夏目 漱石
三 峠の茶屋	高濱 虚子
四 比叡の鳥	小川 未明
五 托鉢僧と蝶	鳥崎 藤村
六 いのち	東郷 平八郎
七 皇軍の精神	小笠原 長生
八 肉弾三勇士	結城 哀草果
九 河鹿と山鳩	芥川 龍之介
一〇 蜘蛛の絲	鳥木 赤彦
一一 カルサンと米	

目 次

一 親子の馬	吉 植 庄 亮……………一五
二 野火止の用水	(高等小學讀本)……………一六
三 雜 草	相 馬 御 風……………一八〇
四 蟹	薄 田 泣 菫……………一八二
五 富士登山	萩 原 井 泉 水……………二〇三
六 新 月	北 原 白 秋……………二一九
七 片 島	坪 田 讓 治……………二二四
八 金 華 山	長 塚 節……………二四八
九 ふるさと	石 川 啄 木……………二六四
一〇 我が幼き頃	新 井 白 石……………二八〇
一一 西郷南洲	勝 安 芳……………二九六
一二 乃木大将	中 村 孝 也……………三二四
一三 清淨の國	大 町 桂 月……………三三〇

漢 文 初 歩……………三三〇

一 明治天皇御製

一 解 題

明治天皇

第百二十二代。御諱睦仁。孝明天皇の第二皇子。嘉永五年九月二十二日（陽曆十一月三日）未半刻御降誕。祐宮と御命名あらせられた。尊王攘夷に國論沸騰し國事多端の間に御成人遊ばされ、萬延元年七月十日立太子、九月二十八日親王宣下、睦仁と宣せられた。慶應三年正月御歳十六にして御踐祚。十月十日には將軍徳川慶喜の大政奉還を御嘉納あらせられ、十二月九日王政復古の大號令を發し給ひ、翌年八月二十七日南殿に御即位の大典を擧げられ、ついで年號を明治と改め給ひ、東京に御遷都あらせられた。爾來萬機を親裁し給ふこと四十有五年、明治四十五年七月十四日以來の御不豫。滿天下臣民の至誠を盡せる御平愈祈願も効なく、終に七月三十日御崩御あらせられ、九月十三日伏見桃山に葬り奉つた。御寶算六十一。

天皇は天資御英邁、古今東西に卓絶し、聖徳四海に普く、夙に維新創業多難の時局に當られて、内は國是を定め皇謀を恢弘し、國運伸張の基を築かれ、外は日清日露等數次の大戦によく大勝を博し、近々四十年にして帝國の面目を一新し、堂々世界列強に位するに至らしめ給うた。誠に新日本建設の大皇帝にまします、その御偉業は東西史上稀に見る所である。又天皇は和歌に秀で給ひ、御歌人としても國民の欽仰し奉つてやまぬ所である。

御製

「明治天皇御集」(宮内省藏版・文部省發行)から謹抄し奉った。

明治天皇が古今を絶した大歌人にましますことは吾人の贅言を要しない所であるが、誠に天皇は御歴代の中に伍して最優位を占め給ふのみならず、所謂専門歌人をも遙に超越してをられ、御製のすべてが永久に光輝を放たるべき名歌のみであらせられることは、ひとへにこれ形式を越えた大御稜威のさながら帝王調として流露し光被せられたものと拜すべく、景仰に堪へざる所である。

拜承する所によれば、天皇の御製は御演習御統監のため御行幸あらせられる毎に御上達遊ばされ、その御草稿の如きもすべて奏上袋の裏や公文書の反故の餘白などを御利用遊ばされて、色紙短冊等を御用ひになられなかつたとの御事である。又天皇は御製の世に發表せらるゝ事を好ませ給はず、嘗てこれを漏し奉つた高崎正風男を御咎め遊ばされた由さへ承つてゐる。これに依つて謹み思ふに、御製は全くさながらなる御詠歎にましまし、形式に泥まず、概念に拘はれず、御感情を實感のまゝ天眞に歌ひ出で給うたものであり、天皇は天性の大歌人として自ら作歌の根本的な至上道に立たせ給うたと申すべきで、天皇が御歴代中最も多事多端の御一生を送られながら、よく日本和歌史上の記録を突破あらせられる九萬に餘る御製を遺され給うた事は、蓋し理なりと申し奉る他はない。

「明治天皇御集」はその現在する九萬餘首の中、主なる御製千六百餘首を收載編纂し奉つたものである。

謹抄の趣旨

謹抄し奉つた御製はすべてこれ現人神としての大自覺に立たせられた明治天皇が、皇祖皇宗を崇め、國を思ひ、民を慈しみ、四海の和平を希ひ給う御聲ならぬはない。躬を以て祖神崇拜の範を垂れ給ひ、或は日夜國家國民の上を御軫念あらせられる限りなき御仁慈が拜せられて恐懼の極である。今中學教育に第一步を踏みだすに當り、日本文學の精髓として、而も御歴代の天皇が常に大御心を止めさせ給うた大和歌により、明治大帝の御懿徳の普きを偲び奉り、かねて國語國文學

の尊さを知らしめることは誠に意義深いことと信ずる。巻頭に謹抄し奉つた所以である。

二 解 釋

思ふことつらぬかすしてやまぬこそ大和をのこのこゝろなりけれ

明治三十八年「をりにふれて」と題されて詠ませ給うた御製で、日露戦役に勇戦奮闘よく強敵ロシアを連破した將兵の事など思召されての御述懐と拜せられる。

【思ふこと】 此の思ふは「決意する」「覺悟する」などの意に御用ひ遊ばされてゐる。

【大和】 ヤマト 日本。我が國を「大和」と言ふは、畿内五國の一たる「大和」の地方名から起つたもので、神武天皇が大和地方を御平定遊ばされて、此處に皇基を定め給うて以來、皇威次第に遠く及んで、遂に我が大日本帝

國をなすに至つた爲に、これが一般の呼稱となつたといはれてゐる。因に日本の國號については種々の説があるが、やまとに日本の字を當てたのが初であらう。詳しくは「日の本の」御製に就いて参照。

【をのこ】 男の子の義で女の子に對する語。(一)男。男子。(二)男の子。息。(三)下郎。郎族。御製は(一)の御意。

御製の意は明瞭で、ひとたび決意したことは飽まで貫徹しなければ止まないのが我が日本男子の精神である、と、我が國民の堅忍不拔の精神を讃へ給うたのである。その大御心は自ら御製の上に雄々しく高い御調となつて現れ、殊に「やまぬこそ」の強い一句に拜せられる嚴然たる帝王の御風格は、これをうけて「心なりけれ」と歌ひをさめられた御詠歎と相應じて「つらぬかすしてやまぬ」日本男子の精神そのものの如き雄勁な御格調をなしてをられるやうに拜せられる。而も全く御技巧の跡なく、一息に詠みくだされてをられる滞りない御歌ひ振りは、全く御まごころの自らなる御發露とも申上ぐべきであらう。

石だたみかたきとりでも軍人みをすて、こそうち碎きけれ
明治三十七年、「をりにふれて」と題されて御詠み遊ばされたものである。旅順の戦鬪等を偲び給うた御作かと拜され
る。

【石だたみ】(一)板石を敷きつめた所。(二)石段等の意
があるが、尙次項参照のこと。

【とりで】砦・塞・壘の字を當てる。(一)取出での義で、本来
本城より近く取出でて築いた小城。とりでじろのこと。
(二)轉じて一般要塞を言ふ。御製は(二)の御意。

【石だたみかたきとりで】岩石を以て堅固に築造したる要
塞の意。當時旅順などの要塞はベトン(今日のコンクリ
ート)を以て築造せられてゐた。これを大和歌にふさは
しい表現として、「石だたみかたきとりで」と詠み出で給
うたものであらう。

「岩石を以て堅固に築造したる要塞も我が帝國軍人は身を捨ててこれを打碎き陥落させてしまつたのだ」との御詠歌と
拜される。

第一・二句の「石だたみかたきとりでも」の、嚴々たる御調は、自ら要塞の愈々堅牢にしてその攻陥の如何に困難を
極めたかを思はしめ、これが自ら「うち碎きけれ」の烈々たる御詠歌となつてゐる。かくて「身をすててこそ」の激し
いまでに強い一句が、切々として胸に迫り來るのが感じられるのである。もとより將兵の武勳を賞で讃へ給ふ大御聲で
あらせられる。併しその後隠れた將兵の死を悼まれる御悲痛な大御心が拜せられないであらうか。雄健豪壯な御調の
中に一種沈痛な趣の拜せられるのは、矢張この大御心の自らの御流露と拜せられて畏き極である。

はからずも夜をふかしけりくにのため命をすてし人をかぞへて

明治三十七年、「をりにふれて」と題されて、専ら日露戦役中の大御心を詠み出でられた御製中の一首で、次の「よと、

もに」の御製と同じ頃の御作と拜せられる。

【はからずも】思ひもよらず。意外に。思ひがけなく。「も」は強意の助詞。

「國の爲に戦死した人々を數へて、あるひはその數の多きをいたみ、あるひは感慨の胸にせまるものがありなどして、
おもひがけず夜をふかしてしまつたことだ」との御詠歌と拜される。

御製の中には、國の爲に殉じた將兵に對する御憐みの御言葉も、また國を憂へ給ふ御軫念を表し給うた御言葉も拜せ
られない。併しそれが爲に我々は反つて恐懼に堪へないまでの大御心を拜し奉るのである。御言葉に盡し得る御憐憫で
はあらせられず、御口に上し得る御軫念ではあらせられなかつた。唯次々に死にゆく多くの將兵を悼まれ、その親の爲
に歎かれ、また國難の大いなるを憂へ給ひなど思はずも夜をふかし給うた大君の御軫念が推し慮られて忝いのである。
「はからずも夜をふかしけり」の二句はその御詠歌を總べて歌ひ盡された如き優れた御歌ひ振りと拜せられる。誠にそ
の御心のまゝの直ぐなる、毫も巧むことなき御歌ひぶりは、全く御まごころのさながらの御流露と申し上げる他はない。
同じ時の御作と拜せらるる次の御製を併せて拜誦する時は大御心の程を一層深く窺ひ奉る事が出来よう。

をりにふれて

年へなば國のちからとなりぬべき人をおほくも失ひにけり
たゝかひに身をすつる人多きかなおいたる親を家にのこして

よとよもに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを

明治三十七年御製。御題「をりにふれて」

【よとともに】 世と共に。時代のうつり行くと共に。永久に。世のあらんかぎり萬世まで。

【いさを】 勳、又は功と書く。功績。勳功。

「國の爲に命を捧げた人々の功績を世のあらん限り萬世まで言ひ継ぎ語り繼いで稱へよ」との御意である。前の御製と同じく戦歿將士の上を思召された御製であらせられるが、前の御製が命を捧げた將士の多きに叡慮を憫まさせ給ふ消極的な御製であらせられるに對して、これはその勳功を永遠に稱へよとの積極的な御製に拜せられる。従つて全體として所謂帝王調とも申上げるべき堂々たる御風格が拜せられる。更に細かく申上げれば「よとともに語りつたへよ」と五・七の調二句切に遊ばされた強い調、國の爲命をすてし人のいさをを」と一息に詠み進ませ給うた急迫した御歌ひ振り、何れも止むに止まれぬ大御心そのまゝの御發露とも申上ぐべく、將兵の勳功を賞で給ふ大御心の如何に深くあらせられたかが拜察し奉られる。

尙同じ頃同じ御心を詠ませ給うた御製を掲げて大御心を偲び奉るよすがとする。

かぎりなき世にのこさむと國の爲たふれし人の名をぞとむむる

戦のにはにたふれしますすらの魂はいくさをなほ守るらむ

くにのため心も身をもくつきつる人のいさををたづねもらすな

波風はしづまりはてよもの海にてりこそわたれ天つ日のかけ

明治三十九年、「をりにふれて」と題されて詠まれ給うた御製の中の一節。

【波風】 (一) 風荒く吹き波高く立つこと。又波と風。(二) 轉じていさかひ・あそひ・騒ぎなどの意。御製は(一)の御意

で、日露戦役を意味せられ、第三句に「よもの海に」と遊ばされた語と縁語となつてゐる。

【はてよ】 「果てて」である。をはる。つきる。「しづまりはてる」は「すつかり静まつてしまつて」の御意。

【よもの海】 「四方の海」である。(一) 四方の海。四海。(二) 海内。天下。ここは(三) 天下の御意。世界中。全世界。

【てりこそわたれ】 あまねく照りかがやく。「こそ」は詠歎の助詞。此の「わたる」は晴れわたる・澄み渡る・響き

大戦がめでたく終局を告げ國威のあまねく全世界に輝き渡つたのを喜び詠ませ給うた御製である。

なだらかに詠み進ませ給うたはじめの一・二句には平穩和煦の趣が拜せられ、これを「よもの海に」と字餘りの莊重な句で受けられて、下の句「てりこそわたれ天つ日のかけ」の清秀高明な御しらべにつゞく所、まことにさわやかに、悠々迫らざるおほどかなる御調に拜せられるのである。

久方のあめにのぼれるこゝちしていすずの宮にまゐるけふかな

明治三十八年、「をりにふれて」と題せられて詠ませ給へる御製。

皇祖神靈の御加護により、日露戦役も我が大勝利によつて終を告げ、九月五日講和條約も調印せられたので、天皇には伊勢大廟に御親拜あらせられんとの思召しで、此の年十一月十四日宮城御發聲、三重縣宇治山田市に行幸させ給ひ、十六日豊受大神宮に、十七日皇大神宮に御參拜あらせられた。その折の御製と拜察される。

【久方の】 ヒサカタの (一) 天の枕詞。(二) 轉じて天空に關係のある「雨」「月」「空」「雲」「夜」「星」等の枕詞。(三) 更に轉

じて「日の光」「月の都」などを略して「光」「都」の枕詞となり、又光から轉じて「鏡」にもかゝる。語意については諸説があるが、みな牽強附會で據るに足るべきものはない。

【あめにのぼれるこち】天照大神を祀つた「いすずの宮」にまゐるのであるから、やがて天上の如く思召されたのであるが、それが眞に天上界に御上り遊ばされたやうな御満悦を表して餘す所がない。

【いすずの宮】五十鈴の宮即ち伊勢神宮のこと。内宮の御前を流れる清流を五十鈴川と言ひ、此の川の名に因んで一首の御意は「日露戦役も我が大勝する所となつて、その御禮に参拜する今日の朕が心は天に上る思である」との御意である。

國運を賭して戦ふこと二年、國を憂ひ民を憐み或は思を遠く將兵の上にかげさせられて、千々に御心を碎かせられた天皇の戦捷の御歡びと御満足は、拜察に餘るものがあらせられたであらう。まことにあめにのぼれるこちして「あらせられた御事と拜せられる。まゐるけふかな」の具象的な結句は、大君の「けふ」のその御歡び心を歷々と髣髴させる御詠歎であらせられる。「あめにのぼれるこち」は單なる御満悦をあらはす語だけではなくて、天皇の大廟にまゐり給ふ敬虔崇高なこちの籠められたものと拜すべきであらう。

この時の大御心を偲び奉るには、次に掲げる同じ折の御製を併せて拜誦されたい。
をりにふれて

さくすずの五十鈴の宮の廣前にけふおほ幣をさゝげつるかな

内宮を五十鈴宮と申上げる。

「五十鈴川」は別に「御裳濯川」または「宇治川」といふ。源を度會郡神路山大床谷に發し、宇治山田市の南西を過ぎて二見ヶ浦に注ぐ。流程は約十六軒。皇大神宮の神域を流れ、その水は清く澄みきつて水底の眞砂も數へ盡すことが出来る程である。此の清流に手を清め、口嗽ぐ時、参拜者は自ら身がしまり心の改まるを覺える。八田知紀は「下りたいむことも畏し神垣や御裳濯川の清き流は」と歌つてゐる。

【まゐる】詣る。参拜する。

くもりなきあしたの空に神路山かうがうしくも見えわたるかな
尙行幸に先だつて御詠み遊ばされたものと拜せられる御製に次の一首がある。

社 頭

神路山みねのまさかきこの秋は手づからをりて捧げまつらん

日の本の國の光のそひゆくも神の御稜威によりてなりけり

明治三十九年「神祇」と題して詠ませ給うた御製三首の中、本課には次の御製「國民のうへやすかれ」との二首謹抄し奉つた。

【日の本の國】ヒのモトのクニ 日本にほんの國號は孝德天皇の御代に新に建て給うた國號である。推古天皇の御代に隋國への國書に「日出處天子」と書き遣はされたのに基づいて、皇國の名と定められた。日の本は此の日本の字を訓讀したものである。また一説に皇朝は天津日の大御神の生れ出でませる本つ國であるから日の本の國と言ふのであると言ひ、玉葉集二〇神祇の「我が國は天照大神の末なれば日の本としも言ふにぞありける」との歌は此の意に據つたものである。いづれにしても神國にふさはし

「我が日本帝國の國威がいやましに伸張發展するのは、全くこれ神の御威光によつてである」と神々の御神威を尊び讃へ給うたのである。

此の國號を持つことは愉快なことである。
【國の光】クニのヒカリ 國威。光は御製では威光・勢威などの御意。

【御稜威】ミイツ 御は尊稱で「イツ」は(一)神の嚴靈なる威光を言ふ。漢書李廣傳に「威稜愾乎隣國」とあり註に「李奇曰、神靈之威曰稜」(二)鋭い威勢。神代記上「奮威稜之雄詔」發稜威之噴讓(三)轉じて天皇の御威光を申上げる。御製はいふまでもなく(一)の御意。

我が國が神の護り給ふ國であり、神の御稜威によつてとこしなへに榮える神國なることは、歴史の雄辯に物語る事實であるが、長くも明治大帝には常に此の御信念に立たれ、天つ神々を御尊信遊ばされ、皇祖皇宗を崇め奉り、身をもつて國民に範を垂れ給うたのである。その御信念の自らの御發露として誠に滞りない莊重雄勁な御格調に拜せられる。所謂帝王調とも申上ぐべきこの堂々たる御風格は、つまり現人神としての大自覺の自らなる御流露であると申上げねばならない。尙細かく申上げれば「日の本の國の光」と調子のなだらかな「の」の音で一氣に歌ひくだされた所、技巧ならぬ御技巧が光をついで底に輝いてをるとも申すべきか、伸び伸びとして悠々迫らざる思ひがあり、その流るゝ如き勢を「そひゆくも」と莊重な御句でうけさせられ、かくて「よりてなりけり」と歌ひ收められた引緊つた御詠歎は雄勁な調で全體を引しめてをられるかに拜せられる。

國民のうへやすかれと思ふにもいのは神のまもりなりけり

明治三十九年御製。御題「神祇」

【國民のうへ】クニタミのうへ 國民の生活。この「うへ」はその物事に就いてのいろいろの事を表す意。例へば「身の上」「人の上」と言へば「その身」「その人」の境遇を

言ふが如きである。境遇・事情・事柄・様子などと解釋される。

【思ふにも】思ふにつけても。

御製は「國民の生活が安穩なれかしと思ふにつけてまづ祈るのは神の御加護である」との御意である。

我が國が神靈の御加護によつて、いやさかに榮える神國であるとの天皇の御信念に就いては既に前の御製に於いて述べた所であるが、限らない御仁慈をもつて絶え間なく國民の上を御軫念あらせ給うた天皇は、何にもまして神々の御加護の民草の上にあまねからむことを祈願あらせられるのである。誠に有難い御製と申すべきである。

「神祇」三首の中漏し奉つた一首を左に掲げる。

かみかぜの伊勢の宮居を拜みての後こそきかめ朝まつりごと

照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと

明治三十七年御製。「述懐」と題された九首中の一首である。

【照るにつけくもるにつけて】表には天候の晴曇の意を述べさせられたものであるが勿論、世の平安なるにつけ不穩なるにつけての御意も含められたものと拜察される。

譬へて言ふ語。人民のこと。蒼生・あをひとぐさなどと

同じ。

【うへはいかにと】様子はどうであらうと。此の「うへ」

は「國民のうへ」の「うへ」に同じ。

【民草】タミグサ 人民の生れ出づるのを草の生ひ茂るに一首の御意は明瞭である。至尊の高きにおはしまして萬機御總攬に御暇もなき御身にありながら、照るにつけ曇るにつけて民草の様子はいかにあらんと絶え間なく御軫念あせられる大御心は、忝けなしなど言ふはおろか、誰か感激流涕しない者があらうか。「賈誼の新書に『視民如子』といへるは、天皇の御上を申せりとぞ言ふべき」と佐々木信綱博士は言つてゐるが、げに天皇は國民の大御親としての御仁慈に立たせられてゐたものと拜察されて長き極である。御歌は全くその大御心そのままの眞摯率直な御歌ひ振りである。

尙同じ「述懐」の中に此の御製に並んで

民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな

の御製が拜せられるので、御製は日露戦役勃發の前後の事と拜察される。愈々政務多端にまします御時に、先づ思召すは民草の上であらせられる御仁慈の程に思ひ及ぶ時、御聖旨の一入身に泌みるものを覺えるではないか。

花見つゝ遊ぶ春日におもふかなたがへす民のいとまなき世を
 明治四十年、「をりにふれて」と題せられて御詠み遊ばされた御製三首の中の一詩である。

【たがへす】 田返すの義。たがやすに同じ。

られる。

【いとまなき世を】 此の「世」は生活・渡世の御意に拜せ

「櫻花を見ながら遊ぶその暇も終日田を耕して働く農民達のいとまない生活を思ふと安閑たり得ない氣持である」との
 忝い御述懐であらせられる。

日毎の御劇務の疲を憩はせ給はんその僅かの御遊びであらう。日頃の萬機御總攬の御親らの御繁劇は他に遊ばされて
 「民のいとまなき世を」とは誠に忝けなしなど言ふも及ぶ所ではない。その絶間なく國民の上に御心を懸けさせ給ふ深
 い御慈しみが底に堪へられて、全體の御調が打沈んだ嚴かなものに拜せられ、それが「おもふかな」の御詠歌に集中さ
 れて深い御感慨となつて表れてゐるやうに拜せられる。

同じ折の御製二首を左に掲げる。

おのがじしつとめを終へし後にこそ花の陰にはたつべかりけれ

平かに世はをさまりて國民と共に楽しむ春ぞ嬉しき

三 備 考

用字に就て

本課の用字は明治天皇御集のまゝに、一文字も改めてない。他の課の用字法と不一致であるが、御製は一文字も改める

べきでないが故にかくしたのである。

1 指導研究

(一) 明治天皇御製については生徒は小學國語讀本卷十二の巻頭に於て既にこれを拜誦し奉つてゐる。豫備として改めてこ
 れを拜誦せしめておくことは指導を進める上に何かと好都合である。因に小學讀本に謹抄し奉つてある御製は、天皇が畏
 き大御心より或は國家を思召し、或は祖神を敬ひ給ひ、また國民をいつくしみ給ふ御製の外、更に御教訓・御修養の意を
 詠じ給へる御製、及び純然たる詩人としての御親らの御感興を表現遊ばされた純藝術品とも申上ぐべき御製など、天皇の
 御製の全貌を窺ひ奉るやうに謹抄し奉つてある。尙参考欄について見られたい。

(二) 本課の御製はすべて既に主眼の中に述べた如く、一にこれ帝王として常に國と民の上に御軫念あらせられた大御心
 が、その基調となつてゐるのであるから、その心を以て拜誦し奉り、生徒をして御聖澤の篤きに新なる感激を呼び覺さし
 むべきは勿論であるが、唯これを指導者の立場から強ひるが如き事のないやう注意しなくてはならない。御製はすべておの
 づからなる御詠歌であられて、世上凡下の歌にみる計ひ心や、所謂小細工の影だにあらせられない。唯ひたすらなる御流露
 であらせられ、従つて生々とした御感懐が御實感のまゝ天真爛漫に御詠ひ出されたものであつた。拜誦これを久しうすれ
 ば必ずや大御心は生徒の心を感動せしめずにはおかないであらう。ひたすら拜誦を重ねて、生徒自らの感動を待ち、然る後
 私意を排し心を澄して説明を加へ大御親としての深甚の御仁慈を、深く生徒の腦裡に滲みこませるやうな態度で指導を進
 めたい。

(三) 小學國語讀本をも反省し、天皇の御製は本課の如きものの外、御修養御教訓の御製・純藝術品とも申すべき御製のあ
 らせられる事を知らしめ、時間が許せば此の方面の御製をも謹抄増補して天皇が御歴代中、否古今に互り第一等に位すべ
 き大歌人にあらせられる事に思ひ到らしめるならば、大帝に對する生徒の景仰慕の情はいやまずであらう。

2 参考

(一) 北原白秋著「季節の窓」から「明治天皇の御製」の一文を抄録する。

明治天皇は現人神としての大自覺に立たせられた。この神ながらの道に立ち、まことに一大聖王として萬民の景仰を受けさせられたその御製を拜するにまことに王者の御風格が大御心を通じて蒼穹のごとく天日のごとく、十方四海に光耀してわたらせらるる。歌柄といふ點から見れば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前には鞠躬如たるものがある。帝王と凡下とはおのづからにして違ふ。これは天意であつて如何ともなすすべはない。

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

御製は桂岡派の歌調にして、而もその御歌所調を遙かに超越しておはせらるる。ある歌人が萬葉調でおはせられぬといふ點について遺憾の意を表してゐたが、萬葉調ならぬ點こそ御製たる所ではないか、何となれば大帝の御製は既に大帝の御風格そのものであつて、桂岡調とか萬葉調とかを以て批判し奉るべきでない。形式以上の大稜威がそのままの帝王調として流露し光被して遍ねき故に私ごときもひたすらに景仰し奉る所以である。

眞の王道こそは大帝の立たせたまはうた絶対無二の天の道であつた。現神としての御自覺そのものが既に一の宗教でおはせられた。御製を一一拜誦するに、その殆どが、皇祖皇宗を崇め、國を思ひ、民を慈み、四海の和平を希ひ、異民愛撫の御聲ならぬはない。我が國民の當に常に禮拜しまつるところである。人たるの道、子たるの道、言の葉の道をあくまでも實に即いて御詠歌遊ばされた。その中には教調の教調、道歌としての道歌として、純粹の藝術外の見地から拜せらるる御製も少くないが、世の教育家達も讀つて御製の眞純なる御風格をも、その各自の道の爲にする牽強附會の冒瀆があつてはならぬ。何となれば大帝の御製は理趣のための理趣でなく、一に王者としてのさながらの御詠歌でおはせられたからである。

人口に膾炙してゐる御製以外の御製について、大帝の御一面についてこそほと／＼私は人としての大帝を改めて思慕しまつるものである。誰人もまだそこに言及したものが無ささうに思はれる、故に、敢て茲に其種の御製を謹抄して歌壇の人々の拜誦を希ふのである。

をりにふれて

月みればまづこそ想へ旅渡して近くむかひし山のけしきを

綿の實もややゑみそめて畑中のくぬぎの林色づきにけり

庭 花

九重の庭木のさくらさきにけり野山の春もさかりなるらむ

旅 中 花

野も山も花のさかりになる時をうれしく旅にいでにけるかな(以下七十一首省略)

何等の滯りもあらせられぬ。思無邪は天の思無邪である。良寛の歌はいいと云ふ。然し良寛以上に大帝の御製は眞率で無心であらせられる。良寛は天成の童心者であつたであらう。然しかの思無邪の境涯は禪家としての修道と忍苦とから更に深められて、始めて幼心の心に還つたものにちがひない。大帝は抑からそのまゝであらせらるる。禪家の悟入やそれに付き纏ふ厭みが些もあらせられぬ。この純眞無垢こそは天意である。良寛の歌を渴仰する歌壇に良寛以上の大帝の御製ある事を恭禮しまつらないのは不思議である。所謂太古にして太新、滔滔乎として天の如しとは、まことに聖帝明治天皇の大御心であるものを。

(二) 佐々木信綱博士の御製謹註を「やまと心」から抄録する。

天皇が歌について抱かせ給ひし御考は、所謂まごころを重んぜられ、その歌の生命と遊ばされしにて、さる御思想は、次の御製によりても何ひ知るを得べし。

おもふことうちつけにいふ幼児の言葉はやがて歌にぞありける

まごころを歌ひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

歌に對してかくの如き御考を抱き給へりしこととて、天皇の御製は眞情流露、自然の妙味あるの趣をもてその理想とし給ひ、かつ十分にこの旨を得させ給へり、而してこれを御製なべてを通じてのまことに貴むべき根本の御特色として、同じき理由よりして、またおの

づから御製中の多きを爲す自然の風物に關する御作に於ても、あしびきの山のはいづる月かげに大海原の波を見るかな浪の上に朝日にほひて鏡なすあをうな原は明けはてにけり家なしと思ふかたにももし火の影みえそめて日はくれにけり如き、自然眞率のうちに自ら感情のゆたかなるをおぼゆるの御傾向著く拜せらるるあれば、或はまた、うしろにはいつなりけむ漕ぐ船の行方はるかに見えし島山寄る浪にうちあげられてふしながら花咲きにけり河原なでしこ草雲雀鳴きもぞやむと秋の夜の月なき窓もさされざりけり

の如き、即興即感のうちに自ら輕妙奇警の趣を得させ給へる御製にもすぐれさせ給へり。
 こは御製を通じて著く感銘し奉らるるところなるが、更に又御製を拜して、最も我等の感じ奉るは、天皇が畏き大御心よりして、或は國家をおぼし、或は祖神を敬ひ給ひ、或は國民をいつくしみ給ひ、或は御修養、はた御訓誡の意を詠じたまへりし御製なり。由來この種の歌は或は説明に流れ或は理に落ち、歌として趣乏しきもの多かるが習ひなれど、御製に至りては、いづこまでも高き調と、雅びやかなる趣とを失はせ給はずして、しかもその御意ふかし。これ蓋し、この種の御歌が天皇の高く大いなる御人格の自然の發表にましまししが故にして、その高風氣品にいたりては、到底他の學び得ざるところ。この種の幾多の御製は吾等國民の心に大なる教訓として永久の價値を有すべきこと、恰もかの古經典の一言一句にも比し奉るべきものといふべし。例へば、
 曉のねざめしづかに思ふかなわがまつりごといかがあらむと
 國の爲たふれし人を惜むにも思ふはおやのころなりけり
 あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな
 目に見えぬ神の心にかよふこそ人のころのまことなりけり

等、この種に數へまつるべき御製いと多かり。なほ、

こらは皆軍のにはにいではてて翁やひとり山田もらむ

つばめとぶ影のみ見えて田うゑ時家に人なき小山田の里

しづのをが一人ひきゆくをぐるまの重荷の上につもる雪かな

等の如く、戦時の御製、田園の御製等に、人民の實情に通ぜさせ給へる御作少なからず拜せらる。こはしばしも民草の上を離れさせ給はざりし畏き大御心何はれて貴き限りなるが、これにつけて思ひ出さるは、亡き高崎男爵がかつて語られしところに、陛下の御製は演習行幸の度毎に御上達あらせられ、また大戦役に際して殊にすぐれたる作品をものせさせ給へるやう拜せらるるとありしことなり。御製を拜誦する人々の爲に、頗る感銘しつべき物語と覺ゆるまゝにこゝに記しおきつ。

もしそれ全體を通じて我等が感じ奉るところは、一種雄々しく高く豊かに、かつ廣やかなる御訓なり。たとへばうらゝかに晴れたる空に高鳴る山松風を聞くが如く、讀む者をして、その高明悠容なる御訓に自ら引入れられては、知らず識らず大いなる王者の威徳に身の溶化せらるるを覺えしむ。これぞまさしく、高貴博大なる御人格の自然の發露にして、天皇が歌人として有せさせ給ふ獨歩の御特質とたたへまつるべく、感歎景仰しまつるに堪へざるところなり。

(三) 小學國語讀本卷十二第一課明治天皇御製を轉載し奉る。

古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと

淺緑すみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

大空にそびえて見ゆるたかねにもほればのぼる道はありけり

ほどく心に心を盡す國民のちからぞやがてわが力なる

さし昇る朝日の如くさわやかにたまほしきは心なりけり

よきを取りあしきを捨ててとつ國におとらぬ國となすよしもがな

荒駒を馴らしがてらに野邊遠く櫻がりするますらをのとも
 いづ方に志してか日盛りのやけたる道を蟻の行くらむ
 はるんと風のゆくへの見ゆるかなすゞきはらの秋の夜の月
 海原はみどりに晴れて濱松のこすゑさやかにふれる白雪

二 大和言葉

五十嵐 力

一 解題

1 作者

五十嵐力 イガラシチカラ 號を巴干、又は甲鳥園主人といふ。明治七年十一月山形縣米澤市に生れた。二十五年米澤中學校を卒業して出京。二十八年東京專門學校(早稻田大學前身)文學科を卒業。三十四年以來講師として母校に教鞭を執り、翌年同校の早稻田大學と改稱されると共に、同學文科教授となり、更に大正十三年同大學文學部長に進み、大正十四年には文學博士となつた。「國歌の胎生及び發達」がその學位論文である。昭和五年文學部長を辭し、爾來引續いて同大學教授として今日に及んでゐる。

氏は國文學者として夙に國語の愛護を主張し、文章論・修辭學に造詣が深く、此の方面に「新文章講話」「作文三十三講」「修辭學大要」等の好著があり、國文學上の著作には前記學位論文の外「新國文學史」「平家物語研究」「軍記物語の研究」等が挙げられ、又「趣味の傳説」「八重葎」「半農生活」「我が書翰」「甲鳥園隨筆」等の隨筆集も多い。これ等主なる著作を集めたものが「五十嵐力集」である。

2 出典

隨筆集「八重葎」から採つた。「八重葎」はその序文によれば主として大正五年に書いた隨筆で、「有難き老醫」以下八題が集められた小著である。本課はその中「八重葎の這ふまゝに」と題した中の一話である。今五十嵐力集第一編自然親愛

記「野草集」の中に收められてゐる。

3 主眼及び採擇の趣旨

國語は祖先數百年の經驗の結晶であり、國民の文化と傳統とを背景にして、そこに無限の味と不動の眞理とが藏されてゐるものである——これが作者の中に永く湛へられた國語觀であつた。その國語觀が一老農の話によつて具體的に實證される機會を得て、作者は今更新なる驚異を感じ深い感歎を漏してゐるのである。この話を通して感じられる事は國語の語意成立の深さであり、従つて國語の持つ深遠の味であり不動の眞理である。更にまた文解釋の根柢も表現の基礎も、要は國語の眞實な理解に俟たねばならぬ事である。究極すればそれは國語の持つ重要性に對する自覺となり、國語愛の觀念に結びつくであらう。改正要目の「國語が國民性ノ具現タルコト及び國語ノ教養ガ國民ノ自覺ヲ促シ品位ヲ高ムル所以ナルコトヲ會得セシメテ國語愛護ノ念ヲ培フ」ことは、本課の如き教材に依つてその目的に近づかねばならない。

中等學生として今國語學習の第一歩を始めるに當つて、國語に對する明確な觀念を會得せしめ、將來の國語學習の根本態度を確立させることは最も肝要必須のことと考へてこゝに採擇したものである。

二 解 釋

1 語 釋

【大和言葉】 ヤマトコトバ 日本固有の言葉。和語。漢語佛敎語等の影響をうけぬ純正なる日本語で、所謂本文中の「日本の古言」(四頁二行目)であり、「祖先が幾百年の經驗を結晶させて三四字の中に不動の眞理を疊み込んだ」(一〇頁)ものである。解釋に先だつて讀みによつて

得た生徒の理解を整理してから始めたい。「大和」は日本のこと。詳しくは前課參照。

【老農】 ラウノウ 老農は多年農事に従事して經驗をつんだ農夫。年老いた實際的經驗の豊かな農夫。論語・子路「樊遲請レ學稼、子曰、吾不レ如老農。請レ學圃、吾不レ如老圃。」

【H氏】 稗田杉屏氏である事は「國語の愛護」に述べてある。Hはその姓のローマ綴の頭字である。

【稗田杉屏】 ヒエダサンペイ。本名は三平。杉屏は號である。千葉縣東金の人。古く早稻田大學を卒業し、アメリカに遊び、歸朝後牧著に從事しながら、隱遁的生活をしてゐたが、昭和四年十一月歿した。

【古言】 ヨゲン 古代の言語。古語。新井白石の東雅總論には「古言トハ太古ヨリ近古ニ至ルマデ、其世々ノ人ノ言ヒシ所ノ語言ナリ」とある。

【裡】 ウチ(音リ) 裏の俗字。表の反對。本來衣の内側をいひ轉じてすべての物の内面の意となる。こゝは後の意。

【眞理】 シンリ (一)まことの道理。動かし難い道理・正理。眞諦の理。(二)論理學上では論理の形式又は法則に適合する吾人の知識。(三)哲學上では何人にも何時如何なる場合にも妥當なりとみとめ得られる知識。こゝは(一)の意。

【いつぞや—もう二十年にもなりませんか】
いつぞやと言ひかけて、—の符號でそこに沈黙回想の時間を示し、次に「もう二十年にも」と古いおぼろげな記憶をたどつてゆく所、これはよく使はれる手法ではあるが、話體文の技巧として一應注意さるべきである。「いつぞや」は過ぎし何時の頃なりしかの義。轉じて過ぎし頃、かつてなどの意となる。

【海上胤平】 ウナガミタネヒラ 歌人。通稱六郎。號は椎園。天保元年元旦、千葉縣海上郡三上村に生れた。父は賢胤。彼はその三男である。はじめ武道を志し、山岡鐵舟、千葉周作の門に入り、安政の初武者修業のため諸國を遊歴し、和歌山に入り、文武二道の盛なるを見て、止つて加納諸平の門に入り國學を學んだ。戊申の役に遇ひ江戸に歸り、明治二年水原縣按察使となり、後山形縣地方裁判所判事補に轉じ、又同縣勸業課に勤め、十六年辭して上京。以後専ら野にあつて歌道につくし、多くの評論を著し、又塾をひらいて門に入るもの數千に及んだといふ。氏は賀茂眞淵に傾倒して古格により當時歌壇の主流に眞向から挑戦し、その態度は眞摯であつたが、一方冷徹苛烈であつた爲、當時の歌人からは憎まれた。大正五年四月歿。享年八十八。著書に「椎園家集」十四家集評論「歌學會歌範評論」「長歌改良論」等がある。

【小出榮】 コイデツバラ 明治時代の歌人。號を樞園といふ。天保二年八月、江戸の石見藩邸に生れた。父は石見濱田藩の家臣松田三郎兵衛といひ、彼はその四男である。二十歳の時小出家の養子となつた。幼にして畫を荒木寛敵に學び、武藝に於ては槍術に長じた。明治十年宮内省文學御用掛となり、十七年京都に轉勤、二十年東京に歸り、廿四年吉野京都行幸に供奉、ついで御歌所主事とな

つたが晩年辭して御歌所寄人となり、勅任の待遇を賜はつた。彼の著には、梶花初篇・同續篇・同後篇・同拾遺・小出榮・翁家集三卷・幾久能志太幡・飛驒の山ふみ等がある。祭の歌ひ風は、自由輕快な歌ひぶり、多少の新味を含み、當時宮内省歌人の中では、優れた詠み手であつた。明治四十一年四月十五日、東京に於て歿、享年七十八歳。

彼の自讃歌として有名なものは次の二首である。暮るるまで柳に見えし春風は梅の匂になりけるかな我がために水汲む妹があさかげのやせたる姿見ればかなしも

【暇つぶしに下らんことを言ふ】 退屈しのぎにつまらぬ事を言ふ。「下らん」は「とるにたらぬ・つまらぬ」などの意。日々農事に追はれてゐる農人の考へさうな事である。恐らく生徒達も度々耳にして、或はおぼろげながら國語の語句の検討などに無意識的な疑問などいだいてゐるものがあるかも知れない。本課はさうした觀念を徹底的に打碎いて、國語觀念の確立を期せねばならない。

【板橋】 東京市板橋區板橋町。舊江戸四宿(千住・品川・新宿・板橋)の一。中仙道口の首驛で、浦和・大宮に向ふ要路である。板橋とは驛の北、石神井川の架橋より起つた名であらう。既に源平盛衰記・義經記等にもその名が見えてゐるので、古い地名である事が知られる。江戸開府後は中仙道の首驛として毛・信・越往來の人馬を繼立てた。

たしてやらうか」と威勢よく出かけて行く自信たつぶりの言動の中にも、それがよく現れてゐる。

【旦那】 ダンナ、檀那とも書く。(一)佛語梵語 Dana, Paṭi の略で施與の義。翻譯名義集四「秦名ニ布施、若 内有ニ信心、外有ニ福田、有ニ財物ニ心生ニ捨法、能破ニ慳貪、是爲ニ檀那」これより財物を施與する信者、即ち施主を僧より檀那・檀家と呼び、僧はまた俗家に法利を施與するので、俗家より僧寺を檀那寺といふのである。(二)轉じて家人奴婢より主人を指して呼ぶ語。主人・家長の義。(三)妻が夫を呼ぶ語。(四)商人が得意客を呼ぶ語。(五)身分の低いものが尊貴の人を呼ぶ語。こゝは(三)の意。

【旦那どうしても動きませんよ、今日はどうかしたんですな。】 「俺が一つ立たしてやらうか」と自信たつぶりに威勢よく出かけた手前、どうもてれくさい限りである。そのきまり悪さが「旦那どうしても動きませんよ」といふ情ない報告であり、到々それを「今日はどうかしたんですな」と他の罪になすりつけてしまつたのである。併し「打つても叩いても引張つてもだまして」は、大言の手前苦心慘憺した五平の姿が思はれて、憎めない滑稽感を誘はれる。

【一寸も】 イツスンも、「チョツトも」と訓まないがよい。

【程なく】 (一)距離が近い。せまい。源氏物語若紫「程なき處なれば君もやがてきゝ給ふ。(二)時が少い。まもない。源氏物語總角「わりなくしておはしましてはほどなく歸り給ふがあかす苦しきに」。こゝは(二)の意。

【一程なく走つて来て】

【一しばらくすると、それが又歸つて来て】

【一しばらくすると、それも歸つて来て】

同じ事柄を反復して敘述するに、それぞれその表現を變へ、而もその同じ結果に對する非難をまた「意氣地のない奴だ」「馬鹿な奴だ」をかしい事だ」とみな異つた言葉を受けて、事件の進展を漸層的に、立體的にせり上げて行くあたり、一見凡にして凡ならぬ、周到にして巧妙なる手法に注意しなければならぬ。

【小力】 コヂカラ ちよつと人並より力があるといふ程度の力。

【それちや五平お前行つてやれ】 前に「一人の男に五頁六行」と言ひ「小力のある他の男を(六頁二行)」と言つて、此處ではじめて「五平お前」と名をだした所に注意すべきである。五平は老練な牛方でその腕前は日頃主人の信賴する處であつたに違ひない。それが「五平」と特に名前になつて出たものと思はれる。「情ない奴だ」と他の者を小供扱ひにしたやうな口調の中にも、俺が一つ立

【男ども】 ヲトコども この男は召使の男、即ち下男の意。

【一日の長】 イチジツのチャウ(一)少しく年齢の上なこと。論語先進「以ニ吾一日之長ニ乎爾、毋ニ吾以ニ也」(二)轉じて少しく勝れてゐること。少々餘計の經驗をへてゐて、他よりは少々すぐれてゐるといふやうな心持である。唐書。王珪傳「臣于ニ數子ニ有ニ一日之長」こゝは(二)の意。

【六戸邸】 シンドテイ 「六戸」は氏であるが、如何なる人であるかは不詳である。

【大磐石】 ダイバンジャク 大岩。磐は大石。「じやく」は吳音。磐石のみで大岩であるが、更に「大」をつけて一層大きい感をだしたのである。

【大磐石と腰を据ゑてをる】 据り込んだ牛の杆でも動きさうのない様子の形容である。それこそ「打つても、叩いても、引張つても、だましても(同頁二行目)どつしりと坐り込んで動かぬ状態が、この一語で目に映る様である。「大磐石」との「と」は「の如く」の意。古今集・八・離別「白雲のこなたかなたに立ちわかれ心を幣と碎く旅かな」。「据ゑる」はワ行下二段活用の動詞。据へると誤らぬ様に注意し、併せて「ゑ」の假名遣を用ひるワ行の動詞には「植う」「据う」「飢う」の三語だけであることを教へたい。

【人だかり】 人のあつまりつくこと。人がより集ること。

【あやす】 愛し慰めること。こゝでは牛をあやなして機嫌をとるやうにすること。俚言集覽に「嬰兒をあやすなど言ふはあやなすの略か」とある。

【困りぬく】 コマリぬく、非常に困る。「ぬく」は「果す」「遂ぐ」などの意で、或る事を徹底的に爲し了する意味に用ひる。こゝは極度に達すること。困り切るに同じい。

【呆然】 パウゼン あつげにとられたさま。ぼんやりしたさま。

【半纏】 ハンテン 「絆纏」とも書く。こゝは印半纏の略。通常「半纏」は羽織に似て胸紐をつけず、襟を折返さずに半襟をかける。

【股引】 モモヒキ (一)詳しくは「猿股引」と言ひ、所謂猿股のこと。後にはこれを長くして「腰」まで達するやうに綿布で作つたものを専ら言ひ、猿股引と區別する。職人などの用ひるのはこれである。

【半纏を着て股引をはいた】 所謂職人風俗である。職人・労働者・入足などこの服装をした人を一口に「半纏着」といふ。

【馬方】 ウマカタ (一) 江戸幕府の職名で、馬の良否を鑑別しその飼養を司り、又將軍の馬の調教に當つた。(二)馬子。駄馬をひくを業とするもの。いふまでもなくこゝは(二)の意。馬方に對し牛方の語もある。

【老爺さん】 チイさん
【ねんごろに】 「懇に」と書く。「ねもごろに」の音便。(一)真心をもつて。手厚く。丁寧に。(二)懇意に。じつこ
ん。こゝは(一)の意。

【鼻綱】 ハナヅナ 牛の鼻に輪を通しそれにかけてある綱。

【尻邊】 シリベタ
【大磐石の牛】 隠喩である。直喩を煎じつめて相似の關係を相即の關係にまで押しつめたものである。「大磐石の如き牛」といふのを更に「大磐石の牛」と隠喩にした所が味ひ深い。磐石そのものの牛」といふ位の味である。

【一身振りひして】 ヒトミブルひして。「身振り一つして」と言ふ所を熟語的にして緊張感を出してゐる。

【むつくり】 起き上る様。むくむく。むくり。むくなど言ふ「むつくり」はむくりの音便。

【大丈夫】 ダイヂヤウブ (一)とりわけ壯健なこと。(二)あぶなげないこと。(三)間違ひない。たしかなこと。こゝは(三)の意。「夫」を清んで讀めば男子の美稱となる。區別を明にしたい。

【一向】 イツカウ 更に。全く。

【古學】 コガク (一)國學では何事も古典に據り、其の本を考へて古代精神・古代文化を闡明にする學、契沖には

【賈島が推敲の話】

【賈島】 カタウ 晩唐の詩人。字は浪仙、唐の范陽の人。初め僧侶となり無本と名づけてゐた。後還俗して洛陽に來て韓愈と交を結び、その教をうける事が多かつた。後進士に擧げられ、累進して遂州長江の主簿に至つた。毎歳の除夕に、一年中の自作の詩を檢し、之を祭つたのは有名な話である。

嘗て賈島が馬上他出の途、詩を賦して「鳥宿池邊樹、僧敲月下門」といふ句を得た。併し下句「敲」を「推」にすべきか「敲」にすべきかに思ひ惑ひ、手で推す眞似をし敲く眞似して我を忘れて行く中、忽ち人に誰何された。氣がつくと馬が何時か人の玄關に乗りつけたのであつた。賈島もさすがに驚いたが、幸にそれが韓退之の家で、退之も居合せ實を物語ると、退之は沈思稍久しくして敲の字が佳いと評したと言ふ。要はいかなる事物を寫すにもこれに最も適當な語があつて、それを用ひねば落ちつかないといふ例話である。(備考参照)

【推敲】 スキカウ 右の故事より「詩歌文章の字句を鍛煉工夫する」意に用ひられてゐる。

【應舉がゐのししの話】

【圓山應舉】 マルヤマオウキョ 江戸時代の畫家。圓山派の祖。通稱は主水、字は仲選。丹波國桑田村に生れ、初

じまり荷田春滿・賀茂眞淵・本居宣長等の國學者の唱導した學である。(二)漢學では宋明の儒學の性理學に反對して起つた我が國の儒學で、註釋によらず直接儒書の本文に據り孔孟の眞意を發揮せんとする學で、伊藤仁齋・荻生徂徠等がこれを主張した。こゝは(一)の意。

【不案内】 フアンナイ その道に暗い。様子を知らない。「案内」は「案内」とも書き(一)本來「官府に藏する先例留書の文案の内」の意である。(二)轉じて物事の内情の意となり、(三)三轉してその内情を知る意となり、更に(四)取次を頼むこと。(五)客を招く事。(六)手引・道しるべなどの意となる。こゝは(三)の意。

【幾百年の經驗を結晶させる】 幾百年といふ永い經驗の精髓を壓縮凝結させる。「結晶」ケツシヤウ 化學上の術語。數個の平面をもつて限られた規則正しい立體で、天然に成生し、その組織の一定したもの。こゝはこれを動詞化して唯一「精髓を凝結させる」位の意である。

【言葉の味】 コトバのアヂハヒ 「言葉の意味」の譬喩的表現。言葉は單に概念的・抽象的な意味を持つだけでなく、それぞれその言葉獨特の具體的・特殊な意味を持つてをり、それは直觀的に情意的にのみ把握せられるのである。故にこれを譬へて「味」と言つた。

仙嶺と號し、後應學と改めた。別に仲均・遷齊・雪汀・夏雲等の號もある。初め狩野派の畫人石田幽汀に學び、出藍の譽があつたがその規矩に泥まず、元の錢舜舉の畫法に法り、古今の畫風を參酌して一新機軸を出した。世に圓山派といふ。寫生に妙を得、而も之を強調し、特に花卉・動物・山水に秀でてゐた。實に探幽以來の大家で、その作中三井寺圓滿院の「七難七福」の巻物、讃岐國金刀比羅宮社務所の襖繪、丹波國桑田郡穴太村金剛寺の襖繪の「波濤圖」等が最も著名である。寛政七年歿。享年六十三。

應學は嘗て睡猪を畫かうとしたが、それには實物を寫生すべきであるとなし、八瀬の里から來る薪賣の老婆に猪を見たら知らずやうに頼んだ。一ヶ月程してこの老婆は裏簾の中に睡猪のある事を告げ知らせた。應學は門人と共に直ちに赴いて細かく之を描いた。後鞍馬から來た老翁にその畫を示すと、彼は「猪は睡つてゐる時でも、その怒毛の差毛が立つてゐるものなのに、此の猪の毛がみなねてゐる所からみるとこれは病猪であらう」と評した。そこで應學はその老翁に詳しく生猪の睡狀を聴取して書き直したが、案の如くその後先の老婆が來て、先の睡猪があつた晩の中に死んだ事を告げたといふことである。應學が如何に寫生に妙を得てゐたか、如何に繪事に

熱意をもつてゐたかを窺ひ知るに足る逸事である。思ふにあらゆる形象はすべてそれぞれ獨特の意味内容を現してゐるもので、その關係を知悉せねば、立派な藝術は生れないといふ話である。言葉の問題ではないが唯一絶對の表現といふ點で本課と聯關する譯である。(備考参照)

〔觀世大夫が木賊刈の話〕
〔觀世大夫〕 クワンゼダイフ(ダユー) 觀世流の家元。その祖は觀阿彌清次で、その子世阿彌と共に足利義滿に仕へて寵眷をうけた。猿樂の藝能を今日の能樂の様な藝術的にしたのは彼の功績であると言はれてゐる。現在の觀世宗家は二十四代左近氏である。こゝに言ふのは何代であるか明瞭でないが、種々な點から考へて第十四世清親であらうと思はれる。

享保年中、觀世大夫が京都で一世一代の觀進能を催し(但しこれは疑問である。備考の條參照のこと)「木賊刈」を演じた。満座その妙技に陶然たる中に、一群の百姓は一向感動の色も現さず、反つて非難の色さへ浮べて囁き合つてゐた。觀世大夫はこれを見て怪み、能の果てて後百姓を招いて仔細を尋ねると、自分等は信州木曾の御坂國原山で木賊刈を渡世とする者である事を述べ、且能の木賊の刈り方の誤つてゐる事を指摘した。觀世大夫はこれをきいて深く感謝し、その後江戸で百姓より教へられ

た新しい型を試みて名聲を博したといふことである。この話も言葉の問題ではないが、同じく唯一絶對の表現といふ點に於いて本課の話に結びつくのである。(備考参照)

【フローベルが一語説】

フローベル Gustave Flaubert (1821—1880) フランス十九世紀の小説家。自然主義作家の泰斗。ルアンに生れ、少年時代より文學を好んだが、後法律を學ぶ爲にパリに出た。然しパリでも法律をも彼は好まず、ユーゴー等と交際して文學研究に専念した。やがて父の死に會ふや、彼はパリでも法律も惜氣なく棄て去つて、セーヌ河畔の生家にかへり、生涯を獨身で其處に過した。ボバリー夫人 (Madame Bovary) サラムボオ (Salambo) 等はその代表的な作品である。

嘗て彼は後輩の作家モーパッサン (Maupassant) に、一つの事物・動作或は性質を現す爲に最も妥當適切かすべからざる名詞・動詞・形容詞は唯一つに限られてゐるといふ意味のことを言つた。これを一語説 (One word

theory 或は Single word theory) と呼ぶのである。

フローベルは自ら身を以てこの一語説を實行した作家で、一頁を書くに一週間を費す程の苦心努力を拂ひ、その用語は確實、その文體は的確無比であつた。彼の不滅の傑作は蓋し其處から生れたものであらう。彼の後繼者としてはゴンクール・ドゥデ・ゾラを擧げる事が出来る。(備考参照)

【黙止す】 モダす 「黙す」とも書く。(一)言ふべき事を言はずに黙る。(二)そのまゝにすてておく。こゝは(二)の意。

【備忘する】 ビバウする 忘れない用意に備へること。忘れない用意のため書きつけておくこと。備忘と言ふ名詞から轉化したサ變の動詞。「運動する」「勉強する」などと同じである。

【黙止すにもだされずして備忘することにした】
その感動が如何に意味深いものであつたかを、この一語で、最後に今一度繰返してゐるのである。

2 文の構成

第一節 初一行 結尾の一文と相對して作者自身の言葉であり、文の序をなす。

第二節 四頁二行—一〇頁四行 海上嵐平が、小出繁の歌に「牛牽く」とある言葉を咎めたのを、歌人のくだらぬ暇つぶし位に考へてゐた老農H氏が或時はつと思つた事件に遭遇して、大和言葉には簡単な裡に奥深い眞理の含まれ

- 1 「日本の古言には簡単な裡に實に奥深い眞理を含んだのがあるものです」と先づ結論を敘し、當時歌人のくだらぬ暇つぶし位に馬鹿にしてゐた牛には「追ふ」と言ふ言葉について、はつと思つた事件に遭遇したと言つて讀者の興味を誘つてゐる。(四頁二行―五頁四行)
 - 2 はつと思つた事件の話。(五頁五行―九頁七行)
 - 3 はつと電光のやうに牛には「追ふ」と言ふ言葉を思ひ浮べて、大和言葉が祖先の經驗の結晶で三四字の中に不動の眞理を含んでゐる事に驚歎する話者の感想。(九頁八行―一〇頁四行)
- 第三節 一〇頁五行―終 作者の感想で、作者はこの話を古今東西の類似例より興味深く感じたこと。
- 3 文意

日頃下らぬ事として心に止めても見なかつた牛には「追ふ」といふ詞を、實際それを立證する事件に遭遇して「はつ」と思ふと共に、日本の古言が幾百年の祖先の經驗の結晶であつて、奥深い眞理を含んだものである事を驚歎した老農H氏の話の備忘で、作者はこの國語に於ける語意成立の深さをとり擧げて、これを古今東西の類似例よりも更に意義深しと感歎し國語愛護の觀念の一端を披瀝してゐる。

4 鑑賞批評

五十嵐氏の文章は、名文ではあるが、技巧的方面の跡が見えわざとらしい臭味があるといふやうな批評もあるが、實は寧ろ反對で、氏の文章は衝氣や誇張の少い率直なものである様に思はれる。この文なども所謂名文章の範疇には屬してゐないにしても、全體がしつくりと落ちついた味の深い文章と言ひ得よう。

本來此の課は作者の備忘が材料であつて、作者自身の言葉は冒頭の一行と結尾の感想とだけで、他はすべて稗田杉屏氏

の話として、特に「あります」體で記されてゐる。勿論稗田氏の話には違ひないが、然しそれを整理し洗練して藝術的に盛り上げていつたものは作者の手腕であつた。恐らく稗田氏の話は作者にとつて單なる素材に過ぎなかつたであらう。これをここまで藝術的に彫琢を加へた作者の創作的手腕には感服すべきものがある。

先づ結論を出し次に「はつと思つた」と述べてそれを結論とおぼろげに結びつけながら、更にその事件に讀者の興味をつないで行く運び方などもなか／＼巧妙である。然しその事件の描寫になると更に文は生彩をおびて来る。一人行き二人行き、五平が威勢よく出かけて行く。みな手に餘して歸つて来る。主人の威光でどうにかなるとでかけて行く。駄目である。そこへ群集の中から現はれた馬方の老人がわけもなく立たせる――その事件の運びが多少ユーモアを持った童話風の雰圍氣を醸しながら、而も巧な會話の授受によつて、立體的にせり上げられて劇的な弾みさへ持つてゐる。その巧妙な事件の運びによつて話者の「はつ」と思つた驚異感動も自ら強く浮び上つて、それにひかれる作者の興味も深かつたわけである。熟讀する程味の深いといふ風の文である。

三 備 考

1 指導研究

(一) 本文は作者の國語觀が一老農の話に通して語られてゐると見るべきである。先づその話を大和言葉の語意の成立に定位し、發展させて、國語の持つ意義の深さは古今東西の類似例よりも「面白い」と感歎したもので、作意の根柢にはたしかに讀者の國語觀念の刺衝といふ目的が籠つてゐるやうに思はれる。指導の目標はこゝに存することを確認すべきである。國語愛と言ふ事が叫ばれながらそれが一部の國學者や國語教育家等の上にも限られて、國民一般は極めて無關心である。殊に新しい中學生等はこの方面には一向無頓着である。新な氣分で中學生になつた彼等にこの具體的事例によつ

て國語觀念を刺戟するのには絶好の機會であらう。かくて國語の持つ意義の深さ、美しさ、貴さを知る事は、それが唯に將來の國語學習上効果的であり得るのみならず、眞に國語愛に導く所以である。

(一) とかく興味本意に走りたがる此の時代の生徒は、H氏の話に相當面白く讀むであらうが、然し肝腎のH氏の驚歎感想に一向心を留めないで讀過してしまふといふ風な傾向がある。唯單なる興味に終らせず、或は作者の感想から反省的に讀返へさせるなどの方法によつて、飽まで生徒の國語觀念の刺戟に重點をおき、國語愛を誘發するやうな指導が望ましく。

(三) 小學國語讀本卷九第二十八「國語の力」がある。指導に先だつて一應讀返させておく事は本課の目標を自覺させ教授を進める上に極めて有効であらう。(備考参照)

2 参考

(一) 賈島が推敲の話

(イ) 湘素雜記の一文を轉載する。

劉公嘉話にいふ。賈島初に京都に赴く。一日驢上に於て句を得たり。いふ鳥宿池邊樹僧敲月下門と。始め推の字を着けんと欲し、敲の字を着けんと欲す。之を練つて未だ定まらず、遂に驢上において吟哦す。時に手を引き推・敲の勢をなす。時に韓愈史部權の京尹たり。鳥おぼえず衝きて第三節に至る。左右擁して尹の前に至る。鳥具さに得る所の詩句を對へて云々す。韓馬を立て良久しくして鳥に謂つて曰く、敲の字に作る佳なりと。遂に轡を放てて歸る。

(ロ) 唐史紀事に據る。

賈島赴舉至京。騎驢賦詩。得鳥宿池邊樹僧推月下門之句。欲改推作敲。引手作推敲之勢。未決。不覺衝大尹韓愈。乃具言。愈曰、敲字佳矣。遂並轡論詩。

(二) 觀世大夫が木賊刈の話

雨窓閑話(著者不詳)から拔萃する。

「觀世一代能の事並木賊刈の事」

享保年中觀世大夫一世一代の勳進能を行ひ、京都の河原に舞臺を造り、棧敷を拵へ芝居を興行す。見るもの蟻の如く群集せり。初日か二日目に觀世「木賊刈」を舞ふ。其の面白き事見るもの感に堪へたり。爰に如何にも田舎めきたる百姓と覺しき者、十人許り連立ちて能を見物してありけるが、數千人の數悉く讚嘆する中に、彼の百姓共はさも思はぬやらん、何かひそひそ囁き合ひて、うけず顔なりけるを、觀世舞ひながら此の體をきつと見とがめ、扱、能の終りければ、木戸へ人を遣し、かくかくしたる衣類著たる百姓十人許り木戸を通らん時、必ず留め置き申すべし、尋ねる仔細ありと云ひやりければ、程なく能すみて木戸を出んとする時、かの百姓共を差し止める故、何事かと大に驚きしを、觀世騒がぬ様に樂屋へ呼びて申しけるは「今日吾等木賊刈を舞ふ。其の出來たること凡そあるまじく思ふ心にて仕たりしが、果して貴賤群集おしなべて感心の様子に見えたるが中に、その方共はさも思はぬ様に何やらん打ちひそみて囁合ひたるはいかに、其の様ふしぎに思ふによりて仔細を尋ねたく木戸にて留めさせしなり」と申しければ、百姓共申すは「吾等事は信州のその原と申す所の土民に候。今日木賊刈の能興業有る由承り及び、我等も木賊刈者共なればなくさみなながら能とやらんを見物して、一生の嘶の種にもせまほしく思ひて、今朝より芝居して見物する所、心なき賤の我々どもも感心して面白く侍る。去りながら、只今遊ばされたる中「いでいで木賊刈らうよ」と申す所、鎌の御手、我々が仕なれたるとは聊か替りある故申す事にて候」といへば、觀世の曰く「それはいと面白き見物めやうなり、いかにして汝等は刈るか」と尋ねければ「されば木賊はむかふへ一刀切りに刈り申候に、今遊ばされたるを拜見致し候へば、同じ所を前の方へ二刀にて御刈りなされ候を見申て候。あれにては木賊は刈られ申すまじく候。」と言ひければ、觀世大いに感心して、ものたらせつゝ厚く賞して戻しぬ。その後觀世江戸にて「木賊刈」をなせし時、先年信州の百姓らが評判せしを守り、向うの方へ木賊を刈りければ、其の能出來たること大方ならず。

以上の如き物語がある。これを觀世家譜によつて見ると、享保年代の觀世大夫は第十四世清親である。しかし清親は京都に於て一代

能を演じた事實は無いのである。京都に於ける觀世大夫の一代能は、第十三世滋章が元祿十五年北野七本松で四日に亙つて行つたものがある。池内信嘉氏は、木賊刈はこの元祿一代能の際の出來事であらうと能樂盛衰記で論じてゐる。しかし更に詳細に七本松一代能の番組を調査した結果、それには木賊刈の曲が演ぜられてゐない事が判明した。従つて、これは一代能でない普通の勸進能の際の出來事と見なければならぬ。さすれば享保年間の大夫は清親であるから清親の事と考へられるのである。見本劇の頭註に、第十三世滋章としたのは池内氏の説によつたものであるが、それは訂正を願ふ。檢定済のものには、第十四世清親と改めておいた。

(三) フローベルの一語説

フローベルの一語説を、ワルター・ペーターの英譯によつて左に掲げる。

"Possessed of absolute belief that there exists but one way of expressing one thing, one word to call it by, one adjective to qualify, one verb to animate it, he gave himself to superhuman labour for the discovery, in every phrase, of that word, that verb, that epithet. In this way, he believed in some mysterious harmony of expression, and when a true word seemed to him to lack euphony still went on seeking another, with invincible patience, certain that he had not yet hold of the unique word."

(Walter Pater: Appreciations 中の "Style" による。)

右の大意は、「一つの事物を言ひ表はすには一つの道しかない。それを呼ぶには唯一つの名詞、それを性質つけるには唯一つの形容詞、それを生かすには唯一つの動詞しかないといふ。かういふ絶対的の信念を有つてゐたので、彼は一句々々を書く毎に、その名詞その動詞その性質形容詞を見出だす爲に、超人的獻身的の努力を試みた。彼は表現の神秘なる諧和を信じた。そして現用の言葉が諧調を缺くと思はれるやうな時には、まだ唯一獨特の言葉を把握しないのだといふ事を確信しつゝ、不撓不屈の忍耐を以て、他の言葉を探し續けた。

(四) 小學國語讀本卷九第二十八「國語の力」から直接本課に聯關を持つ一節を抜萃する。

我が國は神代このかた萬世一系の天皇をいたゞき、世界にたぐひなき國體を成して、今日に進んで來たのであるが、我が國語もまた

國初以來繼續して現在に及んでゐる。だから我が國語には、祖先以來の感情・精神がとけこんでをり、さうして、それがまた今日の我々を結び附けて、國民として一身一體のやうにならしめてゐるのである。若し國語の力によらなかつたら、我々の心は、どんなにばらばらになることであらう。してみると、一旦緩急ある時、國をあげて國難におもむくのも、皇國のよろこびに、國をあげて萬歳を唱へるのも、一つには國語の力があづかつてゐるといふはなければならぬ。

(五) 小出榮の牛ひく云々の話

明治三十一年二月七日から、日本新聞紙上に、當代歌人の「新自讃歌」といふものが掲載しはじめられた。これは當時、日本新聞が正岡子規によつて、文學的方面に特色を示し、俳句や和歌の革新に關する記事を多く掲載してゐた中の一つの企であつた。その最初に載つたのが小出榮の歌十首であり、その第一首に、「薄暮遠望」と題して

賤の男が牛ひきかへるうしろ影見る見る消えて野は暮れにけり

といふ歌があつた。本文中に「牛牽き云々」とあるのは、この歌である。この自讃歌に對しては、伊藤左千夫も「非自讃歌論」を書いてこれに攻撃を加へ、海上胤平も「新自讃歌評論」を書いて、小出榮以下の作品を論難したのである。胤平の所論の中、本課に關係のある要點は

二句(牛ひきかへる)とあるは、うひ／＼しきなり。小荷駄馬ならば、ひくといふべし。牛はおふといふべきものぞ。折にふれては馬もおふことあり、牛もひくことあるべけれど、歌によむ詞にしては、好ましからず。畫工が牛を舐がけるを見ても、そのことわりは知るべきをや。

といふ條である。老農友稗田杉屏氏の話は、この批評を思ひ起して、五十嵐力に語られたものであることは明かであるが、この評によれば、「外國は知らず」の語は、胤平自身の評ではなく、稗田氏が自覺しないで補はれた語であらうと思はれるのである。尙このことは、松田好夫氏の發見にかゝるものであることを申しておく。

三 峠の茶屋

夏目漱石

一 解題

1 作者

夏目漱石 ナツメソウセキ 本名金之助。

慶應三年一月東京市牛込區喜久井町に、名主夏目直克の末子として生れた。三歳の時養子にやられたが十歳の時實家に歸つた。戸山小學校・市ヶ谷小學校・錦華小學校を経て一ツ橋中學校(府立第一中學校の前身)に入學、半途退學した。その間二松學舎に通つて漢學を修め、成立學舎に英語を學んだ。明治十七年大學豫備門豫科に入學。一回原級に留つて、二十一年本科に入り、二十三年卒業。ついで帝國大學、文科大學に入學、英文學を専攻した。在學中正岡子規と交り感化をうける所が大であつた。二十六年英文科卒業。以後大學院にとどまり、東京高等師範學校の囑託となり、二十八年四月正岡子規の紹介で松山中學校に赴任した。翌年第五高等學校教授に轉じ、三十三年文部省の命により英語研究の爲英國に留學。三十六年歸朝。第一高等學校教授に任じ、東京帝國大學講師を兼ね、三十七年からは明治大學にも講義した。四十年一切の教職を辭し、東京朝日新聞社員となり、専ら文藝的著作を同紙に掲載することになつた。四十二年滿洲に旅行し翌年胃潰瘍のため大吐血、危篤に陥つたが、この大患は氏の人及び藝術上に一轉機を齎し、四十四年には博士號を辭退した。大正五年十一月宿痾胃潰瘍再發の爲、十二月九日永眠した。享年五十。墓は東京市小石川區雜司ヶ谷の墓地にある。氏の文名をして頓に高からしめたものは、明治三十八年一月から雜誌「ホト、ギス」に連載された「吾輩は猫である」

であつた。以來引續いて「倫敦塔」「薙露行」「坊ちゃん」「草枕」「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」「彼岸過」「硝子戸の中」「道草」等を發表し絶筆「明暗」は未完にして遺された。その作品の特色は、自然主義文學とは反對に、一貫して餘裕を存する所にあり、餘裕派の名の存する所以である。然し晩年の作は初期の輕妙絢爛なるものに比して内面的心理描寫に沈潜して行つた。評論の方面に於いて「文學論」「文學評論」は時代の文學に大きな示唆を與へたものである。大學在學中、子規との交際は彼をして俳壇にも一位置を占しむるに至らしめた。三十六年頃から繪筆を弄び、その歿年には漢詩をつくる事が多かつた。以上小説を初め小説、隨筆、俳句に至るまでの諸作はすべて集めて漱石全集の中にある。

2 出典

本課は小説「草枕」の中の一節である。草枕は明治三十九年九月雜誌「新小説」の卷頭を飾つた作品で漱石初期の代表的作品である。後に「坊ちゃん」「二百十日」と共に「鶉籠」に収録され、又漱石全集卷二に收められてゐる。この作品は當時文壇の自然主義全盛の時流と正反對の立場に立つて書かれたものである。即ち作者自ら「人生の真相を味ははせるのも結構であるが、同時に又人生の苦を忘れさせて慰藉を與へるといふ意味も存在してゐると思ふ(備考参照)」と、その作意を語つてゐる如く、現實の世界を超越し、人情を脱離し、純美の世界に心を遊ばせんとする作品であつて、所謂非人情小説と呼ばれる所以はこゝにある。従つて全篇をつらぬく何等のプロットもなく、唯非人情を志す主人公の青年畫家が現實界を超えた純美の藝術的理想界に直進せんとして春の峠を越えて那古井の温泉に行く。その途中山路を上りながら、一種の非人情的哲學、非人情的藝術論を案じ、かくてその温泉場に過す數日の間一人の美しい女性を中心としたあらゆる人物或は事件を一切の利害關係を離れ人情を去つて自然界の一點景とし、能樂を鑑賞する氣持で眺め樂しむのである。本課はその春の山路を越える途中、思ひかけぬ雨に逢つて一軒の茶店に辿りついた主人公が、そこでゆくりなくも非人情的の世界を見いだした部分を探つたのである。

3. 主眼及び採擇の趣旨

純然たる文藝的趣味教材である。ホトトギス派の寫生を根柢とし、その上に高雅なユーモアと輕妙なウィットとを織りまぜた漱石獨特の持味に陶醉する境にまで導いて行くべきであらう。時正に春、入學後の新しい氣分を持つた少年達に、この現實を越脱した人と自然とに接觸せしめて、東洋人的心境を味到せしめるのも意味深い事と思はれる。こゝに採擇した所以である。

一 解 釋

1 語 釋

【峠】 タウゲ (一) 山坂の上りつめた所。(二) 山の上り下り。ここは(一)の意。手向たむけの音便で、古旅行者が其處で旅の安穩を祈る爲國津神・道祖神に手向したのだといひ、又嶽の延音だともいふ。峠の字は國字。

【おい】と聲を掛けたが、返事がない。輕妙な書出しである。雨に濡れて辿りついた峠の茶屋である。何はともかく一休みしよう。さう思つて聲をかけたが返事がない。返事のない所がすでに峠の茶屋らしい。次に目に映る煤けた障子、庇につるされた草鞋、駄菓子だ菓子の箱、そのそばに散らばる五厘錢・文久錢などがその情景を次第に具體的に浮び上らせて行く。一瞥の中に寫しだして、而も茶屋の面目の躍如たる所、まことに寫生の

妙味である。

【煤けた】 ススけた 煤がかゝつて黒ずんだ。田舎の障子は焚火の煤で黒くなつてゐる。

【立て切つてある】 すつかり閉ざしてある。「たてる」は閉すこと。萬葉十二「かど立てて戸も閉ぢたるをいづくゆか妹が入り来ていめに見えつる」。「切る」は果す・終る。終了するなどの意。

【草鞋】 ワラヂ 草履に似た藁製の履物。爪先にある二本の緒を兩側の乳に通し足に結びつけて履く。わらくつ(藁沓)―わらうづ―わらんず―わらんぢ―わらんぢと轉訛した語である。

【屈託氣に】 クツタクゲに 退屈さうに。疲れていやにでもなつた風に。「屈託」は本來一事に執着して氣のふさぐ

事、轉じてくたびれていやになる・退屈するなどの意に用ひられる。「氣」は名詞・動詞・形容詞について氣配・様子・氣色などを表す接尾語。

【駄菓子】 ググワシ 粗製の安菓子。胡麻ねぢ・微塵棒(十六頁四行)など。「駄」はすべて劣つたもの、粗悪なものを表す場合に冠する。駄辯、駄洒落など。

【五厘錢】 ゴリンセン 明治三十年三月貨幣法によつて發行された五厘の補助銅貨。

【文久錢】 ブンキウセン 文久三年から慶應三年まで徳川幕府の發行した銅錢。面に「文久永寶」の四字があり、文久永寶とも文久通寶錢とも呼ばれ、一箇が四文に相當する所から「文久永寶四文錢」「文久四文錢」又は略して「四文錢」とも呼ぶ。明治四十年以後暫く一厘五毛に通

用した。

【おい】と又聲をかける。依然人の返事はないが目をさました鶏が騒ぎだす。その騒ぎで場面が生きて来る。そして返事を待つ間の作者の觀察は、雨に濡れた土竈・眞黒な茶釜など、更に遠く離れたものに及んで行く。その觀察の進め方は極めて自然である。

【土竈】 ドベツツヒ 土製のかまど。

【茶釜】 チャガマ 上の方がすばんで口の狭い釜。主とし

て茶を煮るに用ひる。茶釜は關西では鑊くわんす子と言ふ所もある。

【土の茶釜か銀の茶釜かわからない】 輕妙な諧謔的な文である。前の「眞黒な」を受けた説明であるが、それを愉快に茶化してゐる所に注意。

【幸ひ、下は焚きつけてある。】

正に畫龍點睛の趣がある。この「幸ひ」といふ主觀的な一句で場面が愈々生彩をもつて浮び上つて来る。火の燃えてゐる所、茶屋の人がそれほど遠くへ出かけたのではないらしい。やがて誰か歸つてくれば濡れた着物も乾かせるし、茶ももらへるし、冷えた身體も温められる。それが「幸ひ」と言ふ心持であらう。よく効いた一語である。

【無斷で】 ムダンで ことわりなしに。

【牀几】 シヤウギ は「床几」「床机」とも書く。昔陣中狩場などで用ひた一種の腰かけで、尻の當る部分を革で張り、脚を打違へて組み、折疊式で携帶出来るやうになつてゐる。後には縁臺式の小さい簡単な腰掛臺をも言ふやうになつた。こゝは後者。

【羽搏】 ハバタキ 急に羽をばた／＼させること。

【狗】 イヌ 犬の小さいもの。犬は大、狗は小。但し、漱石がこの區別を感じて書いたか否かは不明である。

【まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。】
 狐や狗は鶏をとるからの形容である。羽搏をして臼からとび下りる一疊の上にあがつた一奥までかけぬける氣かも知れないと思はれる慌しい動作と、雌雄のけたたましく鳴き交す騒ぎと、それは如何にも無斷の客に對する鶏の小面憎い警戒的示威の様子である。「こけこつこ」けけこつこ」の示す諧和な調子も、外來者には一種の排他的なものにきこえる。この主觀句はその鶏の狂態から導かれて、そこにあるユーモラスな氣分を出してゐるものである。

【牀几の上には一升辨程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。】

鶏の「動」と對照をなして、この線香の「靜」は、悠長な時の茶屋の氣分をひとしほ濃やかなものにしてゐる。殊に「閑靜に控へて」日の移るのを知らぬ顔」などの擬人法は、この場合如何にもしつくりとその情景に適つてよくその面目を生かしてゐるし、「とぐろをまいた線香」といふ形容も亦蛇が駭蕩たる春陽をあびて悠然と日向ぼつこしてゐる様な趣があつて、全くこの場面の雰圍氣にふさはしい。而もこれ等擬人法・形容はそこに一種のユーモラスな味を出してゐる。生徒はよく漱石のかういふ點

を眞似たがる傾向があり、事實よく眞似をする。然しこれ等はこの場合この作者だから生命を持つのであつて、單なる模倣は全くの駄洒落に墮して文の品格を下げる事を注意しなければならぬ。

【とぐろを捲いた線香】 渦巻線香の形容である。「とぐろを捲く」は蛇などが渦狀にわだかまつてゐる様子。

【悠長に】 イウチャウに ゆつたりとして、こせつかない様。

【燻る】 クスブる 「ふすぶる」「いぶる」とも言ふ。

【雨は次第にをさまる。】

「今しがたの雨に濡れて半分程色が變つてゐる」と言ふので、既に止んだと思はれた雨も、實はまだ名残が残つてゐた事が知られる。經く戶外の模様を配つた所もおもしろい。

【煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た】

「煤けた障子がさらりと開く」と切つてわざ／＼筆を改めて「中から一人の婆さんが」とした表現に注意したい。「障子をあけて、一人の婆さんが」とか「障子が開き一人の婆さんが」と言ふ風な表現法と比較して見れば、この味は自ら理解出來よう。即ち「障子が開く」と言ひ切つた所に登場人物に對する作者の期待が躍つてゐる。舞臺の上に俳優をまつ氣持である。そこへ「中から

一人の」と婆さんを登場させる時、そこに現れた婆さんの印象は一層鮮明になつて、場面全體が劇の舞臺の如く浮び上つて來てゐる。

【どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は暢氣に燻つてゐる。どうせ出るにはきまつてゐる。】

「竈には火が燃え、菓子箱の上には錢が散らばり、線香が燻つてゐる」のは、「どうせ誰か出るだらう」といふ判斷の條件として、前の描寫の反復であるが、それを餘裕を残した簡明な筆で運んで來て、その反復によつて今一應場面の印象を鮮明にしておいて、「どうせ出るにはきまつてゐる」といふ強い斷言に導いて行く所に味がある。

【あけはなす】 開けたまゝにしておく。

【苦にならない】 心配にならない。平氣である。

【自分の店をあけはなしても苦にならないとみえる所が、都とは少し違つてゐる】

寫し來つた時の茶屋の狀景をこゝで總括し、それに配するにこの婆さんを以つてして、そこに浮世ばなれのした世界を覗かせてゐる。

【二十世紀】 一九〇〇年から一九九九年まで。西曆では百年間を一世紀と呼ぶ。草枕の書かれた明治三十九年は一九〇六年、即ち二十世紀になつたばかりで、二十世紀が

「現代的」とか「新しい」などの意に用ひられた。こゝは現代的位の意。二十世紀でない」とは、浮世離れがしてゐることをいふ。

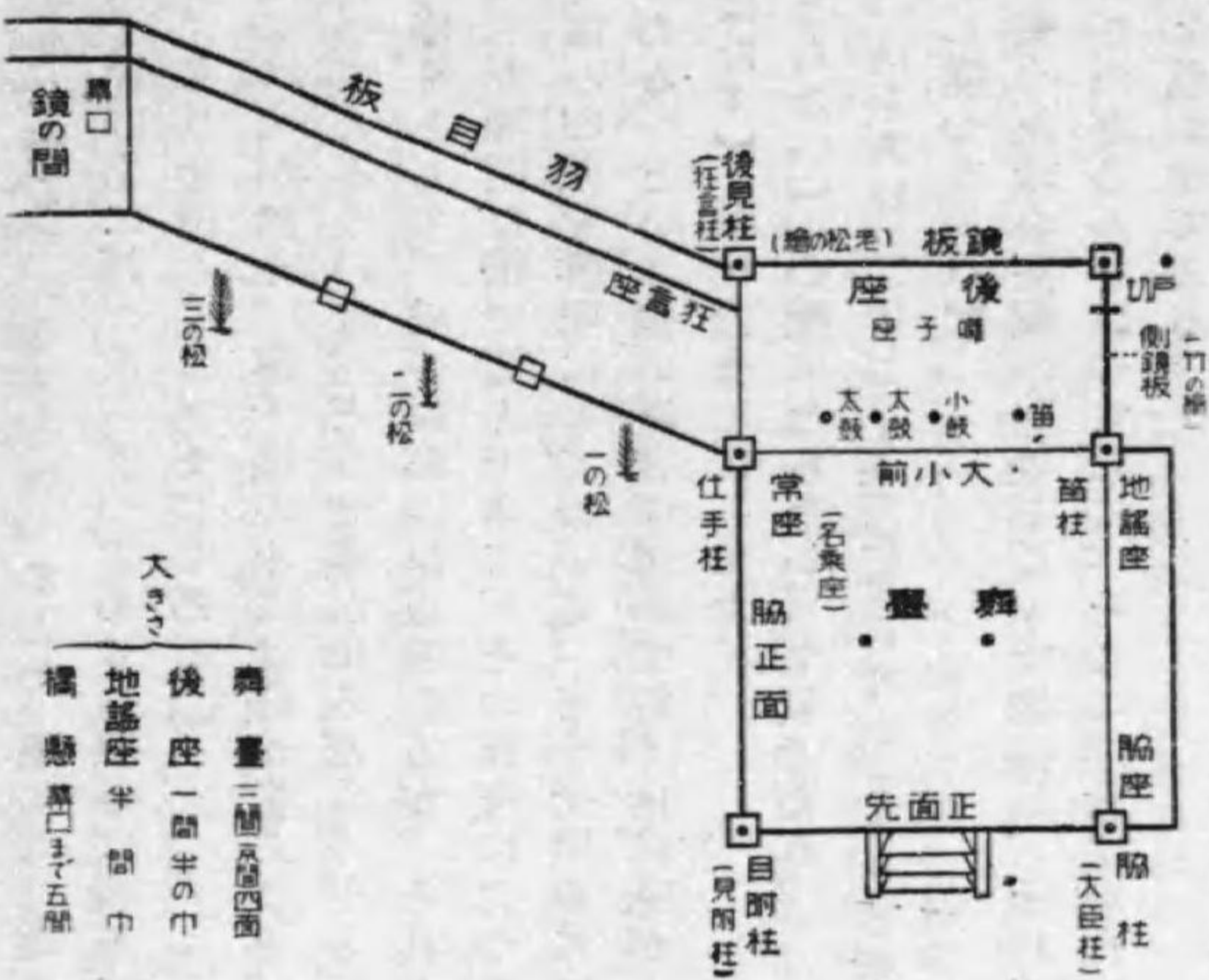
【返事がないのに、牀几に腰をかけて、いつまでも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。】

婆さんの浮世ばなれのしてゐることに對する、主人公自身の反省である。婆さんに劣らず主人公自らも二十世紀的でなかつた。こゝで情景人物すべて揃つたわけである。

【その上、出て來た婆さんの顔が氣に入つた。】
 これから描きださうとする婆さんの顔に對する讀者の興味をつないで行く描き方は巧妙である。

【寶生】 ハウシヤウ 「保生」ともかく。寶生流のこと。能の五流(觀世・寶生・金春・金剛・喜多)の一。開祖は觀世觀阿彌清次の兄である。大和の磯城郡外山に座を持つてゐたので、「トビの座」ともいつた。子孫歴世その流をついで能樂を業とした。徳川幕府になつて、能樂は式樂とせられ、能の役者は俵祿を受けるに到つた。寶生流が榮えたのは十一代將軍家齊の時で、當時寶生流十四世英勝をはじめ同流に名人が多く、又將軍自らも寶生流を好んだ爲、觀世をすら壓倒する程の勢力を得た。明治に入つても十六代九郎知榮は觀世流の梅若實・金春流の櫻馬伴馬と並稱される名人であつた。現宗家は十七代重英氏である。

【能舞臺】 能樂を演ずる爲の舞臺で、三方開放して床板を張り、京間で方三間が正式である。正面に階段を設け、右方に勾欄を廻し、床下に音の共鳴の爲に瓶をおくのが



常である。背後に樂屋があり、樂屋から舞臺に通ずる廊下を橋懸といふ。橋懸は欄干のあるのが普通である。

【高砂】 タカサゴ 能の曲名。結崎元清(觀世世阿彌)の作

古く「相生」又は「相生松」と言つた。古今集序に「高砂住の江の松も相生のやうに覚え」とあるに暗示を得て作者の新に構想したもので、松の精魂を人格化して舞臺に上せてゐる。國家安穩・壽命の長久・夫婦の和合等を祝福したためたい神事能で、諸流を通じ神事能の代表的名曲として尊重されてゐる。梗概は肥後國阿蘇の神主友成が都へ上る途中、播磨國高砂の浦に立ち寄つて見物してゐると、老人夫婦が出て来て、あたりの風光を賞し情懷を述べて、松の木蔭の塵を掃き清める。友成はこれを見て、「どれが高砂の松であるか」と尋ね、また「高砂と住吉とは國を隔てゐるのに、何故に相生の松と謂ふのか」と不審を起す。老人は「山川萬里を隔てゝも、妹背の道は近いものである」と夫婦の愛を述べ、且友成の間に應じて、高砂・住吉とは萬葉集と古今集のことであり相生の松とは古今變りのない御代を壽ぐ喻へである」と語り、なほ松に關する和漢のめでたい故事を擧げ、自分達は高砂住吉の松の精である。まづ住吉に行つて待たう」といつて舟に乗つて沖へ出て行く。友成は奇特の思ひをして沖人の舟に乗つてゆくと、住吉明神が出現して春景色を賞し、御代を祝つて舞を舞ひ給ふといふのである。

【活人畫】 タワツジングワ 所要の背景裝置等をなし、それに相當する歴史上の人物などに扮装した人が、一定時

間の間その姿勢をかへずには恰も畫中の人物の如く見せるもの。古くは集會の餘興等に行はれたが今は廢れた。

【箒を擔いだ婆さん】 草枕の原文には婆さんが爺さんになり、次行の爺さんが婆さんになつてゐる。能實演を見れば箒を擔いで出るのは婆さんで爺さんはサラ(態手)を持つて出る。これは作者の記憶の誤か何かであらう。従つて原文に訂正を加へた。

【橋懸】 能舞臺の條参照。
【あゝ美しいと思つた時に、その表情はびしやりと心のカメラへ焼きついてしまつた。】



三 峠の茶屋

で、成程老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚いた。あの面は定めし名人の刻んだものだらう。

惜しい事に作者の名をきゝ落したが、老人もかうあらはせば、豊かに、穩やかに、あたゝかに見える」と言つてゐる。

【心のカメラ】 「カメラ」は寫眞の暗箱。こゝでは心の中に鮮明に印象せられた事を寫眞のカメラに映するのに譬へたのである。

【生憎】 アイニク アヤニク (一)あゝ憎むべく。あなにく。(二)は折悪しく。間がわるく。こゝは(二)の意。
【しつしつと二聲で鶏を追ひ下げる。】

二聲でと限定した所に、漱石らしい輕妙さが味ははれる【ごさんしょ・上げましたよ】 ごさいませう。あげませうを略めたもの。「しょ」と「せう」の假名遣に一應の注意をしておきたい。

【剃拔盆】 クリヌキボン 一枚板を剃拔き窪めて製した盆【一筆がき】 イツピツがき 一筆で畫き上げた繪。粗末な繪の書き方の安茶碗を示したもの。ガ行四段連用形より轉化した名詞である事に注意したい。

【無造作】 ムザウサ 造作ない、手輕な、容易いなどの意から轉じて、慎重でない、ぞんざい、ぶさいくなどとなる。こゝは後の意。

【焼きつける】 素焼の陶磁器に釉をかけて焼上げて後、著色顔料で模様を描いて、その模様の固着するやうに焼き

つけるのである。

【無造作に焼きつけてある】

運ばれた茶碗の底に、はやくも一筆がきの梅の花を見てとる處、主人公の畫家らしい一面を現さうとする作者の用意がうかがはれる。

【胡麻ねち】 ゴマねち 駄菓子的一種 微塵粉（糯米の粉を炒つたもの）に胡麻と砂糖をまぜて煮固め、細く四角にしてねちたもの。

【微塵棒】 ミチンボウ 駄菓子的一種 微塵粉に砂糖を混ぜて煮かためて棒状にねちつたもの。

【袖無】 ソデナシ 袖のない綿入羽織。幼兒のものは「ちやんちやん」といふ。

【折柄籠のうちがばちばちと鳴つて、赤い火がさつと風を起して一尺あまり吹き出す。】

雨曇の薄暗い土間に籠の火が勢よくばつと燃上つた様が音と色と形との三つの形容によつて、如何にも鮮明に現されてゐる。

【軒端を見ると、青い烟が突當つて、崩れながらに微かな痕をまだ板庇にからんでゐる。】

誠に印象的な表現である。一見安易に見える表現の中に峠の茶屋の全景と氣分とがすつきりと浮び上つて來るやうな精緻的確な觀察が含まれてゐる。

【逡巡】 シュンジュン ぐづぐづしてゐる。ためらふ。思ひきつて斷行しない。

【逡巡として曇りがちな】 すつきり晴れるでもなく、又雨となつて降るでもなく、ぐづづいてゐる空模様。

【もどかし】 思ふままにならないで心のいらだつ様。ちれつたい。はがゆい。

【未練】 (一)未熟なこと。源平盛衰記源平侍遠矢事に「坂東の者共は馬上にてこそ口はきゝ候へども、船軍は未練なるべし」と。(二)思ひきりの悪いこと。こゝは(二)の意。

【老嫗】 ラウウ 老婆。

【嘖嘖】 サンガン 高い様、又鋭く尖つた貌。

【逡巡として曇りがちな春の空を、もどかしとばかりに吹き拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ盡くして、老嫗の指さす方に嘖嘖と、荒削りの柱の如く聳えるのが天狗巖ださうだ。】

この一節の漢文調の高い響は實に美しい。急流奔湍の概があり、山の雨上りの清新な氣を洋溢せしめてゐる。和文のやうな柔いだらだらしたものは嫌ひで、漢文のやうな強い力のある、即ち雄勁なものが好きだ」と漱石自身言つてゐる。その趣味がこゝに現れてゐるのであらう。

それでゐて「天狗巖ださうだ」とその結びがぐつと碎けてゐる爲に、何等全體の調和を破つてゐないのみならず

一種酒脱の味をだしてゐる。

【腰をのして】 腰を伸して。屈んだ腰を眞直にしてゐる様子である。

【手を翳して】 テをカザして 翳すは、普通は手を額の前方に持つて來る動作をいつてゐるが、元來は必ずしも額の前に持つて來なくとも、眼の高さに擧げて、前方を指すやうな動作をもカザスと言つたのである。能樂の方で、

2 文の構成

第一節 初—一二頁三行 峠の茶屋の軒下で觀察した状景。

1 店先の觀察。(初—一頁六行)

2 内部の觀察。(一一頁七行—一二頁三行)

第二節 一二頁四行—一三頁四行 返事がないのですつと這入つて牀几に腰を下して觀察した内部の様子。

第三節 一三頁五行—一四頁一〇行 しばらくして出て來た婆さんの顔の美しさ。

1 前節の觀察總括と老嫗の様子と自己の反省から感ずる浮世ばなれの境地。(一三頁五行—一四頁二行)

2 老嫗の顔の美しさ。(一四頁三行—一四頁一〇行)

第四節 一四頁一行—一七頁終 老嫗との會話の中に峠の茶屋の情景氣分を寫しだしてゐる。

第五節 一八頁一行—一八頁終 眼前に霽れ上る天狗巖を中心に戸外の情景を敘し、老嫗をその景中の趣を趣へるものとして描き出して、全文の結尾とする。

尙右に便宜上段落を分けては見たが、本來時を追ひ目に映る情景の寫生であるから、何處から何處までと明確に分節

カザし扇といふ型が丁度これに當る動作をする。こゝは手を眼の高さにあげて、前方を指示してゐることを意味してゐる。

【袖無姿】 ソデナシスガタ 袖無羽織姿の意である。

【景物】 ケイブツ 趣を添へるもの。景趣を添へるもの。

【恰好】 カツカウ 誠に似合しく適當なといふ意。

し得る文ではないと思はれる。例へば右の第一・二節を合せて峠の茶屋の觀察といふ一節ともされるし、又二・三節を合せて主人公と老婆との交渉による峠の茶屋の時代離れのした氣分の敘述ともされ得るであらう。生徒の分節も様々であらう。それをいろいろにまとめ上げてゆく所に指導の妙味がある。

3 文意

主人公たる旅の畫家が、峠を越える途中峠の茶屋にたどりつく。閑散として誰もゐない。無斷で入りこんで待つてゐると老婆が出て来る。時代離れのした老婆である。その老婆との會話がつゞく。精密な觀察と輕妙な筆致と高雅なユーモアとゆとりのある筆致とでその超俗的な峠の茶屋の情景雰囲気遺憾なく描き上げてゐる。

4 鑑賞批評

精緻の觀察を以て對象の核心を把握し、輕妙なユーモアを持った簡潔な言葉を自在に驅使してゐながら、一分もピントを外れてゐない正確さは、流石に巨匠の筆、寫生文の抄諦に觸れたものと言ひ得よう。「駄菓子箱の上に散らばる小錢」「雨に濡れて半分色の變つた土竈」「茶の色の黒く焦げてゐる底の一筆書の梅花」「軒端に突當つて崩れる青い烟」など作者の觀察の細かさ鋭どさは到る處に窺はれる。殊に其處に用ひられる擬人法や形容・譬喩、例へば「屈托氣にふらりふらりと揺れる」とぐろをまいた線香が日の移るのを知らぬげに悠長にくすぶつてゐる」などは極めて輕妙であり、ユーモラスであり、且妥當である。これは客觀描寫の中にひよいひよいと顔をだす主觀句、例へば「障子が締めてなければ奥までかけ抜ける氣かも知れない」とか「人を狐か狗のやうに考へてゐる」などの様な一種皮肉な句と共に、漱石獨特の持味であつて、それ等はゆとりのある輕妙な筆致に一層效果的な役割をなしてゐるかに思はれる。

「おい」と聲をかける―「おい」と又聲をかける―返事がないから無斷ですつと這入るといふ風な所からはじまる全體の描寫の運び方も、如何にも輕妙そのものであると共に、その間それを立體的に盛上げて行く手法なども尋常ではない。

三 備 考

1 指導研究

一、度々言及した様に本課は輕妙自在であり、而もユーモアに富んだ文である。取扱上の危險性も其處に潜んでゐる。即ち稍々もすれば生徒はその輕妙さに引づられ、そのユーモアに甘やかされ、唯面白をかくし讀過して、文の眞味にふれずに終つてしまふ事である。輪妙と思はれる行文の底に實は精緻な觀察があり、描寫の確かさがある事に氣づかせねばならない。そして又面白いと拍手して喜ぶユーモアが單なる洒落でなくて、物の核心を端的にとらへて戲畫化してゐる所から來るものである事を理解せしめたい。この理解の上に立たねば本當の味讀も鑑賞もあり得ないであらう。

二、峠の茶屋を人情的に描いて行つたらどんな風になるかを考へさせるのは、非人情とか東洋人的心境とかを理解する上に面白い試であらう。

三、作文と聯關する問題であるが、前に一度言及しておいた通り、生徒は漱石の手法を模倣したがる傾向を極めて多分に持つてゐる。その輕妙さ、諧謔などに魅力を感じるものらしい。全然それが悪いといふのではないが、然しその表面的な模倣には多分に危險性のある事を指摘して適當な指導がなされねばならない。

2 参考

一、挿繪 峠の茶屋

本課の挿畫は、本文章を讀んで、それを想像的に描き出したものである。文中の主要なものが、この畫の中に描かれてゐる。小學國語讀本の挿畫の味を出したものである。

二、本課の前、畫家が山中で雨に逢ふ部分を次に抄出する。

路は存外廣くなつて、且平だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぼたりぼたりと落つる頃五六間先から、鈴の音がして、黒い中から、馬子がふうとあらはれた。

「こゝらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。大分濡れたね。」

まだ十五丁かと、振り向いてゐるうちに、馬子の姿は影畫の様に雨につままれて、又ふうと消えた。

襟の様に見えた粒は次第に太く長くなつて、今は筋毎に風に捲かれる様迄が目に入る。羽織はとくに濡れ盡して肌着に浸み込んだ水が、身體の温度で生暖く感ぜられる。氣持が悪いから帽子を傾けてすたすた歩行く。

茫々たる薄墨色の世界を幾條の銀筋が斜に走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思へば、詩にもなる句にも詠まれる。有體なる己を忘れ盡して純客觀に眼をつくる時、始めてわれは畫中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。

只降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを氣に掛ける瞬間に、われは既に詩中の人にもあらず、畫裡の人にもあらず。依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲烟飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情も心に浮かばぬ。蕭々として獨り春山を行く吾の、いかに美しきかは猶更に解せぬ。初めは帽を傾けて歩行いた。後には唯足の甲のみを見詰めてゐる。終りには肩をすばめて、恐る恐る歩行いた。雨は滿目の樹梢を搖がして四方より孤客に逼る。非人情がちと強過ぎたやうだ。

本課はすぐこの後へ續くのである。

三、如何なる態度意圖のもとに書かれたものか作者自身の言葉に聞いてみよう。

「私の草枕は世間普通にいふ小説とは全く反對の意見で書いたのである。唯一種の感じ、一美しい感じが讀者の頭に残りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットもなければ事件の發展もない。

茲に事件の發展がないといふのは、かういふ意味である。あの草枕には一種變つた妙な觀察をする畫工が、たまたま一美人に邂逅して是を觀察するのだが、此の美人即ち作物の中心となるべき人物はいつも同じ所に立つて少しも動かない。それを畫工が或は前か

ら或は後から或は左から或は右からと、種々な方面から觀察する唯それだけである。中心となるべき人物が少しも動かんのだから、其處に事件の發展しやうがない。所が普通の小説ならばこの主人公は甲の地點から乙の地點に移つてゆく。即ちそこに事件の發展がある。此の場合に於ける作者は、第三の地點に立つて事件の發展して行くのを側面から觀察してゐるのだが草枕の場合はこれと正反對で、作中の中心人物は却つて動かずに觀察する方が動いてゐるのである。

だから事件の發展のみを小説と思ふものには草枕は分らぬかも知らぬ。面白くないかも知れぬ。けれどもそれは構つたことではない。私は唯讀者の頭に美しい感が残りさへすればそれで満足なのである。もし草枕がこの美しい感じを全く讀者に與へ得ないとすれば即ち失敗の作、多少なりとも與へられるとすれば即ち多少の成功をしたのである。

また私の作物はやゝもすれば議論に陥るといふ非難がある。が私は言つてゐる。もしそれが爲に讀者に與へるいゝ感じを妨げるやうではいけまいが、これに反して却つてこれを助けるやうならば、議論しようが何をしようが構はぬではないか。要するに汚い事や不愉快な事は一切避けて唯美しい感を覚えさせればそれでよいのである。普通にいふ小説、即ち人生の真相を味はせるのも結構であるが同時に又人生の苦を忘れさせて慰藉を與へるといふ意味の小説も存在してよいと思ふ。私の草枕は無論後者に屬すべきものである云々。(明治三十九年十一月文章世界所載)

四 比叡の鳥

高濱 虚子

一 解 題

1 作者

高濱虚子 タカハマキョシ 本名は清。明治七年二月愛媛縣松山市に生れた。松山中學校在學中、河東碧梧桐を介して子規と相識り句作に志した。二十七年中學を卒へ。第三高等學校へ入學。翌年第二高等學校に轉じたがその年退學して上京。親しく子規について文學並に俳句の研究に専念し、碧梧桐と共に子規を助けて俳壇革新に盡した。明治三十一年八月かねて松山に於て刊行され來つた雑誌「ホト、ギス」が廢刊の運命に頻するや、十月これを引繼いで東京で發行し、爾來今日に及んでゐる。俳壇革新の業は、實にこの雑誌「ホト、ギス」と新聞「日本」とによつて達成せられたといふも過言でない。勿論その中心は子規であつたが、三十五年子規の歿して後は、名實共に氏の主宰する所となつた。四十年頃から俳壇に新傾向運動が起り、一時俳壇を席捲する勢であつたが、虚子は漸く俳句を遠ざかつて、嘗て子規の提唱した寫生文を鼓吹し、進んでその手法をもつて小説を創作し、漱石の所謂低徊趣味の作品を發表した。大正年代に入り再び俳壇にかへり、新傾向運動に對峙して勢力の挽回につとめ、流風の擴大普及をはかりつゝ今日に至つた。内藤鳴雪なき今日、俳壇の老大家として重きをなしてゐる。その主張は子規の紹述で、主として客觀的寫生論であり、又俳句的境地を強調して、十七字の定型を堅持してゐる。

その著作は創作方面に代表作「俳諧師」を初として「續俳諧師」「鶏頭」「朝鮮」「柿二つ」「十五代將軍」等があり、俳句に

關しては「俳句入門」「俳句の大道」「虚子句集」等が擧げられ、文集としては「寸紅集」「子規共編」「寒玉集」「新寫生文」等がある。

2 出典

文集「新寫生文」より採つた。本書は高濱虚子・坂本四方太・長塚節・寒川鼠骨の四人の寫生文を收載し、明治四十一年一月出版されたものである。本課はその中「比叡詣」と題する虚子の文に據つた。「比叡詣」は明治四十年三月六日から十五日までの叡山紀行で、車中遠望から下山までを十數章に分つて日記風に書いたものである。本課の文はその中の「鳥の聲」と題する一章を殆んどそのまま採つた。

3 主眼及び採擇の趣旨

教材としては直接前課に連絡する。即ち前課「峠の茶屋」が純然たる文藝的教材たるに並んで、これも又純然たる文藝的、趣味的教材であり、而も同じく寫生文である。その「如實」を狙ふ點は共通であるが、然し前者が輕妙洒脱にして機智と諧謔の豊富な筆致でその文を生かして行くに反して、これは寫生文の正統とも言ふべく、極めて率直嚴肅な態度で對象に立ち向つてゐる。こゝに兩者の相違を見、且本課の主眼をそこに讀みとる事が出來よう。即ち本課は深山幽谷の清閑な朝の空氣を破つて鳴き交す小鳥の聲を、斬新鋭敏な觀察と巧妙なる譬喩とをもつて敘述し、太古にも似た幽邃閑寂な境地を遺憾なく描き出してゐる。その精緻なる觀察・巧妙なる譬喩と、そこに醸出された鮮冽高雅なる詩境に味到せしめ、兼ねて前課と比較しつつ寫生文の本道を知らしめ、作文の範例たらしめたい。特に前課に並べて此處に採擇したのである。

二 解 釋

1 語 譯

四 比 叡 の 鳥

【比叡】ヒエ(ヒエイ) 比叡山のこと。略して叡山といふ。山城・近江兩國に跨り、海拔八四八米。京都市の東北方に聳えるので北嶺と呼ばれ、山上を占める天台宗山門派の總本山延暦寺にちなんで天台山ともいふ。頂上を四明嶽と稱する。登山路は滋賀縣坂本村よりの坂本口、京都側には白川町より登る白川口、修學院町よりの雲母坂及び八瀬村より上る八瀬道がある。今は京都市出町柳から叡山電車、坂本村から比叡山登山鐵道の各ケーブルカーが山上に通じ十分餘で山路の大半を登る事が出来る。



比叡附近の圖

全山延暦寺の境内で所謂三千坊を擁してゐた古の様はないが、尙蒼たる杉の老樹は、山にまつはる千年の歴史傳説と相俟つて、森氣幽邃身に迫るの概がある。加ふるに山嶺の眺望は東に琵琶湖を脚下に望み、西南に京都の古都から近畿の山河を一眸の内に集めて誠に絶佳である。

【湖水】コスイ 琵琶湖を指す。形状が琵琶に似た所からかく呼ばれる。別に淡海・志賀海・鳩の海等の名もある。土地陥没によつて生じた陥落湖。湖中竹生島、多景島、沖の島等が散在し、東の富士山と共に本邦の雙美と稱へられてゐる。

【雲海】ウンカイ 高山の頂上などで、眼下に雲が充滿して恰も海上の波浪のやうに見えるのをいふ。

【東谷】ヒガシダニ 東塔中の東谷。比叡山延暦寺は傳教大師開基以來朝廷貴族の尊信を集め、一時は全山三千坊と稱せられる盛大をなした。分けて東塔・西塔・横川の三塔となし、更に之を十六谷(東塔・東谷・西谷・南谷・北谷・無動谷・西塔・東谷・南谷・北谷・南尾谷・北尾谷・横川・兜率谷・横尾谷・解脱谷・般若谷・戒心谷・飯室谷)に區分した。

【杉の梢がさながら鉾のやうに】「鉾」は諸刃の劍に長い柄をつけた槍に似た武器。杉の梢の遠望は鉾を立てたのに似てゐるからの直喩である。和歌に鉾杉と讀まれたものが多い。萬葉卷三「いつの間も神さびけるか香具山の鉾杉がもとに苔蒸すまでに。」

【我が眼よりや、高く、や、低く杉の梢がさながら鉾のやうに突立つてゐる。】「我が眼よりや、高く、や、低く」は峡谷の眺を印象的

に生々と描寫してゐる。「鉾のやうに」と形容し「突立つてゐる」とうけた周到さも注意すべきである。

【北谷】 東塔中の北谷。

【杜】 モリ 森のこと。説文に「甘棠(ヤマカイダウ)也。杜曰棠、牝曰杜」とある。我國では「モリ」と訓じ、森に對して特に社寺の森に言ふ。此處ではその區別なく森と同意に用ひられてゐる。

【杜が鋸の齒のやうな杉を背に並べて湖の方に流れてゐる】「背に並べて」といふ擬人法も巧妙であり、そのなだらかな傾斜を「流れてゐる」と描寫した所も斬新な手法である。

【いやが上に】 此の上もなく。非常にの意。「いや」はいよよ、ますますの意。

【空氣がいやが上に清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の杜も、ともに新鮮な色をしてゐる。さうして、その間を薄く霞が流れてゐる】

いやが上に清冽な空氣、新鮮な杉の杜の色調、さうしてその間を淡い霞が流れる、實に克明に印象的に山の朝の清新な氣分が寫しだされてゐる。まのあたり見るやうな快い一句である。その描寫が如何にも自然流露の趣をもつてゐる爲、「非常に靜かだ」といふ句が讀者の心にそのまま素直に受け入れられる。

【うき世】 憂世又は浮世と書く。本來は憂世、即ち憂き事の多い世の意。後浮世の字をあてて、(一)浮きて定らぬ世。無常の世。(二)世の中・俗世間などの意となる。こは(一)の意。

【我が物顔に】 ワガモノガホに 自分の所有物かの様子で。思ふ存分に。

【その杉の梢で一羽が啼いてゐる。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。又遙か向うの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳をすますとなほ二三羽の聲が、どこかで聞えるやうだ】

彼方でも此方でも我物顔に啼囀る鳥の聲の描寫である。

「その杉」「彼方の杉」「遙か向うの谷」と巧にその位置の遠近を書き分けて、而も啼いてゐる「答へる」「應ずる」と變化を持たせた所に作者の周到な用意がうかがはれ、それが、鳥の啼に快い音樂的な諧調を感じさせる。よく耳をすますと「の一語はその小鳥の合奏に恍惚としながらちつと耳をすます作者の姿を髣髴せしめ、朝の靜寂のいよいよ深きを思はしめる。

【高音を張る】 タカネをハル 高調子の聲を張上る。

【りりしい】 凜々しい・律々しいと書く。きりりとひきしまつてゐる。いかめしい。

【空山】 クウザン (一)人の居ない、ひっそりとして靜か

な山。華陽國志「獨坐空山一放虎自衛」(二)人げのないもの淋しい山、唐詩選王維「空山不見人、但聞人語響」こゝは(一)の意。

【錯綜】 サクソウ 物の入り雑ること。

【諧調】 カイテウ 和いだ調子。整つた調子。諧は玉篇に「合也・調也」とあり、書經舜典には「八音克諧」とある。

【けたまひしい】 俄かに驚き騒ぐ貌。さはがしい。あまただしい。

【雉子】 キジ きゞし・きぎすの約つたもの。鶉鷄類に属する。形は稍、鷄に似てゐる、雉は頭に二條の角の様な毛があり、體は黒青色で翅に斑紋があり美しいが、雌はそれ程美しくない。山野に棲み、飛翔力は弱い。

【急調】 調子の速いこと。

【山鳥】 ヤマドリ 鶉鷄類。雉に似てゐるが稍雉よりも大きい。雌雄共に銅赤色で光澤があり、背面には黒斑、腹部には白斑があり、尾羽の長く垂れてゐるのと額に冠毛を持つのが雉と特にちがふ。雌は雉に比して尾羽も短く全體として地味である。雉より一層山奥に住み、保護鳥である。

【前の二つの小鳥で織りなした美しい絹を、唯一聲に引裂きたかと疑はれる】

あの冴えた音感にびつたりと一致してゐるからであらう。

【一つの絝が置かれると、又縦糸を織つて前の小鳥がなく。横糸を織つて次の小鳥が啼く。絝が啼く。縦糸が啼く。横糸がなく】

「絝を置く」「縦糸を織る」「横糸を織る」と重ねて、次に之を「絝がなく」「縦糸が啼く」「横糸が啼く」と簡潔な隠喩で受けて行く處には、一種快いリズムミカルな調子がある。恰も清澄の山氣の中に啼き交す小鳥の音楽的諧調を聞く趣だ。巧妙な手法といふ他はない。

【この絹をまた山鳥が破るのかと思ひながら待ち設けてゐると、不思議な聲が別に起る】

高い晴々した調子が豫期に反して突如こゝから不平らしい低い調子に墮ちてゆく。實に巧妙な變化であり、全文を通じて一種音楽的な効果を齎してゐる。管絃樂の演奏によく用ひられる技巧、あの狂騒的に思はれる合奏が、突如低調なセロの獨奏などに移つて行く、そんな感がないであらうか。

【谷の神社の鰐口が口をあけてつぶやくのかと思はれる。】
「鰐口が口をあけてつぶやく」とは、實に意表をついた擬人法である。鬱蒼たる樹林の蔭に暗くひっそりと鎮まる社、その社前に吊り下げられた鰐口が口をあけて呟く。

「二つの小鳥で織りなした美しい絹」といふ譬喩は「前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸だ」(二一頁)を受けつたものである事を考へさせたい。誠に簡潔斬新な譬喩である。「美しい絹」といふ譬喩は絹の持つ觸覺的視覺的な美感から、いやが上に清い朝の空氣の中にひびく小鳥の聲を愈々明朗清澄なものに感じさせる。それを「唯一聲に引裂いた」と強く言ひ切つた表現には、けたまひしい急調な鳥の聲のけはしさが耳をつんざく思がある。

【その聲は谷の底の底、峰の奥の奥に浸みこんでしまつて、あともとの静かさになる】

「此方の谷に響く」のは谷にこだましながら谷底に、彼方の峰に響く」のはその峰にひびき互つて峰の奥に、次に、水のものに浸みこむやうに、微かな餘韻をひいて消えて行く。耳を澄ましてゐれば、しんと心もそれに吸ひこまれて行くやうな「もとの静けさになる」のだ。動中の靜である。岩にしみ入る蟬の聲」と芭蕉はうたつてゐる。その閑寂である。浸みこんでしまつて」とは實に詩趣盡きせぬものがあるではないか。

【絹に置かれる絝のやうに美しい】

深山の朝、清々しい空氣の中に響き透る鶯の音の清澄さがはつきりと感ぜられる。つや／＼しい絹、その上におかれた鮮やかな絝、その視覺的な美しさが、深山の鶯の

低音ではあるが谷の隅々まで擴がつて行く、不平らしい響である。聞く人の頭に何時までも不気味な餘韻を残してゐさうな、そんな感じがあるではないか。

【啄木鳥】 キツツキ 攀禽類に属する。嘴は鋭く、舌は嘴より長く、その先に逆鉤がある。趾は四本、中二本は前に、二本は後に向ひ、且尾羽が強い。その趾、尾によつて樹幹上に體を支へ、嘴で樹皮を破り、その舌先の逆鉤で皮下の蟲を刺して食ふ。「きたゝき」、「てらつゝき」の稱もある。種類が多く本邦に棲むものはあかけら。こげら。あをげら・くまげら等である。

【山鳩】 ヤマバト 鳩類に属する雉子鳩・あをばとを總稱する。

「雉子鳩」は頭部は葡萄酒色、頸部は鱗狀の斑点があり、背部の羽毛は黒と赤茶色を交へ、尾は黒茶色、胸より下は赤茶色、足は赤く嘴は褐色、姿態可憐である。常に雙棲する。本邦普通の山鳩である。

「あをばと」は本邦特産で、家鴨より稍大きい。全身黄緑、胸先は黄色、嘴は暗青色、脚は赤く、鳴く聲が尺八に似てゐるので尺八鳩の異名がある。

【漢々】 バクバク (一)遠くはるかなさま、王維詩「漢々水田飛白鷺」(二)ぼつととしてとりとめのないこと。蘇軾詩「春風搖江天漢々」こゝは(二)の意。

「杉の梢を渡る霞は少しづつ薄らいで、だんだんと谷が深く見えて来る」

「だんだん谷が深く見えて来る」の一句は「非常に静か

だ、浮世の物音は何もきこえぬ」(二〇頁二行)と相呼應し、山中の塵界を離れた清閑な氣分を捕へて餘す所なく全文を結び終つてゐる。

2 文の構成

第一節 初―二〇頁一行 叡山上の朝の眺望。視覚に映する清閑な情景を描いてゐる。

第二節 二〇頁二行―二三頁七行 清閑な朝の大氣の中に啼き交す小鳥の聲の美しさを描いて文の中心をなす。

1 静寂の天地を我が物顔に轉る「かはい小鳥」の合奏。(二〇頁二行―二二頁一行)

2 前の小鳥の合奏に錯綜して而も諧調を守つて響くらしい小鳥の聲。(二二頁二行―二二頁八行)

3 突然けたたましい鳥の聲が前の小鳥の啼聲の諧調を破つて谷底、峰の奥にきこえて、元の静けさにかへる。(二二頁九行―二三頁三行)

4 静けさを破る鶯の聲から再び前の小鳥の合奏が始る、その清朗高調の中に突然低調な不平らしい鳥の聲が起る。(二二頁四行―二三頁三行)

第三節 二三頁四行―終 再び外界に眼を轉じて、その眺望を敘して擱筆する。

3 文意

清新な山上の朝の絃景にはじまり、それが「非常に静かだ」といふ一句から耳の世界に移る。そしてその清閑の中に啼き交す小鳥の我物顔の轉りを高雅の詩趣を漂はせつゝ圓熟した手法で描いて、恍惚たる境地を醸出してゐる。その恍惚境が低調な不平らしい鳥の聲で覺されてゆく時、作者は再び眼を眺望に轉するのである。

4 鑑賞批評

鋭敏斬新な觀察と圓熟した筆致とが相俟つて、作者の意圖する山上の朝の清らかな閑寂が餘す所なく描かれてゐる。正に寫生文の上乗たるものであらう。深山の朝景色にみとれてゐる―鳥が啼きだす―しばらくは止むがまた啼きだす―恍惚として耳をかたむける―また實景に眼を轉ずる、その視覚から聽覺へ、そして再び聽覺から視覺へかへつて行く運び方も、一分の隙のない整頓したものである。併し、いふまでもなく作者のねらひはその鳥の聲の描寫にある。絹を織る縦横の糸、それを裂く音、その上におかれる絳など隱喩、直喩、擬人法等を自在に驅使して、そこに鳥の聲そのものの様な音樂的詩的効果を擧げてゐる、その渾然たる技巧は味はふべきであらう。而もそれ等の音響が實は靜中の動であり、その音響がかへつて中心たる閑寂を深めるために役立つて、讀者をそこに引張つて行く迫力を持たしめてゐる事は、既に言及した所である。要するにとかく冗長平板になり易い寫生文が破綻のない筆致の中にこの高雅な詩趣を溢れさせてゐるのも、つまり作者の力量はともかく、その裏に眼に見えぬ苦心鍛錬が隠されてゐる事を味到すべきである。

三 備考

1 指導研究

(一)表面的な雜駁な觀察では、とかく冗長に陥り易い寫生文を、愈々無趣味な無價値なものにするだけである。美辭麗句も修辭技巧も輕妙洒脫もすべて核心の把握を基底にして生命を持つてくるのである。要するに寫生の根柢は對象の核心を把握する觀察の眼である。前課「峠の茶屋」とも比較しながら、その確實な認識に導いて行きたい。

(二)勿論寫生文は客觀的對象の如實の表現を骨子とするのであるが、然しそれに生彩を興へ、詩情を盛るものは唯それだけでない事をも併せて考へさせねばならない。即ち本課で小鳥の聲を音樂的に、詩的に、描きだしたものは、様々な譬喩擬人法などを巧妙自在に驅使した技巧であつた。本課は作者の詩人的天性と練達した手腕とによつて、完璧に近い技巧

を示し、それが全文に無限の詩趣を溢れさせてゐる。誇張して言へば、技巧によつて生きた文だとも言へる。さういふ點を生徒自らにも發見させ、檢討させ、或は指摘して、表現技巧の重要性に對する認識を深めたい。

(三)整理として作文と直接連絡してその模範文とさせてよからう。唯この場合、單なる譬喩や擬人法は文にわざとらしさを感じさせ、迫力を乏しくさせて反つて有害無益のものである事を指摘すると共に、例へば本課のその如く、その時その場に最も妥當なものは、その物の核心にふれた所謂フローベルの一語説に規定された唯一無二の表現であることを知らしめ、作文に苦心努力の必要なことを強調して反省を促したい。

2 參考

(一)挿繪 比叡山頂から琵琶湖を望む。

比叡山頂の四明ヶ嶽(標高八四八米)から東方琵琶湖を下瞰した寫眞である。前面の岩は將門岩、中央遠く湖のせばまる所は宇治川であらうか。その右岸は大津邊で、模糊の間に彦根城を望み、左岸には遠く矢橋の名勝がおぼろに霞んで見えるところよ。

(二)「寫生文」の輪廓を窺ふ爲に「日本文學大辭典」からその一部を引用する。

明治年間に正岡子規を中心として起つた文章の様式の稱で、洋畫の寫生の手法を文章に移入した所から起つた名稱である。子規が明治三十一年十月雜誌「ホトトギス」に載せた「小園の記」を彼のこの種の文章の第一歩と見ることが出来るが、翌年十月の作「飯を待つ間」に至つて、寫生文的に渾然たる趣を具へた見本的の好作例が示された。併し確かに意識的になつたのは、三十三年に子規が新聞「日本」に發表した敘事文と題する文章論からで、劈頭先づ、

文章の面白さにも様々あれども古文雅語などを用ひて言葉のかざりを主としたるはこゝに言はず。將た作者の理想などたくみに述べて傾向の珍しきを主としたる文もこゝに言はず。こゝに言はんと欲する所は、世の中に現れ來りたる事物(天然界にても人間

界にても)寫して面白き文章を作る法なり。

と前述し、虚敘(概敘)を排斥して實敘を主張し、虚敘は地圖の如く實敘は繪畫の如し」と説き、「寫生と云ひ寫實といふは實際有のまゝに寫すに相違なけれども、固より多少の取捨選擇を要す」として、

或る景色又は或る人事を敘するに最も美なる處又は極めて感じたる處を中心として描けば其景其事自ら活動すべし。しかも其最美極感の處は常に大なる處著き處必要な處にあらずして、往々物蔭に半面を現すが如き隱微の間にある者なり。

と説き及んで、文章に山を重んずべき所以をも明かにして、彼の文章觀即ち寫生文の立場を明かにした。この立場から文章の研究を進めて行くために、三十二年頃から子規庵で月々文章會(所謂山會)を開き、各々文章を持ち寄つては朗讀して、子規の批評を乞うた。高濱虚子・阪本四方太(文泉子)・寒川鼠骨・河東碧梧桐・松瀬青苔等の諸俳人や、歌人の中から伊藤左千夫・岡倉谷等の人々がこれに参加した。「寒玉集」二卷(虚子編)はこの時代に於ける寫生文の收穫である。(中略)三十四年以後子規の病は愈々重く、從つて見るべき作品も漸く減じて、三十五年九月の死に到つたのであるが、而も彼が病中精力を傾注した文學的事業は、各々後繼者を得て進んでゆき、三十六年九月には「寫生文集」(虚子編)が發行され、三十九年には虚子・文泉子共著の「帆立貝」が發行された。(中略)「新寫生文」が四十一年一月に發行されたが、嚴密にいへば寫生文なるものは、この「新寫生文」時代に至つて先づ一段落を告げたと見ることが出来る。

(三)作者高濱虚子氏の寫生文についての主張の一端を次に掲げる。

もとより寫生文は技巧ばかりではない。内容の方にも主張がある。けれども技巧の點に於ては、今日までの文壇にありて、急先鋒といふことに躊躇しない。自然派の叫聲は寫生文派の者にも多少の刺戟を與へた。けれども寫生文派の文章が今の文學に直接に及した影響は決して少くない。若し今日に於ける新技巧を論ぜんとするならば、決して寫生文を閉關することは 來ない。寫生文の主張する所は文字通り寫生である。自然の寫生である。如何に自然を寫生すべきかにある。(明治文學變遷史)

補材

をちこちに啼きうつりゆく筒鳥のさびしき聲は谷にまよへり

「比叡山にて」と前書がある歌であり、且つ鳥の啼く音を主題とした作であり、かたがた本課の補材としてふさはしく感ぜられる歌であるので、採用した。

【啼きうつりゆく】啼きながら、枝から枝へ、樹から樹へと、とび移るのをいふ。

【筒鳥】ツツドリ 攀禽類の鳥であつて、啄木鳥の類である。成長したものは、羽色が杜鵑(トウモロコシ)郭公(トウ)によく似てゐるが、胸・腹の横行黒條は幅が広い。體は杜鵑よりは大きく、郭公よりは小さい。其の啼き聲がボンボンと、竹筒を叩くやうな風に聞えるので、ぼんぼん鳥とも

呼ばれてゐる。候鳥で、夏期だけ日本に來り、冬は南方の暖地で越冬するのである。古より歌によまれて、十題百首に「これも又さすがに物ぞあはれなるかた山かけのつつ鳥の聲」といふのが見える。

叡山は鳴禽類の多い山として知られてゐる。その山の中で、作者ははたなくも筒鳥の音を聞いたのである。ぼんぼんと啼き又ぼんぼんと啼く。その啼く音を心の耳をすまして聞くと、あちこちと啼きつつ筒鳥のうつり行く姿が心眼にうつて來る。その音は誠に淋しい。その啼く音は流れ動く。樹深い谷間々々をさまよつてひびく。そして淋しく迷ひゆくその音を聞く人の心に、自らも鳥の音と共に深山の谷にあちこちと揺曳するやうな感を起させる。さうした境を歌にしたものである。

【若山牧水】 (二二八頁参照)

五 托鉢僧と蝶

小川 未明

一 解 題

1 作者

小川未明 ヲガハミメイ 名は健作。未明は號。明治十五年四月、新潟縣中頸城郡高田町に生れた。高田中學を半途退學し、二十歳上京して早稲田大學豫科に入學、ついで本科英文科にすゝみ、三十八年第一回生として卒業した。在學中坪内逍遙に師事して特別の指導をうけ、二十三歳處女作「霞と雲」を雑誌「新小説」に、「人生」を「早稲田文學」に發表して文壇の注目を引いた。卒業後早稲田文學社に入り、「少女文庫」を編輯し、後三十九年讀賣新聞社員たること半ケ年、翌年秀才文壇社に一年在社した以外は、全く創作生活に終始した。その間、自然主義全盛時代は氏の最も苦難の時代で、浪漫主義の孤壘を守つて襲ひ來る窮乏と戦ひ、その貧困の爲二兒を失ふの悲惨な生活苦を嘗めた。後その思想は人道主義的社會主義的傾向に向ひ、日本社會主義同盟の結成をみるや、文壇人として率先して参加し、その作品の上にもこの傾向を示した。「赤き地平線」「血に染む夕陽」等はこの時代の作品である。

氏の純情素朴なる藝術境は自ら童話作家として独自の境地を拓き、明治四十三年處女童話集「赤い船」を出版して、純藝術的創作童話の濫觴をなし、以來新興童話の先驅として今尙童話の筆をとつてゐる。

著作には前記の他、浪漫主義的高潮期のものに「愁人」「綠髮」「少年の笛」等があり、人道主義的社會主義時代の作に「底の社會へ」「彼等の行く方へ」「小作人の死」等があり、今殆んど小川未明選集六卷に收載されてゐる。童話集には未明

童話集數冊を數へ、別に未明感想集もある。

2 出典

昭和七年七月、文化書房發行の「童話雜感及小品」に收められてゐる。作られたのは、昭和元年七月頃であつて、同月の讀賣新聞に掲載せられた作品である。

3 主眼及び採擇の趣旨

少年達にとつては心ない惡戯に過ぎないことが、正しい道德的批判の前に曝される時、實は大きな罪過として照し出されるものがある。所謂單なる少年の意地惡によつて、或は無思慮によつてなされる惡戯であつて、少年達は日々のはむれの中に絶えずかうした過を犯しつゝある。人間の二重性の一面たる獸性が、はやくも至純なる童心の中に芽ぐみ初めてゐるものといふべく、成長して道德的無反省となり、やがて惡の兆ともなるのであるから速に摘まれねばならない。

本課は「太郎」の少年時代の追憶と、その成人後の後悔とによつてこれを物語つた童話である。少年期の回顧として描かれたその心理解剖は、生徒にとつては極めて身近な生活の、しかも共通した心理描寫であつて、この點直接な理解と自覺的な學習に導くことの出来る文藝的教材であり、更に彼等の深い反省に訴へて、その徳性と知性とを陶冶すべき人間的教材として採擇した。

二 解 釋

1 語釋

【托鉢僧】 タクハツソウ 托鉢にまはる僧侶のこと。一托

鉢（たつぱん）は（一）頭陀行（だうたぎやう）（煩惱を去り、衣食住に對する貪慾を

去り、清淨に佛道を修めるための行）の一。修行僧が闕市に出て、經文を誦しながら各戸の前に立ち、施與の米錢を鐵鉢で受納して廻ること。「行乞」とも言ふ。（二）寺で粥齋の時、僧尼が鉢を持つて食堂に行くこと。ここはいふまでもなく（一）の意。

【蝶】 テフ 鱗翅目に屬する昆蟲の一群。鱗片及び鱗毛で蔽はれた二對の葉狀の翅は、各種の美麗な色彩を呈し、口器は螺旋狀の吻管をなし、一對の觸角、二箇の複眼を具へる。幼蟲は毛蟲・青蟲・芋蟲の類で、草木・蔬菜の類を食つて生長し、蛹時代を経て成蟲となる。一般に晝間飛翔して花蜜を求め、停止の際は兩翅を垂直に背の上に立てる。その種類は極めて多く、我が國だけでも五百種を數へる。「てふてふ」「こてふ」「てふま」と言ひ、古名を「かはらびこ」といふ。

【隔日】 カクジツ 一日おき。

【黃の勝つた茶色】 「茶色」（チャイロ）は黒色を帯びた赤黄色。黃の勝つた茶色は、茶色の赤黄色の黄色の方が赤色より強く表れてゐる色調のこと。

【錫杖】 シヤクチャウ 僧侶・修驗者の持つ杖。菩薩頭陀行を修める時、又は遠方往來の時に用ひる。上部は錫、中部は木、下部は牙又は角からなり、頭部は塔婆に象どり數箇の銀を掛ける。地を曳く時、上部の錫が音を立て

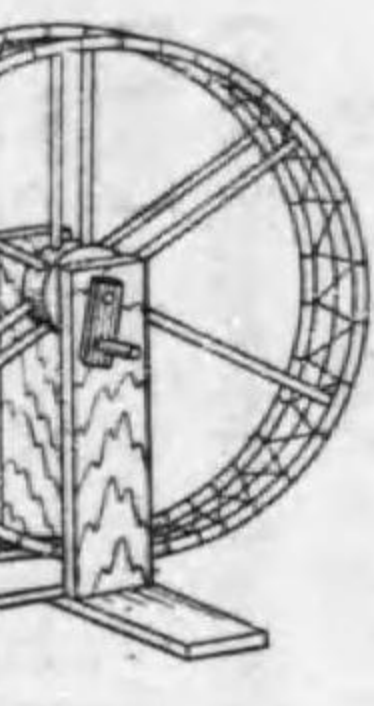
るから、かく名づけたのである。顯教では乞食の時に家人の覺醒の爲に用ひ、又蛇・蝮等の害蟲を防ぐの具とし、密教では五大所成の法界塔婆として、地藏尊、觀世音の三昧耶形とする。聲杖・鳴杖・智杖・徳杖などともいふ（二）祭文讀が振鳴らして調子をととのへるに用ひる具。その形は僧侶などの持つ錫杖の大小の銀を去つた上部の狀をなしてゐる。ここは（一）の意。

【骨休め】 ホネヤスめ 休息すること。「休め」は「休む」の他動詞マ行下二段活用連用形の轉化した名詞。

【ちやうどその時刻には、家の内で仕事をしておいたものは手を休めて晝寝をし、また外で働いてゐるものも、骨休めをして横になつてゐたので、あたりは靜かであつたのです】

田舎の夏の眞晝の様子が巧みに描かれてゐる。すべての人が一時労働を停止して、晝寝したり、ぐつたり横になつたりしてゐる。横になつてゐても汗の滲んで來る程の暑さではなからうか。作者の筆は何等其處に及んでゐないが、家の内の敘述の裏にそれとなくそれを暗示してゐる事を讀取らねばならない。外はかんかん眩めくやうな炎熱で、草木の葉も燃れ萎れてゐる。その暑さの中を而も村人等が骨休めをして横になつてゐる時、きまつて隔日のやうに托鉢に來る眉の白い老僧の苦行の姿が一種

崇高嚴肅なものとなつて來、それが太郎が「一番悪いことをしたと後悔した」(三二頁七行)といふ本課の主題に導かれる發端をなし、また物語全體の大きな背景でもあるから、注意して味はふべき所である。



【糸車】 イトグルマ 絲くり車。絲を手でつむぐ車で、今は殆んど見られないが、曾ては農家の自家用の絲を紡ぐ爲に到る處で用ひられたものである。構造は圖について見られたい。

【つも】 絶え間なくおしやべりをしてゐる絲車までが、ひつそりとしてだまつてゐました。前段に「あたりは静かだつたのです」と言つた死のやうな眞晝の静寂を具象的に敘したのである。「おしやべり」も「だまつて」も共に擬人法であるが、「おしやべり」と「だまつて」との相對照する音感から、「ひつそり」とした静けさが濃やかに、而もなごやかに現されてゐる。

【ぼおう】 托鉢僧が家の前に立ち、又街中等を通る時に發することばであつて、元來は僧が案内をもとめる挨拶である。閑靜な暑さの中に籠るやうな一種壯嚴な音感があ

葉腋に漏斗狀の合瓣花を開く。花は黄色で雌雄同株。果實は大形の漿果で、形は扁圓形又は圓形で、成熟すれば肉は淡黄色を呈し食用に供せられる。「たうなす」「ぼうぶら」などの異名がある。

【佇む】 タタズむ 歹とも書く。(一)立ちどまる。しばらく立つてゐる。(二)さまよふ。ぶらつく。ここは(一)の意。

【小錢】 コゼニ (一)小額の金錢。(二)小遣錢。ここは(一)の意。

【あげますよ】 と言つて、小錢を鉢の中へ落す音が聞えたのでした。殆んど同じ文が「二八頁九行目」に再び繰返されてゐるが、この柔かい語勢の中にお祖母さんの姿が躍如として描かれてゐる。「私が留守でも忘れないであけておくれよ」(二七頁九行)といひ、短くてようございますよ」(二九頁六行)と言ふお祖母さんの、優しく物靜かで、上品な物ごしが、眼に見えるやうである。これを反覆した作者には、その中にお祖母さんの風貌を浮び上らせようとした意圖があつたのではなからうか。

【萼】 ニラ 百合科の多年生宿根草本。葉は扁平、細長肉質で柔かく、長さ三〇厘米内外で、鮮綠色を呈してゐる。花は白色で、八九月頃花梗を出し、その頂に繖房花序の

【目深く被る】 マブカクカブる 目のかくれる程深くかぶる。

【草鞋】 ワラヂ 三・峠の茶屋。一頁三行既出。

【蜻蛉】 トンボ(トンボウ) 蜻蛉ともかく。蜻蛉目に屬する昆蟲の總稱。體は細長く、腹部は圓筒狀をなし、狹長透明な強靱な翅を有し、一時間よく六〇哩の速度で快翔するものもある。眼は複眼で突出し、觸角は短針狀をなす。幼蟲は「やご」と言つて水中に生活し、成蟲・幼蟲ともに他の昆蟲を捕食する。種類は極めて多く、その數は二千五百種に達し、殊に我が國に最も多く、又我が國民ほどこれに注意するものもなく、古來文學に、美術に好個の題目として取扱つてゐる。我が國に「あきつ・えむば」、唐國に「青亭・赤卒・赤衣使者・赤辨丈人」などの異名がある。

【蜻蛉を釣る】 竹などの先に絲をつけ、その絲の端に蜻蛉を結びつけ、之をふりまはしながら、他の蜻蛉を誘ひ捕へる。

【南瓜】 カボチャ 印度支那の Cambodia から傳來したのでこの名がある。葫蘆科の一年生草本。莖は蔓性で卷鬚を有し、葉と共に刺毛がある。葉は心臟形鈍頂で、淺く五裂し、縁邊に細鋸齒を有し、濃綠色で白斑がある。夏

花を著生する。葉は特殊の臭氣を有し、消化を助け、腹痛を醫すと稱せられ、酢味噌とし、或は粥に入れ、汁の味とする。「ふたもじ」の異名がある。

【鳳仙花】 ホウセンクワ 鳳仙花科の一年生草本。東印度地方の原産。莖は多肉で圓く、高さ四〇厘米から六〇厘米に達する。葉は互生し、披針形で、鋸齒と白毛とを有する。夏日葉腋から二・三の花梗を抽き、花梗に一花をつける。花は左右相稱で、赤・白・絞り等種類が多い。果實は熟すると果皮が開裂して種子を弾きだす。「つまくれなゐ」の異名がある。

【頼りなさうな】 頼りないやうな様子の。頼りなさは形容詞 頼りなし(頼るものがない・頼りとする所がない)の語幹に「さ」がついた名詞。「さう」は「さま」の音便で、物事のありさま・様子をあらはす接尾語。

【何となく頼りなさうなこの坊さん】 太郎の坊さんに對する觀察である。炎天下を錫杖を鳴らしながら、而も人の晝寝してゐる時やつて來る眉の白い老人の姿は、子供心には、頼りない人間と思はれたのである。その頼りなさうな坊さんをからかつたのだから後悔の感じは一層切實であつた譯である。「一番悪いことをしたと後悔された」といふ主題と、ある心理的聯關を持たせてゐることに注意したい。

【胡蝶】 コテフ 胡蝶とも書く。蝶のこと。
【あゝ、蝶がお坊さんをからかつてゐる。】と、太郎は思はずにつこりしました】

「蝶がからかつてゐる」といふ觀察は如何にも子供らしい。従つて思はずにつこりしたのも、此處では何も悪氣があつたのではなく、小さな事にも唯し立て、笑ひさめく子供らしい笑である。併しこれを目撃したといふ事はやがて彼に「からかつてやうといふ風な氣」(三〇頁一行)を起させた動機に結びついてゐるのであるから、一應注意して置くべきであらう。

【街道筋】 カイダウスチ 街道の通り道。「街道」はおほどほり。國道。官道。

【信仰心】 シンカウシン 信仰する心。信仰は(一)宗教思想の客體たる神又は佛を崇めたつとび、これに歸依して奉事すること。(二)信じたつとぶこと。ここは(一)の意【氣の毒な、わざわざここまで遠廻りをしなされるのも、私の家一軒きりだから、私が留守でも忘れないであけておくれよ】

留守にまで氣づかふ志の深さを思はせたい。村のものは信仰心がないね。」と泌々慨歎し、わざわざ一軒遠廻りして来る托鉢僧を心からの感謝をもつて迎へてゐる信仰心が窺はれるばかりでなく、ここに至るまでの數奇を極

である。お祖母さんのこの志の深さを理解させる事は、やがて太郎の悪戯の性質をも理解させる事になり、従つてその後悔が心からなる後悔として生徒の腦裡に滲みこむ事ともなると思はれる。
【耳をかさず】 耳に入れない。きかないふりをする。
【坊さんはそれには耳をかさずに、お經をあげてしばらくしてそこを立去りました】

燃えるやうな炎天下にいつまでも立つてお經を上げてゐる眉の白い老僧の貴い姿を描かせたい。唯それが御祖母さんの志に對する感謝の一念からさうしてゐるのである。本當の佛徒らしい貴い姿がそこにある。太郎の眼にそれが見えなかつた所に、大きな過はなされたのであつた。
【反感】 ハンカン 他人に反抗する感情。
【太郎は坊さんが自分の家一軒を當にして來ること、雨が降つても必ず隔日にやつて來ることに對して、何となく反感に近いものを感じたのです】

感謝し尊敬すべきではあつても、反感を感じすべき何ものもない。而も太郎が反感を抱いたのは、一は「自分の家一軒」といふ我執から來る利己心からであり、一は自分に及び得ない眞善美に對する羨望から來る悪意のためであつた。彼の心には既に小さな悪魔が頭をもたげてゐたのである。自覺の明でない生徒たちは、恐らく太郎と同

めた過去をさへ物語つてゐるかのやうな深さを持つた言葉である。

【この時分にも眠らずに外で遊んでゐるのは、子供達ばかりであります】

子供の生活をまことによく把へて、直接その共鳴を呼ぶ所である。かういふ點から殊に生徒の生活に強く結びつけて、それを全體に及ぼして行くやうにしたい。

【志】 ココロザシ (一)一事に心の向ふこと。心に定められた目的。心に立てる信念。(二)厚意。親切心。(三)自分の志をあらはして物を贈り、或は事を行ふこと。(四)亡者の忌日の香奠返しとして物を贈ること。ここは(二)の意。

【御利益】 ゴリヤク 佛が衆生に與へる利益。「御」は敬語。
【坊さんの心持】 「お祖母さんの志を有難く思つて、佛様の御利益をお祖母さんに授けてもらふやうに祈つた」坊さんの心持を指す。

【炎天】 エンテン (一)夏の焼けつくやうな暑い空。(二)夏季に日の照ること。(三)南方の空。ここは(一)の意。

【短くて、ようございます。】と言はれた日もありました】佛の御利益を授からうといふやうな名聞利益に拘はる心は微塵もない。唯施與せずにおられない報謝の深い志である。この言葉はその美しい心から自然に漏れ出たもの

じやうに、意識せずに日々の戯の中にこの過 犯してゐるのである。彼等の生活に聯關せしめて、直接その内省に訴へ、反感の基く所を明にして、それが如何にさもしい卑しい行動であるかを悟らしめたい。

【それにもう一つ】
「笑ひもしない、また物も言はない坊さんを、からかつてやうといふ氣が起つたのです】
少年の心理をよく描いてゐる。よく笑ふからといひ、笑はないからと言ひ、怒るからと言ひ、黙つてゐるからといひ、とにかく自分達の生活と少しでも違つたものには抑捺したり、輕蔑したりする無自覺な行動を、少年達はむしろ喜んで行つてゐる。太郎のこの行動も、そこから生れたものであつたが、それは輕卒無慮なものとして咎められても、故なき反感に比べればまだ許される。半分からかふ氣で(三二頁八行)と言つてゐる所はこの事であらう。

【往來】 ワウライ (一)ゆきき。ゆきかへり。(二)ゆききの道。往還。(三)書狀往復の文案を集めた書物。ここは(二)の意。
【空しく】 ムナしく 無益に。かひなく。

【太郎は後で笑つてゐました】

後味の悪い笑であつた。單なるからかひの爲のからかひでなく、反感の籠つてゐる惡意的なからかひであつただけに、罪惡感が既に太郎の笑を翳らせてゐる。何か重くらしい語調が巧にそれを暗示してゐることに注意したい

【びくつかせる】 びくびくさせる。
【坊さんは、相變らず笑ひもしなければ物も言はなかつたが、白い長い眉毛のあたりをびくつかせて、じつと太郎の顔を見て行つてしまひました。】

坊さんの容貌が、實に克明に彫刻的な鮮かさを以て描きだされてゐる。長い眉毛のあたりをびくつかせて」といふ語の中には、坊さんの心持の平らかでない状態が、しのびやかに示されてゐる。殊に黙つてゐるだけにその顔は一層冷たく底氣味悪く感じられたであらう。思ひがけぬこの顔をみせられた太郎の驚愕と恐怖とが想像される。作者はそれを一言もしてゐない。併し生徒は矢張かうした經驗に一度位突當つてゐる。街の浮浪者からかつたり、或はまた村に流れて來た乞食にからかつたりして、黙つてじつと顔を見つめられて身のすくむ思をしたことの一度や二度は必ずあるであらう。唯坊さんの表情だけ描いて、少年の經驗に訴へてゐる所はかへつて効果的であつた。

【この時、どこからか白と黄の蝶が二つ來て、坊さんの身の來なくては悪いと思つて、今まで來ていらしたのだ。と、しんみりと言はれました】

「來なくては悪いと思つて今まで來ていらした」といふ證據を何處に求めるかを生徒に考へさせたい。従つてもう一度物語全體が反省回顧されるべき所である。小錢のお布施にもかゝらず雨が降つても必ず隔日にやつて來る坊さんが思ひ出される筈である。炎天下に長い事お經を讀んでゐた姿が回顧されるであらう。信仰によるお祖母さんとお坊さんの心のつながりが不思議な美しさをもつて初めて明るく照し出された。と同時に同情から湧くお祖母さんの言葉は太郎の心を底から揺り動かすものがあるかに感ぜられる。次に來る「一番悪い事をしたと後悔された」といふ前提として、これと深い聯關を持つものであるから、十分の理解を要求すべき所である。

【しんみり】 しめやか。しつぽり。こまやか。
【その中で、一番悪いことをしたと後悔されたのは、半分からかふ氣で坊さんを歸した、この時のことであつたのです】

これが本課の主題であり、作者は太郎の惡戯を通して少年の知性にそれを呼びかけてゐるのである。ここでは前節によつて反省された所にもとづいて、物語を生徒の胸中に再構成せしめ、その後悔を自分自身の後悔として實

まはりを飛びながらついて行きました】
【もう、あのお坊さんは來ないだらう……。と、太郎には思はれたのでした】

「あゝ蝶がお坊さんをからかつてゐる(二六頁一〇行)と比較して讀ませたい。最早太郎の顔には笑も浮んで來なかつた。お坊さんにまつはりついて飛んで行く蝶の様子が、今度は坊さんの怒を慰めてゐるやうにも見えたのであらう。親しい友達として戯れてゐるかのやうに見えるたのかも知れない。唯一人取殘された孤獨感と、意外な坊さんの怒に依つて呼び覺された罪惡感と、その過失の自覺の中に湧き上る寂しさで、去り行く僧侶の後姿を見送る太郎の暗い姿がそこにある。もうあのお坊さんは來ないだらう……。」といふ太郎の獨白の持つ重い寂しい語調は、よく太郎の心境を把へたものである。

【果して】 ハタして (一)思つてゐたごとく。案の通り。(二)げに。まことに。ここは(一)の意。
【自白】 ジハク (一)包みかくしてゐた事を自ら申しのべる。(二)法律上には、自己に關する罪惡の有無一切を自ら認すること。ここは(一)の意。

「自白」といふ言葉には太郎の過失に對する肯定感が含まれてゐる事に注意したい。
【錢がほしくて、わざわざ一軒いらつしやるのではない。】

感せしめる所まで導いて行くべきである。
【蝶がからかつてゐる。】と言つて笑つたのも、いまややくその理由が分つたのでした】

少年時代の無知と無思慮への反省である。唯ほんに眼をひらきさへすれば、何でもなく理解出来ることに眼を開かうとしないのは、生徒達にも共通な點である。彼等の反省に訴へて、無思慮な過を犯さないやう注意すべきであると共に、心の眼をひらいて見ることの樂しさを、この後の一節の文について悟らしめたい。

【田圃】 タンボ(デンボ) (一)田と畑。(二)田畑のある土地。ここは(二)の意。

【野薔薇】 ノイバラ(略してノバラ) 薔薇科・薔薇屬の落葉灌木・高さ約一米。枝及び葉柄は棘を散生する。葉は奇數羽狀複葉で、各小葉は楕圓形、尖頂、縁邊に鋸齒を有する。初夏、梢上に芳香ある白色花を房狀に開き、秋日、赤色球形の小果實を結ぶ。花は香氣を有し、香料の原料となる。

【昔ながら】 昔そのままに。ながらは「隨」の字に當る接尾語。(一)名詞又は動詞に添へて「そのまゝ」の意を表す。(二)動詞に添へてあれをすると共にこれもする意をあらはす。(三)名詞の下に添へて「共に」の意をあらはす。ここは(一)の意。

【そこには、野薔薇の花が雪のやうに白く咲き亂れてゐて、花の香りが、坊さんの衣の袖に移つてゐたからでした。今も小道には、夏になると、昔ながらに野薔薇の花がいつぱいに咲きます】

美しい情景である。明るい野趣に満ちた此の景色は、稍

重苦しかつたこの話にほつとした安堵感をもたらして讀者の心を解放し、その爲に物語全體が温かい和かな光に つゝまれて來るのである。殊に「今も小道には」といふ結尾には、泌々とした感慨が溢れて、すべてが少年等に懐しい物語として回顧されて來るのである。

2 文の構成

第一節 初―三〇頁二行 自分の家一軒だけを目當に必ず隔日にやつて來る托鉢僧に太郎が反感を抱き、からかふ氣を起すまでの経緯。

1 夏の時分、隔日のやうに村へ托鉢に來る坊さんがあつたこと。(初―二四頁五行)

2 丁度村人の晝寝の時刻で、蜻蛉を釣つてゐた太郎は、お祖母さんのお布施をうけ經を上げて立去る頼りなさうな坊さんのあとを、蝶がからかふやうについて行くのを見たこと。(二四頁六行―二六頁末行)

3 街道筋の荒寺からでも來る坊さんにお祖母さんが深い同情をよせたことと、この志に對して坊さんはまた焼けつくやうな炎天下に長いことお經を上げてゐたこと。(二七頁一行―二九頁八行)

4 太郎がこの坊さんに反感を感じてからかふ氣を起したこと。(二九頁九行―三〇頁二行)

第二節 二度まで坊さんを斷つて坊さんを怒らせてしまつた太郎の後悔したこと。(三〇頁三行―三二頁四行)

1 二度まで太郎にからかはれて憤然と立去る坊さんに、蝶がまつはりついて飛んで行つたこと。(三〇頁三行―三一頁七行)

2 太郎がお祖母さんに自白したこと。(三一頁八行―三二頁四行)

第三節 三二頁五行―終 成長後少年時代を回顧して太郎はこれを一歩悪いことをしたと後悔すると共に、蝶が坊さんに

まつはりついて飛んで行つた理由も明になつたこと。

3 文意

少年時代の無智無反省から犯された太郎の悪戯が、實はその成長後の正しい道德的自覺の中に回顧された時、「一番悪い事をした」といふ批判が下される事であつたといふ物語である。まづその尊敬すべき托鉢僧の姿を鮮明に描き出し、而もこれに對する當然の道を信仰深いお祖母さんの美しい行の中に暗示して、ここに太郎の反感の故なき事であり、そのからかふ何等の理由のなかつたことの理解を促してゐる。従つて太郎の悪戯の性質も自ら明となり、その成長後の後悔も、全く必然的なものとして少年の心に自覺反省されることとなるのである。

4 鑑賞批評

「現實に發生しない童話はすでに生氣を失つたものです」(参考欄参照)と作者は言ふ。また「少年の眞の讀物は彼等の生活に關係あるべきものでなければならぬ」ともいふ。作者はこの主張をこの物語に具體化したものと云へる。少年の生活とその心理とをしっかりと把へて、彼等の境地に身をおいて、そこから優しく物語り、その知性の眼覺めに呼かけてゐる態度である。その態度は當然作者の少年を勞り愛する心から生れたものであり、従つてそれが全篇になごやかな温い光を湛へてゐる。その文章は所謂名文ではないが、簡明素朴な筆致にはいささかの無駄もなく、その線の太さは寧ろ少年の生活・心理の描寫には妥當なものではないかと思はれる。殊に語り盡さざる表現は少年の經驗に訴へる暗示的なものであり、冥想と反省との間に自覺的に題意を體得せしめて行く趣がある。味讀すべき少年讀物としては蓋し好個のものである。

三 備考

1 指導研究

(一)波瀾を喜び、變化を楽しむ少年達にとつて、本課の結末は或は飽氣ないかも知れない。それに主題が常に暗示的にぼかされてゐるので、生徒達にはちよつと喰ひつき難いのである。併しもとも少年の生活と心理とに深く潜みいつて、その立場から物語られてゐる話であるのだから、讀みを重ねるに従つて理解度が深まり、次第にその共鳴共感を誘ふものがあるであらう。解釋より説明より、より多く讀みを重ねる事によつて、自覺的に主題に到達させるやうな扱が考へられねばならぬ課である。

(二)生徒自身の事として、或は生徒の周囲の出來事としてかうした事件は日々のやうに繰返されてゐる。その生活經驗と結びつけて、今まで無自覺に無反省に犯して來た過が、如何にさもしい卑劣な輕蔑すべきものであるかの自覺に導く事が要求せられるべきであるが、此處で一番注意せられねばならない事は、それが教訓として説明されてはならないといふ事である。修身教材ではなく、人間的教材であるといふ點に常に立脚し、身を以て體感せしめねばならない。

2 参考

氏の童話論の一端を「隨筆と童話」の中から抄出する。

すべての空想が、その華麗な花と咲くためには、豊饒の現實を温床としなければならぬごとく、現實に發生しない童話はすでに生氣を失つたものです。過去のお伽噺が、その當時の生活經驗に調和して生れたものであるなら、新しい童話はお伽噺であり、お伽噺は所詮架空を材料とした作品なりとの理由をもつて、現實から出來るだけ離脱しようとしたのであります。そしてそれが單に怖がらせの妖怪談であつたり、また滑稽ものであつたり、然らざれば、教訓的な童話であり、若くは全くナンセンスであつて足れりとなりました。

しかしかくの如きものは、兒童等の知識の進むに従つて満足することが出來なくなつた。この缺陷と不満は、すでに從來のお伽噺や

童話について感じられたことであつて、兒童の讀物を科學的のものに引戻せといふ聲はその反動的のあらはれとみなければなりません。近時兒童の讀物といへば、先づ科學的知識を主としたものが重きをなすやうになつたのもその爲であります。しかし科學的知識のみを基礎とした讀物は、たとへ好奇心と興味とを多分に持たせることはできても、個性や特質や體驗といふことを無視するが故に、いまだこれをもつて眞の理解に到達したとはいへないのであります。そしてその曉は、かの架空的なお伽噺が現實を無視したも同じ結果に陥るといつてもいゝのであります。なぜなれば兒童等の現實に於ける生活は多様だからです。そして眞の兒童のため讀物は彼等の生活と關係あるものでなければならぬからです。

補材

草麥や雲雀があがるあれさがる (春の季)

二句共に「鬼貫句選」より採つた。「鬼貫句選」は鬼貫に私淑してゐた炭太祇が、その句文の傳はるものの少いのを慨いて、その見聞に入れるものを集めたもので、鬼貫の佳句の大部分はこれに收められてゐる。明和二年刊行。

【草麥】 クサムギ 麥のこと。まだ穂を胎まない前の若々しく青々と伸びた麥をいふ。書物により(特に教科書など)「青麥」と書かれたものが多いが、これは誤記のやうであるから一言附記しておく。

【雲雀】 ヒバリ 告天子・天鵲とも書く。燕雀目雲雀科の

一句の意は解釋するまでもなく明瞭である。

「草麥や」は緑の色も鮮やかな明るい麥畑を眼前に展開させる。燦々とふりそぐ春陽をあびて、伸びゆく生命に満ちた麥の若葉が瑞々しく軟かに微風にそよいでゐる麥畑である。その麥畑を舞臺にして、ひばりは舞ひ上り舞ひ下りて、これも喜びに満ちた元氣一杯の聲を張り上げて轉つてゐる。「雲雀があがるあれさがる」の弾むやうに輕快なしらは、

小鳥。春から夏にかけて高く揚つてよく轉る。雀より稍大きく、羽色は極めて地味で、赤褐色の地色に多數の黒色の斑點を有し、嘴は比較的長く、先端に小さな缺刻がある。腹部は白く、後趾の爪は非常に長い。

【あれ】 驚きの意をあらはす感動詞。

その雲雀の姿の躍動であり、その聲の調律であり、またその自然の中に溶けこんだ作者の心のリズムである。まことに明るく生々とした春の情景をたくみに把へた名句であると言へよう。

春の日や庭に雀の砂あびて

【砂あびて】 鳥獸が羽蟲(はじらみ)などの爲に身體の痒い 時、砂に身をすりつける、あれを美化した表現である。

「春光の明るい庭に雀が砂をあびて春の日はいよいよ和やかに長閑である」といふのが一句の意である。

「春の日や」の和やかなしらは、所謂駘蕩たる春日の長閑けさを感じしめるに十分である。明るい、併しぼかぼかと睡たげな陽光が溢れてゐる庭に、雀が下り立つて砂をあびてゐるのである。「砂あびて」と言ひ捨てたやうな表現が實によく活いて、愈々閑靜に更けてゆく春日の和やかさの中に身も心も溶け入る思がある。

鬼貫の句には、かうした口語調の句が比較的によく、それが又、如何にも自然純真で、軽やかな句風を作つてゐる。丁度少年の頃の氣分にびつたりとあふ句境である。少年時代の思出をのべた本課の補材として、その少年的な純な俳風の作をあげたのであつて、本課と内容的に深い聯關を持たせたのではない。

【鬼貫】 オニツラ 姓は上島、名は宗通。通稱は與三兵衛 又は與總兵衛。俳號は鬼貫。他に樺花翁・囉々哩・犬居士・馬樂堂・佛兄とも號した。寛文元年四月攝州伊丹村に生れた。八才よく句作したと自稱してゐる程の早熟兒で、夙に貞門の松江重頼に俳諧を學び、二十五歳には早くも「まことの他に俳諧なし」と悟つたと言ふ。貞享三年江戸に下り、間もなく大阪に移り、自ら一家をなし「伊丹風」と稱した。晩年大阪に住み、剃髮して即翁と號し、元文

三年大阪鰻谷に歿した。享年七十八。性磊落で名利に淡く、時人が彼の句を評して「伊丹俳諧嵯峨嵯」と言つたのは、つまり芭蕉の細みに對する彼の放膽な風格を暗示したものであらうが、併しその飄逸自然の句風には芭蕉の寂と一脈相通するものがあつた。著書には「七車」「獨言」「犬居士」「獨吟百韻」「老の寢覺」「大悟物狂」「寸の字集」等がある。

六のち

島崎藤村

一 解 題

作者

島崎藤村 シマザキトウソン 名は春樹。明治詩壇に於ける抒情詩の建設者として不朽の光輝を放つ詩人であり、又明治末期の自然主義小説の先蹤者であり今日に至るまで小説界の重鎮である。明治五年二月長野縣西筑摩郡神坂村馬籠に生れた。父は平田篤胤の息、鐵胤に師事した國學研究者である。十三年上京、三田英學校、神田共立學校を経て、二十四年明治學院卒業。卒業後明治女學校に教鞭をとり、二十七年北村透谷等の雜誌「文學界」の創刊に參畫し文學生活に入つた。二十九年東北學院の教授となり、此頃から新體詩人として土井晚翠・薄田泣菫等と相並んで詩壇に頭角を現した。仙台に在ること約一年、翌年東京に歸り、三十二年長野縣北佐久郡小諸義塾に赴任し、約七年間此處に送つた。この間、まづ三十年處女詩集「若菜集」を上梓し、以來次々に「一葉舟」「夏草」「落梅集」を刊行し、その清新な聲調と優婉な姿態とを以て若々しい情感をうたひ、明治浪漫主義の輝ける記念塔たらしめた。三十五年頃から詩作を捨てて小説創作に轉換、轉換後第一回の作品「舊主人」は發賣禁止を命ぜられたが、ついで「水彩畫家」を書いて小説家としてデビューし、三十九年、一年有半の苦心になつた「破戒」を携へて上京、これを上梓して自然主義運動の先蹤をなし、小説家として本格的に立つに至つた。當時の自然主義の頭目田山花袋が、外國文學よりこれを採り上げて提唱したのに對して、藤村は自己の自然發展の過程によつて浪漫的傾向から現實的傾向への明治文學史上の時代的發展に相應じたものであつた。大正二年フランス

に遊び、彼地に於て歐洲大戰に遭遇した。五年歸朝、歸朝後作風一轉して新現實主義的傾向を帯びた「新生」を發表した。以來不斷に創作に精進し、近く長篇小説「夜明け前」の大作を完成して、未だ氏の文學的生命は健全である。

著書は詩集に前記「若菜集」以下「一葉集」「夏草」「落梅集」ならびにこれを合せた「藤村詩集」があり、小説に「破戒」「春」「家」「櫻の實の熟する時」等を第一期作品とし、歸朝後「新生」ある女の生涯「伸び仕度」をはじめ、近く「嵐」「分配」「夜明け前」等の力篇がある。隨筆集に「千曲川スケッチ」「佛蘭西だより」「飯食だより」「春を待ちつつ」等があり、童話集に「幼きものへ」「ふるさと」「をさなものがたり」等がある。藤村全集全十二巻はこれ等作品の大部分を收載し、またこの他藤村讀本六巻も刊行されてゐる。

2 出典

形式統一の爲に文末に「をさなものがたり」と附記したのであるが、「雀のおやど」は「ふるさと」から採り、「屋根の草と釣葱」を「をさなものがたり」から採つたのである。「ふるさと」は大正九年に、「をさなものがたり」は大正十二年に出版された。共に少年の讀本として書かれた童話集で、本課の文はいづれも原文を殆んどそのまま採つた。次に掲げる作者の言葉は、此の兩著の作意を窺ふに足るものである。

「私の『ふるさと』や『幼なものがたり』は形こそ童話であるが、その心持は民話に近いやうに子供のために作つた。」

3 主眼及び採擇の趣旨

竹の子の成長と釣葱の述懐とによつて一は靈妙な生命力が、一は神秘的な自然の攝理が象徴されてゐる。それを民話風の平明な文で敘してゐるのであるが、詩人藤村の詩魂から滲み出た簡素清らかな美しい表現は、よく幼心を揺り覺し、その童心の自らなる理解に呼びかけてゐる。明るいしみじみとした情感の盛られた此の平易な童話は、心からなる親しみをそ、らずには置かないであらう。そして少年達はそれぞれの程度につれて、その象徴の世界を理解して行くのであらうが、併

しその世界は理解の深まるにつれて深まり擴がり、恐らくは少年の成長と共に永遠に魂の中に生き、發展してゆくべき深奥なる内容を持つてゐる。此の詩趣溢れる靈筆の力をかりて此の時代の生徒に、今や失はれんとする至純なる童心を揺り覺し、且はその氣品高い藝術的香氣を味はしむべき文藝的教材であり、更にその味到によつて象徴の世界を深く掘り下げて、人生的教養に資すべき文化的教材として採擇した。

二 解釋

1 語釋

【雀のおやど】 雀のお家、雀の巢を童話風に擬人化したもの。やどは(一)家、住居。(二)旅宿。はたごや。ここは(一)の意。

【雀、雀、おやどはどこだ】

少年達が幼ない日に繰返しきかされた舌切雀の童話の中で、舌を切られた雀を探してまはる時のあの爺さんの言葉である。恐らく少年達も幼い日の黄昏、竹藪の側や林の蔭で、こんな風に雀に呼びかけた記憶の一度や二度は持つてゐる筈である。この起筆の一句は、かうした少年達の幼時の記憶に呼びかけて、一氣に彼等をその懐しい童心の世界に呼び戻すのである。全く此の文にふさはしい起筆といふべく、呼戻された幼心に語られるこの一文は少年達に、否大人達にさへ、無限の懐しさを抱かしめ

すにはおかない。

【この雀には父さまも母さまもありました】
父さま母さまは勿論親雀を擬人化したのであるが「両親」とか「父母」といはずに、「父さまも母さまも」としてこれを重ねた表現に、如何にも優しい幼さを現して、而も次の「楽しいお家」と心理的聯關を持ち、子雀の幸福感を暗示してゐる。

【その竹の間から見ると、楽しいお家がよけいに楽しく見えました】

藤村の詩心はその情景を「青いまつすぐな竹が澤山竝んで生えてゐました」といふ簡素な表現に昇華してしまつてゐるが、青竹のすくすく伸びた竹やぶの中は、何時も爽かで新鮮な空氣が溢れ、葉漏陽がちらちらと揺れ、雀

の葉のさやぎは絶間なく自然の歌を奏でて、全く雀達には天國である。この美しい情景を背景にしての竹の間から見ると、雀のお家は「よけいに」楽しく見えたのである。なぜ「よけいに」楽しく見えたか生徒にたづねて見たい所である。

【母さまのお洗濯する方へ行つて見ますと】

雀の洗濯とは警拔な擬人化である。勿論我々の屢々眼にする雀が水溜で翼を洗ふ、あれからの連想もあらう。竹藪の側に小溝か何か流れてゐる。母雀がそこへ洗濯に行くのにさへ、子雀はその傍を離れずについてまはる。これはそのまゝ優しい母にまっはりついて離れない幼子の姿であり、その爲にもう「雀の洗濯」といふ擬人法が擬人法でなくなつて、讀者は知らず知らず全く童心の世界に引き入れられてしまふのである。

【あそこにも竹の子。ここにも竹の子】

歌ふやうな、躍るやうなこの言葉のリズムの中に、既に竹の子のまはりを踊つて歩いた子雀の歡喜が躍つてゐるではないか。

【悦んで踊つて歩きました】

好奇心と求知心に燃える幼児が、新しいものを發見した驚異であり、歡喜であり、滿悦である。而もそこに見出だされたものはすくすくと伸びる力に溢れた竹の子で

眼を圓くして驚いてゐる子雀の顔が見えさうである。而も飛んで行つた所が母の許である。幼児は一にも母二にも母、事あれば母の許に告げ訴へる。その幼さを巧に把へてゐる。

【すると、母さまは可愛い雀を抱きまして】

藤村の文は深い沈潜の底から殘滓を濾過し盡して滲みでた結晶であると言ふ。これなど正にその典型的な表現で「可愛い雀を抱きまして」のこの簡潔な表現に堪らないとしさで、子雀を抱きしめる無限の母の慈愛が溢れてゐる。ここに至ると讀者は全く雀と人との隔を忘れ、すつかり子雀となつて母の言葉に心を集めずにはをられません。

【お前は初めて知つたのかさ。】

勿論今まで知らなかつたことへの詰問ではない。寧ろもうそんな事に驚きの眼を見はるやうになつた、我が子の成長への無限の喜が躍つてをり、それで何とも言へぬいとしさが言葉の裏に溢れてゐる。

【そのや】 生物の生活を支へる原動力。壽命と言ひ生命といふ。作者はもつと積極的に萬物の成長伸展の靈妙な力の意味で用ひてゐる。

わざわざ假名書にしてゐる所は一は幼さを現し、一は感銘を深からしめてゐる事に注意したい。矢張詩人らしい

ある。子雀と竹の子とのはち切れるばかりの生命の自然の交流がそこに暗示されてゐるのである。一應生徒になぜそんなに踊り歩くほど喜んだのか考へさせて、さうした幼い日の悦びを呼びもどさせたい。

「ヨロコブ」と訓する漢字の重なるものについて、次にその意味を略解する。「喜」キ 怒・悲・憂の反で、心によろこび楽しんで外に現れるさま。「悦」エツ 心の中によろこび楽しむさま。「歡」カン 喜び楽しんで心の勇む様。「欣」忻 キン 悦に近くよろこんで氣の浮立つさま。「怡」イ よろこんで顔色の和ぐさま。「愉」ユ 喜びが顔色にあらはれるさま。

【雀が寝て起きてまた竹やぶへ遊びに行きますと】

「一夜明けて」翌る日」などでいい所を、「寝て起きてまた」と言つてゐる。「いくつ寝て起きるとお正月だ、お祭だ」と指を折つて數へる幼子そのまゝの姿が描かれてゐる。作者自身すつかり幼児になりきつてゐるやうな、洗練醇化された表現である。實に妙筆と評する他はない。

【「一晩あたり」 ヒトバンあたり 一晩程。あたりは(一)附近。近傍。(二)程。頃。ここは(二)の意。】

【雀は驚いて、母さまのところへ飛んで行きました】

「飛んで行きました」に雀の驚の大きさが述べられてゐる。一夜の中にすつかり變つてしまつた竹の子の様子に言葉に對する敏感さが窺はれる。

【それが皆さんのよくいふ「いのち」といふものですよ。お前たちが大きくなるのもみんなその力なんですよ】

「お前たちが」と言はれて生徒は思はず自らの心に眼を向けないであらうか。今まで思つても見なかつた不思議な命の相をはじめて見つめるであらう。そして「いのち」をいとほしむ氣持がひしひしとこみ上げて來るのを感じると共に、草も木も鳥も獸も、その不思議な「いのち」



の力で生き、成長することに思ひをいたす時、彼はもう一度周圍の自然を新しい氣持で見なほさずにはゐられないであらう。そこまで讀みを深めて行きたいものである。

【釣葱】 ツリシノブ 葱草をわがねて夏日涼味を添へる爲に軒端につるすもの。「葱」は水龍骨科の羊齒植物。根莖は匍匐し、淡褐色の鱗毛を密生する。葉柄は淡褐色で長さ五—一〇輻位。葉は長三角をなし、四回羽狀複葉に分裂し、裂片は長楕圓形。叢堆は深盃形をなし、小裂片の過半部を占め、子囊は長い柄を有する。

【辛抱】 シンバウ (一)こらへしのぶこと。忍耐。

【ええ、ありがたう】

人の好意は好意として素直に受容れ、常に感謝を忘れな
い度しく床しい屋根の草の心根が、この挨拶の言葉に現
れてゐることに注意すべきである。この自ら持する謙虚
な心の持主だからこそ、つらさを忍んで花の咲く日を待
つてゐられるのである。

【でも、私はかうして花の咲く日を待つつもりです。どんな
小さな草にも一度は花の咲く日が来ると言ひますからね。
それを私も信じて行きますよ。】

芭蕉は「よく見ればなづな花咲く垣根かな」と詠歎して
ゐる。どんな小さな草も、春が来ればそれぞれに花をひ
らく。小さい者は小さいまゝに、大きいものは大きく花
やかに、それは靈妙な自然の攝理であり、嚴肅な天の配
劑である。藤村はこれを葱草に語らせて、その自然の攝

理のまゝに一切の運命を甘受して花の咲く日を待たうと
いふ人生觀に肯定を與へてゐる。これは宿命論的な消極
的な態度であり、或は世に省みられない者の淋しい諦だ
と言ひ得るかも知れない。
併し結局大きい神の攝理のまゝに生き死ぬ人間である
此の自然の秩序を信する度ましい謙虚な悟に於てこそ、
はじめて生きる事の喜があり、幸福への感謝が生れ、ま
た不幸や悲哀に對しても不平不満を抱かず、絶望失意に
陥らず、靜かにこれに耐へて行き得るのである。今洋々
たる前途の希望に燃える野心的な少年達には、この象徴
は稍理解し難いし、例へ一應は理解したとしても多分に
飽きたらなさを感ずるであらう。その爲に反つて此處の
徹底的理解は重要性を持つて来る。泌々と熟讀翫味して
心からなる反省に訴へたい。

2 文の構成

「雀のおやど」

第一節 初―三四頁八行 竹藪の中の雀の楽しいお家のこと。

第二節 三四頁末行―三五頁五行 母さまの洗濯について行つた子雀が竹の子を見つけて踊つて悦ぶこと。

第三節 三五頁六行―同頁末行 竹の子が一晚のうちにびつくりする程大きくなつたこと。

第四節 三六頁一行―終 驚いて飛び歸つた子雀が母様に尋ねると、母さまはそれが「いのち」といふものであると教へ

たこと。

「屋根の草と釣葱」

全篇一節で屋根の草と釣葱との會話によつて屋根の草の心持を語らせてゐる。

3 鑑賞批評

「雀のおやど」は純粹に幼い童心に向つて語られてをり、「屋根の草と釣葱」は民話的色調のかなり濃やかな童話である。
然しその何れについても、まづ感じられる點は作者が全く童心の境地に浸つて、そこから直接幼い者に物語つてゐるとい
ふことである。それは豊かな情感を湛へた平明なる表現に伴はれて、此の童話を限なく親しくなつかしいものにし、やが
て少年たちの童心を快よく揺り覺して、これが象徴する内容をそのまゝその童心に泌みこませる源泉をなしてゐる。

而も一口に簡素平明といふその表現は、實は内へ内へと沈潜し、濾過され、醇化された珠玉の結晶で、事もなげな一語
一語に汲めども盡きぬ詩趣が溢れてゐる。機智も警拔も絢爛さもなく、此の點夏目漱石の文と好個の對照をなすものであ
るが、その素直な淡々たる文章には、青玉の様な靜かな輝きが滲み出てをり、内に籠る韻律的な躍動は、散文の形こそし
てゐるが明に一篇の詩を思はせる。詩人の靈筆といふ言葉は藤村の場合文字通り當てはまるのではなからうか。
靜かに愛讀翫味して少年達の養の糧とすべき上乘の童話と言ふべきであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一)中學生生活に入つてまだ間のない生徒ではあるが、併し彼等の童心は日々失はれんとしつゝある。此の時期にあ
る生徒達の境位にかやうな童話の持つ幼なさは、既にある隔を持つてをり、而も活動的で外向的な彼等の心は、深く内へ

潜まりゆく藤村の文の持味は事實呑みこみ難いのである。此の障壁を超えて本課の持つ高雅な藝術的香氣に浸らせるといふことは相當困難なことで、指導上の工夫も一にここに繋げられねばならない。

(二) 彼等の童心を揺り覺して、その雰圍氣の中に身も心も浸らしめることが先づ第一の工夫である。本課には語句にも文法にも説明解釋を要する部分は殆んどない。心を潜めて熟讀翫味させ、その間暗示的な説明などを加へることに依つて教室全體に童話的な雰圍氣を盛り上げて行くやうにし、そこから更に讀みを深めて藤村の持味などを味到せしめて行くやうな指導を進めたい。

(三) 既に主眼の條で觸れたやうに、その話の象徴する生命力にしても自然の靈妙な攝理にしても、それは理解の深度に従つて深まり擴がる豊かな内容を持つものであつて、生徒はそれぞれの讀力の程度によつて淺深さまざまな理解に到達するであらう。これを整理統一し、且多少の説明を與へて輔導しつゝ、出來得る限りその理解を深めたい。唯指導者の説明が理窟に墮ちて理論の上からこれを生徒に押しつけて行くといふ風になつたなら、言ふまでもなくこれは大きな失敗である。飽まで文に即して情感的に生徒の實感に訴へて行くやうな指導でありたい。

2 参考

一、諸家の藤村批評二三を次に掲げる。

【高須芳次郎氏評】

小説家としての藤村を最もよく知つたのは中深臨川であらう。臨川は藤村を評して、日本のツルゲネフだとした。それは詩人たると同時にリアリストたる事、平明に人生を實寫して眞を掘むと共に、その一部を感情で補つて行く事などが、ツルゲネフと共通してゐるからである。藤村は想よりも文に長じた人であるのを、彼自らも知つて、徹底的に人生の研究乃至從軍記者として押通さうとした。そして或程度までその目的を達した。彼が「藝術家となる前に人たれ」といひ、すぐれた文學は、生その儘に物を見得るといふ時に生れ

たものであることを忘れてはならぬ。」といつたのは、その邊の用意に疎かになかつたことを明らかにしてゐる。……要するに藤村は優れた技巧家で、印象派的自然主義者の代表者である。(現代文學十二講)

【坪田讓治氏評】

藤村童話を含むところの味が深く一二の引例では満足出來ないが、結局のところ彼が作品で示すものは「學べ」といふ事である。生活から自然から。でこの態度は兒童の知性に對して呼びかけてゐるとみることが出來ないか。彼は兒童を知性の未發達なるものとしていたはり眺めてゐる。また一方では、このイソップに比すべき作品は高級な處世訓とも見る事が出来る。そこに子供をこの世の生活の中に置いて眺める彼を見る。またこゝに彼の幼年時代と、その頃の子供文化をうかがふことが出来る。つまり彼が多くの處世訓を聞いたであらうと想像するのである。それは童話作家の作品に、どんな姿でか、作者の幼年時代の影のささいなことが窺だからである。

(班馬鳴く)

七 皇軍の精神

東郷平八郎

一 解題

1 作者

東郷平八郎 トウガウヘイハチラウ 弘化四年(二五〇七)十二月、鹿兒島城下(現鹿兒島市加治屋町)に薩摩藩士、東郷吉左衛門の三男として生れた。初名仲五郎、元服して平八郎實良と改めた。文久三年英艦の鹿兒島砲撃に際し、十七歳にして初陣、ついで藩選により航海操艦術を學び、戊申の役には春日艦に乗り組み、北越警備に従ひ、宮古灣及び函館の戦に參じた。明治四年英國留學を命ぜられ、十一年軍艦比叡を回航して歸朝し、海軍中尉に任ぜられた。爾來果進して大佐となり、明治二十七八年戦役には浪速艦長として、第一遊撃隊の先鋒となり、豊島沖・黄海・旅順・威海衛に轉戦して勇名を轟かし、二十八年戦役中少將に進んだ。ついで常備艦隊司令長官に補せられ、澎湖島の占領及び臺灣征討に従ひ勲功により功四級を賜つた。三十一年中將に昇進、翌年佐世保鎮守府司令長官に任補、三十三年北清事變には常備艦隊司令長官として活躍した。三十六年聯合艦隊司令長官の大命を拜し、翌年大將に任じ、日露戦争の勃發するや先づ露國東洋艦隊を旅順に封鎖して、日本海の制海權を確保し、三十八年五月には露國バルチック艦隊を對島海峽に邀撃し、世界海戦史上空前の大勝を博し、彼をして再起する能はさらしめた。戦後大勲位功一級を賜ひ、ついで伯爵を授けられた。軍令部長・軍事參議官に歴補し、四十四年には東伏見宮殿下に供奉して渡英した。大正二年元帥府に列し、翌年東宮御學問所總裁を仰付けられ、以來七年聖上陛下の御輔導に盡し奉つた。昭和九年五月歿。享年八十八。歿年候爵を授けられ、特に國葬を賜つた。

元帥 ゲンスキ 軍人最高の稱號。陸海軍人の中で、特に閥歴・名望ある者に賜ひ、天皇の軍事上の最高顧問府たる元帥府に列せしめられる。元帥刀を賜ひ元帥徽章を上衣右乳下につける。

2 出典

愛國讀本。編者小笠原長生氏が明治三十八年以來、機に觸れ事に當つて東郷元帥より受けた教訓懇諭、或は消閑の雑話を収録し、これにその述べられた年月場合等の解説を施したものである。本課は大正十四年日本海戦二十年記念日に當り、財部海相より元帥にラジオ放送の懇請のあつた時、代つて放送せしむる爲に編者小笠原長生氏に口授した感想である。

3 主眼及び採擇の趣旨

(編者略傳は次課參照)

日本海海戦は、實に我が國運を賭しての一戦であつた。この一戦に於ける海戦史上曠古の大捷は、つまり軍艦の存在を限度とする露國軍人の單なる任務感に對して、忠烈比なき皇軍精神の勝利であつた。加ふるに背後にあつた一般國民の熱誠燃ゆるが如き義勇奉公の大精神の活現も勝利の一因であつたと東郷元帥は述懐せられてゐる。生命を君國に捧げて國難に殉じ、その本分を完うせんとするものこそ、我皇軍の精神であり、銃後國民の奉公の精神と共に、これこそ我が國民精神そのものである。實に一旦緩急に際して燃え上る和衷協力・一死報國のこの大精神こそ、よく過去數次にわたり國難を征服したのみならず、將來永遠に我が君國を護り、國體に光輝を添へるべきものである。今日日本海海戦記念日も間のない時、身を以つて國難に處した元帥の文章に接して、一は日本海海戦の歴史的意義を省察し、皇軍精神の本質を究め、國民精神の涵養に資すると共に、併せて偉人東郷元帥の文章を反覆玩味して、その風貌を髣髴せしめ、その偉大な人格の光に浴せしめたい。これを要するに、改正要目「國體ノ精華國民ノ美風偉人ノ言行等ヲ敘シテ國民精神ヲ涵養スルニ足ル」ところの教材として此に採擇したのである。

二 解 釋

1 語 釋

【皇軍】 クワウグン 天皇の軍勢、即ち日本軍隊。天皇は大元帥として陸海軍を統帥し給ふ。故に皇軍といふ。

(次項大元帥参照)

【精神】 セイシン 個體及び集團の意識内容の總稱である。普通國語に用ひられる時は心・氣力・氣性などの意。

【大元帥陛下】 ダイゲンスキヘイカ 陸海軍を總帥せられる元首であらせ給ふ天皇陛下。

明治十五年一月軍隊に賜つた詔に「兵馬ノ大權ハ朕ガ統
ブル所ナレバ、ソノ司ヲコソ臣下ニ任スナレ、ソノ大
綱ハ朕親ラ之ヲ攬リテ肯テ臣下ニ委ヌベキモノニアラズ
一 中略一朕ハ汝等軍人ノ大元帥ナルゾ。」とあり、我が天
皇陛下は元帥府を軍事上最高顧問府とし、軍事參議院を
おき兵馬の大權を統帥せられる。統帥の大權は常にこれ
を國務上の大權と區別し、國務大臣の輔弼を待つもので
はないが、その範圍は普通軍を指揮しその戰鬥力を發揚
するに存する。 陛下 天皇・皇后・皇太后の尊稱。

【御稜威】 ミイヅ 稜威とも書く。天子の御威光。「御」は
敬稱。稜威(イツ)はもと神の威光にいつたものであるが、

轉じて天子の威光にいふ。(一明治天皇御製三頁既出)

【將卒】 シヤウソツ 將校兵卒。將校は陸海軍少尉以上。

【國を擧り】 クニをコゾリ 國をあげて。「國」はここでは
國民の意に用ひられてゐる。「擧る」は悉く集る。悉く揃
へる。即ち國民全體の意。

【海戰史】 カイセンシ 海戰の歴史。

【空前】 クウゼン これまでに未だないこと。宣和畫譜に
「願空ニ於前ニ張絶ニ於後ニ而道子乃兼ニ有之」とあり、よく
空前絶後(前になく後にもないこと)と熟して用ひられる

【大捷】 タイセフ 大勝利。「勝」と「捷」の區別「勝は負
の對語で一般に廣く用ひられ、捷は軍に勝つるの意。

【日本海海戰】 ニッポンカイカイセン 日本海海戰第四公
報に「五月二十七日午後より翌二十八日に互り、沖の島
附近より鬱陵島附近までの海戰を日本海海戰と呼稱す」と
ある。ロジエストウエンスキー提督の率ゐる三十八隻
の露國バルチック艦隊は遠くアフリカの南端を經、印度
洋を回航して、ウラヂオストツクの根據地に入り、以つ
て日本海の制海權を奪還して、大陸奮戰中の皇軍の後路

を斷ち、海陸呼應して一舉に勝を制せんと企てた。苦心
慘憺術策を練り、對島海峡に之を邀激した東郷大將の率
ゐる我が聯合艦隊は、二十七日午後より、翌二十八日に
互る二日間の大激戰の後、之を殲滅し、撃沈二十隻、捕
獲六隻、無事遁航せるもの僅かに五隻といふ史上空前の
大捷を博したのであつた。戰の將にひらかれんとするに
當り、旗艦三笠に掲げられた「皇國の興廢此一戰にあり」
の信號は天下熟知のものであるが、實に此の一舉にして
露國は全く戰意を失ひ、講和の運びとなつたのである。

【歴々】 レキレキ (一)一々分明なる貌。李白詩「分明楚
漢事、歴々王霸道」(二)行列する様。古樂府「天上何所
有、歴々種白榆」こゝは(一)の意。

【追憶する】 ツキオクする 過ぎ去つた事を思ふ。

【當年激戰の狀、歴々として今なほ目前に見る心地が致しま
す】

國家興廢の責を一身に擔ひ、萬死を期して難局に對處し
た東郷元帥の追憶として讀み行く時、其處に無限の感慨
がこめられてゐる事を感じ「歴々として今なほ目の前に
見る」といふ言葉がそのまゝはつきりと頷かれる。

【寧ろ強兵と言ひ得る】
實戰に参加し、目のあたりその奮戰活躍の狀を目撃した
東郷元帥の言葉である。確かに露國軍人は強兵であつた

強者が弱者に勝つは常理であつて、何の不思議はない。
然るに日本海海戰は、寧ろ弱者と見做されてゐた皇軍が
強兵を破つたのだ。そこに理由がなければならぬ。か
く考へ至る時、次の中心たる一節が生きて來る。

【連敗】 レンバイ 戰ふ毎に次々に敗れる。受けつゞける。
【惟ふに】 オモふ 文の發端に用ふる語。「オモフ」と訓ず
る多くの漢字の相違を略述する。思(一)思案する(再
思・慎思)(二)慕ひ思ふ(思慕・相思) 一般に廣く用ひ
られる。惟(一)一筋に思ふ。文の途中に用ひられる事は稀
である。憶(一)過去を思ふ(追憶・憶昔) 意(一)かくならんと
疑ひ思ふ意。念(一)いつも念頭に掛けて忘れずと思ふの意。
想(一)想像する意。願(一)心にふり返つて思ふ(回顧)

【戰爭なるものを、軍隊若しくは軍艦としての任務だと信
じてゐる】

更に言へば責任の限界を「軍隊若しくは軍艦の存在を限
度とし、それ以上の個人的奮闘の精神は持たない」のであ
る。これを皇國軍人が、戰は飽まで君の爲、國の爲、正
義の爲であるとの確信をもつて、最後の一人となるまで
盡忠の大義に殉じて自分を完うする事と比較検討するや
うにしたい。そこに大捷の大原因が自ら分明になり、皇
軍の精神の本質もその貴さも認識し得るのである。

【思惟】 シイ (一)考へ思ふこと。思量判斷すること。

【(一)哲學上では "thinking" の譯。經驗によつて學んだ事實を比較して、その關係を定め、これに基いて未だ經驗せぬ境涯に至らうとする精神作用で、その中に概念・判斷・推理の三作用を含む。ここは(一)の意。

【假令】 タトヒ タト(副詞)

【苟も】 イヤシクも (一)かりそめにも。かりにも。(二)若しも。萬一にも。こゝは(一)の意。

【敢然】 カンゼン 思ひきりよくしつかりする貌。

【盡忠】 ジンチュウ 忠義を盡す。

【大義】 人倫の重大なる義理。君國に對する臣民のなすべき道。

【殉す】 或事に従ひ命を捨てる。

【以て】 モツて それによつて(接續詞)「苟も一人たりとも生存してをる間は、敢然として盡忠の大義に殉じ」をうけ「かくする事を以て」である。

【本分】 ホンブン (一)その人の本來の分限。(二)その人の盡すべき義務。ここは(二)の意。

【完うす】 マツタうす 「マツタクす」のウ音便。完全に果す意。

【一隊一艦としてのみでなく、假令一兵となつても、苟も一人たりとも生存してをる間は、敢然として盡忠の大義に殉じ、以て本分を完うしようとする覺悟は、鐵石よりも堅い

【(一)】 哲學上では "thinking" の譯。經驗によつて學んだ事實を比較して、その關係を定め、これに基いて未だ經驗せぬ境涯に至らうとする精神作用で、その中に概念・判斷・推理の三作用を含む。ここは(一)の意。

【假令】 タトヒ タト(副詞)

【苟も】 イヤシクも (一)かりそめにも。かりにも。(二)若しも。萬一にも。こゝは(一)の意。

【敢然】 カンゼン 思ひきりよくしつかりする貌。

【盡忠】 ジンチュウ 忠義を盡す。

【大義】 人倫の重大なる義理。君國に對する臣民のなすべき道。

【殉す】 或事に従ひ命を捨てる。

【以て】 モツて それによつて(接續詞)「苟も一人たりとも生存してをる間は、敢然として盡忠の大義に殉じ」をうけ「かくする事を以て」である。

【本分】 ホンブン (一)その人の本來の分限。(二)その人の盡すべき義務。ここは(二)の意。

【完うす】 マツタうす 「マツタクす」のウ音便。完全に果す意。

【至誠】 シンセイ 此上もないまごころ。中庸「唯天下至誠

爲能盡其性」

【一貫す】 イツクワンす ひとすちにつらぬく事。一理をもつて萬事をつらぬくこと。

【何時如何なる場合に於ても、唯々至誠を以て一貫すべきのみで、他を顧みる必要は更にあるまいと思ひます】

「至誠一貫」至誠努力」などの元帥の書幅扁額はよく我々の眼にする所である。誠に元帥の武勳赫々たる生涯は至誠を以て貫かれたものであつた。露艦が浦艦に向ふ進路の朝鮮海峡なることを推斷して疑はなかつた確固不動の信念も、敢然として敵前回轉を行ひ死中に活を得た大英斷も、要は至誠一貫他を顧みざる元帥にして始めて爲し得た事である。至誠一貫の語も元帥の口から語られる時愈々不滅の眞理として輝く思ひがする。そして大將のこの貴い人格にふれて益々景慕の情を深うするものである。

【軍艦旗】 ダンカンキ 陸軍の歩兵・騎兵の聯隊旗に相當する軍艦旗章。軍艦の進水と共に天皇親しく軍艦旗を艦長に授け勅語を下し給ふのである。軍艦旗はその軍艦及び艦員と生死を共にすべきものとされ、朝夕軍艦旗の揚げ卸しの場合には全艦最敬禮をなし、嚴肅な儀式が行はれる。もと陸軍と同じく日章旗を用ひたが、明治二十三

年今の日章旗に光線を添書することに定められた。(小學國語讀本卷九第八軍艦生活の朝参照)

【光輝】 クワウキ (一)ひかり。輝き。(二)名譽。勢威。

ここは(一)の意。

【保障】 ホシヤウ (一)保護して安全にすること。(二)小城・とりで。(三)租税を軽減して安民をはかる政。こゝは(一)の意。

【僚友】 レウイウ 同役の友。同僚。僚輩などと同じ。

【顔がある】 カンバセがある。「カンバセ」は「カホバセ」の音便。面目が立つ。人と顔を會せる事が出来る。

【義勇奉公】 ギユウホウコウ 一身を犠牲にして君國の爲に盡すこと。義勇は(一)正義心より發露した勇氣。(二)忠義と勇氣。(三)君國の爲に一身を犠牲にすること。こゝは(三)の意。奉公は君の爲に心力をつくすこと。後漢書祭遵傳「憂國奉公」

【活現】 クワツゲン はたらかし現す。

【當時國民諸君が、義勇奉公の大精神を活現して、燃えるが如き熱誠を示された一事】

背後國民の後援が、敵前にあつて日々砲煙彈雨の危険に曝されてゐる將兵にとつて如何に心強いものであるか、

2 文の構成

それは今親しく身をもつて經驗された元帥の述懐によつて愈々明確に認識されねばならない。「回顧しまして」と言ふ言葉の中には、元帥の無限の感慨が含まれてゐる事を感じる。事實日清・日露の兩役は言ふに及ばず、古くは元弘・弘安の役に遡り、近くは滿洲事變を顧みても、一旦緩急の時に際しては、所謂我が銃後國民が愛國奉公の大精神を活現し、和衷協力以て背後の護を固めたその熱烈なる至誠は、將兵の忠勇義烈と相俟つて、常にその難局を克服して、金匱無缺の國體をして愈々光輝あらしめた事に思ひ及ぼさせたい。そして第二國民たる少年等の反省に訴へ、その覺悟を新にせしめねばならない。

【回顧】 クワイコ (一)ふりかへり見る。(二)ふりかへり思ふ。ここは(二)の意。

【澎湃として漲る】 ハウハイとしてミナギる 水のさかまき漲るやうに「此の大精神」が國民の間に滿ち溢れる。

澎湃は(一)水波相うつ。(二)水のさかまき漲るさま。こゝは(二)の意。

【確信】 カクシン (一)堅く信じて疑はないこと。(二)堅固な信念。こゝは(二)の意。

第一節 初―三九頁七行 日本海大海戦を回顧し、寧ろ強兵と言ひ得る露軍を撃破した理由について疑問を發し次節の前提となる。

第二節 三九頁八行―四〇頁一〇行 日露兩國の軍人精神の根本的相違を説き、大海戦の勝因が皇軍精神によるものなる事を明にする。

第三節 四〇頁一一行―四一頁三行 日本海海戦に戦死した英靈を偲ぶ。

第四節 四一頁四行―終 常住至誠一貫をもつて皇國精神を作興すべきを述べ、日露戦役當時の國民の赤誠を回顧して將來における國民の奮起を促す。

3 文意

日本海海戦の回顧に文を起し、この海戦の勝因が日露軍人の精神の根本的相違に基づくことを論斷して、以て皇軍精神の本質を明にし、更にこの大精神をもつて戦死した英靈をしのんでゐる。かくて國民當爲の大道に説き及び、日露戦役當時の國民の熱誠を回顧して、將來國民の益々義勇奉公の大精神を活現すべく奮起を促して文を結んでゐる。

4 鑑賞批評

赫々たる武勳に輝き身は元帥として武官の極位にありながら、言々句々を通して感ぜられる謙讓にして恭敬なる風貌は誠にゆかしさの極である。日露戦役大捷の眞因について語る所、寧ろ坦々として平板にすら思はれるその言辭が、不世出の偉人の人格と高い識見とを滲透し來る時、それは燦然として輝き我々をして皇軍の大精神に對する新なる認識を深めずにはおかない。例へば既に言及した如く至誠一貫の語の如きも、元帥の口にする時、更に不滅の眞理に輝くの思ひがする國民が一致協力皇軍の大精神を體し、一貫の至誠を全うする時、日本精神は澎湃として漲り、國運の伸張は期して待つべきであらう。因みに「愛國讀本」小笠原長生伯自序の一節を掲げて、鑑賞批評の資に供したい。

「本書中収録したのも、雄辯とか流暢とか評すべき種類のものではなく、寧ろ平易に過ぐる感さへ起るが、一度元帥の口より吐かれたことに想到する時、言々句々燦然として光輝を放ち、文字滅して其處に生身の聖將を仰視し得るであらう。」

三 備 考

1 指導研究

(一) 東郷元帥の赫々たる武勳と偉大なる人格とは日本少國民崇拜的であり憧憬のシンボルであつた。加ふるに元帥の温情は慈父の温容を以て少國民の心に應へた。日本の東郷元帥は同時に少年達の東郷元帥であつたと言ふも過言ではなからう。誠に近代に於ける英雄偉人の中、元帥程少年達に欽慕景仰された人はない。従つて少年達は元帥についてはその生ひ立から初めて、あらゆる逸話も武勳もすべて知り盡し、殊に元帥の勇名を全世界に普く知らしめた日本海海戦談の如きは、彼等の得意中の得意とする所であらう。これ等の生徒の既有知識は本課取扱の上に重要な背景をなすものであるから準備として一應これを整理してかゝるべきである。

(二) 「一人たりとも生存してゐる間は、敢然として盡忠の大義に殉じ、本分を完うしようとする」皇軍の精神は、即ち銃後にあつて燃えるが如き熱誠を以て前線將兵を後援する國民精神に共通なるものであり、今これを日本精神と呼ぶ。生徒をして身を以てこの大精神を體認せしめ、愈々その精神を確固不動のものたらしむる事を本課取扱の主眼とすべきは前述の通りであるが、唯これを元帥の言葉としてさながらに生徒の腦裡に涵みこませて行くといふ態度であらねばならない。貴い體驗を通し、確固たる信念に立つて語る元帥の言々句々が、その輝ける武勳と偉大な人格を背景にして、絶對不滅の眞理として生徒の腦裡に涵みこんでゆく—そこまで忠實な讀みを實行させたいのである。教授者側よりする附説解明は、時に生徒の實感を稀薄ならしめ、その理解を概念的なものにする恐があるので、その案配には相當苦心が拂はるべきであらう。

(三) 言々句々を通して窺はれる元帥の床しい人格に絶えず注意を拂はせる事も怠つてはならない。英雄崇拜がともすれば他律的な皮相な觀念に終るのは、唯功績とか名聲とかの華々しさに眩惑されて、人としての英雄の偉大さが顧みられなからである。東郷元帥は人としても第一等の位置に立つべき人であることは、本課の如きを通して直接感得し得られる所である。眞に「大和ものゝふ」らしい床しい人となりを生徒に悟らしめる事によつて、彼等の景慕の念を更に深めて、且はまた自己の人生的教養の糧ともせしめるべきである。

2 参 考

(一) 本課の文の後に編者は次のやうな註釋を加へてゐる。當時の事情を窺ひ得ると思ふから、次にこれを掲げる。
大正十四年は日本海軍があつてより丁度二十年に相當するので、その記念日たる五月二十七日にラヂオに依つて追懷の一端を放送せられたいと、同月初旬海軍大臣財部大將より元帥に懇請があつた。併し元帥は慣れぬことでもあり、加之先頃來少しく風邪の氣味なれば、と固辭せられたので、重ねて同大臣より然らば誰かに感想を口授せられ代つて放送せしめられたいと交渉があつた。仍て元帥は副官太田泰治大尉を編者方へ遣され、代つて放送されたしとの懇の依頼があつたので、編者は直に元帥邸に赴いて面會の上、「放送は承知致しましたから、御感想を御口授下さい。それを筆記して持参し放送致しませう。」と返答して鉛筆を取上げて紙に向つた。もし元帥にして、それを拒まれたなら、此方も代理を謝絶しようと思つてゐた。すると元帥はそれを覺られたもの如くやや困却の體であつたが、つひに我を折つて暫時黙考の末、「此方の考は貴方が充分承知してをらるゝ筈で、別段改めていふ程の事もないぢや……唯思つた事をそのまま言ふからよろしく續つて下さい。」
と斷つて、それからポツリポツリと感想を漏された。編者は一語も聽漏すまいと熱心にそれを筆記し、元帥の承認を経て當日放送した

のが此の一事(本科の一文のこと)である。

(二) 小笠原長生著「撃滅」の中から左の一文を抄出掲載する。日本海海戦に臨んだ東郷元帥の信念を窺ふに足るものである。

「本國より新來の敵艦隊に對しては、誓つてこれを撃滅して宸襟を安んじ奉ります。」

御下間に對し、聯合艦隊司令長官東郷海軍大將は、かう奉答して肅然となつた。列席してゐた山本海軍大臣・伊東海軍々令部長は、その餘りに斷定的な奉答振りに、思はず大將の顔を見詰めたといふことだ。さればたとへ自信があるにせよ、一些事なりとも苟くもしない大將が、かうした思ひ切つた奉答をなすには、勿論それだけの覺悟がなくてはならない。そこで色々揣摩臆測を逞しうする者が出來て、終にかういふ噂が傳へられた。その節隨伴して覺悟の程を訊ねた所、大將は慨然として、「報慮に懸けさせ給ふ聖顔を拜しては、あゝ奉答するよりないではないか。」と答へたとの事だ。成程、聖顔を拜して大將が「層決心の胸を固めたには相違なからうが、如何なる場合たりとも、自信もないやうな事を輕々しく奉答するが如きは、大將の斷じてなさざる所で、大地を打つ礎は脱るゝとも、敵に對する勝算は、やはか違ふまい、との大信念の下に奉答されたものと私は確認する。されば敵艦隊撃滅の事態こそ、日本海において顯現したれ、我が全勝の運勢は、既にこの御前における奉答中に嚴存し、神機もまた冥々の裏に活躍してゐたのである。

何時の時代の、何處の戦役に於ても、苟且にも一方の指揮官たる者で、勝たなくてもよかつた者は一人もない筈だ。が、今度新たに露艦隊を遂撃する我が司令長官ほど責任の重い場合は滅多にあるまい。五分五分の勝負は勿論、七分三分の勝を得たとしてもまだ責任を盡した事にはならないのだ。當時、浦潮にゐた僅かの露艦の爲にすら、散々苦い經驗をなめさせられたではないか。まして新來の敵艦が浦潮に入つたとしたら、朝鮮海峡は絶えずその脅威を受けて、滿洲に屯する我が軍隊は後方連絡の安定を得ざるのみならず、露國はまた決して媾和を申出はしなかつたらう。さうから觀察してくると、司令長官即全勝者たらねばならないのだから、東郷大將の奉答は、當然すぎる程當然なものとなつて來るのである。今一つ大將の確信を裏書する有力な證據がある。それは開戦の當日哨艦から敵艦出現の報に接した際、大將は大本營に「直ちに出勤これを撃滅せんとす。」と電報した事なので、全勝の自信がなくして、端的に撃滅な

どと言切れるものではない。これに徴しても大將の覺悟は明々白々で、その偉大さは、むしろここに存すると思はれる。

しからば大將はどうしてそれ程までの自信を得られたのであらう。先づ御稜威と臣民の忠誠とに由り生ずる天祐神助を確信せられた事である。我々のやうな凡庸を以て淺くこれを見ると、何だか迷信臭くも思はれるが、大將の天祐神助に對する觀念は、決してそんなものではない。國家としても、個人としても、至誠によつて磨きだされた正義の光は、必ず神界の明鏡に映じ、その反射が天祐となり神助となつて人界に下る。といふのが、大將の信仰基調であるやうだ。されば「天は正義に與し、神は至誠に感ず。」の信條を眞向に振りかざして、向ふ所、金剛・鐵山は物かは、拮抗し得る何物もないのである。

補材

をのこやも空しかるべきよろづ世に語りつぐべき名は立てずして

萬葉集・卷六に「山ト臣憶良沈痾之時歌一首」の題で載せられてゐる歌である。これには次の傍註が施されてゐるのでこれによつて吟詠された時の事情を窺ふことが出来る。

右一首・山上憶良臣痾之時、藤原朝臣八束、使河邊朝臣東人、令問三所疾之狀。於是憶良臣報語已畢、有須拭涕、悲歎口吟此歌。

【をのこやも】 男子たるものが。「をのこ」は「男の子」の意。即ち男子(一・明治天皇御製・一頁既出)「や」は反語の助詞。「も」は感動の助詞。

【空しかるべき】 空しく朽ち果ててならうか。空し」はこ

一首の意は「男子たるものが萬代に互つて語り傳へられるやうな名も立てないで空しく死んでならうか、空しく死んではならない。」と言ふのである。

こでは無益である。かひがないの意。「べき」は當然の助動詞。

【よろづ世に】 萬代に互つて。萬世の後までも。

「をのこやも空しかるべき」と初めから強く主観を打出して、此處に全心の涙りを見せてゐる。重態の病に抗する憶良の悲壯な叫びであり、その昂奮は「萬世に」とまで高潮して行つた。然し結局は病中即吟である。「名はたてずして」と歌つた彼にはふと身が顧みられて氣も、心も一時に碎け、それが「名は立てずして」の結句に吐息を聞くやうなりズムとなつて現れてゐる。一首をつらぬく調には、内容の強さとは異つた哀切なものがある。その點がつまり、この男子の覺悟といふ概念的なものを憶良のものとしたので、此の歌はそのしらべによつて支持されてゐるとも言へるのであるが併し氣概に満ちた内容の強さ雄々しさは、大和もののふの意氣を示したものである。本課の補材としては、作者が病中に於てよんだ哀痛の歌として説明を加へず、一般的に男子たるものの覺悟を示した雄壯なる歌として、取扱つて頂き度い。さうした扱ひ方が「皇軍の精神」の後の補材としては望ましい。一般の解釋としては、歌の製作された際の境地よりして作者の心をくんだ解釋を施すべきであるが、こゝは漢語の「斷章取意」的な扱方を希望する。

【山上憶良】 ヤマノヘノオクラ 藤原時代から奈良朝へかけての歌人。齊明天皇六年に生れたが壯年時代の事は傳はつてゐない。文武天皇大寶元年正月、四十二歳の時はじめて遣唐小録に任ぜられ、遣唐大使粟田真人に隨行して入唐し、三年半程を経て、慶運元年七月歸朝した。その後元正天皇靈龜二年伯耆守となり、養老五年には東宮の侍候となつた。晩年大伴旅人の下官として筑前守となり

僻鄙の地に居ること數年、この間妻子を失ひ、哀切の情を詠んだ歌が多く、萬葉集卷五の一卷として傳つてゐる。聖武天皇天平五年六月歿。享年七十四。柿本人麿・山部赤人と共に三歌聖と稱されてゐるが、その歌才は人麿に次ぎ、赤人よりは寧ろ上にありと言はれてゐる歌人である。

八 肉彈三勇士

小笠原長生

一 解 題

1 作者

小笠原長生 ヲガサハラナガナリ 慶應三年十一月、肥前唐津（今の佐賀縣唐津市）に生れた。幼名を賢之進又は捨丸と稱し、唐津藩主（封邑六萬石）小笠原長國の嫡孫に當り、明治六年、先代長國の家督を相続し、十七年子爵を授けられた。二十年海軍兵學校を卒へ、少尉候補生となり、日清戦役には軍艦高千穂に乘組み、黄海の戦に參じ、日露戦役には大本營幕僚として活躍するなど幾多勳功を残し、戦後は軍令部出仕、東宮御學問所幹事、宮内省御用掛、學習院御用掛等に歴任し、大正七年海軍中將に至つて豫備役を仰付けられた。現に宮中顧問官である。

文筆に長じ、鳳翼・鐵櫻或は金波樓主人等の號で筆陣を張り、多くの著述をなしてゐる。「日本海戦史」「東郷元帥詳傳」「海戦日録」「海運史録」「海上権力史」「撃滅」「大海戦秘史」「鐵櫻漫筆」等はその主なるもので、就中「日本海戦史」は有名である。

2 出典

忠烈爆彈三勇士（昭和七年版）より採つた。東郷元帥の「忠烈泣鬼神」の題字を巻頭に、三烈士に關する多くの寫眞を掲げ、又當時三烈士の直接上長たる内田・馬田兩氏の手記等を掲げて、三勇士の忠烈を讃へたものである。本課はその中「忠烈爆彈三勇士」の四、「爆彈三烈士」の章の一節を採録したものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

君國のため身を鴻毛の輕きに比し、爆破筒を抱き敢然として敵壘に突入し、壯烈無比、花と散つた三勇士こそ皇軍の龜鑑であり、大和魂の精華である。凡そ日本人にして、この壯烈無比の盡忠奉公の犠牲的行動を耳にして、感奮興起しない者があるであらうか。これぞ誠に皇軍の大精神、否萬邦無比なる日本精神そのものの具現であり、我々は長くその忠烈を讃へその犠牲に對して深甚の感謝と尊敬とを捧げねばならない。

前課東郷元帥の「皇軍の精神」においてその本質を究めた。續いて此處に身を以てこれを具現した具體的教材を採擇し、以て一層深く生徒をして皇軍の大精神の本質に徹し、更に國民精神の涵養に資せんとしたのである。

二 解釋

1 語釋

【事件に至る經過】

滿洲事變の發展に伴ひ、支那各地、特に上海方面に於ける排日行動の激化は、日支人間の敵愾心を高めつゝあつた折柄、昭和七年一月十八日、日本人日蓮宗僧侶及び信徒數名は租界通行中暴行に遭ひ、且二十八日朝更に抗日會員と覺しき者が日本領事館を襲撃し、遂に日支衝突を不可避ならしめた。而も我が要求に對する上海市長吳鐵城の回答には全く誠意なく、かくて列國の上海駐屯軍は豫ねての協同防備計畫に基いて配備につき、我が陸戰隊も亦その擔任區域なる北四川路に於て二十九日午前零時

から配備に就かんとした。此の時突如支那正規軍第七十八師は、我が陸戰隊に發砲挑戰し來り、我が軍は已むなくこれに應戰、ここに上海事件なるものが勃發した。かくて我が陸軍も亦出動、次第に支那軍を西北方に壓迫した。二月二十二日午前五時を期して廟行鎮の敵陣地に總攻撃を加へ、これが奪取を決した下元混成旅團は、左翼方面に森田大隊を、中央主攻方面に碓大隊を配備し、二十一日午前十一時、松下工兵中隊長に對して歩兵攻撃路開設を命じた。命をうけた松下中隊長は同日午後五時、麥家宅に部下の第一小隊長大島少尉、第二小隊長東島少尉を集めて、左の如き要旨の命令を下した。

一、本隊はその主力を以て碓大隊正面敵陣地に突撃路を開かんとす

一、第一小隊は森田大隊正面の鐵條網を爆破し、突撃路三條を開くべし

一、第二小隊は碓大隊正面の鐵條網に突撃路五條を開くべし

かくて各隊は部署について作業を開始したのであるが、第一小隊の方面では、その成功を告げる大爆音と共に、突撃に移つた喊聲が聞えたが、東島小隊の爆破作業は最も困難を極めた。本課はこの第二小隊内の事件である。

【肉弾】 ニクダン 肉體を以て彈丸にかはらせること。身を挺して敵に迫り彈丸の如く身を躍して敵地に闖入すること。

【決死の一隊】 ケツシのイツタイ 下元混成旅團の上海郊外廟行鎮攻撃に際して、歩兵突撃路を作る爲、久留米工兵大隊、東島〇隊では二ヶ小隊を以て決死的破壊工作を強行した。その時の決死隊で、三勇士はその第二班第一組であつた（編隊の詳細は参考欄参照）

【猛射】 マウシヤ 猛烈な射撃。

【はむむ】 阻む・沮む・難むなど書く。妨げ支へる意。他に通路を塞ぐ・勢を挫く等の意もある。

【強行破壊】 キヤウカウハクワイ 多少の犠牲を忍び、む

りやりに障礙物を破壊すること。

【鐵條網】 テツデウマウ 敵の前進を妨害する爲に陣地附近に設ける障礙物の一種。通常一・二〇米の杭を地上に數米の間隔に植立し、之に有刺鐵線を縦横に張つて構築する。更にこれに電流を通じてその效力を増大することもある。形式は屋根形・網形の二種に區別し、又折疊鐵條網と稱するものは運搬に便で、不意の用に供せられる。鐵條網破壊には砲撃・戰車の強行通過・破壊筒による爆破・鐵條鉄による截斷などの方法が用ひられる。

【敢行】 カンカウ 押し切つて行ふ。障礙を排して敢て行ふ。

【無念や】 ムネンヤ やは咏嘆の助詞。「あゝ残念なこと」など咏嘆的に解釋する。

【斃る】 タフる 倒れ死ぬ。

【悲壯】 ヒサウ あはれにも勇しいこと。悲哀の中に壯烈な氣味のあること。

【豫備】 ヨビ (一)豫め備へること。(二)軍隊で「豫備役」「豫備隊」の二意に用ひられる。(イ)「豫備役」は常備兵役の一、現役を終了した後に服するもの。下士・兵はその現役年月を通算して、陸軍は七年四ヶ月、海軍は七年。將校・准士官は兵科によつて別に定められた年限がある。(ロ)「豫備隊」は陸戰の際、後方に配備して、必要に應

じて前線の援助、兵力の補充等に充てる軍隊。いふまでもなくここはこの豫備隊のこと。

【悲憤】 ヒフン 悲しみ憤り意氣昂ること。後漢書、蔡琰傳「追懷悲憤作詩二章」

【眦を裂く】 マナジリをサク 裂眦(リツイ)の漢語の書下し。憤怒の爲かつと目を見開く貌。淮南子「荊柯西刺秦王、高漸離末意擊筑而歌于易水上。聞者莫不隕目裂眦」。「眦」は「眼のしり」の轉訛。目尻。

【第二班の勇士たちは、燃えあがる悲憤の念に、思はず眦を裂いて敵陣を睨んだ】

「親を討たれよ、子も討たれよ、死にぬれば乗り越え乗り越え戦ひ候(平家物語)」とは齋藤實盛が關東武士を評した言葉であるが、それはそのまゝ、皇軍の精神である。戦友の屍を越えて愈々憤激突進して朝敵を屈服せしめずば止まぬ意氣が、この悲憤の中に烈々として燃えてゐるのを覚える。これぞやがて三勇士の壯烈な行動となつて現れたのである。

【機關銃】 キクワンジュウ 各國軍隊で用ひる最も進歩した軍用銃の一。装薬より生ずる瓦斯の一部を利用して、一分間に六百發前後の彈丸を發射し得る能力を持つてゐる。重機關銃・輕機關銃の別があり、輕機關銃は歩兵一人で携帶操作し得る簡便なものである。近時飛行機にも

ぞ」と言ふ思慮に結びつき、更に「さうだ、破壊筒と一緒におれたちも爆發させれば間違ひないぞ」と言ふ悲壯な覺悟に到達する。實際、三勇士が所謂暴虎馮河の勇だけではなく、君に捧げた命を徒らにせず、二段にも三段にも成功の方法を熟慮してゐる所が、更にえらいではなからうか。

【險惡】 ケンアク (一)道路・人心・天候などのあらあらしくけはしいこと。(二)轉じて物事のやうすが甚だ危険な事。こゝは(二)の意。

【情況】 ジャウキヤウ 「狀況」とも書く。やうす。ありさま。

【破壊筒】 ハクワイトウ 鐵條網破壊筒には制式のものゝ急造のものゝ二種ある。三烈士の用ひたものは急造のもので、詳しくは「急造鐵條網破壊筒」と言ひ黄火薬を割竹で被包して、その上數箇所を鐵線で堅く結束し、前後兩端を木栓で閉鎖したもので、長さ四・五米に達する。制式の障礙物破壊筒は、直徑約五十糎の軟い鋼の圓筒で、長さ二米五十糎位のものゝ四箇つき合せて、丁度瓦斯管の恰好にし、その兩端に圓錐形の木栓を嵌めこんでゐる。而して後方の木栓に口火(導火索)を取付けてある。

點火装置には、電流を通ずる方法と、導火索による方法

裝備して缺くべからざる武器となつてゐる。

【凄慘】 セイサン もの凄くいたましい様。

【いやましに】 彌増しにと書く(副)いよいよ。ますます。いやが上に。

【瞬間】 シュンジュ またたく間。瞬間。

【壕】 ガウ 塹壕又は散歩壕の略。

【生還】 セイタワン 生命を全うして還る事。

【期す】 キス (一)期限とする。限る。定める。(二)豫期する。待ち設ける。(三)約束する。ちぎる。こゝは(二)の意。

【時々刻々】 ジジコクコク 時刻を追うて。次第次第に。

【切迫】 セツパク さしせまる。おしつまる。

【三烈士】 サンレツシ 頭註、作江伊之助・北川丞(すけ)・江下武二の三烈士。「烈士」は節義堅固の士。忠烈な士。(略傳參考欄参照)

【衝く】 ツク ものに突き當る義。「突」は突如などのやうにはかにつき當るの義。

【達成】 タツセイ 目的をなすとげる。成就する。此の場合「達」は「遂げる・つらぬく」の意。

【死は易い、されど果すべき任は重い。徒に死んでは不忠になる!】

作者の言葉はやがて「投げつけただけでは安心出来ない

とある。通常導火索を用ひるが、この場合點火してから幾秒後に爆發するかといふことは索の長さに左右されるのである。普通一米は約百秒で燃えるから、十秒間に十糎である。各兵が點火後に早駆で後退するために三十秒を要するとすれば、三十糎で足りるのである。そして平らな土地では六七十米は走れる割合になる。三勇士の場合には敵前二十米であつたから導火索の長さは極めて短く、點火して突入することその事が、すでに非常な危険であつた。

【烈士たちの間には、期せずして、かうした最後の決心が定められてゐた】

勿論強制ではない、又互に懇諭し合つたのでもない。一死報國の決意は豫期せずして三烈士共通であつたのである。「大君のへここそ死なめ」の精神は、皇軍共通の、否我が國民共通の精神であるといはねばならない。期せずしての語に注意すべきである。

【非常手段】 ヒジャウシュダダン 非常の場合に於ける臨機之處置。

【貫徹】 クワンテツ つらぬきとほす。やりとげる。

【壯絶凄絶】 サウゼツセイゼツ 此上なく壯であり、此上なく物凄くこと。「絶」は極頂の意。

【健氣】 ケナゲ 殊勝。神妙。かひがひしく勇ましい。

【爆裂】 バクレツ 爆發して破裂すること。
【必ず死ぬが、必ず成功するといふ悲壯極まる決心なのだ。鬼神もその壯烈に泣かう！】

「健氣な覺悟」の内容を更に説明したものである。成功はする。然し死ぬことは既定の事實にも等しい。而も君國の爲にはこれをしも敢然として決行するのだ。健氣といふは言ひたりない。莽猛の鬼神もその決心には感動し泣くであらうと結んだ所以である。敵膽はおろか全世界の人々の心膽を寒からしめたのも、蓋し宜なるかなである。

【重大任務の時】 重大任務敢行の時。

【欣然】 キンゼン よろこぶ様。いそ／＼として。喜んで。嬉しさに。

【生死を超越す】 セイシをテウエツス 生死などの觀念を一切乗り越え、これを念頭より放棄してしまふ。

【歡聲】 クワンセイ 歡びの聲。歡・觀・勸など文字の相違に注意。

【欣然としてすぐに突撃破壊の準備にかゝつた。生死を超越した三烈士は、晴れやかに歡聲をさへ揚げつゝ、四米の青竹で作つた破壊筒に、次の命令を待つまでもなく、すばやく點火した】

「晴れやかに歡聲をさへあげつゝ」次の命令を待つまで

もなく、すばやく點火する」行動の中に、如何にも「欣然」たる姿が偲ばれる。生死を超越し、念頭唯一死報國、赤誠に燃えて笑つて死地に飛びこむ三烈士の心中に泣かぬものがあらうか。

【堰を破る奔流】 セキをヤブるホンリユウ

「此の期を待ちに待つた」(四七頁五行)と相應する一句である。押上げて来る悲憤を抑へて待ちに待つてゐた氣持と共に、命令一下勇奮する三烈士の姿をまさまざと表現した巧妙な譬喩である。

「奔流」は急湍。早瀬。

【はた】 將 (一)も亦。(二)若しくは。ここは(二)の意。

【弦を離れた矢の如く】 發射された矢の如くまつしぐらに飛ぶに譬へる。三烈士の破壊筒を抱へて突進する姿を巧みに譬へてゐる。

【無二無三】 (一)唯一つのみあつて二つとないこと。法華經に「唯有二乘法、無二又無三」とあるより出た語。

(二)轉じて脇目もふらず唯一すちに振舞ふ義。ここは(二)の意。

【躊躇】 チウチヨ ためらふこと。決行にまよふこと。

【何の躊躇もあらばこそ】 少しのためらふところもなく。「あらばこそ」は「なし」といふのを強めた表現。「ばこそ」その上に来る動詞の強い否定をする。

【よしや】 「縦や」と書く。「よし」の強め。(一)さもあらばあれ。まゝよ。(二)たとへ。萬一。かりに。ここは(二)の意。
【三つの肉弾は、北川一等兵を先頭に一つの破壊筒となつて】

前に「身も心も一つになつた三つの肉弾」(四八頁五行)と言ひ、こゝに「一つの破壊筒になつて」といふ。實に今は自他の觀念の如きは微塵もなく、三つの魂は、唯目的貫徹の大きな犠牲的精神によつて一つとなり、而も生死を超越して突進する三人は、これ既に一個の破壊筒そのものであつた。一個の破壊筒となつて」の句は玩味すべき一句である。

【幕進】 バクシン まつしぐらに進む。眞一文字に進む。

【猛虎】 マウコ 猛々しい虎。唐書兵志「猛虎所以百獸畏一者、爪牙也。」

【刹那】 セツナ 梵語 Kṣana の音譯。須臾と意譯する。極めて短い時間。一彈指の間を言ふ。「劫」の對語。具舍論「時之極少名刹那。時之極長爲劫」

【が、敵前に至り、北川 等兵は小銃弾にやられて、ばつたり倒れ、二勇士も同時につまづいた。しまつた。」と思つた刹那、三人は忽ち起き上り】

緊張急迫し、氣分をよく把へて、息もつがせぬ敘述である。小銃弾にやられてばつたりと倒れ」は讀者をあつと

失望落膽させるが、併し「しまつたと思つた刹那忽ち起上つて」で再び起上る三勇士の悲壯な活動が眼前に髣髴し、俄に目頭が熱くなり、感激の涙でその後の文字を貪りよましめる。

【途端】 トタン 丁度その時。その瞬間。

【遽然】 キョゼン (一)にはかな、突如たる。(二)うろたへる様。こゝは(一)の意。

【大爆音が天地をゆるがして響き渡つた。同時に、大きな肉塊が、火焰と共に八・九米天空に舞ひ上つたかと思ふ間もなく落ちて來た】

「壯絶凄絶」(四五頁)といふ言葉の如實なる光景である。物凄いなと言ふは寧ろ及ばない。而もそれをも敢てして微塵に碎けた三烈士の行動は、誠に壯烈言語に絶したものであつた。この光景を眼にし耳にして、その貴い犠牲的精神に感謝を捧げないでをられようか。

【戦場の花と散る】 散る花の如く華々しく戦死すること。三勇士の場合それこそ「花と散る」といふ言葉がそのまゝあてはまるであらう。

【この爆死の光景に怖れをなしたか、近くの敵軍はわあつと悲鳴をあげて逃げ出した】

さもあるであらう。鬼神も泣かしの悲壯な決意は、鬼神をも恐れしめる行動となつて現れた。これを聞いた敵

米人が慄え上つたと聞いてゐる。目のあたりこの壯烈な行動を目撃した支那人が悲鳴をあげて逃げ出したのは當然である。

【かくまで尊き犠牲の下に、突撃路の一條は遂に完全に開か

れたのであつた】
前に比べると稍落ちついた調子を見せて文を結んでゐる。全文に落ちつきを與へ、而してその裏に泌々とした強い感動の籠つてゐる事に注意したい。

2 文の構成

第一節 初―四四頁五行

鐵條網強行破壊作業は敵の猛射に困難を極め第一班は全滅、第二班の勇士が悲憤するが、敵の猛射がいやまして戦況は愈々困難を極めること。

1 第一班の全滅。(初―四三頁五行)

2 第一班全滅に第二班の悲憤。(四三頁六行―同頁末行)

3 敵の猛射がいやまして破壊作業の愈々困難なること。(四四頁一行―同頁五行)

第二節 四四頁六行―四六頁七行

危険極まる情況の中に、三烈士は破壊作業を達成すべき方法を合議し、終に破壊筒を抱き我が身も共に爆發させて目的貫徹を期する悲壯な決心をすること。

1 三烈士が敵の猛射を衝いて完全に破壊作業を達成せんと心に誓ふこと。(四四頁六行―四五頁一行)

2 三烈士の心は期せずして破壊筒に點火して突進し、鐵條網に投げこまんとする決意に合致すること。(四五頁二行―同頁九行)

3 前段の方法を不安とし更に破壊筒と共に爆死せんとする悲絶壯絶の最後の決意を固めること。(四五頁一〇行―四六頁七行)

第三節 四六頁八行―四七頁二行

悲壯健氣な三烈士の覺悟に對する作者の讚歎。

第四節 四七頁三行―五〇頁五行

命令一下勇躍した三烈士は覺悟の通り、猛射の中を奮進また奮進、傷き倒れながら終に悲壯なる爆死を敢行する。

1 命令一下三烈士が欣然勇躍、破壊筒に點火して無二無三飛びだす様。(四七頁三行―四八頁四行)

2 一心同體三烈士が恰も一つの破壊筒となつて雨と降りそぐ敵彈の中を奮進する様。(四八頁五行―四九頁五行)

3 一度は敵前につまづき倒れるが、終に大爆音と共に三烈士は悲絶壯絶の戦死を遂げ目的を達成すること。(四九頁六行―五〇頁五行)

第五節 五〇頁六行―終

三烈士の犠牲的精神により一條の突撃路がひらかれたことを以て文を結ぶ。

3 文意

鐵條網の破壊作業の困難の爲第一班は全滅し、第二班の勇士は悲憤勇躍するが、その激烈な戦況の中にあつて、破壊作業は人間業のよくなし得る所ではなかつた。而るに歩兵突撃の期は刻々に迫る。こゝに於いてか、終に三烈士は身を爆薬と共に爆裂せしめ、以て鐵條網破壊を敢行せんと悲壯なる決意を固める。かくて命令一下、既に生死を超越した決死の三勇士は、勇躍して敵の鐵條網に突進し、戦場の花と散つた。この壯烈鬼神をも泣かしめる犠牲のもとに一條の突撃路がひらかれたのであつた。

4 鑑賞批評

作者の態度は解説的なもののやうに思はれる。事件の経過を追つて記述しながら、例へば「この方法こそ工兵としては―」(四五頁)とか、「この際一つの破壊筒を三人で持つて行つたのは―」と言ふ風な軍事的解説を挿入して三勇士の事蹟を詳細に知らしめんとする態度である。従つて紀事文の範疇に屬すべきもので、感情的な色彩は稍稀薄のやうに感ぜられるが、然し實は三勇士の尊い犠牲的精神に對する讚美歎賞が、その根柢に横たはる作者の意圖である事は論を俟つまでも

ない。或は三烈士の心事を付度敷衍し、或はあらはにその決意を歎賞するなど、作者の意圖感情は全文を通して滲み出し、讀者の生々しい實感をそそり心を動かすものがある。形式的にみて敢て名文とは言ひ難いが、三烈士の決意を敘するに地を挿まない對話體で活寫した點、或は「東島隊長の叫」號令一下「思つた利那」叫ぶ途端」など體言止の形式は、かゝる切迫した情景を敘するに極めて効果的であつた。殊に第四節三烈士の破壊作業敢行の一節の息もつがせぬ書振りは、全文中の壓巻であらう。讀者の感動をよびつゝよく事件の真相を傳へる所、蓋し記事文としては範とするに足るものである。

三 備考

1 指導研究

(一) 近時弛緩した人心に衝擊を與へた事件として肉彈三烈士の如きはない。生徒は既にこれに就いてかなり豊富な豫備知識を持つてゐる筈である。まづその整理統一の中に本課にふさはしい雰圍氣を醸成することによつて指導の第一歩が踏みださるべきであらう。

(二) 本課は此の時代の生徒の最も喜びさうな教材である。勇壯で冒險的と思はず拍手喝采もしかねない。或は拍手喝采する所まで導けば成功かも知れないが、併しそれが淺薄な快哉の喝采であつたならば、指導は邪道にそれたものと言はねばならない。飽までその根柢に横たはる作者の意圖感情にまで讀みを深めて、犠牲的精神の貴さ美しさに觸れしめ、更に皇軍精神の本質に思を致し、日本精神の體認を目指して指導に進めらるべきである。此の點に於いて常に前課「皇軍の精神」と聯絡並行して取扱はるべきであらう。

(三) 事件記録の敘事文についての陶冶をも兼ねて行ひ、作文とも聯絡してその模範文たらしめたい。

2 參考

一、挿繪三勇士寫眞

肩章はいづれも二ツ星となつてゐる。昭和六年一月入營、同年十二月一等兵に昇進、翌年二月六日には既に上海に出征してゐる所から見ると、この寫眞は二十二歳の暮か、二十三歳の一月、即ち一等兵昇進の記念撮影などではなからうか。

二、肉彈三勇士の銅像

東京市芝區萬年山青松寺の境内にある。肉彈三勇士銅像建設會總裁西郷從德侯、委員長金杉英五郎氏以下朝野の名士數十名の贊助により、昭和九年二月に建設された。製作者は西田新太郎氏である。

三、第二破壊隊の編成

隊長	工兵少尉	東島時松
第一班長	工兵軍曹	馬田豊喜
第一組長	工兵上等兵	濱川恭一(負傷)
	同 一等兵	小崎清(戦死)
	同 二等兵	持田元七(負傷)
第二組長	同 一等兵	中場清八(負傷)
	同	小佐々吉郎
	同	山崎榮
第三組	同	
八 肉彈三勇士		

長	同	林田正喜(戰死)
同	野口妙平(同右)	
同	坂井榮一(同右)	
第二班長	工兵伍長	内田徳次
第一組	長	作江伊之助(戰死)
同	同	北川丞(同右)
同	同	江下武二(同右)
第二組	長	北村五郎一
同	同	築瀬三四二
同	同	杉本琢一
傳令	同	前田虎雄
同	同	海野辰雄
一等看護兵	同	吉田輝成

四、三勇士の略歴

作江伊之助 サクエイノスケ

明治四十三年十月長崎縣北松浦郡平戸町に作江晋次郎氏二男として生れた。同町小學校高等科修了、後平戸町山二組運送店で仲仕奉公をした。昭和六年一月久留米第十八聯隊に入營。同年十二月一等兵に昇進。思想正順責任觀念旺盛で、上等兵候補者として、初年兵

教育係助手に勤務した。七年二月混成旅團工兵中隊に編入、直ちに上海に出征。

北川丞 キタガハススム

明治四十三年三月長崎縣北松浦郡佐々村北川權助氏二男として生れた。同町小學校高等科修了後木挽職に従つた。入營、昇進、部隊出征はすべて作江氏に同じい。性質温良で而も責任觀念に富み、出征は氏の熱望する所であつたといふ。

江下武二 エシタタケジ

明治四十三年一月佐賀縣蓮池村に江下徳松氏四男として生れた。家事都合の爲高等小學校を中途退學し、相知炭鐵、岩屋炭鐵、杵島炭鐵に次々探炭夫として働いた。言行表裏なく模範兵として上等兵候補の一人に數へられてゐた。昇進その他前二者に同じい。

五、植田師團長より三勇士に與へた感狀

感 狀

混成第二十四旅團工兵第〇中隊

陸軍工兵上等兵	作江伊之助
同	北川丞
同	江下武二

昭和七年二月二十二日拂曉、混成第二十四旅團砲兵大隊が廟行鎮ノ敵陣地ヲ攻撃スルニ當リ、ソノ砲屬工兵小隊ヲ以テスル鐵條網強行破壊の壯圖ヲシテ敗レ、破壊筒ヲ鐵條網ニ押入レタルノヲ點火スルコト不可能ナル狀況ニオイテ、作江一等兵ハ北川・江下ノ兩一等兵ト共ニ破壊筒ニ點火スルヤ、コレヲ抱イテ敢然勇躍鐵條網ニ突入シ、遂ニ鐵條網ト共ニ粉碎セラレ、幅約十メートルノ突撃路ヲ開設シ、砲大隊ノ突撃ヲ容易ナラシメ、遂ニ聖廟行鎮ノ一角ヲ占領スルヲ得シメタリ。以上作江一等兵外二名ノ行動ハ實ニ崇高ナル軍人精神ノ精華ニシテ、壯烈眞ニ鬼神ヲ泣カシムルモノナルヲモツテ、全軍ノ龜鑑トスルニ足ル。ヨツテコ、ニ感狀ヲ授與ス。

昭和七年三月十九日

八 肉彈三勇士

第九師團長 陸軍中將 正四位勳一等功四級 植田 謙吉

六、左の「肉弾三勇士の歌」は、當時大阪朝日・東京朝日新聞社募集に當選した與謝野寛氏の作である。選者薄田泣菫の感想談とを併せて此に掲げる。

一

喇行鎮の敵の陣、
われの友隊すでに攻む。
折から凍る二月の
二十二日の午前五時。

二

命令下る、正面に
開け、歩兵の突撃路
待ちかねたりと、工兵の
誰か後れをとるべきや

三

中にも進む一組の
江下・北川・作江たち、
凜たる心、かねてより
思ふことこそ一つなれ。

四

我等が上に載くは、
天皇陛下の大御稜威、
後に負ふは、國民の
意志に代れる重き任。

五

いざ此の時ぞ、堂々と
父祖の歴史に鍛へたる
鐵より剛き「忠勇」の
日本男子を顯すは。

六

大地を蹴りて走り行く
瀕に決死の微笑あり。
他の戦友に遣せるも、
かろく「さらば」とただ一語。

七

時なきまゝに點火して、
抱き合ひたる破壊筒、
鐵條網に到り着き
我が身もろとも前に投ぐ。

八

轟然おこる爆音に、
やがて開ける突撃路。
今わが隊は荒海の
湖の如くに躍り入る。

九

あゝ江南の梅ならで、
裂けて散る身を花と成し、
仁義の軍に捧げたる
國の精華の三勇士

十

忠魂清き香を傳へ、
永く天下を勵ましむ。
壯烈無比の三勇士、
光る名譽の三勇士。

薄田泣菫氏の選後感想

ある日のこと、私はいつものやうに手もとにとげられた夥しい應募歌を見てゐるうちに、ふとある奇篇を見つけた。それは手法の自由と暢達さに於て、また詩の行と行との間に物凄い劍氣がひらめき、火薬の匂ひがしさうな點に於て、他に一頭地を抜いてゐる作だつた。誰の作だらうな。私は物ずきに原稿の末尾に記された作者の名を調べてみた。それには慶應大學教授與謝野寛とあつた。うまいはすだ、與謝野氏だもの。私はこの詩壇の老大家が、多くの少壯無名詩人の中にまじつて應募したその若々しい心意氣を思ふにつけても、喇行鎮に於ける三勇士の犠牲的精神が、老若男女を問はず日本民族の血を底より湧き立たしめ、義勇奉公の念に齊しく點火したことを感嘆しないではゐられなかつた。

八、外交官堀口九萬一氏の「爆弾三勇士に對する感想」をその著「世界及世界人」より抄録する。

身を以て廟行靈の鐵條網に突撃し、我軍の爲に進路を開いた北川、江下、作江の爆弾勇士のニュース新聞を初めて讀んだ時の感想を率直に書いて見る。その時私は心の内で絶叫した。

これこそ、日本男子の本領の發揮である。大和魂の精華そのものである。この豪勇壯烈無比な犠牲的精神こそ、日本民族特有の靈魂の現はれである。この民族的精神が續く限りは我が國礎は千古萬古不動である。嗚呼有り難いと、知らずに涙がこぼれた。この涙は感激の涙であり嬉し涙であつたのである。

そして、この犠牲的精神は遠い祖先から傳承されて來たもので、我々大和民族の一人一人の血管中に潜流して居て、折に觸れ機を見て發動し噴出するのである。明治天皇の御製

しきしまのやまところのををしきはことあるときぞあらはれにける

この犠牲的精神が我々のうちに潜在し、流動して居ればこそ、そのおかげで、我が小日本が大日本となつたのである。東洋に於てもジュネーブに於ても、我が正義の主張が曲りなりにも通る所以のものは、その主張の後に、この一死報國の犠牲的精神が、當時も眼を光らして居たからである。歐洲大戰後、俄か成金になつて、英・佛・獨・伊の強國すら、その鼻息を伺つて居る程の強勢振りを遠慮なく發揮した米國のオブサーヴァーさへも、我が日本に對しては、ジュネーブで、不本意ながら無言の行を續けさせられたり、滿蒙事件や上海事件に關して、言ひたいことが胸一杯の傲慢不遜のスムムンでさへ、日本に對してハツキリ物が言はずに、當時曖昧模糊、口一ばいに糊を含んだやうな物の言ひ張りをしたのも、畢竟するに、我がこの一片歌々たる、觸らば斬るぞの犠牲的精神の閃きが、彼等米國人の目先きにちらつて、その爆發を恐れしめたからである。

嗚呼有り難くまた尊しや、我が民族特有のこの犠牲的精神の泰公心よと、沁々心の内に嬉し泣きに泣いたのである。

この犠牲心は「菅原傳授手習鑑」に於ては、松王の「女房喜べ悴はお役にたつたぞや」となり、「伽羅千代萩」に於ては、千松の毒死となり、政岡をして「そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中、所存の胸を固めさす 誠に國の礎ぞや」となり、元祿の快舉となり、旅順の閉塞隊となり、そして今や三勇士の爆死となつたのである。昔から支那や外國に傳はつた英雄的行爲だとか、壯烈鬼神を泣かし

むる所行など幾多の美談も、これ等日本勇士の生きた事例の前にはその色彩の轉た光輝を減ずるを思はしめるではないか。藤田東湖の正氣の歌「天地正大氣、粹然鍾神州。秀爲不二嶽、巍々聳千秋。注爲大瀛水、洋々環八洲。發爲萬朵櫻。衆芳誰與儔。神州熱君臨。萬古仰天皇」なるもの、これ亦我が國特有のこの犠牲的精神を歌つたものに他ならぬ。

そしてこの時、不圖思ひ出したことがある。それは數年前に讀んだことのある、フランスの著述家リエドゲック・ノードーが日露戰爭後に書いた『近代日本』中の記述である。

彼はその中に於て口を極めて日本人の武勇を賞嘆して、大よそ下のやうなことを言つてゐた。「武勇は日本のレーゾン・デートル（存在の理由）である。武勇ならざるものは日本人ではないのである。日本人は常々、義は泰山よりも重く、死は鴻毛よりも軽しか、または、生死岸頭に立つとか、或は大死一番などと、口癖のやうに言つてゐるだけあつて、死に直面しても決して恐れないのである。彼等の一死報國と言ひ、粉骨碎身と言ふのは、形容詞ではなくて、實際のことを言つた言葉である。日本のこの決死的精神が今や世界を動かすのである。

……彼等は戰爭に於て如何なる場合でも、決して降参しない。日本人に取つては、戰爭と言へば直ちに「勝つか、死ぬか」只この二つしか頭に浮ばないのである。だから、日本人が戰爭に於て強い理由は、全くこの傳統的國民觀念に基くものである」と驚嘆してゐる。

九 河鹿と山鳩

結城 哀草果

一 解 題

1 作者

結城哀草果 ユフキアイサウクワ 名は光三郎。哀草果は號である。明治二十六年十月山形縣山形市下條町に生れた。原姓は黒沼。結城家に養はれ農耕に従事し、傍獨學に勵み、夙に和歌に親しみ、大正初年頃雜誌「文章世界」「生活と藝術」等にその歌を投稿した。大正三年夏アララギ會員となり、専ら齋藤茂吉に師事して作歌に精進した。十五年以來アララギ選歌の一部を擔當し、また萬葉集臨講にも加はつた。現在同縣南村山郡本澤村菅澤に居住し、農村歌人として、その純朴無二の歌境はアララギ派歌人の中にあつても特異な地位を占めてゐる。

歌集に「山麓」「すだま」の二著があり、近く刊行された隨筆集「村里生活記」「續村里生活記」は、一個の農民としての著者を中心とした環境の人事自然を寫し、一種獨特の境地を示した「土」の隨筆として高く評價されてゐる。尙作者の素樸眞實なる人となりの一端を示すものとして、「一一・カルサンと米」を参照されたい。

2 出典

「續村里生活記」からとつた。「續村里生活記」は彙に昭和十年出版された「村里生活記」の續篇として翌年出版された隨筆集で、雜誌「アララギ」をはじめ諸雜誌に發表された主として昭和十一年度の作品を收載したものである。その中本課には「河鹿」「山鳩」の隨筆二篇を合せ一課として採録した。河鹿は昭和十一年六月、雜誌「温泉」に發表されたものであ

り山鳩は同年四月雜誌「アララギ」に載せられたものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

前者は寒き夜も山にひびく河鹿の音の涼しさに歌心を揺り動かされた山の温泉の情調を寫し、後者はゆくりなく飼育した山鳩の晴曇を鳴き分ける聲に對する驚を敍したものである。而してこれを貫くものは作者自ら「小鳥等を飼育してゐるといふことに氣附くやうになつた」と告白してゐる如く、靈妙神祕な自然に對する驚異と讚美との純情である。作者はこれを寫生派の歌人らしい確實精緻な觀察を基底とし、農民らしい率直大膽な筆觸とを以て敍し、そこに獨特の藝術的香氣を醸し出してゐる。この特異な藝術境に味到せしむる事によつて明朗至純、高雅なる心情を養ふべき文藝的教材として、併せて誠實なる觀察態度を養ひ、自然親愛の心を喚起すべき文化的教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【河鹿】 カジカ 赤蛙の一種。その他の説明は本文に略よ盡されてゐる。

【山鳩】 ヤマバト 鳩類に屬する雉子鳩・あを鳩の總稱。ここは雉子鳩のこと。(四・比叡の鳥・三三頁・既出)。

【山川】 ヤマガハ 山中を流れる川。溪流のこと。「サンセシ」と音讀し、又「ヤマカハ」と清んで讀む時に「山と川」の意となることを注意したい。

【夏秋の交】 カシウのカウ 夏から秋へのはりめ。交は季節のはりめの意。

【呼應】 コオウ (一) 一方のものが呼べば相手がこれに應答すること。(二) 互に氣脈を通ずること。(三) 文章中の前後の語句が互に同一の聯絡關係を有すること。こは(一)の意。

【抑揚】 ヨクヤウ (一) 音楽の調子・文勢などのあげさげ高低。(二) 或はけなし、或はほめること。(三) 時勢につれて行動すること。浮沈。こは(一)の意。

【愛すべきである】 愛するに足るものである。愛する價値がある。「べし」は當然の助動詞

【斑】 マダラ 曼陀羅の轉訛といふ説がある。種々の色が

處々入りまじつてゐること。曼陀羅(マンダラ)はもと佛語で、(一)宇宙法界萬徳を網羅せるもの意。佛の證の境界その他を繪畫化したものを言ふ。(二)轉じて種々雑多な色を言ふ。マダラは(二)の轉訛したもの。

【書物に書いてある】

此の「書物」は辭書らしく各辭書に略々これと相似た説明が施されてゐるが、最も近いものは大槻文彦著「大言海」である。「大言海」の説明に作者が多少の手を加へて轉載したもののやうである。本課の素朴な線の太い文章と一脈相通じて一種新鮮な趣を出してゐる。

尙「大言海」の説明を引いてみると「古名かはづ。かへるノ一種、山川ノ清流中ニ棲ムモノ。形小サク體瘦セテ疣アリ、色黒シ、又褐色ニ黒キ斑アルモアリ、足細長シ、秋ニ至リ、更ゴトニ石上ニ出デテ鳴ク、一ツ鳴ケバ皆鳴ク。聲小サクシテ清ク、抑揚多シ。好事ノ人飼ヒテ聲ヲ賞ス。丈極メテ小サク、八・九分ナルハ雄ニテ聲最モ佳シ、一・二寸ナルハ雌ナリ。」

【關山峠】 宮城縣・山形縣境の奥羽山脈横斷路で、古來峻峻な狹路であつたが、明治十五年洞道を開通して行路の難を除いた。洞道は竇長三百米弱、高さ四米、廣さ五米である。

【峠】 タウゲ (一)山坂の上りつめた所。(二)山の上り

先の尖つた卵形。春、葉と共に三〇―六〇種の花穂を垂れて紫色又は白色の蝶形花を多數房狀に著ける。莢は扁長楕圓形で長さ二〇種内外。莖皮は強韌である爲、繩の代用等各種の用に供せられる。

【蜂】 ハチ 膜翅目に屬する昆蟲。通常成蟲は頭胸腹の三部にくびれ、頭上に一對の觸角がある。三箇の單眼は著しく發達し、翅は膜質で強韌、翅脈は少く、肢は發達して歩行に適する。雌は尾端に産卵針を有し、一部の蜂はこれを毒針として用ひる。完全變態をなし幼蟲は普通蛆狀である。種類は頗る多いが、大別して獨立生活をなすもの、家族生活をなすもの、寄生生活をなすものに分けらる。

【峠は青葉を飾つた雜木山で、しばしば山道に立ち止つて汗を拭いてゐると、谷を吹きあげて來る風が、臭木のほひを送つて來る。岩間に水がこもつて行く深い谿川に、藤の花が盛りで、明るい日光のなかを蜂が光つて飛ぶのが見える】

「青葉を飾つた雜木山」は力強い表現である。その稍生硬な線の太い表現は既に青葉の色も濃くなつて生氣に満ちた雜木山をよく現して、六月の峠道の新鮮な背景を描いてゐる。時々立止つて汗を拭いてゐる時、臭木のほひを含んで谷底から吹上げて來る風には、汗もひく冷涼

下り。ここは(一)の意。(三)峠の茶屋(既出)

【作並温泉】 宮城縣宮城郡廣瀬村にある。廣瀬川の溪流に臨み、仙臺より七里、關山峠より下ること三里の地にある。古湯と新湯があり、何れも鹽類泉で熱度百三十度。近く廣瀬川の源流にかゝる樺目木瀑の名所がある。

【雜木山】 ザフキヤマ 雜木の生えた山。「雜木」は建築用材などに用ひられない粗末な木。「雜」は粗末の意をあらはす接頭語。雜巾・雜兵・雜煮などこの類。

【臭木】 クサギ 馬鞭草科の落葉灌木。高さは三米に達する。葉は廣卵形で鋭頭。幹・葉共に一種の臭氣がある。夏赤色の萼と白色の花冠とを有する管狀五裂の花を、聚繖花序に開く。實は「なんてん」に似て、熟すると碧色を呈する。嫩葉は食用に供せられる。

【こもる】 籠る・隠ると書く。(一)かこまれる。包まれる。(二)かくれる。しのぶ。ひそむ。(三)潜存する。(四)籠城する。ここは(二)の意。

【谿川】 タニガハ 谷川・溪川とも書く。此の谿川は廣瀬川の流を指す。谷」は水なきを言ひ、水あるを「谿」・「溪」と言ふ。

【藤】 フヂ 荳科の纏繞性落葉木本。山野に自生し、又庭園に栽植せられる。幹の高さは一〇米以上に昇ることがあり、葉は六内至八對の小葉からなる羽狀複葉。小葉は

清新な感がある。臭木のほひに引かれて見下したのであらう、脚下の谿川は深い。こもつて」の持つ音感は、底深さと共に淀み流れる水の静けさを表し、今を盛りの藤の花の華やかさと、蜂の光り飛ぶ日光の明るさと相伴つて、六月の山らしい明るい平和境を描きだしてゐる。全體に素樸な線の太さで一貫された表現技巧が、此の場の紋景には効果的にはたらい、六月の峠を巧に寫してゐる。

【古風】 コフウ 昔風。古昔の状態。

【高窓】 タカマド 腰高窓のこと。窓と床の間を壁又は板にして、その上に狭くつくられた窓。通風彩光などを一向考へてない所が「古風」なのである。

【高窓から雲霧がはひつて來て、部屋がしつとりとする朝があつた】

下の地圖で明瞭なやうに作並温泉はかなり山深い所に在る。槽氣しめやかに雲霧の往來する山中の古風な旅宿の氣分が、簡潔な此の一行の文に盡されてゐる。核心をつかんだ表現だからであらう。(地圖には作並とあり本文は「作並」である。上は略字、下は本字。本文は本字に統一したのである。)

【岩淵】 イハブチ 峙つた岩にかこまれてゐる淵。

【あふいで】 仰ぎての音便。あほいで、あおいで」など

誤らぬやう假名遣を注意したい。

【湯槽】 ユブネ(ヨクサウ)

【岩淵】 霧が白くうらみてる夜に、きれいな星空をあふいで深い谷間の湯槽に浸つてゐると、鈴を振るやうに河鹿の音がきこえて来る】

深い谷間の露天風呂である。すぐその岩淵のあたりに夜目に白く河霧が立まよつてゐる。山深い清澄な空の星は美しい。谿川のせせらぎの中に聞く河鹿の音は、それこそ「鈴を振るやうに」といふ文字通り澄んでゐたものであらう。全く清澄玲瓏、山氣溢れた景趣である。霧が白くうらいては夜目に白々とみる河霧の立まよふ様には動かし難い表現であり、「きれいな」といふ星の形容がまた實によく利いてゐる。洗練濾過を経て醇化されたものだからであらう。

【川床】 カハトコ 河水の底の地盤。

【東北】 トウホク 東北地方のこと。奥羽地方の別稱。東北は古くは東國(東海・東山兩道にかゝる)及び北陸の汎稱であつたのであるが、皇都の東遷以來奥羽六縣を指稱する名となつた。

【凝る】 コる(カタマル)

【河鹿の聲がひびく】 前に「鈴をふるやうに」とした形容に聯關して「ひびく」と言つたのであらうが、事實また

である。

【山一帯】 ヤマイツタイ 山一面。「一帯」は(一)もと一

すぢ。一脈。(二)轉じて全般。一面。ここは(二)の意。

【こぞつて】 舉りての音便。ことごとく。残らず。みんな。

【村里】 ムラザト 田舎の人家の集つてゐる所。部落・村落・里落・邑里・村邑などの語はみな同意の語。

【作谷澤】 サクヤザハ 山形縣東村山郡作谷澤村。虚空藏

山の北壑に沿つた山村である。

【丑君】 郵便局長日詰平七氏の頭字をとつたのである。

【薪小屋】 マキゴヤ タキギゴヤ 薪を入れて置く小屋。

「小屋」は(一)小さく粗末な造の家。(二)かりごや。

(三)芝居見世物などの興行をする建物。(四)昔の藩主

の藩邸又は城の中にあつた藩士の家。(五)昔京都の大路

に設けられた衛府の官人の夜まはりの詰所。いふまでも

なく、ここは(一)の意。

【貉】 ムジナ 「貉」とも書く。食肉目・犬科に屬する東亞特産の動物。形は狐に似て肥満し、頭は上部廣く、口は尖り眼は圓い。四肢が短小で趾行性があり、尾は總狀をなしてゐる。山地・草原に穴居する。毛色に種々あるが最も普通なのは暗灰色で、毛皮は防寒用・鞆用とし、毛は毛筆を製するに用ひられる。

【格闘】 カクトウ 組うち。うちあひ。

山の澄んだ空氣の中に聞く河鹿の音には「ひびく」がびつたりしてゐる。

【川床に温泉の涌きて寒き夜も河鹿のこゑは山にひびきぬ】

【温泉】 イデユ 温泉の古語。

一首の意は「川床に温泉が湧いて水が温いからであらう。まだこんなに寒い夜を河鹿の聲は涼しく山にひびいて聞える。何といふ豊かな情趣であらう」といふのである。

純粹の寫生歌で「寒き夜も」鳴く河鹿の聲に對する驚きと、その山にひびく聲の涼しさに對する讚歎とが作者の歌心を揺り動かしたものと思はれるが、その驚と讚歎の情は内に靜かに燃えて、しつとりと落つた歌境を醸し出してゐる。川床に温泉の涌きて「はほのぼのと河霧の動く川のぬくみを思はせ、寒き夜も」は「此の寒き夜を河鹿の聲をきくものか」との作者の驚きであり、且寒き夜に聯想される大氣の冴えは、河鹿の聲を更に清澄なものに感じさせもする。「河鹿のこゑは」の「は」に籠る詠歎は靜閑たる山の夜にひびく河鹿の鈴を振るやうな清朗な聲を印象的にひびかせてゐるやうに思はれる。

【舊作】 キウサク 以前の作品。古い作品。

【今年】 コトシ 此の作品の書かれた年、即ち昭和十一年

【朝明け】 アサアケ 「夜明け」に同じ。「朝明く」の力行

下二段の動詞連用形より轉化した名詞。

【薬小屋】 ワラゴヤ 薬を入れて置く小屋。

【靱】 モミ (一)穀附きの米。もみごめ。(二)もみがらの略。ここは(一)の意。

【あさる】 (一)さぐりもとめる。(二)魚介類をとる。(三)餌をさがしてあるく。ここは(一)の意。

【朝明けの薬小屋の中で、數十羽の小鳥が、薬にのこつた僅

かの靱をあさつてゐる】

あるかなしの靱に數十羽群をなして集る小鳥の様は痛ま

しい感じを誘ひ、雪を出さず寒さを言はずして、雪深い

山村の荒涼たる情景をよく描いてゐる。

【紅をさす】 紅色を注ぐ。この「さす」(差す)は注ぐ・つ

ぎこむの意。

【燻銀】 イブシギン 燻しをかけた銀。燻は硫黄をいぶ

して金屬に煤色をつけること。

【光澤】 クワウタク つや。ひかり。光の反射によつて物

體の表面の輝くこと。

【薄い紅をさした燻銀の光澤をもつた鳩】

山鳩の羽色の形容であるが、簡潔な表現の中に美しく如

實に描いて、寫生派の歌人らしい筆の確かさを示してゐ

る。

【案外】 アングワイ おもひのほか。意外。
【目玉をくるくるとごかして水を呑み、豆を拾ふ】

唯これだけの動作の中に鳩の愛くるしさが躍如として現れてゐる。核心をつかんで大膽率直に表現してゐる爲である。一體線の太い明朗な筆致には好感が持てるのであるが、つまりこれは作者の素朴な人となりの現であらう。

【遠雷】 エンライ 遠くで鳴る雷。

【丁度遠雷のやうなかなかな聲で鳩の啼いたのを聞いた】
控へ目に遠慮勝ちに、咽喉の奥に籠らせて啼くのである。馴れ初めの飼鳥が啼き初める時あらゆる鳥がさうであるやうに、此の鳩も遠慮勝ちにいたのであつた。遠雷のやうな」といふ言葉は鳩の咽喉の奥に籠つたあの鳴聲を巧に形容したものである。「聞いた」には單なる過去でなく明かに初めて鳩の啼聲をきいた作者の驚きが含まれてゐる。

【山道を歩きながら、深い林の中で啼くの聞くやうな氣持である】

野鳥の聲には野鳥らしい故郷の野山に呼びかけるやうな悠遠な神祕の響がある。それを巧に把へた形容である。

【耳を澄して聞くと聲は震へて】

作者の周到な觀察は「聲は震へて」と、啼き初める際の聲を詳細にきゝとつてゐる。

【鳩は日によつて「テツポツポー」と啼く日と、「テデツポツポー」と啼く日とがある】

「テツポツポー」と「テデツポツポー」とは讀みながらでさへ間違ひさうな極めて微妙な相違である。これを鳩の啼聲について聞いては容易に聞きわけられさうもないと思はれる。それを明瞭にきき分けたのは作者の犀利な觀察であつた。觀察の鋭敏さを示したものである。

【判断】 ハンダン (一)眞偽・善悪・美醜などを考へ定めること。(二)うらない。(三)論理學上、主辭と賓辭の綜合をいひ、判断の綜合は推理となる。こゝは(二)の意味が主である。

【はかなし】 果無し・儂いなど書く。(一)頼みにならぬ。かひがない。(二)思慮が浅い。(三)とるに足らない。つまりまらない。こゝは(三)の意。

【経験の言草】 ケイケン のイヒダサ 経験によつて導かれた言草。經驗上の言草。「言草」は「言種」とも書き、(一)言ひごと。(二)言ひわけ。口實。こゝは(一)の意。

【たまたま】 偶・適・會など書く。(一)たまに。まれに。たまさかに。(二)ゆくりなく。偶然に。ふと。こゝは(二)の意。

【飼育】 シイク 飼ひ育てる。「飼」は古く人・動物何れにも用ひた語であるが、今は主として動物のみに用ひる。

【小鳥等を飼育してゐると、いろいろのことに氣附くやうになつた】

「いろいろのこと」とは何を指すか生徒に考へさせたい所であるが、その前に「小鳥等」とわざわざ「等」をつけた氣持について考慮する事から出發すべきであらう。

「等」は勿論鳩二匹の複數でなく、小鳥とか小犬とか或は蟲等のやうな「等」で、とるに足らないさうしたものからも、觀察し方により、考へ方により啓發されるといふ氣持である。「いろいろの事」とは勿論鳩が晴曇を啼き分けたといふ不思議な事實に觸發された靈妙な自然の神祕さへの想到が中心であるが、「いろいろのこと」といふ以上、鳩の生活を通して氣附かれる幾多の事實、例へば動物の飼主に馴染んで行く過程とか、たまたま飼育してみ

2 文の構成

河 鹿

第一節 初―五一頁六行 河鹿の説明。

第二節 五一頁七行―五二頁四行 關山峠を越えて作並温泉に下る途中の六月の峠の敘景。

第三節 五二頁五行―五三頁八行 鬱氣しめやかな作並温泉の露天風呂に浸つて聞く河鹿の音の珍しくもまた涼しい音に歌心をそゝられたこと。

山 鳩

九 河鹿と山鳩

第一節 五三頁一〇行―五四頁三行 二百年來の大雪で、山の鳥獸が食を求めにこぞつて村里に下つて来たこと。
第二節 五四頁四行―五五頁一行 或朝藁小屋で糶をあさつてゐた山鳩を二羽生捕つて飼つてみると案外早く馴れたこと。

第三節 五五頁二行―同頁一〇行 二十日程経て啼きだした鳩が、殊に天候の變り目に啼き、その啼き方も日によつて違つたこと。

第四節 五五頁一行―終 鳩の啼聲が天候の晴曇を豫報してゐることに氣がついた作者の驚。

3 文意

前者は昭和五年六月作並温泉を訪れ、時ならぬ河鹿の聲を聞いた驚と、その山にひやく聲の涼しさに歌心をそゝられた話であり、後者は昭和十一年の大雪に食をあさつて村里に下つて来た山鳩を捕へて飼育する中、その鳩の啼聲によつて天候の晴曇が判断される事に氣づいた驚を敍したもので、その根柢に流れるものは、犀利精緻な觀察の眼をひらく者の前に提示される靈妙神秘な、而も美しい自然に對する驚異と歎美の情である。作者はこれを明るく線の太い農村歌人らしい純樸さで描いてゐる。

4 鑑賞批評

島木赤彦氏は「その（哀草果）優秀な作歌は、この素樸と眞情とからいつも生れ出るのであらう」（一・カルサンと米・七四頁参照）と言つてゐるが、同一のことは氏の隨筆にも言はれると思ふ。明朗な線の太い率直な表現は農村歌人として特異な地位を占めるその眞情と素樸な氏の人となりの自らなる表現に他ならない。而も農耕の傍々として精進した氏の作歌修業によつて練磨された正確犀利な觀察はよく對象の核心を把握し、その率直大膽な表現の基底をなし、これに深みを加へてゐる。これが全篇に獨特な藝術的香氣を漂はす源であり、氏の隨筆が高く評價せられてゐる所以でもある。まことに愛讀するにたる好個の隨筆といふべきであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一) 繰返し述べて来たやうに本課の文は獨特の藝術的香氣を持つてゐる。これに浸らしめる事に中心點がおかるべきであるが、一見平板に思はれる表現に終始してゐる爲に、稍、生徒には味到し難いのではないかと思ふ。この爲には、表現の要所所の檢討から出發して、そこから全體的にその味を盛上げてゆくやうな方法をとりたい。従つて文中の歌の鑑賞などにはかなりの力が費さるべきであらう。

(二) 「小鳥等を飼育してゐると、いろいろのことに氣附くやうになつた」と言ふ作者の言葉は晴曇を啼き分ける山鳩の聲に對する驚であると共にやがて全體をつらぬく作意でもあるが、その理解に導く手段がともすれば理窟に墮ち易いと思ふ。飽まで文に即し、その鑑賞から自らしみこませるやうな態度で扱ひたい。

2 参考

(一) 挿圖 關山峠・作並温泉を中心とする附近の地圖である。關山峠から作並温泉に三里、更に廣瀬川に沿うて下ること七里にして仙臺に至る。地圖によれば關山峠の洞道であること、温泉が廣瀬川に臨むこと、温泉附近の山深いことなども明であり、且作者の立つて汗を拭いた峠が關山峠から温泉に下つて行く途中であり、谿川が廣瀬川である事も明瞭である。

(二) 歌集「すだま」から作並温泉に遊んだ當時の歌を次に抄出する。

作並温泉

九 河鹿と山鳩

峠くだる道は青葉の雜木山憩ひをるわれに臭木にほへり。
岩のまに水こもりゆく深谿は藤の花盛すぎにけるらし。
岩淵に碧くたたふる谷水に霧うごきつつ曉さむし。

村山の田圃にのびし菖蒲くさ山のいでゆにけふは浮かしむ。

赤坂街道

山峽をうねりのびゆく岨道に春日は照りてゆく人ぞなき。
谷ふかくこもりて鳴れる川音の高まるきけば風の吹きゆく。
やま峽の乾ける道をゆく犬のわが口笛にふり返りけり。
川の瀬にいつか舞ひ來し蝶一つ流れしとおもふに波間飛びゆく。

(三) 昭和十一年二月雜誌アララギより山鳩の書かれた當時の作と思はれる歌を左に轉載する。

霰ふる崖の雀生に啼きより鶯鳴啼く目さめつゝをり。
水たふ刈田の鳥の飛びたちて雪ふる空の朝焼ひさし。
響きつゝ水は流るゝ山川のたぎちのうへに雨は降りをり。
街角の唐辛粉つくる家ありてつらなめさげぬ赤きたうがらし。(哀草集)

補材

薬ぶきに雞さけぶ賤が門一もと柳ひるしづかなり

橋曙覽の歌集「志濃夫廬舎歌集」の櫻裸艸第二集に「門柳」と題して載せられてゐる一首である。

【薬ぶき】ワラぶき (一) 屋根を薬でふくこと。(二) 薬ぶき屋根の略。ここは(二)の意。
【雞さけぶ】ニハトリさけぶ 牡雞が時をつくる。
【賤が門】シヅガカド 賤が家の門先。「門」は家の前の廣

い庭をさす。こゝは農家の仕事場であり又物干場などともなる。賤は(一)いやしいこと。みすばらしいこと。(二)

いやしい者。ここは(二)の意。「が」は所有を表す助詞。【一もと】一本。

「薬ぶき屋根の百姓家などの庭で、鶏が甲高い鳴聲をあげてゐるそのあたりには一本の柳がしつとりと枝垂れて居り、折りしも眞晝の陽光が燦々とふり注いでゐる。ほんとにひっそり閑としたのどかな田園の情趣である」といふのが一首の意である。

純粹の寫生の歌である。その材料は「薬ぶき」「雞」「賤が門」「柳」などがかなり多いのであるが、少しの混亂もみせずみなそれぞれその處を得て、野趣溢るる一幅の繪のやうに確かな構成をみせてゐる。殊に邊幅を飾らなかつたと言ふ作者の人となりは、自ら無技巧な表現となり、用語の自由さに現れこの歌を更に一段と野趣豊かなものにしてゐるやうである。

その線の太い素樸な人となりに於て、また感情の至純點に於て、本課の作者は曙覽に一脈相通する所がある。従つて本課の文の持味にはこの歌の境地に極めて近いものがある。併せて鑑賞せしむべくこれを補材として採つた。

【橋曙覽】タチバナアケミ 越前福井の歌人。幼名は五三郎。名は尙事。舎號を薬舎と稱した。文化五年九月越前福井に生れた。二歳にして母を、十五歳にして父を失ひ、家を弟に譲つて京都に出で、頼山陽の高弟兒玉士敬に學び、天保十二年江戸に出て國典を學んだ。殊に本居宣長を景慕してその門人田中大秀に就いて學び、萬葉集の研究に没頭した。また皇室尊宗の念が厚く、王政復古を唱へ、歌を以て士氣を鼓舞した。弘化三年郷里福井に歸つ

て子弟を教へ、藩主松平春嶽の尊信を受けた。明治元年歿。享年五十七。
人となり邊幅を飾らず、蓬髮垢面、敝衣を着し、屢々食を缺くも意に解せず、専ら學に勵んだといふ。博覽強記で歌詞文藻に意を注ぐ傍ら、廣く和漢の學を究め、諸子百家をはじめ稗史小説にまで通じてゐたといふ。而も生涯を通じて一意精進したのは和歌であり、その最も希求したのは王政復古であつた。

はやく曙覽の歌に着目してこれを世に紹介したのは正岡子規であつて、子規は曙覽を激賞して次のやうに言つてゐる。これは曙覽の歌風を窺ひ得るものと思ふからここに掲載する。

曙覽の志濃夫廼舍歌集を見て始めて其の尋常の歌集に非ざるを知る。その歌古今、新古今の陳套に墮ちず、眞淵・景樹の窠臼に陥らず、萬葉を學んで萬葉を脱し、瑣事俗事を捕へ來りて縱横に馳驅するところ、却て高雅蒼老些の俗氣を帶び

す。殊にその題目が風月の虚飾を費ばずして、直ちに自己の胸臆を擲く者、以て識見高邁、凡俗に超越する所あるを見るに足る。而して世人は俊頼と文雄とを知りて、曙覽の名だにこれを知らざるなり。

著書には「志濃夫廼舍歌集」「葦屋永草」「葦屋文集」「古今集垣間見」等があり、今すべて橘曙覽全集に收められてゐる。

10 蜘蛛の絲

芥川龍之介

一 解 題

1 作者

芥川龍之介 アクタガハリユウノスケ 小説家。澄江堂主人と號し、又俳號を餓鬼と稱した。明治二十五年三月、東京市京橋區入船町に新原家の長男として生れた。辰年・辰月・辰日・辰刻の出生に因んで龍之介と名づけられた。生後間もなく母方の叔母の養子となり芥川姓をついだ。東京府立第三中學校・第一高等學校を経て、大正二年東京帝國大學英文科に入學。久米正雄・菊池寛・松岡讓等の諸友と「第三次新思潮」を刊行し、三年同誌に處女作「老年」を、四年に帝國文學に「羅生門」を發表して漸く一文壇の注目をひいた。同年漱石の門に入り、翌五年再び「第四次新思潮」を發刊、「鼻」を發表するや漱石の激賞する所となり、一躍文壇に新進作家の地位を占めた。この年大學卒業。海軍機關學校の英語教官となり、その間引續き小説の筆をとり、第二短篇集「傀儡師」を上梓する頃には既に中堅作家として重きをなした。大正八年三月職を辭し、東京朝日新聞社の客員となり、以後専ら創作に従つた。晩年極度の神經衰弱のため、昭和二年七月田端の自宅で自殺した。享年三十六。

所謂大正文壇における新理知派の代表的作家で、清澄明徹而も高雅な作風は當代獨歩であつたが、同時に理知的冷徹さは氏の作品共通の缺點とされてゐる。その著には前記「傀儡師」をはじめ、短篇集「羅生門」「煙草と惡魔」「影燈籠」「夜來の花」「邪宗門」「春服」「黃雀風」等があげられ、隨筆集に「點心」「百艸」「侏儒の言葉」等がある。「鼻」「羅生門」「將軍」「秋」

「藪の中」或日の大石内蔵助「黄雀風」等は氏の傑作として數へられてゐる。今總べて芥川龍之介全集に收められてゐる。

2 出典

第二創作集「傀儡師」(芥川龍之介全集卷一)より採つた。「傀儡師」は氏の中堅作家の地位を確立せしめたもので、傑作「或日の大石内蔵助」をはじめ「奉教人の死」「るしへる」「戯作三昧」等十一篇の短篇が收められてゐる。大正八年一月刊行。

本課はもと大正七年五月童話雑誌「赤い鳥」に發表されたものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

高雅な氣品高い寓意的童話である。人間のさゝやかな一つの善行が濟度をうける因ともなれば、又一つの欲望が洪大無邊の慈悲心を持つ釋迦の救済からすら遠ざかる業ともなる。つまり人間の一つの行爲・一つの欲望が、この永遠の世界秩序の中では常に克明に嚴かに因果の主體として照しだされて行く。その姿を童話として具體化した所に作者の意圖は存するのである。改正要目「文學趣味ニ富ミテ心精ヲ高雅ナラシムル」文學的教材としてその氣品高い藝術的香氣を味はせることは勿論、それを通して生活の指導にも資したい。此にこれを採擇した所以である。その深い思想を裏に隠して、飽くまで子供の爲、優しくしとやかに、而も間然する所なき表現力は、そこに崇高幽玄な美の世界を描きだしてゐる。蓋しこの時代の生徒には最適な文藝的教材である。

二 解釋

1 語釋

【お釋迦様】 おンヤカサマ 釋迦牟尼のこと梵語(Muni)

Muni. 釋迦は種族の名で、牟尼は寂黙、能仁と譯す。

釋迦在世の時代については諸説紛々、未だ定説とすべ

きものはないが、大體西曆前五世紀の頃であらう。印度伽毘羅國の太子、父は淨飯王、母は摩耶夫人、四月八日の降誕である。幼名は悉達多。夙に人生の無常に思を潜め、出家得道の志を抱いて煩悶した。父王は太子の煩悶を防がうと拘利城主善覺の女耶輸陀羅を迎へ妃としたが、太子の志は翻すべくもなかつた。間もなく一子羅睺羅の誕生するに及んで、終に二十九歳(一説十九歳)妻子を捨て、王城を逃れ、諸哲を歴訪して道を尋ね、更に自ら苦修練行すること六年、(一説十二年)、二月八日早曉佛陀伽耶の菩提樹下に無上の正覺に徹して佛陀の位に至つた。時に年三十五(一説三十)。爾來五十年北天竺を巡錫して教を布き八十餘歳拘尸那城外跋提河畔沙羅雙樹下において寂滅した。時に二月十五日であつた。

尙、釋迦については尋常小學六年の國語教材にとられてゐる。

此にいふ「お釋迦様」は事實上の釋迦でもなく、諸經中に説かれてゐる釋迦佛でもなく、全く作者の創意によつたものである。

【極樂】 ゴクラク 佛語。極樂淨土・極樂世界・蓮華藏世界・無量清淨土・無量光明土・九品淨域などともいふ。西方十萬億土を經過した所にあり、阿彌陀如來の淨土である。諸事圓滿具足し、全く苦患なき安樂世界で佛果を

得た者は此處に往生する。佛教徒の理想世界である。阿彌陀教「爾時佛告長老舍利弗。從是西方過十萬億佛土。有世界名曰極樂。其土有佛、號阿彌陀、(中略)其國衆生無有衆苦、但受諸樂。故名極樂。」

こゝに極樂の佛を阿彌陀如來とせず、子供の世界に近い釋迦とした所など、大膽な創意であると共に、現實感を與へるものと言ひ得る。従つてまたこの極樂は教典中のそれだけでなく、作者の創意による童話的理想世界であるに過ぎない事を心得置くべきである。

【蓮池】 ハスイケ 極樂に七寶池がある。これに作者の創意を加へたものである。阿彌陀經に「極樂國土には七寶の池あり、八功德水の中に充滿せり。池の底には純金沙を以て布けり。四方に階道あり、金・銀・琉璃・玻璃・磔磔・赤珠瑪瑙を以て而も之を嚴飾せり。池の中に蓮華あり、大なること車輪の如し。青色には青光あり、黄色には黃光あり、赤色には赤光あり、白色に白光ありて、微妙香潔なり」とある。

【蓮の花はみんな玉のやうに眞白で、その眞中にある金色の蕊からは何ともいへない好い匂が絶え間なくあたりへ溢れてをります】

玉のやうに白い花、金色の蕊の色彩美、何とも言へない芳香、誠に極樂らしい、清淨な美しい夢のやうな敘述で

ある。
【極樂は今、朝なのでございます】

前の夢の様な童話特有の想像世界が、急に一轉して現實化され、物語全體が立體的に浮き上つて来る。今、朝なので」といふ詞は、何とも言へぬ追眞力を持つて、讀者に強い實感を抱かせ、且つその世界に引き入れて行く。

【蓮の葉の間からふと下の様子を御覽になりました】
「ふと御覽になるのである。見る氣もなく恍惚と蓮池の美しさに見とれてをられる時、ふと思ひがけなく地獄をお覗きになる。その「ふと」と言ふ副詞に讀者をひきつけずにおかぬ効果的な力がある。

一體この作者の副詞的修飾語句の驅使は極めて巧妙で讀者の實感をそより、情景を克明に、印象的に浮上らせる上に極めて効果的役割を果してゐる。

「ぶらぶらお歩きに」(五七頁)地獄は今(五七頁)丁度覗眼鏡で(五八頁)「そつとお手に」(六〇頁)などはその例である。

【地獄】梵語(Naraka)那落迦の意譯。餓鬼道・畜生道とともに三惡道と言はれ、罪障の最も深い者が、墮ちて苦報を受ける地下の獄界で、閻魔大王が主宰し、その部下の羅卒(鬼類)が絶間なく亡者を呵責する所である。その位置、種類等は、經・論により諸説區々であるが、普

通に行はれる一説によると、南瞻浮洲(この世界)の地下二萬由旬(一由旬は四十里)に縱・横・深さ二萬由旬の無間地獄があり、その上に大焦熱・焦熱・大叫喚・衆合惡繩・等活の七地獄が順次に累層する。併せて八熱地獄といひ、その苦患は下に至るにつれて十倍する。この八熱地獄は各々その四つの門外に、四小地獄即ち十六地獄を附隨するので、百三十六地獄になる。尙八熱地獄の周圍には八寒地獄があり、又孤地獄といふものが江河・山邊・曠野・地下・空中に散在するといふ。

惟ふに、地獄は人類の罪障觀念の宗教的反映として、道德觀念の存する限、何處如何なる時代にも存在する應報思想の現れで、キリスト教には悔悟を知らぬものが永遠の苛責をうける幽界(Infernum)と悔悟を知る魂が苛責によつて淨罪昇天の恵に浴する煉獄(Purgatorium)との二地獄があり、回教にも經典コーランの中に地獄についての記載は隨所に見出される。

此に扱はれてゐる地獄は、勿論素材は佛教の地獄であるが、その位置・構造からみて、明かに作者の創意の加はつたもので、寧ろキリスト教の煉獄に近い感じがある。

【三途の川】サンヅのカハ(一)地獄・餓鬼・畜生の三惡道を川にたとへたもの、即ち火途(地獄道の猛火に焼かれる所)、血途(畜生となつて相食む所)、刀途(餓鬼道の

刀劍杖を以て通られる所)である。これを川にたとへた

のは、金光明經に「是經能令三途地獄・餓飢・畜生・諸河焦乾枯渴」とあるによる。(二十王經の説によれば、人が死んで初七日に秦廣王(閻魔大王)の廳へ行くが、その途中にある川で、緩急の三瀬があり、生前の造業の輕重によつて三途の別があるからこの名を生じたのだと言ふ。こ

こは(一)十王經の説からの三途の川の意。但し、十王經の三途の川は、地獄にあるのでなくて、地獄へ行く途中にある。それを地獄中のもの如く書いたのは、少年になじみの多いこれ等の名を、巧みに地獄中のもの如くにあつかつた作者の意圖によつたのである。古歌に「さうづ川」みつせ川「わたり川」などとよまれてゐる。

【針の山】ハリのヤマ「劍の山」とも言ふ。枝葉・花果すべて皆刀劍で出来てゐる樹木を植ゑた地獄の山で、獄卒が亡者達をこの山に追ひ上げて苛責するといふ。これは劍樹地獄(劍林地獄ともいふ)から出た俗説であらう。長阿含經地獄品に、「劍樹地獄、縱横五百由旬。罪人入彼劍樹林中、有大暴風起、吹劍樹葉、墮其身上。著手絶、著足絶、身體頭而無不傷壞」とある。

【覗眼鏡】ノゾキメガネ「のぞきからくり」略して「からくり」とも言ふ。大きな箱の中に續きものなどの繪を備へ、次第に移動轉換する装置にして、前方の擴大鏡から

覗かせる見世物である。

【水晶のやうな水を透き徹して、三途の川や針の山の景色が丁度覗眼鏡で見るやうにはつきりと見える】
「水晶のやうな水」は極樂の水の美しさである。その池の底に地獄が透き徹つて見えるといふのだ。如何にも重

話的な想像世界といふ他はない。「丁度覗眼鏡でみるやうに」と言ふ譬喩も現實感をそよつて全く巧妙である。

【善い事をした覺】「覺」は「釋迦の覺」にとるか「釋迦多の覺」にとるか明瞭を缺くやうだが、次の「いや〜」これも小さいながら……といふ條を参照して見ると、釋迦多の覺」とするが良いと思ふ。「覺」は、記憶といふほどの意。

【これも小さいながら命のあるものだ】火附泥坊の大罪人の釋迦多の心に、たとひ瞬間的にせよ、この善心の宿るのほうれしいことである。これこそ所謂惻隱の心であつて、釋迦の慈悲心を動かし得た所以である。

【それだけの善い事をした報には出来るならこの男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました】
善行に對する善い報を釋迦はお忘れにならない。而もその些細な善をとり擧げ、他の一切の大惡を捨て、救済の誓願を起される。そこに洪大無邊な釋迦の大慈悲心が窺はれる。出来るなら」と言ふ條件は釋迦の力による可能。

不可能ではない。救はれると否とは結局その人の心根である。自ら業火に焼かれて釋迦の救をすら拒む者もある。それは釋迦も如何ともし難い。それを「出来るなら」と言つたのである。

【翡翠】 ヒスキ (一)輝岩の分解によつて生ずる寶石。滿洲地方及アジア東南部に産する。支那では古來最貴の寶石として珍重され、歐洲ではイギリス人に貴ばれる。色は白色・帯綠色・暗綠色などであるが、青綠色で濃淡のむらがないもの程上物で、殊にその澄明なものは瑠璃と稱して貴ばれる。根掛・簪・指環・耳飾・帶止などに用ひられる。(二)かはせみ 翡翠目、翡翠科の鳥。雀大で、頭部は暗緑青色、背部より尾に至るまで美しい空青色を呈し、嘴は黒く長大、脚は赤色である。本邦各地の河沼に棲む。こゝは勿論(一)と見て良い。

【翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけてをります】

翡翠のやうな色をした極樂の蓮の葉、而もその葉の上にある蜘蛛は極樂の蜘蛛である。翡翠色の蓮の葉の上の銀色の蜘蛛の糸、實に美しい繪畫的な想像描寫ではないか。

【こちらは地獄の底の血の池で】

巧みな場面の轉換である。輕妙自然の筆致と評すべきか。

【血の池】 地獄にあるといふ血を湛へた池。血盆經(偽經) 集は、最も巧に地獄の描寫を盡してゐる。

【血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに唯もがいてばかりをります】

不氣味な血潮、その赤黒い血潮の中で、永久に救はれずのたうちもがく絶望的な陰慘さ。死にかけた蛙のやうに、といふ描寫は、如何にも生き／＼と少年の心に働きかけてゆく具體性の妙味がある。

【そのひつそりとした闇の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一寸ち細く光りながら、するすると自分の上に垂れてくるではございませんか】

描寫のうまさには全く神來の技といふ他はない。譬喩語勢すべて真にせまつて間然する所はない。垂れてくるではございませんか、といふ時、その驚きは單に健陀多のみの驚きではない。

【人目にかゝるのを恐れるやうに】

糸の垂れて来る様の形容であるが、即ち靜に細く音もなく下りて来る形容ではあるが、その中に罪人健陀多の氣分の微妙な陰影が宿されてゐることに注意すべきである

【健陀多はこれを見ると思はず手を拍つて喜びました】
地獄の苛責も終に健陀多の惡心を淨めなかつた。機會を見れば、何等の反省もなく、感謝も忘れ唯その苦思を逃

に「目連、血盆池地獄の中に女人許多種々の罰を受くるを見て悲哀し獄主と問答す」とある。

【どちらを見ても眞暗で】

極樂の明るく美しく平和なのに對して、地獄の陰慘な様子を一語で示してゐる。光のない、永遠に闇から闇へ流れて行く世界、思ひ見るだに恐しい。

【ぼんやりうき上つてゐるもの】 暗黒の中に、うすく白く浮き上つて見えるもの。血の池に浮き上つてゐるのではない。

【墓の中のやうにしんと静まり返つて】

物凄いやうな程ひつそりと静まりかへつて、何處か闇の中で、不斷の責苦に疲れはてた亡者のかすかなため息がひびく。その微かなため息が更にその静けさを不氣味な程深める。慄然たる静寂である。前の「どちらを見ても眞暗で」と共に地獄の恐しいみぢめさを歴々として髣髴せしめてゐる。阿鼻叫喚の狀よりも、一層に陰慘であり無氣味であることに注意。

【責苦】 セメク 責め苦しめられること、その苦しみ。責める者の立場でいふ時は呵責といふ。

【さまざまな地獄の責苦】

猛火に焼かれるとか、針の山に追上げられるとか 鐵杖で打くだかれるとか、様々なものがある、源信の往生要

げださうとする惡心の芽が頭をだす。更に忿ばつて、極樂へも入らうとする。これがやがて、彼をして、何年にも出したことのない聲で、しめたしめたと呼ばしめ(六四頁)「こら罪人ども(六六頁)に至つてすつかりその根性を暴露してしまふのである。

【一所懸命】 イツシヨケンメイ 元來、一箇所の知行を命にかけたのみとする意。轉じて一事に専心する。命がけで物事をする意となる。「一生懸命」と書くのは、本義が忘れて轉訛したものである。小學讀本では一生懸命と習つてゐる。生徒の不審に對して、親切な解答が望ましい。「今は『一生懸命』で差支ないが、元來は一所懸命から來た語であるから、正しい用字をも覚えておくやうに」といふ程度に。

【たぐる】 手練る。手元へくりよせる。

【甲斐】 カヒ きゝめ、しるし、効驗。

【存外】 ゾングワイ 思ひの外、案外、意外に。

【驚いたのと恐いのとで暫くは唯馬鹿のやうに大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしてをりました】

さすが大悪人もこれには驚いた事であらう。そのものも言へずたまげてゐる様が如實に活寫されてゐる點を注意。

【肝腎】 カンジン 肝心とも書く (一)「肝腎」は肝臟と腎

臟。「肝心」は肝臟と心臟。共に人體に至要なものであるから轉じて肝要、大切などの意となる。

【折角こゝまでのぼつて来た、この肝腎の自分まで】

悔悟も感謝もなければ一片の同情も持たない利己主義で、而も自我にのみたよらうとする増長慢が、「折角」この肝腎の自分まで、などの簡単な言葉の裏に餘す所なくあらはされてゐる。

【罪人たちは何百何千となく、眞暗な血の池の底からうようよと這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になつて、せつせつとのぼつて参ります】

眞暗な血の海から這ひ上らうとする亡者達の執念深い凄しい不氣味な光景が眼に見えるやうだ。無數に「うようよと這上つて」せつせつとのぼつて来る「亡者が黙々として一語も發しない敘述は極めて効果的である。

【こら罪人共、この蜘蛛の絲は己のものだぞ、お前たちは誰にきいてのぼつて来た。下りろ、下りろ】

「肝腎な自分」と言つた主我的な心が、殘忍な排他的言動となつて表れたのだ。自分自身の惡業を忘れて「こら罪人ども」と喚く増長慢に至つては、最早絶對に救はれない心根である。

【途端】トタン 下度その時。はずみ。(八・肉彈三勇士・五〇頁既出)

【不意に釋迦多のぶら下つてゐる所からぶつりと音をたててきました】

「釋迦多のぶら下つてゐる所から」切れたのである。生前の蜘蛛を助けた善業も、この場の淺ましい主我心の爲に一切滅却された。その眼にみえるかみえない細い絲が「ぶつりと音をたてた」といふ音象徴が、一切の終末を具體的に感銘させる効果をあげてゐる所に注意したい。

【風を切つて獨樂のやうにくるくる】
巧妙な譬喩である。

【後には唯、極樂の蜘蛛の絲が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に短く垂れてゐるばかりでございます】

簡明にその情景を描いて、實感に迫るものがある。想像的描寫の明確さには感歎の外はない。

【一部始終】イチブシジユウ (一)書物の始から終まで。

(二)事の始から終まで。こゝは(二)の意。
【悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶらぶらお歩きになりました】

悲しさうなお顔は、決して釋迦多の無慈悲な心に對する憎しみでも怒でもなく、無慈悲な心が「その心相當な罰をうけて地獄に墮ちる」その人間のあさましさに對するあはれみであり、同時に又釋迦の法力を持つてすら結局

變改し得ない世界秩序に對する諦念でもあつた。釋迦も心を曇らせざるを得なかつたであらう。然しながら一面から見れば、釋迦多に千載一遇の好機を逸した事件も、釋迦にとつては僅かに心を弱らせる一些事に過ぎない。

そこに人間のはかなさがあると共に釋迦の天理そのものの絶對性が示されてゐるものとも言ひ得る。

【無慈悲】ムジヒ 慈悲の心が無い。あはれみの心が無い。

「慈」はいつくしむこと。樂を與へてやること。「悲」は、悲痛を去除してやること。

【あさまし】(一)あさはかである、思慮が浅い。(二)意外で驚くほど甚しい。(三)あきれかへる、興さめる。(四)いやしい、きたない。こゝは(一)の意。

【頓著】トンヂヤク、又はトンチヤク 佛語の貪着より轉じた語だといふ。(一)佛語。多く求めて厭足する所のないのを貪といひ、貪心の固著して離れないのを著といふ。

2 文の構成

第一節 初一六〇頁六行 極樂のお釋迦様のこと。

- 1、極樂の朝の平和な様子。(初一五七頁六行)
- 2、お釋迦様がふと蓮池の底に地獄をお覗きになつたこと。(五七頁七行—五八頁三行)
- 3、その地獄の底に蠢いてゐる大惡人釋迦多にたつた一つ蜘蛛をたすけた善事のあること。(五八頁四行—五九頁七行)

(二)轉じて、ものにかまふこと。懸念。こゝは(二)の意。

【蓐】ウテナ 「蓐」は「蓐」に同じ。植物學上「がく」といふ。

【その眞中にある金色の蕊からは、何ともいへない好い匂が絶間なくあたりへ溢れてをります】

この一句は書だしの一句と全く同じ描寫である。これは氏のよく用ひた技巧で、一切の事件をよそに圓滿具足の極樂淨土が永遠に明るく美しく平和な情景に終始してゐることを現すに、この反復は極めて効果的であつた。

【お午】おヒル まひる、正午、午の刻。

【極樂も、もうお午に近くなつたのでございます】
初の「極樂は今、朝なのでございます」の一句と呼應し、この事件の経過した時間の推移を示して、話全體の具體感と立體感とを一層濃厚にしてゐる。

4、お釋迦様はそのたつた一つの善事を思ひだされて救ひ出されようと蜘蛛の糸をお垂れになること。(五九頁八行—六〇頁六行)

第二節 六〇頁七行—六七頁六行 地獄の健陀多のこと。

1、地獄の血の池の底にもがへ健陀多の様子。(六〇頁七行—六一頁九行)

2、蜘蛛の糸が下つて来るのをみつけた健陀多が手を拍つて喜び、早速それに縋りついて上りはじめること。(六一頁一〇行—六三頁三行)

3、途中で疲れて一休みし、既に遠く地獄を遠ざかつた事に歡喜の叫を上げたこと。(六三頁四行—六四頁一〇行)

4、ふと氣がつくと後から地獄の亡者がうようよ上つて来る。健陀多は驚き且恐れ、終に無慈悲傲慢にも、こら罪人共下りろと喚いたこと。(六四頁一一行—六六頁八行)

5、その瞬間蜘蛛の糸はぶつり切れて健陀多は風をきつてまた地獄の底に墮ちてしまつたこと。(六六頁九行—六七頁六行)

第三節 六七頁七行—終 再び極樂のお釋迦様のこと。

1、一部始終を御覽になつてお釋迦様が悲しさうな顔をなさつた。(六七頁七行—六八頁四行)

2、やがて午になつた極樂の依然として美しく平和な様子。(六八頁五行—終)

3 文意

洪大無邊の慈悲を持つ釋迦は大惡人健陀多のたつた一つの生前の善行の故にこれを地獄から救ひ上げようとなさる。然し彼の無慈悲と利己心と増長慢とはその心相當の罰をうけて永遠に奈落の底に沈んでしまふ。その釋迦の絶大な慈悲心とそれを以てしてすら如何ともし難い世界秩序の嚴肅さとが、童話によつて具體化されたのである。

4 鑑賞批評

永遠の世界秩序の中に於いて、人間の一切の行爲欲望は一絲亂れぬ因果律によつて支配されて行く。無慈悲や増長慢や或は利己主義的なものは、すべてそれ相當の罰を受けるといふのが此の童話の主題である。その主題と表現とが渾然として融合し氣韻の高い藝術的香氣を醸し出してゐる。悠久の樂土極樂を物語の前後に敘述し、それを地獄と對照させることによつて、そこに釋迦の絶對性と人間の淺ましさをくつきりと浮び上らせてゐる巧妙な構成から初めて、物語を劇的に現實化してゐる手法、優美にして的確な想像的描寫より、更に細かい修辭上の技巧に至るまで全く間然する所がない。誠にこれ單なる童話としての二義的作品ではなくして、寧ろ作者の至人格的感動を透して描かれた立派な藝術作品なのである。而も飽まで子供の爲に子供の世界を離れず、優しくしとやかに興味深く純眞な子供の内心の反省に訴へ、その和い情操の芽生えに健全な成長の糧を與へて行く。さうした新しい童話として蓋し稀にみる逸品であらう。

三 備考

1 指導研究

(一) 單に「面白い童話」として表面的に讀過してしまはないうやう、飽まで心の糧として生徒の精神生活に訴へて行く風な工夫が拂はねばならない。然し言ふまでもなく文藝教材であつて道徳を説き處世の教訓を授ける修身教材ではない。すべて生徒の「讀み」を通して生徒の疑問感想批評等を整理し、深く深く掘り下げて行く態度で臨むべきで、簡單に教訓で片づけたり、理窟で理解させる事はさげねばならない。そしてそれを單なる地獄極樂の物語としてでなく、生徒の身のまはりの日々のお出来事に結びつけて、思索し反省し、新しく眼をひらいて周圍をみなほさせたい。釋迦の愛のみでない、この世には無数の救ひの手が垂れてゐる。それにも拘らず、頑であつたり、依怙地であつたり、又自らの驕慢や自惚のた

めに、その救ひの手をみつける事も出来ないし、又折角それに縋つても途中でそれを絶たれたりするやうな現實の姿は、生徒の周圍に數限りなく存在するであらう。さうした現實の姿に結びつけて更に深く社會秩序の嚴かさによれさせて行くやうにしたい。

(二) 構想の妙、間然する所なき修辭上の技巧、實感をもつて迫る想像的描寫のすばらしさなど、それらがこの物語を藝術的香氣の高い作品たらしめた所以の一つである事を知らしめて反復玩味させたい。

(三) 地獄・極樂、或は釋迦等かなり詳細な解説を施しておいたが、これは全く教授者の參考の爲にしたもので、その説明の取捨案配は此の童話の鑑賞の上にはかなり重要な意味を持つて來ると思ふ。適當に考慮をめぐらして、地獄の凄慘な情景や、また極樂の平和な雰圍氣を生かして、これを物語の背景とし、事件を立體的に劇的にせり上げて行きたいものである。

2 參考

(一) 挿繪 芥川龍之介肖像(寫眞)

瀧野川區田端の自宅の書齋澄江堂で撮影したものである。撮影年月は不明だが寫眞の右隅に「病我鬼」のサインがあるから、氏の自殺前の既に神經衰弱に悩んでゐた頃のものではないかと思はれる。併し理知派の名を以て呼ばれる作者らしい聰明冷徹な風貌を窺ふに足るものである。

(二) 地獄の圖(河鍋曉齋筆)

明治大正名作大觀から轉載した。原畫は縦六尺六寸横一丈餘(絹本)の大作で、昭和二年東西朝日新聞社主催明治大正名作展覽會に出品されたものである。曉齋の慶應元年の作で、今東京帝國博物館所藏。

河鍋曉齋名は陳之。下總國古河の人。初め猩々齋と號し歌川國芳の門に入り、浮世繪を學び、後狩野洞白について狩野

派の畫法を修め、また鳥羽僧正の筆意にならつて一種の狂畫をも描いた。明治三年酒興の戲畫が禍して投獄され、後曉齋と改めた。十四年第二回内國勸業博覽會に「枯木寒鴉」を出品して大いに畫名をあげた。明治二十二年歿。享年六十二。

(三) 本篇は「カラマゾフ兄弟」(ドストイエフスキイ著)所載(第七編第三)のロシヤ古傳説「葱」の話からヒントを得て書いたものらしい。次にその一節を掲げる。

昔々ある所に意地の悪い悪いお婆さんがゐたんですとき。それが死んだ時、跡に何一ついゝ行が残らなかつたので、惡魔はお婆さんを捕まへて火の湖へ投げ込んぢやつたの。ところが、お婆さんの守り神の天使は、何か神様に申し上げるやうないゝ行が、あのお婆さんにないか知らんと、じつと立つて考へてゐるうちに、やつとある事を思ひ出したので、神様に向いて、あのお婆さんは畑から葱を抜いて來て、乞食女にやつた事がありますと言つたのよ。すると神様は、ではお前一つその葱を取つて來て、湖の中にお婆さんの方へ差し伸べて、それに掴まらして手ぐるがいゝ。さうしてもし首尾よく湖の外へひき出せたら、お婆さんを天國へやつてもよい。もし葱がち切れたら、お婆さんは今の場所へそのまゝ置かれるのだぞ。とかういふご返事なんですとき。天使はお婆さんの處へ走つて行つて、葱を差し伸べながら、そら、お婆さん、これに掴まつてお手ぐりとやつて、そろつと氣をつけて引き始めたのよ。さうしてもう大方ひき上げようとしたところへ、湖の中にお婆さんの餓鬼共が、お婆さんがひき上げられてゐるのを見て、自分等も一踏に出して貰はうと言ふので、みんなでその葱に掴まり出したの。すると、そのお婆さんは意地の悪い悪い女だから、みんなを足で蹴散らしながら、引いて貰つてゐるのはわたしだよ、お前さん逞ぢやありやしない。わたしの葱だよ、お前さん達のぢやありやしない、とかういふが早いか、葱はぶつりと切れちやつたのよ。そしてお婆さんはまた湖へ落ちて、今までずつと燃え通してゐるんだつて。天使は泣く泣く歸つてしまひましたとき。(米川正夫譯)

(四) 「蜘蛛の絲」に對する相反する二つの批評を次に掲げる。本課鑑賞上面白い資料になると思はれる。

A 試みに「蜘蛛の絲」を見よ。……つまりは、自分ばかり地獄から抜け出さうとするこの男の無慈悲な心が、その心相當の罰を受けたいふのである。作者はここで、極り切つた秩序ある世界をやすく受け入れて、そこに何等の懷疑の苦をも感じてゐない。著

振りが童話として書かれたらしく思はれるが、作者の心持までも童話の世界に安んじてゐる。私はこの頃「ガリベア旅行記」を読み直したが、ここに描かれた童話の世界を見詰めてみると、寒風に肌を劈かれる思がされる。それに比べると「蜘蛛の絲」などの童話の世界は、ストーブで温められた温室的書齋での假寐の夢に過ぎないやうに思はれる。(正宗白鳥著「文壇人物評論」)

B 童話として書いただけに、内容形式共に(正宗白鳥)氏の所謂「寒風に劈かれる思ひ」などは感じられない。が、童話風の豊かな上品な書振は、何とわれわれの心を捉へることか。由來童話は、心の芽の和い子供等に與へるべきものである。白鳥氏の右批評は餘りに氏好みの嫌がある。健陀多のエゴイズムをこらすに蜘蛛の絲を以てした作者の力量を寧ろ嘉すべきであらう。首尾一貫童話の逸品たるを失はない。(竹内眞著「芥川龍之介の研究」)

二 カルサンと米

島 木 赤 彦

一 解 題

1 作 者

島木赤彦 シマキアカヒコ 本名久保田俊彦。二水軒・伏龍・山百合・柿人・柿の村人・柿蔭山房主人などの號もある。明治九年十二月長野縣諏訪郡諏訪町に塚原家の四男として生れ、二十一歳の時久保田家の養嗣子となつた。三十一年長野縣師範學校卒業。爾來十六年間三十九歳まで初等教育に従つた。師範學校在學時代既に和歌に興味を持ち、萬葉集に親しみ、特に正岡子規提唱の根岸短歌會の歌風を慕ひ作歌に熱中した。後専ら伊藤左千夫に師事し、その作品を「馬酔木」「アカネ」等に發表した。四十一年病の故を以て一時退職して歌道に精進し、雑誌「アララギ」の發行されるや投稿して次第に頭角を現した。大正三年教育界を去つて上京し、萬葉風の和歌の創作と研究に没頭し、傍ら淑徳高等女學校に國語を教へた。又「アララギ」の編輯にたゞさはり、以來歿年に至るまで長くアララギ派歌人として歌壇に重きをなしてゐた。十五年三月胃癌の爲長逝した。享年五十一歳。

歌集に「山上湖上」(太田水穂)「馬鈴薯の花」(中村憲吉)「氷魚」「太虚集」「柿陰集」「島木赤彦」十年等があり、歌論に「歌道小見」「萬葉集の鑑賞及び批評」の好著があり、又童謡をよくし、この方面に「赤彦童謡集」「第二赤彦童謡集」「第三赤彦童謡集」等を數へる事が出来る。今總べて赤彦全集に收められてゐる。

2 出 典

本課は赤彦全集第六卷「カルサンと米」の殆んど全文である。大正十四年六月稿せられ、七月大阪朝日新聞に掲載せられたものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

歌の價値を決定するものは人間の眞情であるといふ思想が本編の中心題目である。一はカルサンを以て山形縣から上京した友の話であり、一は信濃の山中から一斗の米を携へ來つて作者に贈つた友の話である。その何れの友も眞實素朴なことに天衣無縫とも言ふべき、眞情の溢れた人々であつた。作者はそこに人間的な美しさ尊さを見出して感歎し且温い感謝の心でこれに觸れてゐる。そこから此の文は生れた。而もそれが、自分自身かうした素樸な眞情を希求して止まなかつた作者の心情を基調にして、極めて高雅なユーモアを持つた趣致の間に發揮され、特殊な文藝的價値を形成してゐる。主としてその文藝的價値の鑑賞によつて心情の陶冶に資すべき文藝的教材であり、併せて生活指導の人間の教材である。

二 解 釋

1 語 釋

【カルサン】 輪衫 ポルトガル語(Calcao)の轉訛と云ふ。股引に似た袴で、足利時代末渡來した南蠻人著用の寛濶なズボンが我が國風に變改されたものかと思はれる。初め輕袴といつて、武士の旅行用として用ひられたが、次第に労働者階級に普及し、殊に元祿時代に流行した。その後次第に廢れて、今は奥羽地方はじめ多く寒い地方に用ひられてゐる。動作に便利である所から労働用のみならず、老幼男女これを常用してゐる地方もある。生地は普通木綿縮・瓦斯縮・紺木綿等であるが、地方により外用としてセル又は絹物でつくる所もある。地方によつて「もんべい」「たつつけ」「裾細」等とも呼ぶ。

【歌の友人】 結城哀草果氏である。(九・河鹿と山鳩參照) 【億劫】 オククウ 億劫の轉訛。(一) 佛語 一劫の億倍の時間。無限に永い時。(二) 久しく暇のかゝること。手間のかゝるのを豫想して著手に氣の乗らぬこと。容易く

ないこと。面倒なこと。こゝは(二)の意。

【劫】 梵語劫波(Kalpa)の略。長時・大時などの意。劫には種々の説明があるがその一二をあげると、大智度論に「佛、譬喩を以て劫の義を説く。四十里の石山を長壽の人ありて、百歳ごとに一度來りて、細軟の衣を以て拂拭し、此の大石を盡すも劫は未だ盡きざるなり。又四十里の大城に芥子を滿たし、長壽の人ありて、百歳に一度來りて、一の芥子を取り、芥子盡くるも劫はなほ盡きざるなり」とある。

【新調】 シンテウ (一) 新しく調へる。新にこしらへる。(二) 新しい調子・新曲、こゝは(一)の意。

【耕作】 カウサク 田畑を耕して穀物野菜など作ること。

【木樵】 キヨリ 「樵」又は「樵夫」と書く。木を伐(こ)ること。

【紺無地】 コンムヂ 紺は藍の濃い色。無地は織物に模様などなくて、全面同じ色であること。又その織物。

【他出用】 タシユツヨウ 外出用。よそゆき。

【容易ならぬ】 ヨウイならぬ 貴重でおろそかに出來ない。都會人の滑稽なりと笑殺するであらうそのカルサンが、實は友人には「容易ならぬカルサンである」と言ふ代辯である。この軽いユーモアの中に、既に作者の温い心が現れてゐるではないか。

【奥羽線】 アウウセン 奥羽本線。福島を起點に米澤・山形・秋田を経て青森市に至る。全長四八七・四軒。

【一山驛】 イチサンエキ 山間の一停車場。こゝは奥羽本線金井驛(上ノ山・山形兩驛の間に在る)を言ふのであらう。

【上野驛】 ウヘノエキ 東京市下谷區上野山下町にある。東北本線・信越線・常磐本線等の起點で、省線電車山手線・京濱線・東京地下鐵道線等の諸鐵道が此處に連接されて東京市の北玄関である。

【絶無】 ゼツム 絶對にない。皆無。【衆人注視的】 シユウジンチュウシのマト 多くの人々が注意してみつめる目標。「注視」は視力を集中させる。「的」はめあて、目標などの意。

【敏感】 ビンカン 鋭敏な感じ。微細なことをよく感ずること。

【近代人】 キンダイジン 近代思想の感化をうけた人。近代は(一)今の世。近世。(二)歴史上の區分では近世より後、即ち我が國では明治以後。西洋では十九世紀以後。こゝは(一)の意。

【上野驛についていよいよ東京の土を踏んでも相變らず山形縣山中の農人であつた】 東京に來ても依然カルサン姿の山形縣の農人である。汽

車の中で衆人注視の的となつたのですら無理はない。而もそのまま上野驛頭に下り立つたのだ。近代人のうようよとしてゐる東京で、それはどんなにか滑稽であつたらう。外形的にはたしかに滑稽な一風景である。然し作者の見出してゐるものは、單なるユーモアではなく、衆人の注視を氣づく程敏感でない、むしろ重厚な素朴な眞實さであつて、作者はそれに對して感歎に近い温い心で描きだしてゐる事に注意すべきである。

【この農人は】 近代人の中にカルサン姿で立つてゐる友人の異様な姿が「この農人」といふ一見不用意と思はれる言葉の中に、躍如として現れてゐる事を注意したい。

【市内電車】 シナイデンシャ 舊東京市の交通に當つてゐる東京市營の路面電車を、省線電車その他の私設電車などと區別する爲に呼ぶ稱。

【麴町にある私の宅】 東京市麴町區下六番町二十七番地作者の居宅。作者は一時東京市外山谷に移り住んだが、十三年以來ふたたびこゝに居住した。こゝは初の居住時代。上欄麴町區麴町としたのは編纂の際の匆忙に紛れた誤であるから訂正されたい。一般に東京で住居の所在を言ふ時は、大方その區名で言ひ、町名を指す事は稀である。

【麴町】 カウチマチ 東京市麴町區、外濠に圍まれ、内濠を隔て、宮城を擁し奉り、全市の中央部に位する。宮内

省・内閣・樞密院（以上宮城内）内務・大藏・陸海軍の諸省をはじめ、貴衆兩院・大審院・警視廳・參謀本部・東京府廳その他の樞要な諸官衙を網羅して政治的中心であり、又東京驛を中心に多數のビルディングが聳立し、一流の銀行・會社・新聞社等がこれに據り、經濟的中心をも形づくつてゐる。

【いきなり目の前に留つた電車に飛び乗つた】

何とも無茶苦茶な行動である。農人らしい當惑ぶり狼狽ぶりが窺はれると共に、その積極的行動は、如何にもカルサンをはいて上京した人らしい性格を現してゐる。

【車掌】 シヤンヤウ 汽車・電車・乗合自動車などの車内一切の事務を扱ふ人。

【縁】 エン ゆかり。かゝはり。關係。

【停留所】 テイリユウウジヨ 電車・乗合自動車の停留する一定場所。

【S町】 と呼ぶ車掌の聲が聞えた。彼はそれを聞くと直ぐ電車から飛び下りた】

「何の爲に飛び下りたのだらう」と讀者の疑問で興味をつなぎ、その後の行動を敘し、最後に「自分等の雜誌のため感謝の意を表せずにはゐられなかつた」と、その理由を説明して行く手法は巧妙である。それにしても何と言ふ自由な思ひ切つた行動であら

う。「S町」ときくと、N書店を思ひ出す。感謝の意を表さうと思ふ。すぐ飛び下りる。そこに何のこだはりもない。天衣無縫、眞情の發露といふ他はない。

【S町】 原文には「神保町」とある。市内電車の停留所。東京市神田區神保町及び同區表猿樂町・中猿樂町に接する交文點にある。

【N書店】 原文には「岩波書店」とある。當時の岩波書店は編輯部も小賣部も神田區南神保町にあつた。

【歌の雜誌】 ウタのザツシ 月刊の短歌雜誌「アララギ」である。

「アララギ」は正岡子規の歿後その門人によつて發刊された「馬酔木」の後をうけて、明治四十一年一月千葉縣に於いて創刊された。翌年九月その發行所を東京に移し、伊藤左千夫を中心に、長塚節・島木赤彦・平福百穂・石原純・齋藤茂吉などがこれに據つた。大正二年左千夫歿後、赤彦・純・茂吉等が協同主宰し、七年頃から赤彦が専ら編輯に當り、大正十五年赤彦歿後は茂吉が編輯主任となり今日に及んでゐる。アララギの歌風は大正二年頃から勃興しはじめ、その現實主義的萬葉調はアララギ派と稱せられて、長く歌壇の主流をなし、その間森山汀川・土田耕平・結城哀草果・今井邦子等多數の作家を世に送つてゐる。

【奥附】 オクツケ 出版書の巻末に附け添へて著者・發行印刷者の名前・發行年月日等を記した紙。

【一方ならぬ】 ヒトカタならぬ 一通りでない。なみなみでない。

【御厄介】 ゴヤクカイ (一) 災厄を救ふこと。(二) 世話、介抱。(三) 手数のかゝること。面倒なこと。煩はしいこと。こゝは(二)の意。世話になる。

【カルサン姿は】 前段で「農人」と言ひ、此處で「カルサン姿」といふは變化を持たせると共に、ある滑稽感を現してゐる。

【店頭】 テントウ みせさき。

【驚異】 キヤウイ (一) 驚きいぶかる。物事の不思議さに驚く。(二) 轉じて物事の目ざましさに打たれる意となる。こゝは(一)の意。

【主人も目の前の農人姿には少からず驚異の目をみはつたらしい】

店に番頭や小僧もゐたであらう。その人々の驚が少しも書かれてゐない。併し「主人も」の「も」に注意された。店頭の人々の驚を書いてないだけ、反つてその驚の大きさがおしはかれるではないか。

【山形辯】 ヤマガタベン 山形ことば。山形地方特有のことば。

「辯」はことば・ことばづかひ・もののいひぶりなどの意。
【來意】 ライイ (一) 來訪した趣意。(二) 申越の趣意。
ここは(一)の意。
【彼はそんな事には構はず、山形辯を以てずんずん自分の來意をつけた】

「カルサンで上京した」「S町ときいてすぐ飛び下りた」
農人の性格が、こゝにも歴然として現れてゐる。一切無頓着に、唯自分自身の感謝を傳へようとするひたむきな眞實の溢れた、而も何と線の太い野人であらう。

【厚意】 コウイ あつち志。厚情。親切。

【蒙る】 カウムル (一) かうぶる。かぶる。頭に被ふこと

(二) 表面を被ふ。(三) 他から働きをうける。負ふ。受ける。(四) 「受ける」の敬語。ここは(四)の意。

【たまたま】 偶・適・會などの字をあてる。(一) 稀に。たまたかに(二) 折よく偶然。ふと。こゝは(二)の意。

【これこれの人】 かくかくいふ人。「これこれ」は一つ一つの名を挙げず概括していふ時に用ふる語。「しかじか」「かくかく」「うんうん」などいふに同じ。

【畫餐】 チュウサン 畫食・午餐。餐は(一)(動詞)のむくらふ。(二)(名詞)のみもの・くひもの。

【申し越す】 マヲ(ウ)シヨス「申しおこす」の略。申し來る。言つてよこす。

【滞在】 タイザイ 旅先で一時間一所にとまつて宿ること。逗留。

【掌】 タナゴコロ てのひら。たなうら。たなそこ。

【一旦】 イツタン 一朝又は一日より轉じた副詞。一時一度。

【食べる時は、一旦額の邊まで上げて頂いてから食べる】

「いかに勿體ないといふ様子で」「これは何錢ばかりか」と聞く。それだけで如何にも素朴な純眞な姿である。而もそれを押頂いて食べるに至つては、最早そこには全く物と心との隔はなく、宗教と經濟とが一如の姿で生きてゐる。成程近代人の眼から見れば滑稽味の感じられる異風景であらう。然しその滑稽味の裏に、我々の遠い祖先達の姿を、又心の故郷を見出すと共に、純朴な人間の貴さを必々と感じ得るのである。

【國許】 クニモト (一) くにおもて。故郷。(二) 領地又は主君の領地。ここは(一)の意。

【話をしながら時々羽織を氣にして手で撫でる。聞けば國許出立の時、父上から借りて著てきたのださう。ある】

純眞可憐そのものである。何事も隠す事のできない、又隠さうともしない、あけはなしでありのまゝの姿は、微笑ましい。本當に美しい貴い姿である。

【歌仲間】 ウタナカマ 歌上の友達。

畫伯。

【展べて】 ノべて ひろげて。平にひろげ敷いて。

【肖像】 セウゾウ その人の容貌に似せた繪畫又は彫刻などの像。

【友人はいかにも恥づかしさうにして坐つてゐた】

田舎者ははにかみ屋である。あけはなしで無頓着であるが厚面しさは微塵もない。作者が「農人」と言ひ「カルサン姿」といふその人の風貌が、この短い言葉の中によく現れてゐる。

【貴重】 キチヨウ 極めて大切なこと。

【菓子さへ頭上に頂いて食へるこの友人が、畫に對して感謝の詞を述べない。あとで、この肖像畫の非常に貴重であることを話すと大いに驚いた。そして明日お禮をいひに連れていつてくれといふのである】

當時すでに百穂は帝國美術院の審査員であつた。前に菓子さへ勿體なさうに頂いて食へた人が、今畫伯からの肖像畫の贈物に一言の感謝を言はない。知らないのである。知らなければ知らないまゝに振舞ふ。輕薄なお世辭や御愛想などは微塵もないのである。併し一旦貴重であるときけば卒直に心からそれを受入れて疑はない。そして矢も楯もたまらず直ぐにも行つて不明をわび、感謝の心を表さずにはゐられない。眞實の貴さである。純眞

【畫伯】 日グワハク 原文には「平福百穂畫伯」とある。

【平福百穂】 ヒラフタヒヤクスキ 本名貞藏。明治十年二月秋田縣仙北郡角館町に、明治畫壇の巨匠平福積庵の第四子として生れた。二十七年上京、川端玉章の門に入り、次いで東京美術學校日本畫科に學び、三十四年無聲會會員となつた。四十年國民新聞社に入社し、畫報を擔當した。大正三年第八回文部省美術展覽會に「七面鳥」を出品して三等賞を受け、翌年出品の「朝露」は宮内省御買上の榮を蒙り、六年「豫讓」が特選になるに及んで聲名が漸く上つた。八年帝國美術院の設置と共に無聲會に推薦され、十一年同院美術展覽會審査委員となり、爾來屢同展覽會委員又は審査員となり、十四年には「丹鶴青淵」を御物に薦めた。昭和五年文部省在外研究員として渡歐。歸朝後帝國美術院會員となり、七年東京美術學校教授。八年十月歿。年五十七。前出の外「千鳥」「堅田の「休」「蓮華寺和尚」「苧草」「高原」「春の山」等は氏の傑作と稱せられてゐる。

氏はまたアララギ派の歌人として、雑誌「アララギ」創刊以來同人で多くの短歌・隨筆等を發表し、歌集「寒竹」がある。

【畫伯】は(一) 繪畫の道に長じた人。(二) 轉じてその敬稱。ここは(二)の意。「伯」は一藝に通じた者、例へば詩伯。

無垢とは蓋しかういふ風格をいふのであらう。

【優秀】 イウシウ 優れ秀でてゐること。

【作歌】 サクカ (一)歌を作る事。(二)作つた歌。こゝは(一)の意。

【素樸】 ソボク 人為人工を加へず原始のまゝのこと。いっはり飾りなくありのまゝのこと。「素」はきちぢ。したぢ。飾のないこと。天真。天質。「樸」はあらし。全く人為を加へない伐りだしたまゝの木材。轉じてありのまゝで飾らないこと。

【眞情】 シンジャウ (一)まごころ。(二)眞實の事情。こゝは(一)の意。

【今一人の友人】 兩角七美雄氏のこと。氏は長野縣諏訪郡豊平村の人。明治二十七年十一月生。アララギ派の農民歌人。

【信濃】 シナノ 古の東山道十三國の一。現長野縣の地。

【その友人の上京した時】 大正七年三月。

【土産】 ミヤゲ (一)旅先からその土地の土産を持ち歸つて家人に贈るもの。いへづと。(二)二人の家を訪問する時持つて行く贈物。こゝは(二)の意。

【面倒】 メンダウ 物事をするのが厭はしい。手数のかゝること。「面倒言ふ」は「ぶつぶつ小言をいふ」といふ意。【重かつたらう】といへば「汽車の中はただだから重いこゝろ」。

「とはない」といふ。「電車に乗るに困つたらう」といへば「米を背負つて乗らうとしたら、車掌が面倒言ふから歩いて来た」といふ]

あるがまゝに考へ、あるがまゝに行動して、そこに何の滞る所もない。一斗の白米の持参ふりと、そしてその質樸明らかな性情・風采が躍如として微笑ましい會話である。

【私はそのころ雑司ヶ谷龜原に住んでゐた】

作者は大正六年五月、郷里より妻子を呼び東京市外雑司ヶ谷龜原(現東京市豊島區雑司ヶ谷町一丁目)に居を構へ、七年五月に及んだ。ついで作者は七年五月小石川區關口町に移轉、前話の麴町の住居はその八月に轉住した地である。

【飯田町停車場】 イヒダマチテイシヤチャウ 東京市麴町區飯田町五丁目にある驛。舊中央線起點。現在は貨物専用驛となつてゐる。

【偉大】 キダイ すぐれて大なる事。大きく立派なこと。

【偉大な土産をくれたね】といへば、「東京は米が高いといふから持つて来たのだ」といふ]

「東京は米が高いといふから」といふ言葉は如何にも打算的にきこえるが、然し作者にはそれは「偉大な贈物」であつた。その飾らない眞情を買つたのである事は言ふまゝ

人の厚意が有難い。こゝは(二)の意。

【玄く】 タロク 赤黒い。精白のしかたが不足してゐるのである。

【根氣】 コンキ 物事に久しく耐へ忍ぶ力。精力・氣力・精根。

【添ふ】 カタジケナシ (一)もつたない。恐多い。(二)

2 文の構成

(一) カルサン著用のまゝ上京した山形の歌友の話。

第一節 初―六九頁四行 友人が生れて初めて上京を決心したこと。

第二節 六九頁五行―七〇頁七行 新調のカルサンを著用して上京する素樸さ。

第三節 七〇頁八行―七三頁一行 狼狽して飛び乗つた電車がS町につくとすぐ飛び下りてN書店を訪ね、日頃自分等の雑誌への厚意に對する感謝の挨拶をするその眞實さ。

第四節 七三頁二行―七三頁七行 作者宅に滞在中の友人の行動が素樸と眞情そのものであつたこと。

第五節 七三頁八行―七四頁五行 一夕H畫伯と晚餐を共にして、肖像畫をおくられた時の話。

第六節 七四頁六行―同頁八行 友人の作歌の優秀なのはその素樸眞情にもとづくこと。

(二) 白米一斗を土産に持参した信濃の友人の話。

第一節 七四頁九行―七五頁一〇行 信濃からわざわざ白米一斗を背負つて上京した友の純眞素朴なその心情と風貌。

第二節 七五頁十一行―七六頁三行 その友人の厚意に對する作者の感謝。

第三節 七六頁四行一終 この友人の歌の優秀さはその根氣と眞情によるものであること。

3 文意

一は山形のカルサン姿で上京した歌友の、東京についてもその服装を變へるでもなければ、又不案内な東京でS町ときけばすぐ飛び下りてN書店を訪ねたり、或は菓子を押頂いて食べたり、父から借着の羽織を撫でまはしたり、又天下第一の畫家に肖像畫をもらつても一言の感謝もいふべないと思へば、それが貴重なるものである事を知ると直ぐにお禮に行くと言ひだしたり、それこそ全く純眞無垢と言ふべき農人の話である。二はこれも信濃の奥から白米一斗を背負つて來て作者におくる歌友の眞情と根氣を物語るものである。そしてこの二歌友の作歌の優秀さは何れも素樸眞情によるものであると結論を下してゐる。要するに作者はこの二歌友のそれぞれの行動を通して天真爛漫な眞實の心情の貴さを敘述したのである。

4 鑑賞批評

山形の友も信濃の友も度々繰返したやうに、天衣無縫とも言ふべき程天真爛漫眞情に溢れた人であつた。併しその素樸眞實の中に存在する貴い眞實性を希求してやまない作者その人の温い心によつて描かれなければ、これ程に豊かな明るさを持つ事はできなかつたであらう。加ふるにさういふ人間の貴さを喜び、作者をも共に招いて饗應したN書店主や、晚餐を共にして肖像を描いてくれたH畫伯の厚意や、それらが相寄り渾融して、一層濃やかに床しく美しい雰圍氣を醸成してゐることを見落してはならない。殊にこの素樸そのものの野人を、近代都市東京の中に置いた不調和から、一種のユーモラスの趣をだしてをり、そのユーモアが作者の温い心を透過して來る爲に言ふに言はれぬ高雅なものにされてゐる。

修飾のない素直な、寧ろ無技巧とも思はれる敘述をもつて、二歌友の性格風貌を如實に現してゐる點、この文も亦これ眞實の底から滲み出たものと稱すべきであらうか。

三 備 考

1 指導研究

(一) かうした人物を外面的な風貌から蔑視したり冷笑したりするのが此の時代の生徒の傾向である。恐らく生徒の讀みによつて意識する所はその滑稽感に止るのではないかと思はれる。そこを一步掘り下げ、その滑稽感の底に描かれた農人的な純眞素樸の美しさ貴さを知らしめる事によつて生徒の眼をひらいてやらなければならぬ。

(二) 山形の友、信濃の友S町N書店H畫伯など原文ではみなそのまゝの名で書かれてゐるが、特殊の事項の爲に本文中にはみな別の符號を用ひた。教授者の一應心得て置くべきものとして解釋中には掲げて置いたが、教授上深く鑿穿したりしない方が教授はかへつて圓滑に運ぶのではないかと思はれる。

2 参考

(一) カルサン姿で上京した結城哀草果氏の歌を歌集「山麓」から拔萃する。

日もすがら汗をながして掘る薯は早にやけて小さかりけり。

藁塚のなかに見つけし鼠の兒眼あかぬゆえ罪なかりけり。

しとしと雨の降る夜のこほろぎはあまたは鳴かず鼯のべに鳴く。

ひとり黙して稻刈る小田の近くにしながらる川よ音たてながら。

稻を刈り濡れて歸るにわが妻は南瓜を熱く煮て待ちをれよ。

磐城のやまに朝夕たつむり炭焼く秋となりけるかも。

(二) 米を背負つて上京した兩角七美雄氏その頃の歌を同歌人の自撰によつて左に掲出する。

一一 カルサンと米

路の土いまだこぼらぬ青の程杉の木蔭に月ののぼれり。
たまさかに雪のまひ来る軒下に肉まだ温き雉子を裂けり。

雪解雨いち日降りて吾がこもれる土室の戸口ゆ水這入り來つ。

夜ぞふけにし山裾原のくらがりにあやしきほどにもゆる火の見ゆ。

土室に焚火燻りて奥に居る人の光れる眼は見ゆる。

いち目を土室にこもりてかうむりし衣服の埃りはたきおとせり。

待ちたりし雨今日は降りこもり居のわが軒下に水たまりたり。

この日ごろ冷えにあたる吾が體のわづらひ出して土室に居られず。

(三) 結城哀草果氏自身の當時の追憶を同氏の隨筆集「村里生活記」から採録する。

大正十年のはじめ、私が山形のモンベ姿ではるばる上京して、何よりも先に岩波書店を訪ねると、主人の岩波さんが非常によろこんで下さつて、或る夜小石川の本宅にお招きして下さつた。(中略)岩波主人と私とが、赤彦先生のお出でになるのをお待ちしてをる間に主人は私に「久保田さんは今日信濃から汽車に揺られて著かれたから、さぞ疲れて見えられるだらう」と話された。しばらくたつてお出でになられた先生は非常なご元氣だつた。あの健康な體軀、大きな眼に慈愛が溢れてある。私は非常に感激して先生に初対面の挨拶をした。その夜信濃の山嶽を思はせるやうな、久保田・岩波の二氏が私の前に對坐されて愉快に談笑された。その談笑に、私の小さな魂は大きな愛撫をうけすべてが感激に終始した。先生と私とは可成の夜更けに、岩波さんにお暇をつけて、先生は麹町の發行所に自分は巢鴨の小川千麿さんの家に歸つた。

翌朝私は何時もより早く起き、千麿さんの門前の小さな廣場に出て、霜柱を蹴りながら東京の晴れた朝空を仰ぎ、冷たい空気を心ゆくまで吸つた。そして非常によい氣持になつてゐた。

千麿さんから電車の切符をいただき、乗替のことをこまごまと教へて貰つて、どうにかかうにか一人で發行所に行き着くことが出来

得た。そして自身は少からず得意になつてゐた。赤彦先生はもう自分を待つて居られた。先生の案内で百穂畫伯を訪問する日程である。先生は元氣に私の前を歩いて行く、そしてなかなか早い。自分はときどき走りながら附いてゆくと、先生は振り返られて、「齋藤がやらなくともな、心配する事はないよ、俺がをるんだから」と言はれて、眼を大きく見張られた。

二人は四谷見附の三河屋で肉をつまきながら極少々酒を飲んだ。先生は酒を飲みながら、自分にいろいろのことをお聞きになられる。君が煙草をのまんのはよいことだ。僕も齋藤もあまりのみすぎでいけないなどを言はれた。酒は飲まれるか、少々ならよろしいだらうと言はれる。女は好きかとお聞きになられたので、女は大抵好きですが、たまには嫌ひな女もあります、と申し上げると、大抵好きですはなかなかよいと言はれて先生が笑はれたので、私は赤い顔をした。

上目黒の百穂畫伯のお宅をお訪ねする前に、その當時畫伯の近隣にお住ひになつてをられる山本信一さんのご遺族を訪ね、まだ新しい信一さんの遺骨の前に先生と自分は交るがはる低頭して、恭しく香を焚いた。先生の大きい眼は涙でくもつてをつた。先生は山本さんの母堂と、山本さんの遺骨を埋葬されるご相談などをされた。そのお話を聞いてをると、實に細いところにまで手の届く親切心を持つてをられるのがうかがはれる。山本さんのご門のところまで來ると、女の兒を背負はれた娘さんが先生に丁寧に會釋された。山本さんのお兒さんを背負はれた妹さんで、實によい妹さんだよと言はれて、先生がいくたびも振り返られたことを、今もはつきりおぼへてをる。畫伯は世田ヶ谷の白田舎にお出掛けになられてご不在だつたので、先生は玄關の前に立たれたまゝ畫伯の奥様に、山本さんの遺族のご面倒のことなどいろいろおたのみになられた。

畫伯は白田舎にをられた。白田舎が造營されてまだ間もない年で、植込みの梅や竹も短かつた。私は秋田名産の小豆羊羹を畫伯に焼いていただき、無遠慮にたくさん食べた。お暇をつけるとき畫伯は私に一包みの樟の實を下さつて、家に歸つたら庭に蒔くやうにと言はれたが、残念ながら寒國の山形には育たなかつた。

先生と畫伯と三人が連れだつて徒歩で目黒まで歩いた。お二人共非常な元氣で足が早い。あの時の赤彦先生の元氣が目に見えてなつかしい。

補材

畑道に唇くろく染めし兒は熟れたる桑の實を食ひしなり

この歌は結城哀草果氏歌集「山麓」から採つた。「山麓」は氏の處女歌集で、大正三年から昭和二年に至る十四年間の歌が集められたもので、純樸無二の農民歌人らしい風格を示した歌に満ちてゐる。

【熟れたる】ウレたる 熟した。

素朴無技巧な寫生によつて村里の子供等の生活を髣髴せしめ、その裏に作者の少年時代への回顧追慕の情を覗かせてゐる。畑道を駆け走る兒等の唇がまつくろである。「染めし兒は」の一句は、これを見つけた作者のなつかしい凝視の表現である。そこへの桑畑には桑の實が眞黒く熟れてゐる有様も思はれる。「矢鱈に桑の實を食つたなあ」と言ふなつかしい微笑の中に湧き上るもの、それは桑畑の中を潜り歩いて唇を黒く染めた自分の少年の日の姿であつたらう。さうした感情を内にたゞへて、表現は簡朴に力強く、「食ひしなり」といふ所、感情に甘えない作者の行き方がうかゞはれる。

全體に一息に歌ひくたされ、そこにいささかのたるみもない。寫生の確かな、調べの高い懐しい歌である。

【結城哀草果】（九・河鹿と山鳩参照）

二 親子の馬

吉植 庄 亮

一 解 題

1 作者

吉植庄亮 ヨシウエシヤウスケ 明治十七年四月、千葉縣印旛郡本埜村に生れた。父は政友會代議士で、商工政務次官をつとめた吉植庄一郎氏であり、氏も目下、代議士として政治方面にも活動してゐる。十七歳頃から既に短歌に親しみ、金子薫園の門に學びその作品を雑誌「新聲」「新潮」等に発表した。第一高等學校を経て東京帝國大學法科經濟科を卒業。大正十年中央新聞社に入社、文藝部を主宰し、後政治部に轉じた。はじめ金子薫園主宰の短歌雑誌「光」に據つてゐたが、同年秋短歌雑誌「橄欖」を創刊主宰した。大正十三年中央新聞社を辭し、十五年郷里に歸り、以來印旛沼畔の荒地の開墾に従事し、歌作に精進しつゝ今日に及んでゐる。

歌集に「寂光」「草原」「烟歌集」がある。

2 出典

雑誌「新潮」昭和八年八月號所載の「馬・雞」と題する三篇の小品の中から「馬」の一篇を抄出したのである。教科書に採録するために左の二箇所を削つたので、ここにこれを補つておく。

△八二頁末行 人間の音楽にたんのうしてゐたのである。いつか北原白秋君が来て、村の若者たちと笛、太鼓で徹夜した時の、この私の長面貴公子の喜悅の状態といつたら、白秋君の童謡本のお馬の比では無かつたやうである。

△文末 「夜は既に繋がれてゐる。穀物も處々に置いてあるし、他の家畜もふえた事ではあるし、それやこれやで、川田順君が私に贈つた歌

馬さへや座敷に上る野の家に晝寝すぐしてふぐりふまるな
の心配はもうなくなつた。」

雑誌「新潮」は東京市牛込區新潮社發行の月刊雜誌で、創刊以來年を重ねること既に三十餘年、純文藝雜誌として、我が國文壇の發展に寄與する所大なるものがあつた。

3 主眼及び採擇の趣旨

「馬はまことにかはいい動物である」といふ此の起筆の一句に歸納さるべき事實談の連鎖である。單に牡馬牝馬でよい所を「父の」「母の」と修飾し、或は「長面貴公子とその母堂」といひ、また私の友達と呼び、更にその眼に語らぬ馬の言葉を聽いてゐる。その作者の心が、或は座敷に上り、或は飯櫃から飯を食ひ、或はダンスをし、また人間の音楽をきく親子の馬の心と觸れ合ひ交流する、その美しい境地への味到がまづ考へられねばならない。更にその基調をなす深い自然親愛の心の追求がなされるべきである。

情趣豊かな田園を背景にし、純真素朴な田園人を登場させ、そこに自由に任された親子の馬の振舞を、愛に満ちた心で解釋し、美しい温いユーモラスな筆致で描きだしてゐる所は、前課「カルサンと米」と同工異曲、極めて類似した特殊の文藝的教材である。前課に關聯し、前課同様心情を高雅ならしむる文藝的教材として、かねて生活指導に關聯を持つ人間の教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【馬はまことにかはいい動物である】

これから語られる馬の話は、すべて此の起筆に歸納されるのである。軽くさりげなく書き起した表現の裏に、言ひ知れぬ優しさが感じられるのは、矢張その根柢に全篇に示されてゐる馬に對する深い愛が潜んでゐるからであらう。

【開墾】 カイコン 荒地を開いて新に田畑をつくること。

作者はその略歴に記した様に、大正十五年から郷里の印旛沼畔の開墾に従事して半農的生活を送つてゐる。

【牝馬・牡馬】 メウマ フウマ 「牝・牡」は音「ヒン・ボ」鳥獸の「女性」を「牝」と言ひ、男性を「牡」といふ。又一説には「飛ぶものに雌雄と言ひ、走るものに牝牡といふ」といふ。

【三里塚】 サンリヅカ 千葉縣印旛郡遠山村大字三里塚。

このあたりは稍高原性をなす一帯の草原で、内地でも有数の牧場地帯である。

【御料牧場】 ゴレウボクチャウ 皇室御料の牧場。「御料」は皇室の御財産又は御料地のこと。

【拂下げ】 ハラヒサゲ 官・公署から不用品・剩餘品などを人民に賣り渡すこと。

【血統書】 ケットウガキ 血統を書き記した書物。系圖・

系譜。

【まゐ】 感動詞として、(一)驚き又は危ぶむ時に發する語。

(二)制する時に發する語。副詞として(一)まづ。しばらく。(二)まづまづ。どちらかといへば。こは副詞の(二)。

【素姓】 スジャウ 「素生」とも書く。(一)血筋。家がら。(二)うまれ。そだち。こは(一)の意。

【馬族】 バヅク 馬種を擬人化して、そこにユーモアを含ませたのである。

【えらい血統書のついた、まあ素姓卑しからざる馬族に屬してゐる】

「えらい血統書のついた」といふ誇張の中に既にユーモアがある。それをその「血統」にふさはしい「素性卑しからざる馬族」といふ四角張つた文語調で受けて一層そのユーモラスな氣分を盛上げてゐる。「まあ」といふ副詞もよく効いてゐるし、「素性卑しからざる」といふ文語も「馬族」といふ擬人法も、この場合拔差しのならぬ言葉である。

【既】 ウマヤ 音「キウ」。

【高貴】 カウキ (一)身分の高く貴いこと。(二)價の高いこと。こは勿論一の意。

【その父の牡馬はこれも御料牧場で、母の牝馬よりは更に一段と高貴なる血統に屬してゐた】

母が既に「素性卑しからざる馬族に屬してゐた」上に、父は「更に一段と高貴なる血統に屬してゐた」といふことは、自ら仔馬の「貴族的な風貌（次節一行目）を讀者に豫想させて、次節に巧妙な心理的聯關を持たせてゐる。又「父の」「母の」といふ修飾は、勿論作者の馬に對する深い愛情から自ら生れた言葉だからであらうが、如何にも優しい作者の心づかひが偲ばれて、讀者は自然と本課のもつ雰圍氣に引き入れられてしまふ。

「これ」は勿論「その父の牡馬」である。「その父の牡馬も」でよい所を、特に「これも」と取出したのは勿體をつけて、下の「一段と高貴なる血統に屬してゐた」に相應せしめてゐる。「御料牧場」は「御料牧場の馬」であるが、馬の重なるのを嫌つた省略である。

【仔馬】 コウマ 仔は本「任ふ」「克つ」などの意。俗に「子」に通ずる。

【生れるとから】 生れた時から」とはときの略。時・間・うち。萬葉集十「吾瀬子を莫越の山の喚子鳥きみよびかへせ夜のふけぬとに」。續體記「熟寝しとに庭津鳥、鶏は啼くなり」。

【貴族的】 キゾクテキ 貴族らしい様。「貴族」は貴い家柄身分の人。「平民」に對する。

【風貌】 フウバウ 風采容貌のこと。様子。顔かたち。

【わけて】 別けて。とりわけて。ことさらに。

【額白】 エカジロ 額の毛の白いこと。

【聰明】 ソウメイ さとくかしこいこと。聰明は「睿智」と合せて聖人の四徳とされてゐる。即ち「聰」は聞かざるなく、「明」は見ざるなく、「睿」は通ぜざるなく、「智」は知らざるなしと言ふのである。易繫辭「古之聰明睿知、神武而不殺者夫。」

【白秋】 ハクシウ 北原白秋のこと。詩人。歌人。十七「新月」の作者欄を参照。

【夕暮】 ユフグレ 前田夕暮。歌人。本名洋三。明治十六年七月神奈川縣中郡大根村に生れた。病弱と放浪の少年時代を送り、三十七年上京して尾上柴舟の門に入り、若山牧水と共に車前草社を結んで自然主義的傾向を短歌に取り入れた。三十九年白日社を創設し、四十年詩歌雜誌「向日葵」を發行。四十二年には處女歌集「收穫」を上梓し、その標榜する無技巧素朴な風格は歌壇の一角に確固たる地位を占むるに至つた。四十四年雜誌「詩歌」を發行。大正七年廢刊。ついで「日光」の同人となつた。吉植氏との關係も自ら深かつた譯である。昭和四年「詩歌」を復活させて今日に及んでゐる。著書に歌集「陰影」「生くる日に」「原生林」「虹」等があり、他に「綠草心理」「朝青く描く」「雪と野菜」等の隨筆

集も多い。

【千櫻】 チカシ 古泉千櫻のこと。歌人。本名幾太郎。明治十九年九月千葉縣安房郡吉尾村に生れた。少年時代既に歌作を始め、三十七年夏伊藤左千夫の門に入つた。四十年上京、帝國水難救濟會に奉職し、短歌雜誌「アララギ」創刊と共に同人となり、又大正十三年雜誌「日光」創刊と共にこれに加盟した。吉植氏との交友もこの頃からであらう。翌十四年處女歌集「川のほとり」を自選出版し、十五年青垣會を起してこれをリードした。昭和二年八月歿。享年四十二。

「竹里歌話」「竹の里歌集」「長塚節選集」等の編著の他に、遺稿歌集「尾上の土」「青牛集」及び遺稿歌論歌話隨筆を集めた「隨緣集」がある。

【前埜・南埜・大埜】 千葉縣印旛郡本埜村の小字の名。

【食慾】 ショクヨク 食欲とも書く。食べたいと思ふ欲望。「慾」の字は「欲」の後に生れ、「欲」を動詞に用ひるに對して、これは名詞にのみ用ひる。併し名詞として用ひる場合「欲」「慾」に區別はない。

【下道】 シタミチ 普通山かけ・木かけ・花かけなど、すべて物のかけにある道をいふ。併しこの「家の下道」は家からだら／＼と下つた前の往還をさしたものであらう。

【彼等は自分たちの欲するまゝに、いつも前埜・南埜・大埜に、豊かなる草にその食慾を満たし、食ひあきてはよく家の下道に出て遊んでゐた】

一日遊び暮した子供達は日暮が来て遊びにあきると家に歸つて来る。そして夕食の出来る間を庭の隅あたりでひつそりと遊んでゐる。作者は「家族的に」と言つてゐるが、この親子の馬はさうした子供と何の變る所もない。それにしてもこれは何といふ伸びやかな情趣あふるる田園風景であらう。草から草につゞく廣野が蒼茫として暮れて来る。その原中、一棟の藁屋の下道に、馬がひそやかに遊んでゐる。抒情的なこの風景を、話の背景として生徒の腦裡に描かせる事は、本課鑑賞の上に忘れてはならない事である。

【村人ら家のかどべにものまをす言葉をきけば馬にまをせり】

「ものまをす」「ものまうす」とも書く。「もの申す」即ち「もの言ふ」の敬語。物語る。消息す。萬葉集一六「石麻呂に吾物申す夏瘦によしと言ふ物ぞ鰻とりめせ。」一首の意は「村の人たちが我が家のかどのあたりで何かものを言つてゐる。よく聞いてみるとそれは自分にかけてられた聲ではなくて、馬に向つて話かけてゐるのであつた」といふのである。

「言葉を書けば馬に言へるなり」と言ふ風な表現も可能であり、寧ろ馬を對象としてはこの方が普通であらう。併し矢張此處は「馬にまをせり」でなければいけない。「馬をすつかり家族的に取扱つてゐた」作者の氣持もそこに含まれてをるし、家族の一員である馬に話かけられて嬉しげな微笑をもらす作者の様子も、この軽いユーモアを持つた表現の中に取りありと浮んで來るし、また馬に「ものまをす」田舎人の純真素樸な優しさもそこに窺はれるのである。軽い素直な調の中によく情意の盛上げられたいゝ歌である。

【夕まぐれ】 夕暮。日没後薄暗くなつた頃のこと。たそがれ。

【すたすた】 急いで歩く様。
【高草】 タカクサ たけの高い草。附近は牧場地帯で一面に高草が繁つてゐるのである。夫木集「星見ゆる夏げの鹿のかくろへて富士の裾野にしげる高草」

【その人は親子の馬にだけ話をして、もうすたすと走つて高草のなかに影を隠してゐた】

持主の御世辭に「馬にもものまをす」のではない。馬と共に働き、馬と共に耕す農夫には、馬は自分等の仲間であり友達である。路傍に馬が居れば、ものまをさすには居られない純真さを持つのが農夫である。その素樸純真な

農夫を實によく描いてゐるものと言へよう。

【夢の中】 ユメのナカ 此の「夢」はおぼろげな「眠」を意味してゐる。うつらうつらしてゐる眠の中で、夢のやうに馬の足音をきいてゐる氣持である。

【曼々】 カツカツ 本字は「曼」。堅いものが觸れ合ふ音の形容。

【庭石】 ニハイシ (一)庭に風致を添へるために据えておく石。(二)庭に設けた飛石。ここは(二)の意。

【人懐かしがりや】 むやみに人を懐しく思ふ性質の人。馬を擬人化したのである。「がる」は思ふ・思ひつめる意を表す接尾語。不便がる・行きたがる。「や」は人を性質の上からいふ時に用ひる語。寂しがりや・わからずや。

【手水】 テウヅ テミヅの音便。(一)手・顔などを洗ひ清める水。(二)手・顔を洗ひ清めること。(三)轉じて厩に行くこと。ここは(三)の意。

【一度】 イチド この「一度」は下の「その後から」と相對する語で、「最初の瞬間」となる。

【眞暗闇のなかからその長い顔をすりつけて、一度は本當にびつくりさせた。そしてその後から、たまたまかはいくさせた】

眞暗闇から長い顔がぬつと出る。それが不意に身體にすりつけられる。それこそ「本當に」びつくりしたに違ひ

ない。併し驚から覺めてみると、馬が懐しくてたまらぬといふやうに顔を摺りつけてゐるのである。夜夜中、暗

い中でまで主人と知つて慕ひよる氣持は、作者にとつてどんなにかかはいかつたであらう。犬など飼つた事のある生徒には経験のあることである。さうした経験などと結びつけて味はせたい。

【びつくり】させられては、後から「かはいく」なるのは本節のみならず、次節もそれである。そこに人間同志の實際過程と些か異なる點があるが、それが反つて作者の愛情をそそつてゐる點でもあらう。

【祝福せられた朝食】 「楽しい幸福に満ちた朝食」の意。

【祝福】 シュクフクは(一)前途の幸福を祈る。(二)キリスト教で神の恩恵を祈り求めること。(三)轉じて慶事幸福などを祝ふ意となる。ここは(三)の意。「朝食」(テウサン)は朝食のこと。「餐」は前課「カルサンと米」(七二頁一〇行、畫餐を参照)。

「祝福せられた」といふ受身の形にしたのは、天から、或は神から祝福されてゐるといふ作者の感謝の氣持が表されたので、その純真な人となり窺はれる。

【にゆつとその長い長い顔を突きだした】
「にゆつと」といふ副詞が「長い長い」と言ふ形容詞と結びついて、首を伸して突きだした馬のいかにも長い顔

が想像され、一種のユーモアが感じられる。

【けたたましく】 俄かに驚き騒ぐ様。さわがしい。あわただしい。(四)比叡の鳥・二十二頁既出)

【板敷】 イタジキ 臺所の板の間。

【ちかに】 「ちきに」の轉訛。直接に。たゞちに。

【板敷の上を上りこみ、飯櫃の中からちかに御飯を食べてゐたのである】

「困つた腕白小僧である」といふ感じではないか。さりげなく書いてはゐるが、作者の微笑が眼に見えるやうである。「わたのである」といふ表現が、呆氣にとられて、それから微笑する作者の表情を語つてゐる。

【御馳走に與る】 ゴチソウにアヅかる 御馳走を頂戴する。馳走は(一)かけはしる。はしりまはる。(二)轉じてその用意に走りまはる意からふるまひ・餐應のこと。言ふまでもなく、ここは(二)の意。與るは(一)關係する。(二)仲間入する。くみする。ここは(二)の意。

【神妙】 シンメウ (一)靈妙不思議なこと。(二)殊勝。けなげ。(三)すなほ。おとなしいこと。こゝは(三)の意。

【流し目】 ナガシメ 顔を向けず瞳を斜にして見ること。横目づかひに見ること。

【ところで私の友だちは神妙にその小言を聞き、首を垂れ、

流し目に私を見上げて、詫をしてくれといふのである。いや確かにさう言つてゐる、それは本當にかはいらしい目であつた】

腕白小僧を叱るやうに、くどくどと小言を聞かせてゐるのであらう。女中も亦主人と同様に馬を家族の一員として取扱つてゐるのである。それをまた馬が神妙に聞いてゐるのみでなく、詫を頼みこむのであるから、馬もすつかり「私の友だち」になり切つてゐる。ここに至つては不思議な魂の交流が既に人畜の境を越えて相かよつてゐる。女中にはそれが通じないとしても、少くとも愛に徹した作者にはそれが解るのである。その愛らしい流し目の中にそれが解るのである。

作者が馬の眼にその感情を讀みとることは、次節に於てもさうである。この眼の解釋は本課鑑賞の上にも大事な點であると思はれるから、生徒にも留意させなければならぬ。

【湯上りの卓に】 ユアガリのタクに「湯から上つて、さつぱりとした氣分で食卓に向つて」の意である。「湯上り」と名詞にし、且「の」をつけて形容句にしてしまつた簡潔な表現によつて、湯上りの爽かさや、その食卓に集ふ人たちのくつろぎの姿などがうかんで来る。

【麥酒】 ビール

といふ對話體を用ひてゐる。それが堪らないいぢらしさを表す上に効果的にはたらいてゐる。

【月明】 ゲツメイ 月の明るいこと。

【唳々】 リヤウリヤウ (一) 聲のほがらかな様。(二) 音聲が清く遠くまで澄んで聞えること。こゝは(二)の意。

【母堂】 ボダウ 他人の母の敬稱。北堂とも言ふ。いふまでもなく親馬を擬人化したのである。

【わが長面貴公子は、とうから母堂諸共ここに御出座になつて——】

長面貴公子から「母堂」といふ擬人法を導き、更に貴人にふさはしい「御出座」といふ擬人法を用ひてゐる。そこに周到な注意が窺はれ、ここに醸しだされたをかしみは、その用意の周到さに基いてゐるやうに思はれる。

【たんのう】 堪能と書く。かんのうの訛とも、足んぬ(足りぬの音便)。訛ともいふ。(一)飽き足ること。満足すること。(二)技術に長けてゐること。こゝは(一)の意。

わざわざ假名書にした所に、漢字では表し得ない恍惚境を現してゐる。使用文字にまで鋭敏な感覺を示す所はさすがに歌人らしい。

【首を長くし、眼を細くして、人間の音楽にたんのうしてゐたのである】

女中の小言を神妙にきき、酒の座でダンスをする馬であ

【酌み】 クミ 元來は酒茶などを盃・茶碗などにつぐこと。轉じて酒・茶などを飲むこと。

【興】 キョウ(一)おもしろく楽しいこと。(二)おもしろみ。

【まさに】 正に(一)正しく。かならず。きつと。(二)あたかも。ちやうど今。こゝは(二)の意。

【酣】 タケナハ 闌とも書く。物事の最も盛んな時。最中の貴族的な風貌から導かれた擬人法で、一は親愛の情を表し、一は一座の興まさに酣な場面にふさはしいユーモラスな感じを出してゐる。「貴公子」は身分の高い家の男子、即ち貴族の子弟。

【跳躍ダンス】 テウヤクダンス 「跳躍」はをどり上ること。とびあがること。馬が追ひ立てられて前足をたてて跳り上るのをダンスに譬へたのであるが、如何にも此の場の雰圍氣にふさはしい譬喩である。いや譬喩だなどとはあたらぬかも知れない。人間の音楽をきく馬であるからダンスだつてしかなない。少くとも作者だけにはさう見えたのであらう。

【誰がつて、この仔馬が、その眼で確かに私に言つたのです】

「誰がつて」と言ふ自問に起して、特に「言つたのです」

る。月夜明りに浮かれて音楽をきく事もありさうな事である。此の馬はすつかり人間に近づいてゐる。併しその人間に近づいて来たのは、つまり家族的に扱はれ、友だちと呼ばれ、長面貴公子と親まれた事に原因する事を思はねばなるまい。動物への愛護もかうした事の反省から呼び覺される心である。

それにして何といふ可憐な姿であらう。全く恍惚そのものである。さすがの作者もおどろいたに違ひない。人間の音楽に「の中」にその驚が語られ、そしてその後からいとしくてたまらなくなつた氣持が、よくこの馬の恍惚とたんのうしてゐる可憐な姿を描きだしたのであつた。月明にほのぼのと明るい草原、あるかなしのそよ風に草葉に宿る月がゆれ、唳々たる笛の音が原一面にひびき渡る。その風景は既に詩である。その詩的な田園風景を背景に、この作者を立たせ、この馬をおいて味ふ時、無限の興趣が湧き上るを覺えるであらう。

【感覺】 カンカク (一)外界の刺激に對して起る感じ。痛い。重い。冷いなどの感が感覺である。(二)心理學では Sensation の譯語。神経の末端に觸れた刺激が、神経纖維を傳はつて脳中枢に達して起る意識現象。こゝは(一)の意。「物の感覺」は「物が存在してゐるといふ感覺」である。

【重さでない重さ】 直接身體に物體が載せられてゐる重さではなくて、身近にある或物からうける重壓感、即ち上から壓迫されるやうな氣配である。眼覺めたばかりの意識にのしかかる馬の存在が巧妙に表されてゐる。

【鼻笛】 ハナブエ 音をたてて鼻から強く息を吹き出したのを譬へたのである。馬のいななきのこと。

鼻笛は昔乞食藝人が鼻で笛をふいたのをいふ名で、又呼子笛のことを言ふこともある。

【つくづくと見上げた馬のお腹の大きかつたこと】

「つくづく」といふ副詞が實によく効いてゐる。そして、下から見た馬の腹の大きさに偉大な發見の満足を感じてゐる姿がよく出てゐる。常は側面からのみ眺めて、さしも感じなかつた馬腹が、下から見ると實に大きく見えたといふのは實感である。「こと」は「ことよ」位の咏歎的な氣持を表してゐる。

【「まだに身に沁みて忘れられない」】

なぜそんなに何時までも作者に忘れられない印象を残してゐるのか生徒に考へさせたい。即ち忘れられないものは馬の腹の巨大さであり、鼻笛の強さであるが、それを忘れられないものに印象づけたのは、作者の驚であつた。眼が覺めて「重さでない重さ」を感じて「はつ」と見上げると馬の巨大な腹である。そこへ強い鼻笛である。大

きくも又なつかしい驚きであつたに違ひない。それが作者に忘れられなくした理由であつたのである。

【これはまだ開墾に着手しない頃の話である】

「すると今までの話は開墾に着手してからの出来事だな」と言ふ反省を讀者に起させる。巧妙な話題の轉換である。

【ひっそりかんとした眼覺である】

言ふまでもなく「眼覺めてみると家中がひっそりかんとしてゐた」の意である。「ひっそりかん」を上に出して、家の森閑とした靜寂を印象的にしてゐる表現法に注意させたい。

【人間が一人寝てゐる】

勿論寝てゐたのは作者自身である。それを「人間が一人」と客觀的にして、馬の屈托のない無邪氣さを強め、次の「ひやりとして」に、馬に上り込まれてゐるのも知らないで、ぐつぐつと朝寢坊をしてゐた自分への恥しさの感じへうまく心理的に結びつけてゐる。

【私は思はず頭をかかへたものである】

頭をかかへたのは、馬に一本やられたわい」といつた風な、自愧の滑稽的表現である。この作者の姿は讀者の滑稽感を誘ふに充分である。

【足掛】 アシカケ 満何年何ヶ月といふ勘定の仕方に對して、年月年齢等をまたがらせておほよそに數へる稱。足掛

八年は開墾し始めた年も、今年も加へて八年目になるといふ場合である。

2 文の構成

第一節 初―七九頁二行

親子の馬の素性と、家族は勿論、作者の友人・村人等から愛せられてゐたこと。

1 親子の馬の素性卑しからぬこと (初―七七頁七行)

2 親子の馬が作者の友人からかはいがられ、家では家族的に扱はれてゐたこと (七七頁八行―七八頁六行)

3 親子の馬が村人等にも親しまれてゐたこと (七八頁七行―七九頁二行)

第二節 七九頁三行―同頁一〇行

出入を自由に任せられてゐた親子の馬が夜の夜中まで庭を歩きまはつたり作者を驚かしたりしたこと。

第三節 七九頁一一行―八三頁九行

その自由に放任された馬の仕出かした出来事が作者の深い愛情を通して語られてゐる。

1 ある朝、親子の馬が食卓に顔をつきだしてびつくりさせたこと (七九頁末行―八〇頁六行)

2 ある夕方親子の馬が台所に入りこんで飯櫃の飯を食べてゐたこと (八〇頁七行―同頁一〇行)

3 またある夕方親子の馬が台所に忍びこんだ所を女中に見つけられて、女中から叱られそのお詫びを頼む愛らしさ。(八〇頁末行―八一頁七行)

4 ある夕方友達と麥酒を酌み交してゐる座に上りこんだ仔馬がダンスをすること (八一頁八行―八二頁四行)

5 ある月明の宵、親子の馬が原中で人間の音楽にたんのうしてゐたこと (八二頁五行―同頁末行)

6 ある日晝寢の蚊帳を仔馬にのぞかれてびつくりした話 (八三頁一行―同頁九行)

第四節 八三頁末行—八四頁六行 開墾前の回顧談で、ある朝おそく眼覺めた座敷に馬の足跡を見てひやりしたこと。
第五節 八四頁七行—終 その仔馬が血氣盛んで、元氣に働いてゐること。

3 文意

親子の馬の素性卑しからぬ事から書き起して、その馬が作者の友人や村人等からも愛せられ、親しまれてゐたし、殊に一家からは家族的に取扱はれ自由に放飼されてゐた。それをいふ事にした譯ではなからうが、親子の馬はまるで腕白小僧のやうに家族を驚かしたり、盗食ひをしたり、或はダンスをしたり、音楽を聞いたりする。作者は深い愛に徹した理解ある眼でそれを眺め、解釋し、物語つてゐる。そしてそこに作者の心と親子の馬の心が融合交流したゆかしく美しい世界を描きだしてゐるのである。

4 鑑賞批評

或は「たまらなくかはい」と繰返して言ひ、或は「かはいらしい眼だ」と言ふ。併しその主観的な言葉が單なる上づつた浅い主観の表出に終らないで、否寧ろ強く讀者の心に反映して讀者の共鳴を呼び起す迫力を持つてゐるのは、矢張作者の深い愛の心がこれを裏づけてゐるからであらう。馬の眼に馬の訴を読みとることも此の愛に徹した心にこそ可能ではなからうか。誠に全篇をつらぬく基調はその「かはいくてたまらない」としさ・愛らしさである。それが或は「私の友だち」といふ愛稱となり、或は「長面貴公子とその母堂」と言ふ擬人法となり、その「長面貴公子とその母堂」が仕でかす悪さも盗食ひも、また人間のやうにダンスをし、音楽をきく振舞をも、すべて微笑しい温いユーモラスな出来事として描き出してゐる。馬の心と人の心とが人・畜の隔を越えて交流する美しくゆかしい融合の世界であるといふの外はない。又その背景は高草の伸びた原中であり、そこに登場する村人や女中は、或は馬にもそのまをし、或は馬に小言をきかせる素樸純真さの持主であり、又月明笛吹く農夫の悠暢さがある。その中を我が天地として自由に遊びまはる親子の馬を配して

田園情趣の豊かさ伸やかさをも見逃してはならないであらう。

三 備考

1 指導研究

(一) 要は人畜を越えて交流する魂の融合の世界に味到させる事である。そしてその底に流れる馬に對する深い愛情を酌取らせたい。常識的に言へば動物愛護の精神である。併し此處ではそれは副産物として自ら生徒の心に呼び覺さるべきものであつて、一番避けねばならない事は理窟で納得させたり教訓的な結論を期待する事である。飽まで感情的に、言葉を通し、文に即して、その世界へ生徒を導き「かはいくてたまらない」境地への味到といふ態度を終始忘れない指導が要求されねばならない。

(二) 作者もつまりは田園人である。また馬に「ものまをす」村人も馬に小言をいふ女中も素樸そのものの純真な田園人である。此の點で前課「カルサンと米」と一脈相通する教材である。従つて前課と連絡して田園人の素樸純真な美しさに味到して、本課の背景として役立たせるやうにしたい。

(三) 作者の筆は情景の描寫には殆んど及んでゐないが、それは物語を立體的に浮び上らせる背景として、本課の鑑賞の上に忽にすべからざる事である。これを常に生徒の腦裡に想像的に描かしめるやうにしたい。

(四) 二葉亭の「平凡」の中のボチを思はせるやうな題材であるが、それが馬であるだけ、生徒の生活からは稍離れた珍らしいものに思はれるであらう。従つて生活に近い犬とか、その他の事例などと結びつけて、その讀みを深める用意も望ましい事である。小學讀本卷九第二十「僕の子馬」第二十一「母馬子馬」などは、多少参考になると思はれるから生徒に豫め讀んで置かせたい。

(一) 本課の馬を素材としたと思はれる作者の歌を數首拾つて見る。

いっしかに障子のそとに来て居りし馬のはなぶえのあらあらしけれ

朝飯をうから食うべ居りはなさに黙りていでし馬の顔二つ

汲みて來し手桶ながらに飲ます水仔馬の腹に鳴りて滿ちつつ

花かつみむさぼり飽かぬわが仔馬の口の端すずし青くそままりて

土間に來てまた叱られてゐる仔馬のわれを見あげしその幼さや

(二) 本課と同時に新潮に載せられた他の二篇を左に掲げる。作者の作風を窺ふよすがともなり、又は補材として生徒に課してもよからうと思ふ。

雞

馬が私の家の家族であるならば、雞もまた私の家族であると言つてよからう。

ある牝雞は、その小さい養族を引きつれて、日に何度か私が讀書してゐる窓の外にやつて來て、私が蠅叩で叩いた蠅の御馳走をせがみ、團扇の上に一匹でも残つてゐるものなら、私に體をすりつけるやうにしてまで、子供等の爲に團扇からその獲物を持つて行かねば承知しない。

ある時、私が養を一匹書いてある團扇で蠅を與へると、最後に残つたこの繪にしたる蠅を、しきりに啄んで首を傾げてゐたが、其の後は同じ事を繰返すだけであつた。この養の繪は紅い朱がお尻の所に染めてあつたのだが、雞のお母さんは結局色盲であつたらしい。ある牝雞は私の家の風呂棚に澤山卵を生み溜めて、きて明け暮れそれを抱へつつ、風呂につかる私たちと顔を合はせては、静けさそのもののやうな表情をしてゐた。ゆふべじつと風呂桶に浸りながら、ものの命がその翼の下に孵りつゝある不可思議を思ひ、處女にし

てみごまれるクリストの母を思ひ、私はこの牝雞の顔から無限の詩を誦したものだ。とともに、この牝雞は嫁ぎ來つて遂に産まざる私の妻の全裸體を、夜ごと夜ごとに見てゐたのである。

ある牝雞は屋根廻りの青草の中に、ある牝雞はまた屋敷木の太木の洞に澤山卵を生みためてそれを孵し、幾十日かの行方不明の後に自分の子供たちを引きつれて私の家庭に歸つて來た。

かうして半野生的に生命を得た雞は、他の雞に比して遂に健康であるが、同時に人間に仲々親しまず、その後他と同様の園の中に飼うても、捕ふるにも困難を感じる程である。野生的になりつゝ野に生み、野に孵す雞の心が、雞の一生を支配する不思議さを私はしみじみ思ふ。生れて二三日以内に引きつれて來たのであるが、結果は單にさうなのである。

稻のスパルタ的教養

開墾直後の水田は、取りわけてく、草原だつた水田は時によると五寸から尺角位の根塊をごろごろ押しころがし、その上に稻を植ゑて行く。愈々除草となり、手取りに、機械押しに私たちがこの塊田に入る時、私達はその根塊もろともに稻を押しころがすことがよくある。その時私たちはその根塊にしつかりと食ひいるやうに根張つて、光り輝く生命を蒼々と押しおのべる、雄々しき若稻の威力に打たれる。柔かく理想的に代がかけたへ、泥の中に植ゑられた稻よりもこれらの稻は遂に強烈に、遂に雄健に、遂に分葉旺盛に生え育つてゐる。然しながら、これは雄健なる苗のみが必ずさうした経路を取るものであつて、弱き苗は柔き泥に植ゑられたものに比較すべくもなく、遂に貧弱なる發育状態にある。

稻は強烈雄健なる苗を仕立てて、あくまでもスパルタ式に鍛錬道を行かしむべく、在來の箱入娘式になでさすり、なめ乾かす遣り方は極力排すべしといふ私の主張は、全く根塊の上に植ゑられたる稻苗の見るもすばらしき生育に打たれる魂の叫に外ならないのである。

一三 野火止の用水

一 解題

1 出典

國定高等小學讀本卷一第六課「野火止の用水」より採つた。これは明治天皇の思召により宮内省から過く各府縣師範學校へ頒賜された「幼學綱要」の卷五「忍耐十二」に基いたものらしく思はれる。その原據は大槻磐溪の「近古史談」である。尙同一の内容を持つた物語は享保年中朝倉景衡編の遺老物語中の「老談一言記」にも收載され、また蜀山人太田南畝の「一話一言」にも「松平信綱川越野火留の事」として掲載されてゐる。

2 主眼及び採擇の趣旨

野火止の用水にからまる「待水三年」の傳説である。後世の福利の爲大金を投じ、且終始理解ある目でその工事をみまもつてゐた松平信綱の名君たる點にも、勿論感歎すべきものはあらう。併し要は工事竣工後の三年、外部の非難と詰問とに敢然と抗した代官金右衛門の牢固たる自信を仰慕せしむべく、更にその自信の根據である測定の正確・工事の誠實・經過の周到な觀察等に思ひ至らしめねばならない。かくてそれを通して生産業の上に發揮せられた人間力の偉大さにふれさせ、國民性の陶冶に資せんための國民的教材として此に採擇した。

二 解釋

1 語釋

【野火止】ノビドメ 埼玉縣北足立郡大和田町大字野火止。古は武藏國新座郡、後、入間郡に屬した村邑で、川越街道の一宿であつた。此處に野火止塚といつて業平の古蹟と稱する處がある。伊勢物語に「昔男ありけり。人の娘をぬすみて、武藏野に出でゆく程に、ぬすびとなりければ、國の守にからめられけり。女をば草むらの中に藏し置て逃にけり。みちくる人、此の野にぬす人あなりとて火をつけん」とす。女わびて「武藏野はけふはなやきそ若草の夫もこもれり吾もこもれり」とよみけるを聞き、女をばとりて出で行きにけり」とある。併し野火止の字名をこの傳説に附會するのは後人の作爲で、實は今の平林寺の丘が、上古火田を作る爲に放つた野火を消し止めるための築堤であつたのに由來するらしい。

【用水】ヨウスキ (一) 水を用ひること。(二) 灌漑・飲料又は防火等のために引き又は貯へた水。此處はいふまでもなく灌漑用水である。

【薄の波】ススキのナミ 一面に白くほゞけた薄の穂が風になびく様を波に譬へた隱喩。

【春は菜の花、麥の緑、秋は薄の波、雜木の紅葉】
漢文調からとつた對句形式である。「春と秋」、「菜の花」と「薄の波」、「麥の緑」と「雜木の紅葉」とを相對せし

めてゐる。

【雜木】ザフキ 建築用材・工藝用材などに用ひられない粗末な木。雜は粗末の意をあらはす接頭語。(九・河鹿と山鳩・五一頁既) 雜巾・雜兵などの類。

【武藏野】ムサシノ その範圍については古來定説がなく最も廣義には關東平野全部をさし、やゝ縮少して武藏國の全域をさす場合もある。併し一般には北は荒川及び其の支流入間川、南は多摩川及び多摩丘陵、東は隅田川、西は關東山地の東南の一部に圍まれた地域、即ち現在の川越市以南、東京府北多摩郡府中町に亘る所謂武藏野臺地を言つてゐる。この地域は地形上(一)關東山地の南を占める山嶽地帯、(二)その邊緣に發達した丘陵地帯、(三)丘陵地帯の東に連なる臺地地帯、(四)多摩川の本流により臺地の南・西に形成された段丘地帯、(五)多摩川の自由曲流により段丘下に沖積した氾濫地帯の五つに區分される。

本課の武藏野は丁度臺地地帯に當つてゐる。この地帯は平坦な原地形がよく保存されて、殆んど起伏なく雄大な大陸的景觀をなし、往昔は果なき草原で、その特異な風光の美は多く詩歌にも謳はれてゐる。元來この臺地面は湧泉河流に乏しいので、これが開拓には人爲的の用水路が必要とされ、本課の野火止用水の外、神田上水・玉川

上水を初、千川・六田・品川・鳥山・北澤・三田などの用水路が設けられ、その用水はまた武蔵野風景に一美観を添へてゐる。

【野趣】 ヤシユ 田舎のおもむき。田園趣味。

【松平信綱】 マツダヒラノブツナ 幼名長四郎、初名正永。大河内久綱の長子に生れ、伯父松平正綱に養はれて松平姓をついだ。慶長九年九歳の時竹千代（後の三代將軍家光）の誕生と共に撰ばれてその侍臣となり、元和九年家光の將軍宣下にあたり敘爵せられて小姓組頭從五位下伊豆守となり、爾來將軍に常侍して、寛永九年老中に補せられ、幕政に参劃し、武蔵忍城二萬六千石の城主となつた。十四年島原の亂に際しては、板倉重昌難戦の後をうけて、追討の將を命ぜられ、翌年これを鎮定した。十六年武蔵川越六萬石の城主となり、二十年侍從に進み、正保四年七萬石に加封、寛文二年歿。享年六十七。資性慧敏、才氣從横、政の裁斷流るゝが如くであつたので、時人呼んで「智慧伊豆」と稱した。家光歿後は家綱を輔佐して由比正雪の亂、明暦の大火等の難局に處して誤る所なく、爲政家としては徳川三百年を通じて比肩するものがないと言はれてゐる。

【菩提寺】 ボダイジ 一家累代歸依して、葬事・追善供養等を依頼し、自分及び亡者の爲に後世の菩提を求め寺。

を獨占してゐる。

【靈】 レイ (一)靈魂。(二)亡き魂。(三)神・鬼神。(四)不思議にたふといふこと。(五)神々しいこと。ここは(一)の意。

【敷石の苔をふんで】 勿論事實は「苔に蔽はれた敷石をふんで」行くのである。併しその感じは敷石の堅さを踏んで行くのではなくて、その石を蔽つた苔の上をひつそりと音もなく踏んで行くのである。林の奥のしんとした静けさが「詣でる」者の敬虔さと結びついて、森嚴な情景を一層こまやかにしてゐる。

【あたりの静けさを破つて、玉の如き水が勢よく流れてゐるのを見るであらう】

「信綱の靈は靜かに眠つてゐる」までは杉・檜の森々と生ひ茂つた林の奥の静寂を敘してゐる。敷石を蔽つた苔をひつそりと踏んで行く時、そこへ急に清水の音をひびかせる。「玉の如き水が勢よく流れる」はあたりの静寂に籠つて、清冽冷涼の音を響かせるやうな句である。而も主眼となる用水を何心なくそこに提出して來た所に注意すべきであらう。

【一帯】 イツタイ (一)帯のやうに一筋につゞくこと。白居易詩「一帯山水繞家廻」。(二)轉じて全般。一面。こ

菩提所・檀那寺・香華院などとも言ふ。「菩提」は Bodhi の音譯で、知・正覺・道などと譯する。不生不滅の眞如の理を覺つて道の窮極に到達する智慧、即ち佛の正覺の智慧のこと。

【昔此の附近一帯の地は彼の智慧伊豆といはれた松平信綱の領地で、その菩提寺平林寺も此の野火止にある】

後に用水開鑿に當つて副役ともなるべき信綱をそれとなく舞臺にのぼせて、此の土地との關係を説明し、讀者の豫備知識に供したのである。婉曲にそれとなき用意の程がうかゞはれる。

【平林寺】 ヘイリンジ 臨濟宗妙心寺派の大利。永和年間武蔵國岩槻に開創された。天正十八年秀吉軍の兵火にかかつて炎上し、後家康が再興をはかつて寺領五十石を附し、僧鐵山を住せしめた。ついで雪道が鐵山の遺志をついで大いに寺宇 興し、中興の祖といはれてゐる。寛文三年信綱の子伊豆守輝綱は父の遺志をうけて岩槻から現在の野火止の地に移した。慶應三年再び炎上し、明治十三年再建された。寺境五萬餘坪、堂宇宏壯で、總門内に三門があり、十六羅漢像が置かれてゐる。

【楓】 カヘデ 槭樹科の落葉喬木。樹幹は平滑、葉は掌狀裂で對生し、長柄を具し、裂片は鋭尖頭で縁邊に鋭鋸齒を有する。霜にあつて紅葉して美觀を呈し、今紅葉の名

は(一)の意。

【水利】 スキリ 水の便利。(一)飲料水灌漑用水などの便利。(二)水上運輸の便利。いふまでもなくこゝは(一)の意。

【地味】 チミ 地質の良否。土地の生産力の程度。「地味瘠せて」は地質が不良で生産力の乏しいこと。

【川越城】 カハゴエジヤウ 「川越」は今の埼玉縣川越市。武蔵國の略中央、武蔵野臺地の北端に位する。西は入間川を隔てて秩父山麓一帯を望み、東には荒川流域の大平野が横たはつてゐる。絹業地の中心であり、米穀・茶・生絲等の集産地をなし、又桐製品を産し、附近臺地には川越諸の特産がある。川越城趾は市の東にある。

「川越城」は戰國時代扇ヶ谷上杉氏の臣太田氏の築いたものと傳へられ、後、上杉氏が江戸城と殆んど同時に修築したもので、寛永十六年松平信綱の城主となるに及んで更に大修造が加へられた。尙松平氏は信綱の孫輝信に至つて下總の古河に轉封され、後柳澤吉保がこれに代つて城主となつた。

【代官】 ダイクワン 代理の役人の意で、鎌倉時代から徳川時代にかけて存し、最初は主君又は本官に代つて職掌を行ふものを言つたが、後には純然たる職名となつた。即ち鎌倉時代には主君の名代をつとめる者の意で、將軍

に代つて政務軍務を司る執權・管領・追討使・兩六波羅探題・九州探題をはじめ、國史の目代・所司代をすべて代官と呼んだ。室町中期以後は専ら安護代。地頭代の稱となり、更に降つては、地頭代のみを代官といふに至つた。織豊時代になると年具收納の吏を代官と稱した。本課徳川時代には幕府直轄地即ち天領にあつて收税・訴訟その他の民政を司る役人を代官と稱し、これを勘定奉行に屬せしめた。但支配十萬石以上の領域及び形勝の地の代官は郡代といつて代官の上位に位した。尙大名の領内にも代官の置かれたことがあり、その職掌は天領の代官とほぼ同じく、郡奉行と名主との中間に立つて領内の一定地域を支配した。こゝは最後の意味の代官である。

【安松金右衛門】 ヤスマツキンエモン 名は正實といひ、本國は河内、生國は播磨で算法の達人であつた。正保元年信綱に仕へて現米百俵を給せられ、後百石から次第に加録されて二百石となり、はじめ元締であつたが、後代官に轉じた。

【玉川】 タマガハ 今の多摩川。山梨縣東山梨郡大菩薩嶺の北に發する市の瀬川を源流として、東流して丹波川と呼ばれ、武藏國西多摩郡に入つて初めて多摩川の名がある。秋川・淺等の支流川を合せて、武藏野臺地の南に沿つて東南に流れ六郷川と呼ばれて東京灣に注いでゐる。

全長約三十三里、流域面積六九平方里、古の大江戸の上水、今の東京市水道より初めて、武藏野一帯の水利はこの川に負ふ所が多い。古來多摩川・多麻川・多婆川・多波川・丹波川・玉川など種々に書かれてゐるが、玉川と書くのは全國から歌枕となるべき著名な「たま川」を集めて六玉川（山城の井出玉川・攝津の島玉川・近江の野路玉川・紀伊の高野玉川・陸奥の野田玉川・武藏の調布玉川）とすることが行はれて以來であらうと思はれる。この中武藏の調布玉川とあるがこの多摩川である。頭註に「東京府南多摩郡雲取山に發す」とあるは誤記であるから訂正されたい。これは支流秋川である。

【見積】 ミツモリ 見つものこと。あらしの計算。目算。【三千兩】 サンゼンリヤウ 「兩」は金貨幣の名。金貨の單位は兩・分・朱で、分は兩の四分の一、朱は分の四分の一である。一兩小判の金の純分は時代により異なるが、此の信綱時代の慶長小判は定量四匁七分六厘に對する純金四匁一厘であるから、今の圓金貨純分二分に比較すれば、一兩は大體二十餘圓に當る。併し當時の米價（一兩一石五斗位）から考へると實際には一兩五十圓位に相當する。故三千兩は實に十數萬圓に當るわけで、當時の三千兩は非常な大金である」がよく理解し得るのである。

【後世】 コウセイ (一)後世の人々。(二)後の時代。ここ

は(一)の意。

【享ける】 ウける 「受ける」に同じ。「享」は別に饗と意義を同じくし、「獻也」「祭也」など註せられるが、この場合は全く「受く」と同じである。

【當時の三千兩は非常な大金であるが、信綱は、此の爲に後世まで利益を享けることが出来るならばと、直ちに堀を掘る事を安松に命じた】

實際事に當つた安松もえらかつたのであるが、後世まで利益を得るならば」といつて三千兩の大金を投出した信綱の、此の大きな救世済民の仁慈が、つまり此の大事業の基であつた事に注意すべきである。信綱の如き名君主のもとにあつてこそ安松も亦その事業を遂行し得たのであつた。

【督す】 トクス (一)すべひきみる。(二)とりしまる。(三)うながす。督促する。(四)せめるなじる。こゝは(一)の意。

【中央線】 チュウアウセン 本邦中部地方の主要國營鐵道線路。中央本線（東京・鹽尻・名古屋間）。篠ノ井線・大絲南線・太多線・八高南線等をふくむ。

【立川】 タチカハ 東京府北多摩郡立川町。多摩川の東岸に近く、中央線の一驛で青梅鐵道の分岐點。附近に陸軍飛行場がある。

【志木町】 シギマチ 埼玉縣北足立郡志木町。新河岸川に臨み、北は二里半にして川越に通じ、東は一里半で荒川に出られ、水路による舟楫の便が多い。

【新河岸川】 シンカンガハ 埼玉縣入間郡にある。川越の東の伊佐沼から發し、荒川に並行して東南に流れ、宗岡・志木・内間木を経て荒川に會する。長さ約五里餘。舊名を内川といふ。信綱が川越城主だつた時、その水路を修めて江戸への運漕の便をひらき、扇河岸及び新河岸を舟着場としてから今の名に改められた。

【見事】 ミゴト (一)みること。みもの。(二)美しいと。立派。(三)上手なこと。すぐれてゐること。(四)いさぎよいこと。こゝは(二)の意。

【落成】 ラクセイ (一)宮室の出來上ること。「落」はその完成の祭の儀である。(二)轉じて工事の出來上ること。こゝは(二)の意。

【工事はやがて見事に落成したが、併し意外にも一滴の水も流れて來ない】
工事の落成には當然用水流通の豫期があつた。併し期待は全く裏切られて、一滴の水も流れて來ないといふ此の描寫は、何氣ない書振りで、あるが、一方には讀者の期待に反するための失望感を與へ、他方に、それに對する疑問と興味とを誘發してゐる。坦々と見えて而も生動す

る表現である。

【詰る】 ナジる 責め問ふ。とがめ問ふ。

【猶豫】 イウヨ (一)疑深く決断力のないこと。ためらふこと。「猶」も「豫」も獸の名で、性が甚だ疑深いので熟して上の愛となつた。(二)轉じて時日を延ばす。延引する。遷延する。こゝは(二)の意。こゝは詰問の猶豫を願つたものと考へられる。即ち改めて工事を仕直すことを詰られるのに對して、修築の時日を延引されんことを願ひ出たのである。

【翌年になつても水はやはり流れて来ない】

讀者の失意はここに至れば絶望感にまで變り、その疑惑と終局に對する興味は愈々深まる譯である。

【地勢】 チセイ 土地の形勢。土地のありさま。地形。

【手落】 テオチ てぬかり。おちど。手續に缺點のあること。

【安松は尙自分を信じて疑はなす】

安松の確固たる信念には驚くべきものがある。併しそれには根據があつたのである。地勢の高低を誤つてはぬないといふ自信のもとに、安松には水の流れて来ない不審に對する絶えざる解明の努力が拂はれてゐた。土埃が立たなくなつた、野菜の出来がよくなつた。さうした根據に基づく實證的、科學的な態度が彼の信念の基底であつ

たことを見逃してはならない。彼の性格はそこに躍如として現れてゐるのである。所謂まぐれ當りではない事が、彼のその工事に傾けた苦心努力をも明にして、その後人から感謝される功績が愈々輝いて來るのである。

【土埃】 ツチボコリ

【奔流】 ホンリウ 早い流。奔湍。急流。

【自ら信すること】 自信。

【草秀で】 草ヒイで 「秀づ」は(一)穂出づの轉で穂が出る。(二)すぐれる。ぬきんでる。こゝは(一)の意。地味の豊かさを草の繁茂で示したものの。

【常年】 タウネン (一)この年。今年。(二)その時代。

その頃。こゝは(二)の意。

【偲ぶ】 シノぶ 思慕する。思ふ。

【感謝】 カンシヤ 有難く感じて謝意を表すること。

【草秀で木茂り、見渡す限り豊かな田畑の間を過ぎて平林寺に詣でる者は、たゞ春の花や秋の紅葉を賞するばかりでなく、今なほ流れて盡きぬ用水に對して、安松金右衛門が當年の苦心を偲び、この事業に功績のあつた人々に深い感謝を捧げなければならぬ】

平林寺附近の今の景觀を敘し、今猶流れて盡きぬ用水をだして、金右衛門をはじめ、これに關與した入々の功績に結びつけて、參詣人達の感謝の心に呼びかけ、假空的

ないが、然ししつかりと主眼を躡まへた巧妙な結尾と言ふべきであらう。

なこの傳説に具體性を持たせて、入々の感銘を深くしてゐる。一文の主眼である事はいふまでもなく、同時に文の結論となつてゐる。型通りで平凡に感ぜられない事も

2 文の構成

第一節 初―八六頁六行 野火止の位置・地形とそこに今流れて止まぬ野火止の用水の存すること。

1 野火止の位置・地形と松平信綱との關係。(初―八五頁七行)

2 平林寺の奥に今猶流れて盡きぬ野火止用水のあること。(八五頁八行―八六頁六行)

第二節 八六頁七行―八九頁六行 野火止用水開鑿についての物語。

1 安松金右衛門が川越城主松平信綱に獻言して、用水開鑿の工事に着手すること。(八六頁七行―八八頁一行)

2 工事成後の人々の危惧と、金右衛門の自信と、その成功。(八八頁二行―八九頁六行)

第三節 八九頁七行―終

野火止の現在の景觀を敘して金右衛門の功業を偲ぶ。

3 文意

川越城主松平信綱が安松金右衛門の獻言を容れ、命じて野火止の用水を開鑿せしめた話。特にこの工事に當つた金右衛門の努力苦心と、自ら信じて疑はぬその牢固たる信念についての逸話が語られてゐる。

4 鑑賞批評

この文の構想は定石通りの極めて坦々たるものであり、且事件はまつたく報告的な地味な書振りであることなど、稍あきたらなさを感ぜしめないでもない。例へば工事が落成しても水の流れて来なかつた時、或は更にまた翌年になつても依然として水が流れなかつた時などの信綱の心理描寫とか、金右衛門の自信力を強調した描寫とか、或は翌年に奔流の堀に

漲つた時の金右衛門の喜びの内面的描寫など、物語をもつと立體的に浮び上らせるやうな手法をとつたならもつと興味深く、もつと感動的に讀まれはしないか。そんな不満が感じられるかも知れない。それは一應尤だとして、是はまたこれである。地味を地で行つたやうな淡々とした書振りに一種の氣品が感じられ、讀みを深めるにつれて盡きぬ味が底から湧いて來るといつた風な文であり、従つてそこに登場する人物の心理など、讀みによつていくらでも掘り下げて、その平坦の奥にひそむ大きな動にもふれ、その地味の奥に大きな人間の意志力の閃にも接する事が出来るのである。寧ろ作者の解剖した心理描寫や徒らな感激強調を離れたこの文には盡きぬ滋味がありはしないかと思はれる。

尙物語の前後に野火止の位置・地勢・現在の景觀等を描いて、物語の背景とした事は、一體に波瀾にとほ。此の文を現實的にする上に効果的なものであつた。

三 備考

1 指導研究

(一) 波瀾に乏しい坦々たる本課には、その何處にも生徒の興味をひきさうな魅力は認められない。一體にこの時代の生徒は奇を望み重大事に心を引かれ、これに反する事柄は平凡無味なりとして顧みないといふ風な傾向が濃厚である。所が實は屢々平凡の中に重大な眞理が潜み、無味の中に深い味が藏されたりするのである。その平凡無味の中にも眞理と深い味とを讀みとつて行く、ここに國文教授の一方も提示されてゐるわけで、靜かな深い讀みによつて山のない文章の中に「あるもの」を讀みとつて行くことは、生徒の高雅な心性陶冶に關する所が大きいのである。本課の取扱には特にさうした事が考へられねばならないと思ふ。即ち物語の緒を平林寺の事から婉曲に引きだしてゐたり、金右衛門の信念の堅さなども極めて簡單に取扱つてゐたり、その自信を表づけた事實なども、何でもない調子で述べてゐる所などそれである。

その地味を地で行つたやうな文に即して靜かな讀みが要求されるわけであり、その讀みを深める事によつて、その地味の底に潜む強い人間力にふれ、その平坦の奥に大きい生動を感じさせるやうな態度で、相當徹底的な指導が要求されねばならない。

(二) 前後に敘せられた野火止の地形・地勢・現狀などは、この物語にほんの附足しのやうに思はれるが、實は既に一言したやうにこの物語を單なる昔話として假定的なものにしない、即ち話全體に現實態を持たせる爲に極めて効果ある役割を持つてゐる事を知らしめ、そのつもりで讀んでゆくやうにさせねばならない。

2 備考

(一) 挿圖 野火止用水地圖 この地圖では、野火止用水の通路が明瞭でない。しかし、現在實地踏査を試み、用水を完全に辿ることは不可能なほどである。平林寺を流れる小流を溯ると陣屋の方に出で、川越街道のあたりで、中斷してしまひ、それが下の原の方につゞいた形が考へられる。下の原のあたりからは新河岸川に流れ入る地圖の川に接続するものの如くである。

地圖の左隅から野火止とあるあたりを通り出口の方に通ずる流れは、更に後世に開鑿されたものだといふことである。

(二) 寫眞 野火止の用水 平林寺の境内の用水を撮影したものである。

(三) 本文の原據となつてゐる大槻磐溪の「近古史談」の一節を次に掲げる。

「酒井氏移封の後、伊豆守松平信綱代りて川越を領しぬ。領内に野火止と稱する所あり。土瘠せて水既しく田里蕭條、代官安松金右衛門議を建てて曰く、宜しく新渠を鑿ち以て玉河を引くべし。即ち水利疎通し稻田以て開く可しと。信綱その費す所を問ふ。曰く當に三千金を用ふべしと。信綱曰く願ふに吾も此に久しき者に非ず、然れども三千金を以て後人に利するは吾が職のみと、乃ち命じて其事を督せしむ。渠中唯沮洳たり、信綱怪しみて之を詰る。安松曰く臣と雖も亦未だ其理を解せず、且つ明年を待てと。明年に到るも水尙

至らず、信綱殊に不平なり。安松を讓めて曰く、汝特に地勢の高低を察せざる耳、と安松曰く、否、臣今にして悟る所あり。古云ふ河は九里を潤すと。蓋し川越の地たる、武野曠漠の中に在り、土燥き風多く人家皆塵を吹き塵に滿つ。客至る有れば必ず塵を掃ひて後之を延く、而るに今年獨り然らず。加之、蕪菘諸菜肥饒皆平日に異なる。是に知る、河潤地に入る數尺、而して十六里の渠、以て暗に之を助くる有る耳と。其明年に至り、一夜大雨し聲あり雷の如し。俄かにして奔流衝快、香魚躍りて地に登る。十六里の間、一時に皆盈ち、以て新河岸に達す。信綱撫然として曰く、安松三年の久しきを経るも其志を挫かず、洵に感歎するに足るもの有り。之に増すに祿若干石を以てし、後遂に顯職に至れり。寧靜子曰く、余聞く野火止は貢租僅かに二百と。今は則ち數千石に至る。而して渠水の利、民皆之に賴る。然れば則ち松平豆州利を利として樂を樂とするの惠、眞に後世忘る可らざるものなり。

(四)「遺老物語」の中の「用水」の一文を轉載する。

松平豆州信綱代官に、安松金右衛門といふあり。豆州の領分野火止といふ所に多摩川の流を引ききたらんには、開發の田地あるべきや否やを議せられしに、いかにも宜しかるべき由を申す。およそ黄金三千兩を費すべきにやとありしかば、豆州聞きて「我此處を領すとも又いづかたに移りなんも知れず。我三千兩の黄金を費して、ながく此の地の利あらんこと、かつは公儀への奉公の一つなり」とて、安松に命じ、十六里がほど溝漉をうがちて、新河岸といふにいたりたり。

かくて水流れ入るかを待つに、更に水來らずして一年を経たりけり。豆州安松を召して、「いかで水は入らざるぞ」とありしに、「いかにも水は入るべきにて侍る。なにさまにも故ありぬと存す」といふ。其の故いかに」とありしかば、「いまだ其の由をば心得侍らず」と答へけり。又の年にも水入らず。また安松を召して尋ね問はれしに、「さりとては、水は入るべきものに候へども、かくのみ侍ること返す返す不審に候。但し此の地は武藏野にて侍れば、およそ川越の城下の人家、常には疊の上に柿紙などを敷き、客來ればそれを巻きてさて請じ侍る。これ、地乾きて、しかも風常にあれば、忽ちに塵中塵埃に埋れ侍るが故なり。然るに、今年に城下の塵埃むかしの様に侍らず。殊に武藏野に植ゑ侍りしはたけもの、今年程ゆたかに候事、つひに覺え侍らず。多摩川より此の溝に流れ入る水を、廣き野に引き侍る故に、いまだ流れ來らざるにや。此の水廣野にみちみちたらん後は、必ず流れ來るべきものと存す」と答ふ。羽生又右衛門と

いふ代官こゝらをつゞきどりければ、やがて召して尋ねられしに、「されば今年程野に植ゑし萬づものゆたかなることは覺え侍らず」と申ししかば、豆州またのたまふこともなし。又の年にも水來らず。此の時も、安松を召して尋ねられしかど、去年の如く答へにければ、「汝が地の高下を審にせざるが故に、水流るゝに堪へざるにあらずや」といはれけれども、驚くけしきもなし。

三年といふ秋、大雨のありける後に、雷の鳴るごとく、水音おびたゞしくとゞろきて、此の溝にあふれみち、平地をも水行けばかりにて、六七寸ばかりある鮎の流れくることおびたゞしく、ただ一時に十六里が程に流れわたり、新河岸の川に流れ入りてけり。さるほどに田地もひらけて、野火止二百石の地、忽ち二千石の地となりぬ。豆州安松を召して、「此の年頃汝を責めたりけるに、つひ驚くことなく、重ねて溝を修しなんとせざりしこと神妙に覺ゆるものかな」とて、一倍の祿賜はりて三百五十石になされたり。其の後次第に經上りて、高き職をもつかさどれり。

一四 雜 草

相 馬 御 風

一 解 題

1 作者

相馬御風 サウマギョフウ 本名は昌治。明治十六年七月新潟縣糸魚川町いとがわに生れた。明治三十九年早稻田大學英文科卒業。學生時代既に雜誌「明星」の同人として短歌を發表してゐたが、後岩野泡鳴・前田林外等と共に、雜誌「百合」を刊行して詩の發達にも力を盡した。卒業後「早稻田文學」を編輯し、同大學文科講師となり、自然主義全盛の當時に於いて、師島村抱月・條友片上伸等と論壇の鬪將として新進思想家の名を専らにしたが、大正五年感ずる所があつて、「還元録」の一著をのこし、一家を擧げて郷里に引退、田園の間に悠々自適しながら、只管良寛一茶の研究に没頭し、傍ら北越の自然と人生を紹介しつゝ今日に至つてゐる。

著作は「黎明期の文學」「自我生活と文學」「近代歐洲文藝思潮」等の文藝論をはじめ、「個人主義思潮」「凡人淨土」「田園春秋」「ゴリキキ」「雜草苑」「砂上漫筆」「樹かけ」「靜と動との間」「第二の自然」「大愚良寛」「良寛百考」等思想・研究・隨筆の多方面に亙り、又詩集に「御風詩集」がある。

2 出典

隨筆集「雜草苑」の中の「雜草の如く」の一篇から抄出した。本文はもと教授者側を對象にして書かれたものらしく、従つて採擇するに當つて、かなり多くの省略訂正を加へた。今相馬御風隨筆全集卷二（四五五頁）に其の全文が収録せら

れてゐるから、これについて見られたら。

3 主眼及び採擇の趣旨

觀賞用の花をのみ美とする觀念は、やがて世上の名聲のみに依つて人の偉さを評價する觀念に共通する。勿論その花は愛すべく、その人は貴ぶべきであらう。併しそれのみ終始する判斷は、極めて皮相な概念的他律的なものである。典型的な美、或は世評の人物に眩惑されて、實はより美しい、より優れた眞實なるものを見る眼を蔽はれることは、人間の弱點であると共に、殊に純眞素朴の年少者を徒に事大的傾向に走らせ、永遠にその個性を眠らせてしまふ結果を招來する。さうした表面的判斷・概念的他律的な觀念を放れ、雜草の中に眞の美を見出し、唯の人の中に自分自ら偉大なりと實感する底の人物を發見する、言ひかへれば物の眞實を見透し得る曇りない眼を見開き、自分自らのものを持たねばならない。それが本文の作意であると共に、此處に採擇した所以である。單に花の美しさ・人の偉さを發見する場合のみではない。藝術の鑑賞に思想の批判に、人生全般を通じてこれこそ少年の生活を歪みなく培ふ基底である。文藝的教材たると同時に人生教養の爲の教材として、是非一度は少年等に讀ましめねばならない文である。

二 解 釋

1 語 釋

【菊】キク 一般に菊科、菊屬中の觀賞用園藝種の總稱。莖の高さは七〇―八〇種から一―二米位で、基部は灌木狀をなし、葉は羽狀で深い刻があつて稍縮れてゐる。花は頭狀花序で單瓣のものゝ重瓣のものゝあり、その外圍に

一四 雜 草

數重の鱗片より成る總苞がある。花色は白・黄・紅・紫等で、香は清雅である。アジヤの原産。我が國固有の種は古名「かはらよもぎ」、今の「野菊」で、盛に賞翫せられるものは支那種である。故に字音で「きく」といふ。渡來は奈良朝の末らしく、延喜の大御歌にあるが初見であ

る。異名―おきなぐさ・よはひぐさ・こがねぐさ・あきしべのはな等。

【ダリア】 *Dahlia* 菊科多年生草本。メキシコの原産で、最近到る處に栽培される。地下に球根を有し、莖を地上に伸長して、夏は頭状花序に排列した艶麗な花をひらく。天竺牡丹の異名がある。

【朝顔】 アサガハ 旋花科、牽牛子屬の一年生草本。莖葉をもつて他物に纏繞する。葉は互生し、通常三淺裂し、葉脚は心臟形で、全縁である。花は葉腋に生じ、漏斗状の大きな花冠をもつてゐる。晩春から夏に互つて、早朝開き、日光を受けるやうになると漸次萎む。果實は球形である。葉形・花形・花色共に種々な變態がある。觀賞用として盛に栽培される。異名―けんぎょうくわ・こくちゆう。

【コスモス】 *Cosmos* (英) 菊科、コスモス屬の一年生草本。高さ二―三米に達する。葉は再三羽状に深裂し、花は稍頭枝端に頂生し、舌状花は白・淡紅・紅等の諸色で長さ二・五―四・五米、心花は黄色である。花候は秋末。異名―おほばるしや・おほはるしやぎく・あきのはるしやぎく・あきざくら。

【薔薇】 イバラ 通常略して「ばら」といふ。薔薇科・薔薇の灌木の總稱。多くは直立して刺がある。葉は羽状複

葉で互生し、托葉が葉柄に著生する。花は美麗で香氣があり、多くの雌蕊が壺状の花床内に隠在する。我が國産薔薇屬に三十餘種がある。園藝的に分けると、第一に蔓物と然らざるもの、第二に一季咲と二季咲・四季咲、第三に温室物と然らざるもの、第四に切花用と庭園用となる。異名―うばら。

世界各地に産し、種類は約百餘種に上るが、熱帯地では山地のみに生じ、平地には適しない。ヨーロッパの風土は特に薔薇の香氣を保つに適し、且花の色彩をよく現すから、ヨーロッパ人は薔薇に關する愛著甚だしく、これを花の代表とする傾がある。中でもイギリスでは薔薇を以て國花としてゐる。

【觀賞】 クワンシャウ 觀て楽しむ。觀て賞める。この「賞」は「もてあそぶ」めでたのしむの意。

【型にはまつた】 判でおしたやうな。定石通りの。きまりきつた。

【型】 いがた。土で造られ、これに金屬類を熔融して流しこみ鑄物を作りだす器。竹又は金でつくるを「範」木でつくるを「模」といふ。

【もの足りなく】 なんとなく不満に。何となくあきたらず。「もの」はなんとなくさうである意を示す接頭語。足りなくはラ行下一段未然形に助動詞打消「なし」の連用

形の接續したもの。四段活用「足る」を用ひ「足らなく」とする場合もある。

【描く事その事に】 エガクコトそのコト 「その事」はそれ自身の意。事を強めた用法であるから、取去つても意味は通ずる。文に陰翳變化を持たせ、同時に、意味を強める上、簡単な技巧だが注意すべき所である。

【わけて】 とりわけ。特に。別して。

【背戸】 セド 裏門。裏口。宇治拾遺「せどの米の散りたる食ふとて、雀のおどりあるくを」。

【いさ美しい花の繪を描かうといふ段になると、それ等の最も親しみの深かるべき花を除外するのである。私たちの不満は其處にある】

都會の生徒も田舎の子も一律に類型的概念的な花の美しさを描かうとする。そして田舎の子、否日本人のすべてに最も親しかるべき眞の自然の美に一顧をも與へない。その結果は、むしろ日本的ですらある幽媚高雅な、子供たちの心を養ひもし樂しませもしてゐる自然に對して彼等の眼を閉してしまふのみならず、眞實な美に對する鑑識眼を永遠に喪失させてしまふことにすらなる。作者の歎く所以はそこにあるのである。

【注意しない】 チユウイしない この注意は「意識する」「氣がつく」位の意に用ひられてゐる。「注意」は意識作

ある一事に集注すること。氣をつける。意識は覺醒してゐる時の心の情態。知覺。氣がつく。

【心を養ふ】 精神生活の糧となる。即ち子供の情操を培ひ育つて豊かに美しいものにする。

【特に注意しないまでも、田舎の子供たちの心を養ひもし樂しませもしてゐるのである】

田園生活にとつて、自然は太陽の如く空氣の如くである。殊にまだ眼の開かない子供には、その美は意識されないだらう。然したゞ意識されないだけのこと、それは野山を駆けめぐる無心の子供の心に戀を與へ、その精神生活の糧になつて、不斷に彼等の情操を陶冶し育んでゐるのである。

尙此處に注意さるべきは生徒が都會育ちである場合の取扱ひである。恐らくは都會の子供等さへ、否寧ろ都會の塵埃の中にうづもれてゐるだけに、反つて、自然への、雜草へのあこがれを持つてゐるのではなからうか。ここではさうした心に呼びかけて味ははせるやうにしたい。

【この節】 このセツ (一) 季節。轉じて (二) 時代。時。こゝは (一) の意。

【ろくに】 満足に。十分に。たしかに。よくも。「ろく」はよく「祿」の字を當てるが、正しくは「陸」である。「陸」は (一) 物の形の歪なく正しいこと。又公平。満足。(二)

物事の正しいこと。まじめ。こゝは(一)の意。

【この節の若い者は草や木の名すらろくに知らなく】

老人の慨歎は自然の美、自然への愛に對して一言の觸るる所もない。然し親しいもの名を知らうとする事は自然の欲求である。そして名を知る事は更に親しみを深め、深い親しみは愛に移る。知はやがて愛である。草木の名を知らうとする心は草木を親しみなつかしむ心である。そこから草木への愛は生れ、そして愛する心に映る一木一草はすべて美しい。かく考へる時老人の歎聲は暗示深く聞かれるだらう。作者が「何といふ情ないことであらう(同頁末行)と歎聲を漏し、且「しかも、私たちの多くは(九三頁三行)と強く自然の草木の名前すらろくに知らぬことを歎じた所以はこゝにある。

【歎聲】 タンセイ なげきの聲。ためいき。嘆聲(ほめる聲・感心する聲)との相違に注意。

【感じ入る】 カンジイユル 感心する。深く感心する。

【雑多】 ザツタ 種々様々。多く様々なものが入雑ること。

【心に貴い養を恵む】 「心を養ふ」(九二頁一行)ものを恵みあたへる。

【哲人】 テツジン 狭義に哲學者。廣義に哲學的思索にふける人。こゝは(二)の意で「思索家」位に解釋すればよい。

かれ、その自然の生命に通ずる事は比ぶべきものはなく、アメリカ文學中獨創的作品の一とされてゐる。本書は我が國に於ても高等學校専門學校の教科書に用ひられ多く讀まれてゐる。水島耕一郎氏の譯著がある。

【トマス】 Ralph Waldo Emerson (1803—1882) アメリカの詩人・思想家。ボストンに牧師の子として生れ、ハーヴァード大學卒業後、暫く牧師の職にあつたが、信仰上の懷疑から職を辭して歐洲に遊び、當代英國の文豪カーライルと相知り、生涯の友誼を結んだ。歸國後はコンコードに居を定め、専ら著作生活に入り、時代の唯物思想に反抗して理想主義の炬火を振り翳し、汎神論を背景とする個人尊重の暗示的な唯心論的哲學を説いた。併し學的哲學の組織といふよりも、直觀的に思想を閃かす哲人の風貌があり、人呼んで「コンコードの哲人」と稱した。處女作「自然論(Nature)」をはじめ「代表的人物論」(Representative-men)その他多くの論文集を發表し再三歐洲講演旅行後八十歳にて歿した。

【現象】 ゲンシャウ あらはれて見えるかたち。哲學上には Phenomenon の譯語。本體に對して、感知し得らる形象、即ち主觀に映ずる相をいふ。こゝは(一)の意に扱へばよい。

【その日その日にどこで何の花が咲くかを、大概知つてゐる】

【ソー】 (Henry David Thoreau 1817-1862) 米國の詩人・散文家。マサチューセツツ州コンコードに鉛筆工場を經營してゐたフランス系米人の子として生れた。ハーヴァド大學で古典を究め、後東洋の研究に興味を覺えるに至つた。大學卒業後一時教鞭をとつたが、この頃から自然の生活に憧れ、俗悪なる人間の世界より大自然を友とする孤獨の生活を貴しとなし、遂に職を棄てて郷里に隱棲し、一八四六年より翌年九月に至るまでウォルデン・ポンドの池畔に小廬を營み、極度の簡易節欲の生活を營み、衣食に必要なだけの勞働以外は一切自然の研究に費した。「森林生活」とはこの間の生活を指すのである。同年九月小廬を去つて後しばらくエマスの許に寄寓したが、その翌年から家族と共にコンコードに住んだ。然しその後も彼はやはり植木屋・測量師・大工等の仕事に雇はれて生活の糧を得れば足れりとし、餘暇はあけてギリシヤ・ラテン・英佛の文學研究・自然研究・哲學的思索、旅行等に費した。彼は一九三七年以後絶えずその思想を日記に書留めてゐたが、今十卷の全集として残つてゐる。その代表作は「コンコード及びナリマツク河上の一週間」

「ウォルデン」 「逍遙」等で、就中「ウォルデン」は彼の傑作と稱され「森の生活」の別題がある如く、新鮮な太陽と、草の香と、土の愉悅にみちた森林生活が生々と描

た】

いかに自然を愛し自然の現象に注意深かつたかをエマソンが賞讃したのは理であり、作者も亦「其所までは行き得ない」と嘆聲を漏してゐる。その自然に對する注意深さと深い自然愛とが、傑作「森の生活」に結晶したのであつた。

【賞讃】 シヤウサン ほめたゝへる。

【芭蕉】 バセウ(バセウ) 江戸時代の俳人。蕉風俳諧の始祖。姓は松尾、名は宗房、通稱忠左衛門。芭蕉の他、桃青・風羅坊の俳號がある。正保元年(二三〇四)伊賀國(三重縣)に生れた。初め伊賀上野城代藤堂良精に仕へ、その子良忠の近侍であつた。二十三歳の時良忠の早世に遇ひ、感ずる所があつて間もなく主家を脱出した。暫く京都に住んだらしいが、二十九歳の時江戸に下り、漂泊の後三十七歳杉風の別墅に入り、庭内に芭蕉を植ゑて楽しんで。世にこれを芭蕉庵と呼ぶ。在來滑稽諧謔の遊戯的世界に安住してゐた俳諧に慍らず、その革新に任じ、西行・宗祇・李杜の風を汲み、蕉風俳諧の基を開いてその藝術的地位を確立したのは芭蕉の四十一歳の頃であつた。その後前後四回にわたり旅行を試み、最後の旅に於いて元祿七年大阪御堂町花屋で長逝した。

彼は豊かな詩人的素質を有すると共に、極めて恬淡高潔

な人格者で、十哲以下門下數千全國に普く、後代の文學に影響する所が大きかつた。句集としては「俳諧七部集」が代表的なものであり、紀行は「野晒紀行」「笈の小文」「奥の細道」など何れも傑作とせられてゐる。

【よくみればなづな花咲く垣根かな】
此句、貞亨四年の作で、續虛栗集の中に於て發表されたもの。

【なづな】 薺と書く。十字花科の一年生、又は越年生草本。山野道端等到處に自生し、葉はたんぼぼに似て岐があり根葉は叢生する。初春一五内至三〇纏位の莖をだし、上部は分岐して各枝から總狀花序をなして白色の小さな十字花をひらく。果實は莢狀で形が三味線に似てゐるので「三味線草」「べんべん草」などの異名がある。七草の一で初生は蔬として食べられる。

續説するまでもなく次の一節はこの一句の評釋を盡してゐる。この一節の味讀によつて生徒自らをしてその味に徹せしめるやうにしたい。

【下土】 シタツチ 根本の土。

【べんべん草】 なづな。

【見る影もない】 みすぼらしいさま。この「影」はすがた。おもかげの意。

【つつましやかに】 ひかへめに。恥しげに。

【しなもない】 愛嬌もない。品格もない。ここの「品」は品位・品格などの意。

【風物】 フウブツ (一) 景色。風景。(二) 季節季節のもの。こゝは(二)の意。「自然の風物」とは、「なづなの花」をさしてゐる。

【興趣】 キョウシユ 興味。おもむき。

【芭蕉自らにあつても】 芭蕉自身の心中に於てもこの意。即ち外界の自然に心をひかれ驚異の眼をみはつたといふ外的事件のみでなく、自身の心中に於て次の如き反省があつた。

【反省】 ハンセイ 我が身を省ること。

【驚歎】 キヤウタン 驚き感心すること。ひどく感心すること。「よく見る」といふ事の貴さを彼は恐らく今更の如く驚歎せずにはゐられなかつたであらう】

俳人生活は一面において「よく見る」ことの修行である。此の一すぢにつながれて苦心修行を続けた芭蕉は「よく見る」ことの貴さは充分知つてゐたであらう。恐らく今更の如くはその氣持を現してゐるものと思ふ。但し編者は、この句の中心は、なづなの花さくことを見たおどろきではなくて、さうした小さい雑草にさへ、春來れば花さくといふ造化の微妙さ、天地のめぐみといったやうなものに、今更のやうに打たれた句であると考へてゐる。

る。この點御風氏の感じと編者の感じとは、聊か相違するのである。

【結構】 ケツカウ (一) 家又は詩文等をくみだてること。しくみ。(二) 轉じてよいこと。立派なこと。すぐれたこと。こゝは(二)の意。一般に否定に先立つ一應の肯定の際に用ひられる。

【定評のある】 テイヒヤウのある。世間の評判が大體定まつてゐるところの。

【實感】 ジツカン (一) 實際に深く感動する。(二) 哲學上に於ては Sensation の譯語。實在體又は實在體の觀念から生ずる實際感情。意志を動かすこと強く偉大な心中の把持力を有する。こゝは(一)の意。

【自分自ら偉いと實感した自分の手近な人】
定評のある偉い人は、實は我々の本當に知らない人であ

2 文の構成

第一節 初一九四頁二行 型にはまつた概念的な美のみ美とせず、無意識の間に貴い心の糧を與へる自然の美に眼をひらくべきこと。

1、子等達が觀賞用の花をのみ美として心を養ひ樂しませる雜草の美を除外することに對する作者の不滿。(初一九二頁五行)

2、その一例として近頃の人々が草木の名すら知らないこと。(九二頁六行―九三頁四行)